
異世界への移住

まやかしの預言者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界への移住

【Nコード】

N04990

【作者名】

まやかしの預言者

【あらすじ】

平凡な学生生活を送っていた「如月九曜」と「青井連也」はとある事情により異世界へ移住を余儀なくされてしまう。異世界へ行ってしまった2人がどうすごしていくかは誰にもわからない。そう、作者にも・・・

この小説は現実から異世界への移動です。あまりチートっぽくはないつもりです。またこの小説は初小説なので文章がおかしかったりもするかもしれませんが、見ていられなくなったら苦情でもアドバ

イスでもお願いします。また習作でもあるので、慣れるまで戦闘描写はあまりしないつもりです。

ちょっと残酷な表現が出てきましたので、R15にしました。

第1話「プロローグ」(前書き)

初投稿です、更新は遅いかもかもしれませんが、ご容赦を。

第1話「プロローグ」

その日も何時ものごとく学校があり、何事もなく過ぎていった。いや、過ぎていく予定だった。

「クヨウ、帰るぞ」

放課後になり、隣のクラスの「青井連也」が何時ものごとくやってきた。

「お、帰るか。帰りにどっか寄って行くかあ？」

若干だるそうに答えたのは「如月九曜」、もうちょっと真面目な顔をしていればモテていたかもしれない。

これがいつもの2人の光景である。

如月九曜と青井連也は中学に入ってからからの付き合いだが、妙に気が合ったのか2人とも部活に入らず遊んでいた。

「新しいゲーム屋ができるらしいって聞いたか？ 駅裏みたいなんだが」

「ん？ 初耳だなあ、行ってみるか」

そんなとりとめのない話しをしている極々普通の中学生だった。

そして2人はぶらつきつつ帰る途中、妙な出来事に遭遇するのだった。

「なあ、クヨウ？ 目の錯覚かな？ 目の前に光の球が浮いてるように見えるんだがゲームのしすぎだろうか？」

「ん？ ……昨日夜遅くまで銀細工してたからかな？」

俺にも同じ物が見えてるっぽいが・・・」

「・・・なんかどんどん大きくなってないか？ってか、近づいてるぞ！」

何故か2人の体はまったく動かず、光の球が迫っていった。

そして、光の球はどんどん大きくなっていき、2人を飲み込んで消えていった・・・

第1話「プロローグ」（後書き）

話がグダグダにならないようにがんばります！

誤字脱字等があれば修正しますので、報告お願いします。

今後ともよろしくお願いします。

第2話「お引越しの手続き」(前書き)

2話連続投稿！

1話目だけじゃ、何も面白くないしね……

第2話「お引越しの手続き」

第2話「お引越しの手続き」

「ん？ここはどこだ？」

クヨウが目を覚ますと、そこは真っ白な空間だった。周りにはレンヤが寝ているだけで、特に何も無い。

「右も左も分からないってのはこういうことを言うのかな、ははは。眠い・・・」

クヨウは若干寝ぼけていた・・・

「ん、知らない天井だ」

「おや、レンヤじゃないか？天井なんて真っ白すぎてどこかわからんぞお、洗剤もびっくりだ」

「いいんだよ、そこはお約束だ・・・って、本当にここはどこだ？」
「知らん、そしてなんでここにいるんだろうな？」

2人は混乱を収めつつ状況を確認していた。

そこへ、2人の目の前に突然人の良さそうな爺さんが現れた。

「ふおっふおっふお、ようこそ、世界の狭間へ・・・歓迎するよ」

「お爺さんはどちら様で？」

「まさか神とか天使とかいうんじゃないだろうな？」

「安心せい、神でも天使でもないわ。強いて言うなら『世界の管理者』とでもしておこう」

「神と何が違うんだ？同じだろ？」

「神もワシが創ったといえればわかるかのう?」

「まじか! 爺さんすげんだな」

「ん、まあそこはどうでもいいとして本題に移ってくれませんか? ご用件はなんでしょう?」

クヨウとしては速く帰って寝たかったらしい。そして爺さんは暗い影を背負って落ち込んでいた。意外とシヨックだったようだ。

「どうでもって・・・まあよい、要件は簡単じゃ。2人ともわしの作った世界に移住しろ」

「は?」

クヨウとレンヤの声が被って、目が点になる。

無理もない、いきなり世界を移動しろといわれてまともに答えられる人間などいないだろう。

「先に言っておくが、強制じゃからな」

「なんでやねん! 理由は!? 世界が滅亡するだとかそついう理由か!?!」

「わしが暇だからに決まっておるじゃろう、ふおっふおっふお」

「そんなの知るか!?!?! どうし! 落ち着けレンヤ!」

「お爺さん、俺たちがそつちに移住するのがどうして暇つぶしになるか説明してもらえるんでしょうね?」

混乱して興奮するレンヤを良いエガヲで抑えたクヨウは若干キレていた。

理由? 眠かったから。

そして良いエガヲで迫るクヨウに爺さんはびびっていた。

「う、うむ。そこまで難しい話ではないから安心せい」

要約すると、約100年ほど前に治まった大戦争の影響で、世界が安定を望むようになった。

世界の安定を望むのはよかったのだが、困ったことに世界の成長まで止まってしまったのだ。

このまま成長が止まってしまつと、世界が役目を果たせなくなつてしまふ。

なので違う世界の人間を移住させて、刺激を与え、成長を促そうというのだ。

管理者が暇だというのは、世界の成長が止まってしまい、管理者の存在そのものが無意味になるということだったのだ。

「ざつとこんな感じじゃ、お主らの家族の者や周囲の物へのケアはしておくから、とつと行つてこい」

「抵抗は無意味か。・・・ちなみに、移動後の世界はどんな世界なのでしょう？あんまり変な世界だと、僕らすぐ死にますよ」

「お主らの世界でいうところのファンタジー一色の世界じゃ、魔法もあるし、モンスターもいる」

「俺ら学生をそんな世界に送つてどうする！？こちとら平凡な中学生だぞ！」

「ふむ、いきなり行つて死んでしまつては意味がないか。よろしい、身体能力をわしの世界の並くらしい冒険者クラスにしてやるう。少なくとも即死はなかるうて。ついでに何か好きな能力もやるう、ただし1つのみだ。何でもいいが強すぎても面白みがないから制限はかけるがのう」

爺さんは気楽な感じにいつているが結構重要なことだったりする。

「1つだけか、少ない気もするが仕方が無いな」

「ん〜、そうなると思う時間がほしいかな、あと1つ質問いいです?」

「考える時間くらいやろう、後悔のないようにな。それで質問とはなんじゃ?」

「移動後にやらなきゃいけないことかありますか?おじいさんは先程移住しろとしか言ってますが・・・」

「特にないぞ、お主らをあの世界に入れることに意味があるからう、移住後は好きに生きるといい」

「それじゃあ、質問がなければ2、3時間後にまた来るから能力を考えておくように」

そういつて爺さんは消えていった。

そして、残された2人は悩む。

それは当然だ、もしかしなくてもこの先一生を左右することになるのだから。

「ん〜、能力ねえ〜」

「身体能力最強とかかなあ、正直それしかねえって感じだし」

「ん〜、それは手堅いが・・・ツマラン」

「つまらなくて言ってもな、って普段賭け事しないで、こういうところでバクチする気か!??」

「別に賭けをするつもりはないよお、要は考えようなんだよお」

そういうクヨウの瞳は輝いていた。まるで面白いことを思いついた!と言わんばかりに。

その後、爺さんが来るまで2人は能力で何ができるかを話し合っていた。

「さて、決まったかのう?」

「ん〜、決まったよお〜」

「まあ、こんなもんだらう」

「よろしい、ではどんな能力にするつもりじゃ？」

レンヤは「身体能力最強」にするつもりだったが、曖昧すぎて却下された。

最強の定義が人種ならともかく、存在になった場合、世界を滅ぼすことも可能になるからだ。

そこで、爺さんの提案で、異世界の人類の中でも強力な竜人種の2〜3倍の身体能力を得るということで決定した。

それでも反則的に強いことには違いがなかったので、レベルを設定し、鍛えればそこまで強くなれるというようにした。

クヨウが望んだのは「魔法具生成能力」だった。

魔法具生成、早い話魔力を込めて好きな魔法効果をもつアイテムを作れるというある意味反則的な能力である。

爺さんから却下がかかりそうにもなったが、クヨウは制限をかけることにより許可させた。

制限は、熟練度のようなものを設定し、最初から強力なアイテムを作れないようにした。

「よし、では好きに生きて来い」

爺さんがそういってクヨウとレンヤは光に包まれ消えていった。

「さて、これでうまくいくといいが・・・」

爺さんはそう呟き、消えていった。

第2話「お引越しの手続き」(後書き)

気分が乗ってききましたが、自分の中での本編はかなり先になりそうです。

当分今後のための下準備ってところですね。

第3話「道具屋 リュミエール」(前書き)

USBが死んで、設定資料が消失してしまいましたorz

それでもなんとかがんばって生きていこうと思います。

第3話「道具屋 リュミエール」

第3話「道具屋 リュミエール」

「長かったな、レンヤ。ようやく開店だよ」

「そうだなあ、やっとあの地味な作業が報われるのか・・・」

クヨウとレンヤは感慨深く店内を見ていた。ここに来るまでに、異世界に着てからすでに2年以上経過していたからだ。

異世界に来た2人はドワーフ族のヨーゼフに拾われていた。

ドワーフ族は街で暮らすことも多いがヨーゼフが住んでいたのは洞窟の中の集落であった。

一般的にドワーフ族は職人族とも有名であり物作りを得意としていた。また洞窟などに集落を作ることも多く、集落を守るために戦闘も得意としている。

そこで2人はヨーゼフに弟子入りし、物作りとサバイバルの訓練を受けていた。ヨーゼフもかなり高齢になるが、本人曰く「孫ができたようだ」とノリノリだったという。

約2年ほど経って、1人前になった2人はヨーゼフの知り合いの伝で何かの店を開くことになった。

そして、グランパレス国の首都「ラングラン」にて道具屋を開いたのだった。

「ん、手続きから、品揃えと流石に大変だったな。これからはゆつくりできるだろう」

「だといいたが、もう回復薬を作るのはごめんだよ」

「あれが一番時間食ったからねえ、まあ、あとは僕がやっておくよ」
「俺の仕事は薬草等の回収くらいだな・・・やっとな冒険ができる」

いくら伝で店を開けるといっても、すぐにできるわけではない。役所や商人ギルドの登録から、商品の用意など等やるのが山ほどあったのである。

ヨーゼフの元で訓練していたときに稼いだお金とヨーゼフからの賤別があつたとはいえ、簡単にお金を使うわけにはいかない。

また、クヨウの考え出したオリジナルの商品を作るにあたっても手間がかかっていた。

「ん、僕はこのまま店番しているけど、レンヤはどうするの?」

「俺も初日は店にいるよ、店番に慣れないとな」

そして開店後・・・1時間経過したが、誰もこなかった・・・

「暇だな、クヨウ」

「ん? 初日だしね、流石に簡単にはいかないよ」

店の中でレンヤは商品の確認をしていたが、流石に時間潰しにもならず、暇をもてあましていた。一方、クヨウはヨーゼフの所で店番をかなりしているので慣れていた。

そして2時間ほど経過したあと、4人程の冒険者のパーティがやってきたのだった。

「店長、回復薬10個と毒消し薬を5個と・・・あと何が必要だっけ?」

「それくらいいいんじゃない?そこまでは減ってないでしょう」

「はい、回復薬10個と毒消し薬を5個ですね、少々お待ちください」

待ち疲れたレンヤとは違い、クヨウは楽しそうに対応していた。

「すみません店員さん、この『ポーション』ってなんですか？」

「あつと、確か回復薬より効果の高い薬・・・で、あつてるよな？」

「レンヤの説明はずいぶん大雑把だねえ、間違つてはいないけどね」
「あつ、でも値段が回復薬の倍だ。ちよつと高いかな？」

回復薬の相場がだいたい100ゴールド前後に対し、ポーションは200ゴールドになっていた。普通に考えると高いとも思える。ちなみに、お金は1ゴールド1円くらい。

ポーションはクヨウが作ったオリジナルの回復薬で、傷にかければ初級の回復魔法なみに回復する。飲めば体の活性化を促し、再生力が上昇する。

「ん、初級の回復魔法並みの回復力を実現させたので、少々値が張つちゃうんですよ。はい、お待ちどうぞさまです。1250ゴールドになります。」

クヨウは説明しつつ冒険者に商品をわたした。

「へえ、それはすごいなあ、はいどうも。」

「1個ポーションを入れておいたので試しに使ってみてください」

「あ、ほんと！？ありがと、気になったのよね。」

冒険者たちは興味津々だったらしく上機嫌で店をでていった。

このポーションが色々と波乱を起こすことになるとはクヨウも思っ

ていなかった。

このあとチラホラと知り合いのハンターがやってきてこの日の営業は終了した。

その日の夕食は開店祝いとして結構豪華にしていた。

「かんぱい」

「いやあ自分の店だとなかなか新鮮だったねえ、やっぱり趣味が実益になるのは楽しいね」

「クヨウはアクセサリーやアイテム作りは本当に楽しそうにやっていたからなあ。そいや、例のアレは完成したのか？」

「ん？ああアレね。うん完成したよ、次の休みにでも試そうと思ってる」

「そりゃ〜楽しみだ、どうせなら何か討伐依頼でも受けるか？」

「そうだね、たまには訓練しておかないとね」

実は2人とも店を始める前にギルドにハンターとして登録してあったのだ。生活費を稼ぐために結構な依頼を受けていて、ランクも初期のGランクからクヨウはDランク、レンヤはCランクまでに上がっていた。

「さて、明日にそなえて、僕は早めに寝ることにするよ」

「はいよ、おつかれさん」

「おやすみい」

こうして初日は無事終了していった。

次の日、レンヤが二日酔いになったのはご愛嬌。

第3話「道具屋 リュミエール」(後書き)

やっと始まりました、事実上の本編です。

例のアレは次の話で出す予定です。

第4話「新しい武器と厄介事」（前書き）

。初の戦闘とは言っても細かい描写はしませんが、できないです>><。

第4話「新しい武器と厄介事」

第4話「新しい武器と厄介事」

店の定休日に、クヨウとレンヤはギルドの依頼でゴブリンの集団の討伐にでていた。

依頼難易度はE、2人にとっては余裕であった。

ラングラン近くの森でドンッ！つという音が何度も響き渡っていた。

「おゝ、効果は抜群だ！って感じだな」

「んゝ？予想以上の威力だったのは間違いじゃないかな？」

クヨウが試していたものとはリボルバー型の銃であった。

しかし、普通の銃とはいくつか違う所がある。まず、弾を撃つてもシリンダーが回転しない、

7発以上連続で撃てる等、普通の銃ではありえないことが起きていた。

「にしても、よく思いついたよな、その機能」

「んゝ、こればかりはひらめきだよな。予想以上に手間がかかったけど、なかなかいい出来だ」

この銃の名前は『スピードファイア』といい、ヨーゼフとクヨウの合作である。

まず、ヨーゼフが銃全体を作り、魔力を込めると銃身のシリンダーへ魔力がいくように作る。

次にクヨウが魔法具生成能力を使い、魔力でシリンダーを自由に回転できる能力を付加した。

シリンダーには1〜6まで番号付けがされており、指定の番号のシ

リンダーが銃身へセットされる仕組みである。これで銃自体の完成。そして次は薬莢である。

薬莢には籠められた魔力を溜めて、後ろを叩かれると発射する仕組みになっている。そして、薬莢の中に術式を書いておき、魔力を指定の属性へと変換するようになっていた。こうして属性変換付の銃が誕生した。ちなみに銃弾一発の魔力は初級魔法と変わらないくらいで、威力は初級魔法を超えている。

欠点があるとすれば薬莢が小さいので威力がある程度固定される。また、しよせん銃弾なので当たりが小さくピンポイントでしか攻撃できないというところである。

「ゴブリンを一発で倒せるだけの威力があれば十分だよ、やろうと思えば連射もできるしね」

「あとは命中率をあげないと、クヨウって意外と狙うの下手だろ？」

「そこはご愛嬌ってことでね」

銃の影響もあってか、30匹ほどのゴブリンの集団が壊滅するのにも時間の問題であった。

.....

そして、無事ゴブリンを壊滅させて証拠部位を剥ぎ取り終わったころにそれは起こった。

「はあはあはあ」

「ちっ！逃げ切れねえぞ！」

傷を負った2人の男がクヨウとレンヤがいる方向へ向かっていた。

「クヨウ！男2人がこっちへ来ている、どうも怪我をしているみたいだが・・・」

「ん？待って、もう1人いる・・・でっかいのが・・・というかモンスターみたいだなあ」

「行くぞクヨウ！手当ての準備をしておいてくれ、後ろのでかいのは俺がなんとかする！」

「了解、無理しないようにね」

レンヤは2人の後ろから迫っている大型モンスターへ向かい、クヨウは2人へ向かっていった。

「2人とも！こっちへ！傷の手当をするから！」

「逃げる！後ろからマスターゴブリンがきているんだ！」

「そっちは相方がなんとかしてるから大丈夫、傷をみせて！」

「え？1人じゃ無理だろ！」

その男が焦るのも無理はなかった。「マスターゴブリン」はマジックモンスターだったからだ。モンスターは大別すると3種類いる。モンスター・マジックモンスター・ユニークモンスターに分かれる。元々、動物が瘴気を吸い込み凶暴化したのがモンスターであり、マジックモンスターは更に瘴気を吸い込み特殊な力をつけたモンスターである。そしてマジックモンスターは通常モンスターに比べると遥かに強い。この2人もおそらくハンターであり、ある程度経験があった上での発言だった。

しかし・・・

「お〜いレンヤ〜、マジックモンスターらしいけど手伝いいるかい？」

「いやいい、ふんっ！むしろタイマンでやりたい相手だよ！よつと！」

レンヤはマスターゴブリンと互角以上に戦っていた。実はヨーゼフに鍛えられて、Aランクハンター並みの実力はもっているのだった。マスターゴブリンはその茶色い巨体を生かして棍棒をひたすら振り落とす、しかし速度は速いものの単調であったためレンヤは簡単に見切っていた。このマスターゴブリンは棍棒を当てたところを粉碎する能力のため、当たらなければどうということとはなかった。

「じゃあ、そろそろ終わりにしようか！」

マスターゴブリンが棍棒を振り落とした瞬間に最大速度で回し蹴りを後頭部に叩き込んだ。そして、倒れこんだ隙に膝蹴りを首に入れて骨を折った。しばらくしてマスターゴブリンは動かなくなった。

「なかなか楽しかったな」

「ん〜、大分バトルジャンキーになってきたねえ。僕は闘らないよ？」

クヨウは怪我をしているハンター2人を治療したあと、戦闘を見学していた。先程まで逃げていた2人は啞然としてみていることしかできなかった。その後、4人で街まで帰還し、クヨウとレンヤは換金してもらって店に戻るのであった。

「スピードファイアはなかなかよさそうだな〜」

「そだねえ〜、まああまり出番はないけどね。でもまあ、早めに他

の属性の薬莢を完成させよう」

実は薬莢はまだ2種類しか完成していなかった。火と無属性である。最終的には全属性を撃てるようにするつもりである。そんな話をしつつ店のある通りにでると店の前でうろうろしている人がいた。

「ん、レンヤ？ここまどこかに行かない？すごくいやな予感がするんだけど・・・あの人って確か、商人ギルドで会った人だったような？」

「でも、放って置く訳にもいかないんじゃないか？まあ、何やつているのか聞くだけ聞いてみよう」

あまり乗り気じゃないクヨウを他所に、レンヤは店の前にいる不振人物に声をかけるのであった。それが厄介ことのきっかけになるとも知らずに・・・

第4話「新しい武器と厄介事」（後書き）

伏線をはったりするのはいいんですが、矛盾しないかどうか不安になりますよね。

さて、今後はどうなることやら？

第5話「商人ギルド」(前書き)

今回は説明ばかりになってしまいました。そして短い・・・

第5話「商人ギルド」

第5話「商人ギルド」

道具屋「リュミエール」の店内で、クヨウと商人ギルドの男「カリイ・マルゼフ」が机をはさんで向かい合っていた。ちなみにレンヤは難しい話が苦手なので、夕飯の買出しに行っている。

「え〜と、カレー・マゼルフさんでしたっけ？今日はどのような用件ですか？」

「いえ、カリイ・マルゼフです。ちょっと前に一度しかお会いしてませんので、間違える気持ちはわかりますが……」

クヨウは「カレー混ぜる」のほう覚えやすくていいのになあと若干ズレた認識をしていた。

「ごほん！え〜実は今回新商品の調査ということで各店を訪問させていただいています。最近新商品があまりなくて、商人ギルドでも力をいれているんですよ。そういう訳でして、率直に言わせていただきますと、新商品はありませんか？もしくはアイデアでもかまいませんので」

「マゼルフさんも大変ですねえ、新商品ですかあ……まああるにはありますね」

「私のことはカリイで結構ですよ、それとマゼルフではなく、マルゼフです。新商品があるんですか！？それでは是非、特許商品の登録をしましょうー！」

特許商品とは商人ギルドに認められ、オリジナルの新商品として登

録された商品のことである。登録する場合、素材や作り方をすべて公表しなければならぬが、登録から10年間その商品の売り上げの5%を貰う事ができる。希望する店に公開されるので、すべての商人ギルドの支部へ情報がまわされ、大陸中の店に行き渡る。店側にもハンターや冒険者などにも大変ありがたい話になっている。ちなみに、アイデアだけだと売り上げの1%しかもらえない。それでも流行ればかなりのお金が入ってくることになる。しかし、あまりクヨウは乗り気ではなかった。

「ん、それは今すぐじゃないとダメですか？今すぐには登録したくはないんですよえ」

「それは何故ですか？」

「先日お店をひらいたばかり、というのはご存知ですよ？つまり知名度がないんですよ。もし登録されれば確かにお金が入ってくるかもしれませんが、お店の知名度は特にかわらないのです」

特許登録すると何処の店でも売ることができ、つまり店としてのオリジナルがなくなってしまうのだ。知名度のあるお店ならばそれでも構わないのだが、知名度がない、特にできて間もない店にとつてはデメリットのほうが大きいのだ。

そしてクヨウは新商品としてポーシオンを登録するつもりではいたが、それはまだまだ後の予定だった。

「ということなので、今回の一件はなかったことにしてください」

「それでは仕方がないですね。しかし、ある程度知名度があればいいのなら行商に紹介をしましょう。それならば構いませんよね？」

「ん、それならばこちらからお願いしたいところなんですけど、そんなことでもギルドとして大丈夫なんですか？贖済みたいなことをするのは良くない気がします」

「いえいえ、別に贖済をするわけではありませんから大丈夫ですよ。」

「行商とは各町を巡り、珍しい物や必要とされている物を売買している商人である。商人ギルドとしては、各々の町にある名物や商品の情報を行商に渡すことで物流を活発にしているのである。なので、特定のお店だけを行商に紹介するのはNGだが、「その店でしか買えない物がある」という情報は行商にとってもメリットがあり、その際他の店を紹介しても仕方がないだけであるので鼻屑にはならない。」

「なるほど・・・それではお願いしますね」

「わかりました。ではその新商品の使い方や注意事項をこの用紙に書いておいてください。用紙は明日取りに来ますので、その時にできればサンプルとしていくつかいただきたいのですがよろしいですか？」

「ん、わかりました。ではお願いしますね、カレーさん」

「いえカリイです。ではまた明日に」

新商品の紹介用の用紙をおいてカレー・・・ではなくカリイは次のお店に向かうのであった。

「行商に紹介かあ、それは思いつかなかったな。まあ棚から牡丹餅ということで良しとしよう」

そうしてクヨウは店に戻り、明日の開店準備をするのであった。そして重大なことに気がつくのはレンヤが夕飯を作ったあとだった。

第5話「商人ギルド」（後書き）

後書きで本編では説明できなかったことを説明しようかと思います。

まず、「冒険者」と「ハンター」の違いについてです。

「冒険者」は各地を旅したり、ダンジョンの攻略をする人たち。

「ハンター」はギルドの依頼をこなしていく人たちのことです。

ただし、「冒険者」もハンターとしてギルドに登録してありますので、『ハンター』という大きいくりの中で、「冒険者」と「ハンター」に分けているだけです。

次にギルドについてです。

ギルドには2種類あり、ハンター用と商人用があり、基本的に協力関係にはありますが、別の組織です。

ちなみに本編で「ギルド」というとハンター用であり、「商人ギルド」といえば商人用だと思ってください。ハンター用のギルドは一般的な部分が多いのでそういう呼称にしました。商人ギルドは商人しか関係しないのに対し、ハンターギルドは一般人も関係してきますので。

それでは、次回をお楽しみに。

第6話「クヨウの災難」(前書き)

今回はわりと長めになりました。

第6話「クヨウの災難」

「くっ、このままだとまずい」

クヨウは必死に戦っていた、しかし、敵は圧倒的な戦力を誇りクヨウが落ちるのも時間の問題であった。

「せめてレンヤがいれば・・・」

この場にレンヤがいないのは絶望的であった。もしレンヤがいれば打開策の一つも思いついたであろうが、今この場にはクヨウしかないのである。

そして、刻一刻とクヨウの意識は削られていくのであった。

「ここまで・・・か・・・」

最後に力を振り絞るも力尽きていくその時、救いがやってきた！

カランカラーン

「はっ！いらっしやいます」

第6話「クヨウの災難」

はじまりは数日前のことであった。

カリイが新商品の宣伝用の用紙とサンプルを貰いに来た日である。

「おはようございます〜」

「おはようございます、カレーさん」

「いえカリイです。クヨウさん、もしかしなくてもわざわざですよね？」

若干青筋をうかべつつカリイは笑って聞く。

「ん〜、嫌がらせとかではないですよ。そのほうがおいしそ……
じゃなかった、覚えやすいですから」

「何か今、妙な単語がでたような気もしますが？」

「そんなことはないですよ、気のせい気のせい」

クヨウは笑ってごまかす。カリイも愛称だと思えばいいと自己完結した。

「それで書いておいてもらえましたか？」

「あ〜、はい。こちらになります。それで使い方なんですけど……」

クヨウはカリイにポーションの使い方を説明していった。カリイも最初はそうでもなかったが、次第に驚愕の表情を作っていた。

「クヨウさん、随分とすごい物を作りましたね。昨日は随分強気だなあ、とは思いましたがこれなら納得ですよ」

カリイも一端の商人であるので、ポーションの利便性にすぐに気がついた。

元々この世界の回復用の道具はいくつかあって、一般的傷を治すの

は「薬草」「回復薬」「高級回復薬」である。薬草から回復薬へ、回復薬から高級回復薬へ、改善されていったのは回復量と効果時間である。しかし、どれも共通することがある。それは安静にしなければならぬこと。これがゲームであれば即時回復といくのだが、生憎と現実ではそうはいかない。

回復薬や高級回復薬は優れた薬である。しかし、戦闘中、特にモンスターと戦っている時等回復する場合は隠れたり一時避難しなければならぬ。もし即時回復を望むなら、回復魔法を使うしかない。魔法が使えなかったり、魔法使いが仲間にいない場合は即時回復は不可能である。クヨウが作ったポーションは回復量こそ初級の回復魔法並で、回復薬には劣る量である。しかし、即効性が非常に高いのである。それこそ初級魔法並に。

この即効性が今までには無かった部分であると同時に、売れる要素でもある。

基本的な利便性から応用性まで需要が高いのだ。

「応急処置には最適ですねえ、回復薬との併用で怪我の治りも速まるでしょう」

「それでは、こちらがサンプルになりますので、お願いします」

カリィはサンプルを受け取ると、商人ギルドの支部へ戻っていった。それに合わせるようにして、レンヤが戻ってきた。

「クヨウ、容器の注文完了したよ。なんとか200個作ってもらえるよ」

「ん、りょうかい。でも200個もよく注文を受けてくれたねえ。まあ助かるからいいけど」

「ちょっと前に大口の注文が終わって暇だったらしい、向こうも喜んでたよ」

レンヤは朝一からポーシヨン用の容器の発注をしに行っていたのである。それはクヨウが前日の夜に「ポーシヨンの数が足りないかも」と気づいたからである。現在在庫が30個ほどで、緊急で作っても50個ほど。行商が来た場合かなりの数量を買っていくことが予想されるので、いくらあっても足りない状況になるのは目に見えている。そこで急遽、在庫を大幅に増やすことにしたのだった。

「じゃあ、レンヤ、次はおつかいに行ってきたよ」

「ああ、いいよ。ギルドへの材料集めの依頼か？」

「ん、そうしたいのは山々なんだけどね。レンヤ1人でできるだけ集めてきて。これが必要な物を書いた紙ね」

「ちよつとまで！依頼したほうが早いだろう、俺1人じゃ日が暮れるぞ」

「ん、一応機密管理ってことで、よろしく。ギルドのハンターもどこまで信用していいのかわからないしねえ」

レンヤも渋々承諾する。クヨウにとって今回のことは情報漏えいが一番怖かった。何故なら特許商品ではないので「この店でしか売られていない」という強みにはなる。しかし、同じ物を他の人間が作り特許を取得してしまうと一気にご破算になってしまうからだ。例えクヨウが先に作っていたとしても、登録が相手より遅くなれば、相手のほうに優先権が行くからだ。なので情報漏えいには敏感になつてしまつていた。

「材料がわかつてても、作り方がわからなければ作れないとは思っただけど、万が一ってこともあるからね。念には念をいれるよ」

「仕方が無いか・・・わかった。じゃあしばらくは山や森にこもつて集めるよ」

「めんどくさいかもしれないけど、がんばってね。僕は店番もしないといけないから」

こうして急遽ポーションの量産を開始したのであった。そしてクヨウの予想通り、行商が数人ポーションを大量に買っていき、数日であつという間に品切れになっていたのである。その後、しばらくレニヤが材料を集め、クヨウが店番をして、夜にポーション作成という日々が続いたのであつた。

「へ、それでそんなに眠そうなのね」

「ええ、寝るのが好きな人間にとってはつらい日々ですよ。」

「でもクヨウちゃんの予定が繰り上がったんだから、良かったんじゃない？」

「それは・・・まあ、そうなんですけどね。眠れないのは辛いですよ」

睡魔を相手に陥落しそうであつたクヨウを救つたのは、前に一緒に依頼をこなしたことがあるエミリア・ハーベックであつた。ちなみにこの方、Aランクハンターでありかなりの実力者である。クヨウにとってはお姉さんの存在になりつつあつた。

「じゃあ、お姉さんが店番変わってあげようか？クヨウちゃんの眠そうな顔は可愛いんだけど、可哀相だし」

「いえいえ、そこは店主としてがんばっていきますよ」

「一著前にかっこつけて、さっき寝る寸前だったくせに」

「あ、そこは見なかったことにしてもらえるとありがたいですねえ」

流石のクヨウもエミリアには勝てなかつた。

「明日は休みだし、ゆっくり寝るよ。目指せ24時間耐久睡眠！今ならいける気がする、ふふふふ」

「24時間はちよっと寝すぎじゃないかな？それとちよっと怖いわよ」

こうして、忙しい日々は過ぎていった。だが、クヨウの寝不足という耐え難い状況はまだ続いていくのであった。

第6話「クヨウの災難」(後書き)

新キャラ登場!!!

エミリア・ハーベック

Aランクハンター

武器：大剣

外見：金髪でメガネをかけたお姉さんという感じですが。

ちなみに、前に軽くポジションの説明を入れましたが、ぎりぎり矛盾はしないのでそのままでもいいかと思っています。

第7話「新しい従業員 その1」(前書き)

レンヤの影が薄くなってきたのは気のせいかな？

第7話「新しい従業員 その1」

第7話「新しい従業員 その1」

あれから2ヶ月ほど経ち、道具屋リュミエールはクヨウの目論見通りある程度名前が売れてきたので、ポジションを特許商品にし、本来一番やりたかった事に専念することにした。

「ん〜、これでひと段落だねえ」

「やっと終わったか、流石に長かったな」

「うん、これでやっとオリジナルの魔法具を作れるよ」

最近ポジションばかり作っていたが、クヨウの能力は魔法具生成能力である。店も有名になったところで、オリジナル魔法具を売れ筋にもっていくのがクヨウの目標であった。

そして、最近雑用しかやってなかったレンヤも本格的にハンターとして活動しようとしていた。

「あとね、そろそろ店員でも雇おうかと思っているんだ。流石にすべてを1人でやっていくのは難しいでしょ？」

「頃合か〜？若干遅いとも思う方がいい案だと思うよ」

「2人程雇おうと思ってるんだけど、レンヤはいい人知らない？」

「流石に一般の人ではわからないぞ、知り合いは9割がたハンターだしな。ギルドで募集かけたらどうだ？商人ギルドとか人材の斡旋とかやってないのか？」

「あ」

クヨウは商人ギルドが人材の斡旋等もやっていることをすっかり忘れていた。

「明日にでも行ってみよう。ギルド経由の紹介なら信用できそうだしね」

「面接とかするのか？雇用条件とかも考えておけよ」

「ん〜、そう考えるとめんどくさくなってきたな・・・」

若干やる気を削がれつつも、条件等を考えていった。

次の日、クヨウは朝一で商人ギルドへ向かった。

商人ギルドの建物は町の大通りにあり、見た目は大きいが仰々しくも無い建物である。中に入ると朝早い時間だというのに、広いフロアにかなりの人数の人が行き来していた。クヨウはたまに見かける知り合いと挨拶をしながら中に入り受付の順番をまっていた。

「よう〜、リュミエールのクヨウじゃないか。相変わらず儲かっているか？」

かなりいい体格をした中年の男性が隣に座っていた。「ガハハハ」と豪快に笑うこの中年は「ガラム・リジア」というクヨウと同じ道具屋をやっている人だった。

「特許商品はだいぶ儲かっているみたいじゃねえか、商売の虫になつてないで彼女の1人でも作つたらどうだ？ガハハハ！」

「ん〜、商売は趣味の一環みたいなものですよ。それにしても、相変わらずガラムさんは声が大きすぎですよ。耳が痛い」

クヨウは後半はスルーした。十中八九面倒なことになると予想したからだった。

「ん？こいつは素だからな、今更どうにもならねえよ！ガハハハハ

「！」
「まあ、今更治るとも思ってたんですけどね。そんなことより、ガルムさんは今日どんな用事ですか？あまり商人ギルドとかにはこなさそうないメージなんですけど」

「ああ、今日はちよつとした野暮用だよ。しかし、それを言ったらクヨウもだろ？店は大丈夫なのか？」

「こんな朝早くから店は開けてませんよ、帰ったら開けますけど」

ちなみに現在朝の7時過ぎ、いつもクヨウが店を開けるのは8時半〜9時の間である。

「僕は要件はいたって簡単、店員の募集ですよ。もう人を雇えるくらいのお金がありますからね」

「稼いでいるやつあ言うことが違うねえ、うちなんて少ない稼ぎで遣り繰りしてるってのになあ？」

「ガルムさんも冗談はほどほどにね、ガルムさんところだって、ここ数週間はかなり売り上げ伸ばしてるんじゃない？」

「なんだ、知ってたのかガハハハ。クヨウのおかげですっかりと儲けさせてもらったからな」

ここ数週間、つまりクヨウがポジションの作成・販売に追われていた時であった。ガルムの店は売り物は基本平凡。やや、珍しいものも扱ってます。という感じではあったが、商売の仕方が上手かった。行商がいくらポジション目当てでこの町に来るといっても、当然のごとくりュミエール以外の店もまわる。ガルムはそれを商売のチャンスとし、行商に取り入るのではなく、行商すらも利用し上手く売り上げを伸ばしていった。クヨウはその辺の事を最近知って、ガルムに対し若干ではあったが尊敬の念を抱いていた。

「あ、呼ばれたので僕はこれで」

「おう、またな！」

ガルムはクヨウの背中をバンバン叩きながら見送った。

「しつつかし、若いのにあの発想力はすごいな。いや、若いからできるのか？」

俺も老けたもんだと一人笑いながらガルムは受付の順番を待っていた。

クヨウが受付に入ると受付の女性が迎えてくれた。クヨウは従業員の募集と必用条件を書いた紙を提出した。

「今日は従業員の募集ということで、お願いにきました」

「はい、わかりました。こちらの紙はもう記入済みのようですので確認させていただきますね」

女性は紙に記入漏れが無いかチェックいき、納得する。

「最近話題のリュミエールさんでしたか、キサラギさんでよろしいですか？」

「はい、そうです。ところで最近話題のって何か変な噂でもあるんですか？」

「いえいえ、変な噂ではないですよ。新進気鋭の道具屋があると、そういうことです」

それを聞いて若干照れるクヨウだった。受付の女性はそれを微笑ましくみていた。

「期限は7日後までで、7日後に面接をしたいと思っています。雇

用条件は紙に書いた通りで」

「わかりました、ではそのように案内を出しますね。他に「用件はありますか?」

「いえ、大丈夫です。よろしく願います」

若干の不安と期待をしつつクヨウは店に戻っていった。店に戻る途中、面接で何を聞こうか悩んで2、3回転びそうになるのは「愛嬌」

第7話「新しい従業員 その1」（後書き）

サブタイトルを面接といいつつ面接のネタがあまり浮かばなかった
ので、サブタイトルを変更しました。

意外と長くなりそうです。

第8話「新しい従業員 その2」(前書き)

アクセス数やお気に入りの数が増えるとうれしいですね。

読んでくださっている方々に感謝です。

第8話「新しい従業員 その2」

第8話「新しい従業員 その2」

クヨウは商人ギルドの一室を借り、面接をしていた。

ある程度知名度が上がったおかげで2名募集に10人ほど集まっていた。意外と集まっていたことにクヨウは驚いていたが、雇用条件も悪くはなかったから、こんなもんなのだらうと納得する。

気を取り直し、面接を始める。とは言ってもそんなに大げさなことはいらない、そんなに大きい仕事はないのだから。聞いたことといえ、勤務できる曜日や時間、経験くらいなもの。

あとはクヨウの好み（女性のタイプではなく、仕事を一緒にしたいかどうか）で判断していった。

2時間後、「意外と時間がかかったなあ」とダレながらクヨウは休憩していた。

後日商人ギルドを通して本人に通知する予定で、店へ戻ると意外なことにレンヤが店で待っていた。

「あれ？依頼を受けに行ってたんじゃないの？レンヤ」

「従業員にどんな子が入るか知りたいじゃん、いい子いたか？」

レンヤはニヤニヤしながら聞いてくるのを若干引きつつクヨウは苦笑していた。

「ん、もうこの人にしようっていうのはある程度決まっているよ。あとはシフトとの兼ね合いだね。働けない日が多い人を雇ってもねえ」

「いや・・・そうじゃなくてだな・・・、はっ！まさか男を入れる

んじやないだろうな！？俺は反対するぞ！従業員は全員女性で頼む！しかも可愛い子でだ！むさ苦しいのはもう嫌だ！俺は華がほしいんだ！」

「鼻なら顔についてるでしょ？レンヤはもう店の仕事しないでいいんだからあまり関係ないと思うけど・・・」

「そつちの「はな」じゃねええ！いや、女の子の従業員がくるなら働くよ俺も！むしろ働かせてください！」

最後は土下座してくるレンヤに飽きれるクヨウであった。

「まったく、有望株のハンターが何を言っているの。それにハンターでもパーティ組めば女性と仲良くできるじゃない。本業だしそつちのほうがいいんじゃないの？」

「ゴリラが多いんだよ！顔が可愛いのに限ってハンマーでモンスタ一の頭を笑顔で叩き潰すやつとかいるんだぞ！こええよ、マジでこえよ！綺麗系のお姉さんタイプは男がついてるか男を連れてるかだよ！ハンターの女には碌なのがないんだよ！この間なんか・・・」

大声で力説し始めるレンヤ、クヨウは「こいつはハンターに何を求める気だ？」と若干思っていたりした。しかし、レンヤの力説は長くは続かなかつた。レンヤの後ろに「まおう」が降臨したかのようにエミリアと複数の女性が立っていたからであった。

「ほほう、レンヤちゃんはお姉さんたちをそういうふうに使っていたわけか・・・なるほどなるほど。これは少し「おはなし」が必要かな？なあ、みんな？」

この声でレンヤの動きと一瞬ではあったが心臓が止まった。そしてさびついたロボットの如くぎこちない動きで後ろをみるとレンヤは

冷や汗を滝のように流していた。

このとき、クヨウは心の中でレンヤに合掌していた。

「ああああああのののの、ここっここっここっこれはですすすねねね」

すでにまともな会話と思考のできてないレンヤをエミリア達は連行していった。

クヨウは心の中で誓う「女性は怒らせないようにしよう」と。

しばらくして、真っ白になってボロボロのレンヤとエミリア達が戻ってきた、エミリアの顔色が良くなっていたのは気のせいであろう。とりあえず、クヨウは何も見なかったことにして対応することにした。決して現実逃避をしているわけではない。

「いらっしゃいませ、こんにちはエミリアさん」

「やあ、クヨウちゃんも相変わらずだねえ。みんなに紹介しておこうか、クヨウ・キサラギちゃんだ。私のお気に入りだから手をださないようにな？」

「またそんな冗談を」とクヨウは他のメンバーと挨拶を交わしていった。

「今日はダンジョンに潜るからそれなりの用意をしようと思ってね」「あ、そちらの方々はパーティの人たちですか。ん、珍しいですね、いつもは1人で行動しているのに。ついでにいうとダンジョンへ潜るのも珍しい」

「今回も依頼だよ。1人腕利きが欲しかったそうだ。ついでに女性

しかないから、女性で強い人ってことでね」

なるほど、と納得しつつ有用な物を紹介していった。

「ふむ、こんなものだろう。いや助かった、ダンジョンにはあまり行かないから揃えるものがイマイチわからなかったからな」

「モンスター狩とダンジョン探索は別物ですからね。あ、そうだエミリアさん、1つ面白い物ありませんか？」

そういうとクヨウは試作品の魔法具を取り出した。それは腕時計のような形をした物であった。

「これは覚えさせた位置からの、直線距離と方向と高さを表示する物です。ついでに方角もわかりますね。覚えさせれる位置は1箇所のみ。1度魔力を入れると連続は6時間は使用できます。1回の時間は短いかもしれませんが、少ない魔力で動くのでそこまで問題はないと思います。使ってみませんか？」

「おや？いつのまに魔法具の販売なんて始めたんだい？」

「元々やるつもりではいたんですよ、忙しくてできなかっただけで」

「そーなのか。ふむふむ、まあ便利そうではあるから使いたいんだが魔法具を買えるだけのお金を用意してないから今回は遠慮しておくよ」

「あ、お金はいりませんよ、試作品ですから。あとで感想を聞かせてもらえれば十分です。ついでに要望があると嬉しいですね」

クヨウの言葉に周りのほとんどの人間が反応していた。エミリアは「無料ならいいか、使い心地を話せばいいだけだし」と、他のパーティの面々は「あの利便性で試作品なのか」と驚いていた。

クヨウ自身は電池で数百時間は連続で動く似たような物を知っていたから、この魔法具の使用時間が短く感じたのだ。だが、ダンジヨ

ンに慣れているハンターのメンバーからしてみるとかなりの長時間、しかも方角や覚えさせた高さや方向がわかるのはかなり便利であった。なので、エミリアが貰うと他のメンバーも欲しいとクヨウに迫るが、生憎1つしか作っていなかったので諦めるしかなかった。

エミリア達が帰ったあとに、「ハンターの人たちにアンケートしたらいいアイデアが貰えそうだな」と考えているところにレンヤがようやく復活した。

「助けてくれてもよかつただろうクヨウ、相棒だろ？」

「いやね、女性に囲まれて幸せそうな状況を崩すのは流石に気がひけたからね、アーウラヤマシカッター」

「後半棒読みで何を言ってるやがる。しかし、身体能力がいくら強くなってもエミリアさんには勝てる気がしないのは何故なんだ？」

「世に言う、ギャグ補正つてやつだろう」

「んなものあってたまるかい！」

「さてと、面接の結果でもまとめるかなあ。レンヤ、店番お願いね」

「話を変えやがって、了解了解、頼むから可愛い子にしてくれよ」

クヨウは店の奥に引っ込み、面接の結果をまとめていった。

数日後、2人の新しい従業員が店に訪れるのであった。

第8話「新しい従業員 その2」（後書き）

落ち目のレンヤは書いてて面白かったです。

次で新しい従業員が出る予定でいます。お楽しみに。

第9話「新しい従業員 その3」(前書き)

初の感想ありがとうございます！

正直かなりうれしいものですね、アクセス数やお気に入りとはまた違ううれしさがあります。

今後がんばっていきたいと思います。

第9話「新しい従業員 その3」

第9話「新しい従業員 その3」

「では、改めまして。クヨウ・キサラギです。よろしく願いしますね」

「レナリンス・エンプレスですう、よろしく願いしますう」
「え」と、ミリア・カーディナルよ、よろしく願いします」

面接の結果の通知後、3人は店内で顔合わせをしていた。

「今日はとりあえず、仕事を教えるので2人に来てもらいましたが、基本的に1人ずつ仕事をしてもらう予定です。まあ、出勤日が重なってる日は2人でやってもらいます。それと、1人ずつとはいっても基本僕もいますので、何かあったら呼んでください」

「『呼ぶ』ということは店長は店内にいないんですか？」

「ん、僕がいる場所はそのときの気分です。店内で品物整理したり、魔法具を作成してたりしてます。魔法具作成の時は奥にいますね」

「なるほど、わかりました」

「え」と店長さん、このお店って魔法具も売ってたんですかあ？お姉ちゃんの話だと道具関係も売っている」というふうに聞いたんですけどお」

「ん、まだ売ってないですよ。これから売る予定です」

「あ、なるほど、わかりましたあ」

「では、仕事内容の説明をしますね」

こうしてクヨウは仕事内容の説明に入った。とはいっても、仕事内容は主に接客、品物整理等である。仕事の内容と商品の説明が一通

り終わったところで、タイミングよく1人の女性が入ってきた。

「クヨウちゃんいる〜?」

「あ、お疲れ様です、カティナさん」

入ってきたのはカティナ・ルーベンス。服飾の仕事をしていて、ラングランでもある程度名前が通っている。結構テンションは高めの女性である。

「お、その娘達が新人さん?可愛い子じゃない、クヨウちゃんもやるね〜」

「ははは、外見で選んだつもりはないんですけどね。とりあえず紹介します。青色の髪でセミロングなのがレナリンス・エンプレスさんで、緋色の髪でロングなのがミリア・カーディナルさんです。え〜とこちらはカティナ・ルーベンスさん、服飾の仕事をしていて、今回2人の仕事着を作ってもらう予定です」

「そゆこと〜、レナリンスちゃんとミリアちゃんね、あたしのことはカティナでいいから。よろしくね」

「あ、はい。よろしくお願いしますカティナさん」

「はい〜、カティナさん〜、よろしくお願いしますねえ〜」

ミリアは若干カティナのハイテンションに押されていた。レナリンスは特に気にしてはいなかった。そしてレナリンスは何か思い出したように全員に話しかけた。

「あ〜、皆さん〜、私のことはリンスちゃんでもいいですよ〜、長いしい、お姉ちゃん達も〜そう呼んでいますからあ〜」

「ん〜、了解、次からはそう呼ぶね」

全員の紹介が終わり、カティナはリンスとミリアの服のサイズを測

つていき、デザインに関しての要望を聞いていった。

「はい、これで終わりつと。服は10日後くらいには出来上がって
ると思うから、ちゃんと取りに着てね」

「ん〜、了解。それではお願いしますね〜」

「はいはい〜」と言って、カティナは帰っていった。そして、時間
はすでに昼近くにまでなっていた。

「ん〜、もうお昼か〜。昼食でもつくるかなあ〜。2人も食べるで
しょ〜?」

「え、いいんですか?お願いできるならありがたいですけど」

「店長さんはあ〜、料理できるんですかあ〜?」

「気にしなくても良いよ。それと、自炊はしてるから料理はできる
よ。じゃあ、13時に開店するから、それまで店内でも見ててね」

そうしてクヨウは奥に入って料理を始めた。クヨウは元々料理が好
きな部類に入るのでそれなりに上手かった。そして、リンスとミリア
アは店内を見回っていた。

「ねえねえ、リンスちゃん。そののんびり口調はどうにかならない
かな?なんかこう、調子が狂うというか、変な感じがするんだけど」

「え〜、この口調ですかあ〜?昔からあ〜こんな感じなのでえ〜、
どうにもならないですよ。ミリアさんは嫌でしたかあ〜?」

「あ〜、別に嫌とかじゃないから気を悪くしたらごめんね。ただ、
のんびり過ぎてこっちものんびりしちゃいそうだね?」

「あ〜、でものんびりしたほうがいいじゃないですかあ〜?人生気
楽が一番ですよ〜」

「あははは〜」とでも言い出しそうな笑顔でリンス答えた。ミリア

も「これは無理かな？」と諦めるのであった。

その後、クヨウの昼食を食べ、かなり美味しく2人は若干落ち込んだりしたが、気を取り直しお店の準備を始めた。仕事ぶりはミアが緊張してハプニングを起こしたが、特に目立った問題もなくこの日は過ぎていった。

「2人共ご苦労さま、特に問題なさそうでしたよかったです」

「でも初日ですから結構緊張しましたよ、あゝ！おつりの間違えが悔やまれるう」

頭を抱えてミアは凹み、リンスはよしよしとミアの頭を撫でていた。

「緊張は仕方がないと思うよ、僕としてはなかなか微笑ましかつたから楽しめしたし」

「うう、他人事だと思って」

ミアがジト目でクヨウを睨むが、若干涙目になっていたので、クヨウとして全く怖くなかった。というか和んでいた。そんなやりとりが終わったところに、レンヤが依頼を終わらせて帰ってきた。

「ただいま、って・・・もしかして新しい従業員の子！？お、可愛いじゃん、クヨウ！よくやった！」

「帰ってきてすぐさまそれですか？まあ、一応紹介しておきますね」

「一応副店長（仮）のレンヤ・アオイです」

「一応って言うなよ、それと、何で（仮）？」

「（笑）のほろが良かった？それにレンヤの本業はハンターじゃん」「それも勘弁してくれ。まあ固いこと言わないでさ、2人ともよろしくな」

レンヤの勢いに2人は引いたが、気を直し自己紹介をすませた。このあと、レンヤが暴走しかけるがそれは別の話。その後、リンストミアは帰宅していった。

「んで、クヨウく、2人はどんな感じだった？」

「ミアさんは意外と抜けてて面白かったなあ。微笑ましいと言った方がいいのかな？まあ初日の緊張もあったんだろうけどね。リンスちゃんは見た目に反してしっかりしてたなあ、慣れてるのが緊張とは無縁なのかはわからないけど」

「ふむふむ、でもなあ、やっぱり俺的にはミアちゃんかな？なかなか可愛いし好みだし、クヨウはどっちがいいんだ？」

「何でそっちにいつちゃうのかな？まあいいか。ん、僕的に？2人とも可愛いと思うよ。なんか和む」

「和むって親父臭いぞクヨウ。まあいいか、どうせクヨウの枯れ具合はこんなもんだしな。俺も明日は店に出ようかな？」

枯れていると言われてクヨウは若干落ち込むが、言われっぱなしも癪なので少しは反論しておくことにした。

「枯れてるとは酷い言い様だなあ。まあ、レンヤは店に出なくてもいいよ、邪魔だし。それに2人を雇った意味がなくなるしねえ」

「なんでじゃ！?!?!?!?!?別にいいだろ、なんだったら俺が仕事を教えるよ！だから俺も店に出る！」

「いや、もう仕事は教えたし、レンヤがいても邪魔になるだけだから、出なくていいよ。それに本業の邪魔しちゃいけないだろう？」

それでも店に出たいというレンヤをクヨウはぼつさり切り捨てた。その夜、「なんでじゃ！！！！！！」という叫び声が店からしたという。

第9話「新しい従業員 その3」（後書き）

新キャラが何故か3人になってしまいました。まあ、仕事着は大事ですよ？

キャラクターの外見はそこまで細かくは設定しないつもりなので、自由に想像（妄想？）してください。

それでは、次回をお楽しみに！

第10話「新しい従業員 その4」(前書き)

まだ新しい従業員は続きます。レナリンスを天然っぽく喋らせようと色々試していますが、なかなか難しいです。

今回レナは出番なし！出したら話が収拾つかなくなりそうです・・・

第10話「新しい従業員 その4」

第10話「新しい従業員 その4」

「ここがリュミエールね。ちょっと楽しみかも」

「ん〜、制服姿のあの子も楽しみね〜」

道具屋リュミエールの前に2人の女性が立っていた。ことの始まりは数日前のことである。

その日、エンプレス家で3人の女性が食事をしていた。

長女：レナリアス・エンプレス

次女：レナリス・エンプレス

3女：レナリス・エンプレス

周りからは女帝3姉妹とも呼ばれている美人姉妹であった。

「そういえば、リンスちゃん。前にどこかに面接に行ってなかったっけ？結果はどうだったの？」

「あ〜、そ〜いえばお姉ちゃん達には言ってなかったねえ〜。え〜と〜、受かったよ〜」

「え、ほんとだったの！？リア姉さんの冗談じゃなかったんだ」

「リリちゃんも酷いな〜、リンスちゃんを使って冗談は言わないよ〜」

「じゃあ、今度お祝いしないとね〜」と姉であるレナリアスは喜んでいた。しかし、もう1人の姉であるレナリスは不満顔であった。

「む〜、リンスちゃんとも一緒に教師がしたかったな〜。あ、でもどうして今更就職する気になったの？学園を卒業してからは魔法具

の研究一筋だったのにさ」

レナリリスが言った学園とは、アルカディアス国立総合技術学園のことである。

「武術も魔法も道具も技術の1つである」という理念のもとに設立された学園であり、性別は元より種族を超えて生徒を募集している。おかげで大陸一の学園と呼ばれるほどに大きくなった。通称『学園』と呼ばれており、武術科・魔法科・道具科がある。

3姉妹は全員この卒業生であり、レナリアスは武術科、レナリリスは魔法科、レナリンスは道具科を卒業している。卒業後の進路は自由であるので、レナリアスは武術科、レナリリスは魔法科の教師になった。レナリンスだけは家で魔法具の研究をしていた。

「理由？店長さんにいゝ、興味があつたからですよおゝ」

それを聞いた瞬間にレナリリスの目が一瞬で輝いた。

「もしかしてリンスちゃん初恋！？店長さんって可愛いのかっこいいの？もう誘惑はしたの！？」

色恋沙汰が大好きなレナリリスであった。見た目のスタイルも良い上に、思わせぶりの行動をとったりする為、学園では一部からはエロ教師とも呼ばれ、口説かれた数が学園一と有名である。また、彼氏と言う名の下僕が複数人存在するとも言われているが、それは謎につつまれている。それでも教師としては男女問わず評価も人気も高かった。

「もし可愛くて興味ないなら私が食べるわよ、なんなら一緒にヤル？」

……これでも一応教師である。

「気後れしてるの？大丈夫、リンスちゃんが迫ったらイチコロ（死語）だから！最悪襲って既成事実を作っちゃえばいいのよ！私も協力するわよ！むしろ私も混ぜなさい！」

……こいつ本当に教師か？

暴走気味に迫ってくる姉をレナリンスは「リリオ姉ちゃんは変わらないなあ」と、どこか他人事のようにのんびり眺めていた。

「はいはいはい、リリも暴走しない、リンスちゃんもわざわざ煽る様な言葉を使わないの。リンスちゃんの「興味がある」ってそういう意味じゃないでしょう？」

「あははは、リリオ姉ちゃんを眺めてると楽しくてえ、ついつい〜ね〜」

「う〜ん、相変わらずリアお姉ちゃんもリンスちゃんもつれないなあ。で、結局興味っていうのはどういうことなの？」

「それはですね〜あの店長さんがポジションを作ったんですよ〜」

レナリンスは道具科の卒業生である。しかも首席で卒業したくらいなので道具に関しては知識はかなりある。魔法具に関しては十八番で研究し、良い物ができたら売るということをしていた。そこへクヨウがポジションを売り出したのだ。試しに買ってみてその効果の高さにレナリンスは驚いたと同時に自分への挑戦だと勝手に解釈する。当初は特許商品ではなかったため、素材やレシピは非公開なのである。当然レナリンスは解析を開始した。

結果は惨敗。特許商品化による素材とレシピ公開によるタイムアップだった。学園を首席で卒業した事には少し誇りを持っていたが見

事に霧散してしまった。それと同時にポーションを作った人に興味を抱いていた、そこへ従業員の募集がきたので応募したのだった。

「へえ、面白そうね。ねえリリちゃん、今度見に行こうか」

「あ、いいねそれ。リンスちゃんを凹ました人には興味あるし」

そして、今に至る。ちなみに今日来ることはレナリンスには内緒である。

そして2人は意気揚々と中へ入っていった。

「いらつしゃいませえ、お姉ちゃん？」

「はあ、その制服可愛いわねえ」

「リンスちゃんが御執心なカレはどこ？」

今はレナリンスが1人で店番をしていた。クヨウは奥で魔法具を作っていた。

「あらそうなの？じゃあ呼んだらお邪魔かしら？」

「え、とお、大丈夫うだと思つよあ、ちよつと待つてねえ」

レナリンスは奥に入っていく、クヨウを呼んできた。クヨウは姉妹を見ると少し驚いたようだったが、すぐに落ち着く。

「いらつしゃいませ、僕に何か御用でしょうか？」

「御用っていうほどじゃないのよ、っとその前に自己紹介がまだだつたわね。私はレナリアスで、こつちが妹のレナリリス、今日は妹がお世話になつてるからその挨拶にね」

レナリアスはウィンクしながら答える、その横ではレナリリスがク

ヨウを値踏みするように眺めていた。

「ごく丁寧にどうも。僕はクヨウ・キサラギといます。こちらこそお世話になってますからね、お構いなく。ところでそちらのレナリスさんは何故僕を睨むのでしょうか？」

若干怯えるクヨウであった、レナリスの目が徐々に獲物を見つけたような目が変わっていったからである。

「ふ〜ん、ちょっと眠そうな目が減点かな〜、いやでもあれはあれで……」

「あ〜リリちゃんのごときは放っておいていいわよ、貴方のことを気に入ったみたいだからね」

ブツブツと呟くレナリスをとりあえず放っておいて話を進めることにしたレナリアスであった。

「貴方のことはリンスちゃんから聞いてるわ、あのポーション創ったそうじゃない。あれを再現できなくてリンスちゃんが凹んでいたのよ」

「ん〜？リンスちゃんが再現??」

「あれ？リンスちゃん、まだ話してなかったの？」

「だってえ〜、なんとまあ〜く機会がなくて〜」

妙に尻込みをするレナリスに呆れてレナリアスは話を進める。ついでに学園の道具科を首席で卒業したことなどを話していった。その後、復帰したレナリスがクヨウとレナリスを散々からかいたおしていた。

2人が帰った後には、力尽きたクヨウと申し訳なさそうにしているレナリスがいるのであった。

「ん〜なかなかパワフルな人たちだったなあ、正直疲れた・・・」
「あはは〜、店長ごめんねえ〜」

「リンスちゃんが悪いわけでもないから気にしなくてもいいよ。そんなことよりリンスちゃんが学園の道具科の卒業者だったのは驚いたよ」

「でもあ〜、店長には及ばないですよあ〜。たま〜に見せてもらう魔法具だって私が思いつかないものばかりだし〜」

「ははは」

クヨウが創る魔法具の元は電化製品や漫画のネタなのはクヨウだけの秘密だったりする。しかも、能力で魔法具を創ってから術式に落とし込むやりかたなので、カンニングに近かったりする。クヨウは苦笑いしかできなかった。

「店長〜、今度共同研究で魔法具創りませんかあ〜？店長とだったらあ〜楽しそうなんだけどなあ〜」

「それもいいかもねえ、まあ何かあればやってみようか？」

それを聞いたレナリンスは喜んでいた。それと同時に、『店長』と『師匠』、呼ぶならどっちかな〜？と微妙にズレことに悩んだりしていた。

「リンスちゃんも満更でもなさそうだったわねえ〜」

「クヨウちゃんはあまりその辺のことには鋭くなさそうだったから、何かで焚き付けたりするのも面白いかもねえ〜、考えたらわくわくしてきた〜！」

「リリちゃんは少し落ち着こうね、いくらリンスちゃんが満更でも

なさそうとは言っても、まだその気はなさそうよ」「

「まだってことはリアお姉ちゃんも有り得るとは思ってるんでしょ？？」ならいいじゃない」「

「ふう、まったく。ほどほどにしなさいよ？」「

帰る途中のレナリスの頭の中では悪戯や危ない妄想が渦巻いていた。被害者になるであろう2人は、知る由もないことだったが、流石に悪寒を感じるのであった。

第10話「新しい従業員 その4」(後書き)

話の終わらせ方がなかなかスムーズにいかないもんです。

回想シーンが思いのほか長くなってしまいました。もうちょっと考えて作らないとなぁ〜と反省中。

次で新しい従業員は終わります。では次回をお楽しみに〜

第11話「新しい従業員 その5」(前書き)

軽いのりで終わらせるつもりが、思ったよりシリアス風味になってしまいました。

気がつくとも新キャラのほとんどが女性ばかり・・・男ばかりよ
りかはいいですけど、男性も増やさねば。

第11話「新しい従業員 その5」

第11話「新しい従業員 その5」

「そういえば・・・ミリアさんってうちで働く目的とかがあってありますか？」

「え？どういう意味ですか？」

ある日のクヨウの突然の質問にミリアはハテナマークを浮べる。先日発覚した（そんなに大袈裟にするほどでもないが）レナリンスの目的の例があったので、クヨウは聞くだけ聞いてみることにしたのだ。ミリアはミリアで面接の時にも聞かれなかった事な上に、何も思い当たることがなかったため激しく混乱していた。クヨウから理由を大まかに聞かされると納得し、「意外と考えているんだなあ」と驚いていた。

「私はそんなに大袈裟な理由はありませんよ、あえて言うなら「経験のため」といったところですよ」

「経験のため？」

「ええ、『自分のしたい事』っていうのがまだ分からなくて、手っ取り早く色々と経験してみようと思ったわけですよ。学園に入ったのはハンターや冒険者ってどんな感じなんだろう？と思っただけですし、武術を習ったのも国の兵士っていうのを疑似体験できますから。この仕事もそのうちの1つですね。あ、仕事を放り出して辞めるとかはしませんから誤解しないでくださいね。最低でも1年か2年はやりますので」

「んー、じゃあ今は色々とチャレンジしてる最中なんだ。行動的だなあ、僕には真似できないなあ」

「店長が真似する必要もないじゃないですか、こうしてやりたいこ

とをやってる訳ですし」

「僕の場合は半分くらい成り行きだからなあ、趣味の一環なのは認めるけどね」

「でも、ミリアさんは少し難しく考えすぎだよ」と言つてクヨウは笑う。しかしミリアは将来を無計画に過ごしたくはないと意気込んでいた。そんな話をしていた時にエミリアがやってきた。クヨウは「ちょうどいいかなあ？」と思ひエミリアにどうしてハンターをやっているかを聞いてみることにした。

「私がハンターをやってる理由？ 藪から棒にどうしたんだい？」

いきなり質問しても驚くだけなので、クヨウは理由を説明した。

「ふむ、なるほどね。私の場合は簡単だよ、『父に憧れた』ただそれだけの話さ」

「父に・・・ですか？」

「小さい頃は父のことが嫌いだね、ハンターをやつてたから収入が不安定で家にほとんどいない。いくら周囲の人間が良く言う人であっても、母に心配をかけっぱなしで私もあまり構ってもらえなかったからね。そして、ある日帰らぬ人になってしまった。最初は涙も出なかった、元々『いない人』が『いなくなつた』その程度にしか思わなかったからね。でも父の葬儀の時に思い知つた。たしかに父は『父親』としては失格だったかもしれない、でも変わりに『ハンター』として『人間』としては決して間違つてはいなかったとね。父に助けられたという人が大勢来てね、涙ながらに父のことを語ってくれたんだ。そしてその時に思い出したんだ、父が仕事のことを話してくれたときの幸せそうな笑顔を。その後は大泣きしてしまつたが、自分もあんな笑顔をしたいと思つたんだ。父に憧れたというのはそういうことさ」

エミリアは静かに、しかし嬉しそうに語っていた。クヨウは「気軽に聞ける話じゃないよなあ」と若干後悔していた。その隣でミリアは感動のあまり涙ぐんでいた。

「少々湿っぽくなってしまったかな？父のことを語れるのは嬉しいからあまり気にしなくてもいいよ」

クヨウが後悔したのをエミリアが見逃すはずもなくフォローをいれる。同時に涙ぐんでいるミリアの頭を「可愛いねえ」と撫でていた。

その後、ミリアが落ち着くまでクヨウがお茶をいれて和んでいた。

「すみません、お恥ずかしい所を見せてしまいました・・・」

ミリアは顔を真っ赤にして俯いている。

「いやいや、ミリアちゃんの可愛いところが見れたから私としては儲け物だったよ」

「はう・・・」

「エミリアさん、ミリアさんをあんまりからかわないようにね」

「ふむ、未来の旦那様の注意は聞いておくとしよう」

クヨウは「それはいったい誰が、誰の？」と聞こうとしたが、蕪蛇になりそうだったのでスルーした。そしてエミリアの顔はさらに赤くなっていった。

「ん、冗談はともかく、ミリアさんには参考になったかい？」

「あ、そう・・・ですね。ただ私にはそういう経験がないので・・・」

「

「ふむ、ではお姉さんからのアドバイスだ。ミリアちゃんは考えすぎだね、無計画に・・・とまでは言わないけど、もうちょっと成り行きにしたがってみるのもいいと思うよ」

「考えすぎってというのは店長と同じ意見ですね。それにしても成り行きに従ってみる・・・ですか？」

「そう、何が起こるかわからないのが世の中っていうものだ。例えば、2年とか3年で次に移るんじゃないかって、このままずっとこの店員を続けてみる・・・とかね？確かにやらなきゃ分からない事はある。でもね、やり続けないとわからない事もある。1度の人生を失敗したくないとは思わないほうがいい。失敗してもいいから楽しまなきゃ損だよ。『やりたい事を探す』というのもいいけど、『やりたい事を作る』っていうのも有りって事さ」

「『やりたい事を作る』、か・・・」

『成り行きに従う』ミリアはそんなことを考えたこともなかったのに、その衝撃は大きかった。

「今日のお姉さんは随分と真面目になってしまったな、もうちょっと気軽な感じが好きなんだが」

「ん、すみません」

「クヨウちゃんが謝る事じゃないよ。それに、たまにはこういうのもいいだろう」

エミリアはウインクをして、ぼんぼんとクヨウの頭に手をのせていた。

その後、エミリアが買い物を終えて帰宅するまでミリアは唸っていた。そしてこの日はあまり客がこなかったため、ミリアはお茶を飲みつつ唸るのであった。

数日後・・・

「やあ、元気にしてるかな？」

「いらっしやいませ、エミリアさん」

「元気そうだなによりだ。ところで、今日はミアアちゃんはあれからどうなったのかきになってね。アドバイスをしたお姉さんとしては放っておけないんだよ」

「ん〜、「とりあえず、今を一生懸命過ごしてみます」とは言っていましたよ」

「そうか、それなら大丈夫だろう。少し安心したよ、変な意味にはとらえてないようだしね」

アドバイスをした身として、気になるのは当然だろう。それにあまり思いつめても仕方がないこともある。

「そうですね〜・・・それはそうとエミリアさんはいつになったら結婚するんですか？少しは計画も大事ですよ？」

ここでクヨウは強引に話を変える、あまり本人のいない所での噂話は好きではない。それと、いつまでも1人身でいるエミリアへの心配でもあった。

「確かにそうだが、生憎相手がいなくてね。外見や偏見で私をみてる有象無象には興味が湧かないからね。まあ私にはクヨウちゃんがいるからあまり心配しなくてもいいじゃないか」

「僕を勝手に婚約者にしないでくださいよ、それに僕にはそんな甲斐性ありません」

「それは残念、まあ気長に待つさ」

「本当に気があるのかな？」と誤ってしまつクヨウであるが、分かるわけないので話しを切り替える。

「じゃあレンヤはどうですか？同じハンターですから馬が合つんじゃないですか？」

「ハンターとは結婚する気はないよ。ところで、そういうクヨウちゃんはどうなんだい？リンスちゃんやミリアちゃんとは仲良くやつているんだらう？」

あまり好き勝手に聞かれるのも少し癪だったようで、エミリアも切り返してくる。しかし、クヨウは「男女の間でも友情はあると思いますよ」と脈があまりなさそうにしており、エミリアはがっかりする。

その後、レンヤが帰ってきて、恋愛話に花が咲いたりもしたが結局色気のないところで落ち着くのであった。

第11話「新しい従業員 その5」(後書き)

最近のレンヤはオチ担当

更新がおもったより大分早いので自分でもびっくりです。大きいエピソードがあまりないのもありますけどね。

では次回をお楽しみに

第12話「ブルーシード」(前書き)

これから大きいイベントの発生といったところです。

伏線の発生と回収ができるかが心配だったりもします。

第12話「ブルーシード」

第12話「ブルーシード」

「はあ、あ、たっだいま」

「あれ？レンヤ？ギルドの依頼を受けに入ったんじゃないの？」

ある日の朝、いつも通り店を開けて仕事を始めた頃にレンヤが突然帰ってきた。ちなみにミリアとレナリンスは外の掃除中。レンヤは朝依頼を受けに行くと早くても夕方前くらいまでは帰らない。下手をすると次の日ということもあるが、この日は様子が違っていた。

「いやいや、参ったよ。ギルドは今大忙しだ。今日は店を手伝うよ、多分忙しくなるだろうから」

「手伝うって、今日はミリアさんとリンスちゃんの2人がいるから大丈夫だよ。一体何があったの？」

「ただの面倒ごとだよ。数日前に神託が降りたらしいんだ、内容は『ブルーシードが地上に出現した』ってな」

神託とは神が人間に伝えるメッセージのことであり、どの人間に伝えるかは神の意思次第。その際、内容が真実である事を示すために、神託を受けた人間には聖痕が残る。

「レンヤさん！それ本当ですか!？」

「ブルーシード……ってえ、なんでしたっけえ？」

掃除を終えた2人が丁度店内へ入ってきた。ミリアはブルーシードについて知っているらしいが、レナリンスは興味がなさそうだった。

「ミリアちゃんはブルーシードが何なのかは知ってるのか？正直俺は知らんから教えてほしいところなんだが」

「ん〜、僕も知りたいな。教えてもらえませんか？」

「というか3人とも知らないんですか？？？御伽噺では有名ですよね？」

「。。。知りません」

「あ〜、そうですか・・・」

実際この世界の御伽噺で出てくる物だった。ミリアも実際詳しいことは知らないが、御伽噺で、出てくる内容を話した。ブルーシードは実際に手にしたものに永遠の命や富と栄誉を与えたり、魔王を滅ぼす力を授ける等等御伽噺ではよくありそうな内容ではあった。

「ん〜、それで何でレンヤが早く帰って来ることに繋がるの？」

「ああ、実はここ数日世界樹の森周辺が妙に騒がしくてな、モンスターが強化されてたりするらしいんだ。それで教会からブルーシードは世界樹の森か、その中にあるダンジョンに出現したんじゃないか？という話がきてるんだ。それで冒険者やハンターがこぞって向かおうとしているわけだ。しかしな、単独で森やダンジョンを制覇するのは普通は無理だろ？だから、ギルドでメンバー集めをしている阿呆どもが多いんだよ。ついでに強化されたモンスター討伐のパーティを集めているやつもいる。つまり勧誘活動が非常にうざいんだよ」

「あ〜、そういえばレンヤもAランクハンターになってたもんね」

「実はレンヤさんって凄かったんですね、普段ダメなところしか見なかったからイメージと違う」

「へえ〜、レンヤさんはあ〜普段のイメージとわあ、違うんですね〜」

「ミリアちゃんにリンスちゃん、ちょっと酷いな」

レンヤの心には無数の切り傷ができていた。実はこの町でも結構有名になっていたレンヤだった。何故ならこの町にきてから史上最短でAランクハンターになったのだ。しかもまだ底を見せていないところからSランクも夢ではないと言われている。クヨウもブルーシードに差ほど興味はなかったが、森やダンジョンに籠る人が増えるのは火を見るより明らかであったので、回復薬やポーション等、必須になりそうな道具を作るために店の奥に入っていた。

その後、予想通りハンターや冒険者が多く買い物をしにきたが、予想とは違った用事できた者もいた。

「おーっす、相変わらずこの店員は可愛いねえ。お！レンヤ、ここにいたのか・・・そんな格好で何してんのよ？」

「見れば分かるだろう？ここで働いてるんだよ」

入ってきた陽気な男はリユーク・アルメリアというBランクハンターでレンヤやクヨウの知り合いでもあった。

「丁度いいや、レンヤ一緒にブルーシードを探しに行こうぜ！なんならクヨウも一緒にさ。面子がそろわなくて困ってたんだよ、助かったわ」

「俺は行かんぞ、興味ない。多分クヨウも同じだと思っが？」

「は！？なんでだよ！？こういうのは浪漫だろう？ここで行かないや男がすたるだろ！」

「リユークが何を言いたいのかは理解できるが、正直なところ興味がないからな。おゝいクヨウ！ちよつと来てくれるか？」

そういうとクヨウが奥から出てきた。リユークが必死にクヨウを勧誘してきたが、レンヤと同じく興味がないと断る。その様子を見て

いた女性陣2人は軽くほつとしていた。
そして、リユークが肩を落としながら帰っていった。

「クヨウさん、本当にブルーシードに興味がないんですか？」
ミリアがおずおずと聞いてくる、その横でレナリンスも興味があるらしくクヨウを見ていた。

「ミリアさんどうしたの？」

「え、ああ・・・いえ、男の人ってそういうの好きそうなんで、時々探しに行っちゃうのかも思いましたので・・・」

「ん、ただ単に探しに行くなら面白いかもしれないけど。探索とかって疲れるし痛いから僕は嫌いなんだよ。店を閉めてどうこうっていうのはまず無いから安心していいよ」

クヨウは2人に心配させてしまったかとフォローを入れる。その横でレンヤは「いいなあ、クヨウだけ」と軽く落ち込んでいた。

その後、クヨウとレンヤを勧誘する人がきていたが、2人はすべて断った。そして午後になり一段落ついたところに全員で軽い昼食をとっていた。

「モグモグ・・・そういえば、教会からの探索依頼と討伐依頼も来てたなあ。なんで教会が探してるんだ？」

教会とはこの世界の最高神である「アマス神」を信奉しているアマス教会のことである。世界で一番大きい宗教であり、国家間を超えた権威も持っている。ちなみにクヨウとレンヤが会った『世界の管理人』はこの世界の人には認知されていない。(2話参照)

「モグモグ・・・それはですね、教会にとってはブルーシードは神の至宝とされているからなんですよ・・・あ、この具美味しい・・・教会としては『神の宝は教会が管理すべきだ』とか『神の宝は神

に返すべき』という理屈で探しているらしいです・・・モグモグ」
「ん、教会の勝手な推測か・・・そういえば歴代のブルーシードはどうなったのかな？御伽噺に出てくるくらいだから、1度や2度は出てきてるんだろっし」

「それがですね、手に入れたって人は出てきてないらしいです。私、昔調べたことがあるんです。過去3回神託が出されていたんですが、いずれも手に入れたという人は出てきていません」

「それならあゝどうしてみんな探しているのかなあゝ？いくら神託があるとはいえゝ、見つからないなら探しようもないのになあゝ・・・ハグハグハグ」

「リンスちゃんの言うとおりなんだけどね。ただ・・・各地に伝承が残ってるのよ。デタラメも多いんだけど、中には真実味があるものもあるの」

「なるほどね、しっかし・・・昼飯食つてるときにする話じゃないよな？」

「ん、今更感があるけどその通りだね。ちゃっちやと食べちゃおうか」

その日は、街全体が騒がしかった。それは大陸中で同時に起こっていることであった。

その一角での出来事・・・

「ブルーシードか・・・アレは我々が頂く」

「ええ、我々にこそあれは相応しい」

動くのは冒険者や教会だけではなかった・・・

第12話「ブルーシード」(後書き)

今後はどうしようかな?と悩んでいたります。

1つ言えることは・・・まだ戦闘描写をするつもりはありません。

第13話「マジジーナ選手権大会」(前書き)

伏線？何それ？カレーとどっちが美味しいかな？

第13話「マッジーナ選手権大会」

第13話「マッジーナ選手権大会」

ブルーシードの騒ぎからしばらく、道具屋リュミエールは忙しくはあったが、基本平和であった。忙しい理由も、道具が売れ行きがある程度のことであるので別段問題も無い。変わった事といえば、従業員2人の要望で働く日数が増えたことと、レナリンスが道具の作成を手伝うようになったくらいである。平和である、至って平和である。例えブルーシードが見つからなくても、世界のどこかで蠢く裏の組織が動くこうとも、全く関係はなかった。

「ん〜、今日もいい天気だね〜。のんびりお昼寝でもしたくなるね」
「あ〜、いいですねえ〜。どこかの芝生の上でえ〜、みんなでのんびりしたいですねえ〜」

「店長、リンスちゃんものんびりしすぎですよ」

ミアは呆れていた。それと同時に多少なりとも安心していた。数日前のブルーシード騒動で、自分の環境が激変してしまうのではないかと不安があったからだ。しかし、今目の前に2人をみているとそんなことは杞憂だと笑ってしまえる。そして、ふと気がつく。「今の自分は思っている以上にここが気に入っている」のだと。そんな気持ちを感じながら、微笑ましく目の前の2人を眺めていた。いつもと違ったのは、その日の昼過ぎのことであった。

「こんにちは〜、クヨウさん・・・じゃなくて店長さんいらっしやいますか？」

そういつて現れたのはカリイ・マルゼフであった。

「あ、カレーさんこんにちは」

「クヨウさんは相変わらずですねえ・・・」

「まあ、いいじゃないですか。ところで、今日はどうしたんですか？新商品なら特にはないですよ」

「いえ、今日はその用事ではないですよ。実はですね」

今回のカリイの用事とは『マッジーナ選手権大会』の宣伝とチラシ配りであった。『マッジーナ選手権大会』とは早い話オリンピックのようなものである。同じところもあるが、当然違うところがある。選手の登録や管理はギルドと商人ギルドが合同で行う。開催地は毎回大陸中央付近にある『ガチンコ連合国』であること。登録は個人単位から国家単位で登録が可能である。ただし、本選枠には限りがあるので、そこは各ギルド毎に予選を設けて、人数をある程度しぼる必要がある。しかし、参加人数が少なければ予選なしで本選に行くこともあるので、手軽に参加できる大きい大会という面がある。競技内容は各国家間で提案されて、最終的にガチンコ連合国とギルドの大会管理者が決める。実際の競技は戦闘物からスポーツまで幅広くある。それこそ、『武器・魔法有りでの武術大会』から『武器・魔法無しでのマラソン大会』まである。野良試合もあるので、飛び入り参加もやるうと思えばできる。当然各種目にはルールがあり、種族を超えた大会であるので、大陸中がお祭り騒ぎになる。

「ん、いつ聞いても思うんですけどね。もうちょっと名前はどうかにならないんですか？」

クヨウは『マッジーナ選手権大会』という名前がお気に召さなかったようだ。

「アハハ・・・そこは・・・まあ、気にしないでください。一応由来はありますからね」

名前の大本になった人物がいる。『マツジーナ・ガチンコ』というちよつと可哀相な名前だが、実は『ガチンコ連合国の創設者のリーダー』であり、当然連合国の名前の由来の人物でもある。この大会も元々この人物が考え出したものである。ただ、大会の理念は少し変わっている。

『人が人である限り闘争はなくなることは無い。しかし、それは平和を否定するものではない。何故なら闘争と平和の共存できるからである。その形がスポーツである。ならばスポーツで己の闘争を満足させよ。それが平和へつながる道であるから』

という青臭い理想論もいいところな内容であった。が、このマツジーナ・ガチンコという人物とその周囲の人間の行動力が凄まじかったらしく、わずか数年で実現してしまったのである。しかも、このスポーツ大会を開いたことにより、国家間の小競り合いが減少していったのであった。

ちなみに。ガチンコ連合国とは当初は小国のただの集まりであった。しかし『マツジーナ・ガチンコ』が小国をすべて纏め上げ、議会の頂点として、政治を行っている。商業の中心としても栄えている。武術やスポーツに力を注いでおり、一説には軍隊として纏まれば世界最強ではないか？とまで言われている。また『マツジーナ・ガチンコ』が筋肉質で体を鍛えることに余念がなかったらしく、それに習い国全体で男女問わず、体を鍛える人・・・というより筋肉質な人間が多い。

「ギャグもそこまでいくと、尊敬に値するね」

「ははは・・・それで、ですね。競技の種目一覧と宣伝チラシをお渡しするので、お客さんに配ってもらえますか？」

「はい、わかりました。開催は・・・約半年後ですか。見物に行っ

てみるのもいいかもしれないあゝ」

他の店にも配るため、少々話した後でカリイは次の店へ向かっていった。

「マツジーナ選手権大会かゝ、レンヤさんなら何かに出れるんじゃないですか？」

今現在のレンヤの身体能力は既に人間を大きく超えていた。竜人族にせまる勢いである。競技次第では、世界を狙えると言っても過言ではない。

本人のやる気があれば・・・だが。

「んゝ、レンヤが出るとすれば当然技術勝負の競技で出るだろうなあ。竜人族を真つ向勝負で倒したいとか言ってたし」

世界の管理人よりもらった能力「竜人の2ゝ3倍の身体能力」があるので、いずれは身体能力で勝つことができる。レンヤにとってはそんな勝ち方はつまらないらしく、燃えないとのことであった。

「店長さんの言い方だとあゝ、身体能力だとレンヤさんがあゝ勝つのは確定ゝしてるみたいですねえゝ」

「あゝ、いや・・・あいつはただ総合的な勝負で勝ちたいだけなんだろう・・・と思うよ」

能力のことを話すわけにもいかないの、クヨウの説明はしどろもどろになるが、レナリンスは特に気にしていなかった

「見に行くにしても、短くても旅行レベルですよねえ。じゃあ、その間はお店はお休みですね」

「ん〜、どうせなら皆で行こうよ、そのほうが楽しいからさ」

「え？みんなで、ですか？」

「まあ、移動費とか宿泊費はかかるから、強制はできないけど、お店で補助くらいは出しても良いですよ」

ミリアとレナリンスは驚く、他の店ならただの従業員に対してそこまでしないからである。ミリアはクヨウに申し訳ないような気がして断ろうと思ったが、レナリンスが即座に賛成してしまい、ミリアにも誘ってきたので、断りきれない雰囲気になってしまった。そして結局レナリンスに押し切られたミリアであった。

「そ〜いえばあ〜、さっき店長さんが言ってたあ「カレー」ってなんですか??」

「あ、私もそれは気になった。さっきの人の名前じゃないですよね？」

「カレーはね、僕の故郷の食べ物だよ。見慣れてない人にとっては見た目が悪いかもしれないけど、なかなか美味しいよ」

「どうしてさっきの人の呼び名になるんですか??」

「ん〜、カリイ・マルゼフさんよりカレー・マゼルフさんのほうが覚えやすかったから」

「カレー混ぜるんですか・・・店長さんらしいですね」

その後、レナリンスがカレーを食べたいというリクエストが発生し、クヨウがカレーを作って振舞うことになったのは別の話。ついでにカレー粉を作ってレシピと共に販売したところ、いち早く目をつけた有名料理店のシェフがクヨウに頭を下げて、作り方を教わったりしたこともあった。

第13話「マジジーナ選手権大会」(後書き)

ブルーシードは現在のクヨウには全く関係ありません。今後絡むかどうかは分かりませんがね。

あくまで道具屋ですから、道具屋なんです。

第14話「商業連合」(前書き)

今回は推理(?)っぽくなっております。

多少の矛盾やこじつけはスルーしていただけるとありがたいです。

第14話「商業連合」

第14話「商業連合」

「商業連合ですか？」

「ええ、そうです。メリットが多いと思いますよ」

今道具屋リユミエールには1人の人間がやってきていた。しかし、行商人ではなく、買い物客でもなかった。『商業連合』といういくつかの店が共同で進めている、いわば同盟のようなものを進めるためであった。

「この連合はもう数多くのお店が参加しています。もっとも具体的な店名や数を教える訳にはいきませんがね。メリットは多くの店の情報を共有できるということです。この町以外で新商品が入った場合、情報がすぐに回ってきますし、共同で特許を取得して副次的な利益も受けられます。デメリットは、まあ月に何回かある集会に参加してもらう等がありますが、集会に参加しないと情報の共有や共同での特許が取れないので仕方が無い内容しかありませんね。参加の可否は信頼なので1度しか受付しませんのでご注意を。返事は明後日にまた来ますので、そのときにお願ひします」

そういうと、その商人は店を出て行った。残ったクヨウは訝しげに悩んでいた。

「ん〜、商業連合ね〜・・・」

しばらくして、眠そうな顔でクヨウが店の奥から出てきた。

「クヨウさん、一体何の話だったんですか？あまり良いことじゃないさそうですけど」

「ああ、実はねえ」

クヨウは特に隠すことでもなかったもので、ミアとレナリンスに全部話した。すべてを聞いた後、ミアは「胡散臭そうな話だなあ」と首をかしげていた。

「それで、店長さんはあゝ参加されるんですかあゝ？」

レナリンスは答えが容易に想像できていたが、一応聞いてみることにした。どの道ミアが質問しそうなことであつたからだ。

「んゝ、参加しないよ。正直めんどくさいし・・・それに胡散臭いからねゝ。本当にそんな連合作ってどうしたいのかが疑問なところだよ」

「メリットがそれなりにあるんじゃないですか？」

「僕からしてみればデメリットしかないんだよ。本当のメリットは彼らの側にしかないね。どの道長続きはしないと思うけど・・・」

商業連合の商人が言っていたメリットで大きいのは、情報と特許の2つ。しかし、情報は商人ギルドと行商から得られるし、特許は自分でなんとかできる範囲である。というより既にかんりの特許料を得ているので、今更特許にこだわる必要もない。この連合でメリットが得られる人間というのはそれができない人間ということになる。つまり、参加する店の程度が知れているのだ。そう考えていくとメリットなどなく、詐欺に合いに行くようなものだった。

「あとは、すんなり向こうが受け入れてくれるかどうかかな？まあ、強制はしてこないと思うけどね」

「そうですね。でも、何かと理由をつけてえづるさそうですね」
「それなら、商人ギルドのほうに相談してみたらどうですか？」
「ん、それがいいね。幸いにも明日は休業日だし、そうしよう」

次の日……

「レンヤ、今日も依頼を受けに行くかい？」
「ああ、そのつもりだったけど……何か用事か？」

朝から真面目な雰囲気だったので、レンヤも気持ちを引き締める。
クヨウもそこまで大事にならないとは思ってはいたが、念には念を
押すことにした。

「ちょっとね、一緒に来てもらいたいんだ、商人ギルドへ」
「珍しいな、まあいいか。了解、行くときになったら教えてくれ」
「内容は道中で話すよ」

その後、準備をしてから2人は事情を話しながら商人ギルドへ向か
った。

「ふん、昨日そんな事があったのか」
「変なことがあっても嫌だからね、そのための確認ということだよ」
「それで、俺も来る必要があったのか？」
「レンヤは一応副店長ってことで登録してあるからね。搦め手で来
られると流石にどうしようもないから」
「なるほどね、内情は良く分かんが決定権が俺にもあるってこと

か

「そゆこと、レンヤも物分りが良くなってきたから助かるよ」

「酷いよいようだな。昔のクヨウの中の俺はどんなだったんだ？」

クヨウはまともに答える気がなかったので、とりあえず笑って誤魔化しておいた。レンヤもそこまで気にしてはいなかったので、まあいいかと流すことにした。

商人ギルドに到着し、受付を待っていると妙に他の店の店員や店長が多いことに気がついた。同じ相談をする人が多いのかと納得したが、どこか引っかけかりを覚えた。その引っかけかりが何か考えていたが答えが出ず、受付の順番が回ってきた。

「いらっしやいませ、今日はどのような要件でしょうか？」

「端的に言うと、おそらく『他の人と同じ』ということなんですけど」

「では貴方も『勧誘を受けた』ということでしょうか？」

短い単語で、話のやり取りが進む。それは同じ内容の相談者が多いということでもあった。

「はい。僕としては答えは既に決まっていますのでいいんですが。この事に関しては商人ギルドはどう動いているのですか？」

「基本的に商人ギルドとして、その商業連合に対する具体的な動きはありません。彼らは特にギルドの規定に違反している訳ではないですからね。ただし、情報の収集くらいの動きはあります。これはあくまで情報のみですけどね」

商人ギルドはあくまで登録の管理等を行っているだけであり、基本的なことさえ守っていれば特に動くことは無い。規定違反が確認さ

れた場合、罰則を決めたりするが、動くのはその国の警備隊である。そして彼らは嘘を言っているわけでもないので、今のところ動く理由がないのである。

「商業連合の情報が集まったら聞くことはできますか？」

「有料になりますが、それでもよろしいですか？」

「んゝそこは仕方が無いね、お願いします」

「わかりました。では、こちらの用紙に記入をお願いします。情報が集まり次第、通知するようにしますね」

「わかりました、よろしくお願いします」

クヨウとレンヤは用紙を書き終わるとギルドを出て行った。

「なあクヨウ、昨日のことをもうちょっと詳しく話してもらえるか？ どのにも引つかかるんだけど」

「レンヤも？ 僕もなんだかねゝゝまあ、店に戻ってから話そうか」

2人が店に戻ると人が2人ほど店の前で待っている人がいた。ミリアとレナリンスである。

「あれ？ 2人ともどうしたの？ 今日はお店は休みだよ」

「その顔を見ると、用件は同じっぽいな。まあ、みんなで話せばいいんじゃない？ 3人寄らばって文殊の知恵って言うしな」

「レンヤさんがまともな事を言っている！」

「レンヤさんはあゝ、今日は風邪気味ですかあゝ？」

「それはどういう意味かな？ 2人とも」

クヨウが店を開けると2人は逃げるように入っていた。レンヤも続いて入っていき、お茶の準備をしに奥に入っていた。クヨウが

店のテーブルを中央に置き、椅子を用意した。
レナヤがお茶を持ってきたところで話が始まった。まず、クヨウが
覚えている限り詳しく昨日の出来事を話した。

「大体こんな感じだったと思うよ」

「なるほどねえ」

「クヨウさん、商人ギルドの様子はどうでしたあ」

「ん、色んな店の人がいたな。あの様子だと7割の人は同じ用
件だろうねえ」

「へえ……結構多いですね……」

みんな考え込んでいると、レナリンスがとあることに気付いた。

「むしろあゝ多すぎじゃないですかあ」

「あゝ、なるほどねえ。あの違和感はそれかあ」

2人は納得という感じで首を縦に振っているが、残り2人は？マー
クを浮べていた。

「クヨウ、どういうことだ？」

「えっと、私も……わからないんですけど……」

考えても分からなかったので、納得している2人に話を聞くことに
する。

「ああ、ごめんごめん。昨日の人は「すでに数多くの店が参加して
いる」と言っていたんだけど、それにしても商人ギルドの相談者が
多すぎるんじゃないかな？」

「つまり……実は参加している店は少ない……ということですか
？」

「というより、多分元々急な話なんだろうね。商人ギルドですらまだ情報を集めている最中なんだよ？情報が集まる場所でも、まだ情報が集まりきっていないということ」

「作っただばかりっていうことか。でも、それだと1度きりっていうのがおかしくないか？そういう場合は、あとから徐々に増えていくものだろう？」

普通に考えて、こういう組織は信用・・・というよりは実績が大事である。いきなり出てきた怪しい組織には普通は入りたがらないが、もし実績があれば話が違ってくる。そこにお金が絡んでくれば尚更だ。しかし、いきなり実績を掲げて人数を増やすのは難しい。なので、実績をあげてあとから人数が増やしていくのが普通である。しかし、募集を1度きりにしてしまうと、後からは増えないので、前提が破綻してしまっている。

「たぶん、そこまでえっ参加するお店を無作為に増やす気がないんじゃないですかあ？」

「だとすると・・・この場合、参加するお店はほとんど、大したことなくないお店ばかりになっちゃういますね」

「逆にそれが狙いだとしても・・・しょぼい店のしょぼい同盟ってことで落ち着くな。なんだか締まらないオチだな」

「え」と、ここからかな〜り突飛な憶測になっちゃういますけどあ〜いいですかあ〜？」

「ん〜、いいよ。2人もあくまで推測だっことで聞いてね？」

レナリンスの推測をクヨウはある程度予想できた。レンヤとミリアはまた？マークを浮べている。

「ミリアちゃんとお〜レンヤさんのお〜推測が合っているのかもしれませんねえ〜」

「え？どういうこと？」

ミリアとレンヤは参加する店を、逆に売り上げの少ない店に絞っているとは仮定したのだ。つまり、売り上げが少ないということは店としては金に苦心している。それこそ同盟に参加したということは藁をも掴むつもりのお店もあるかもしれない。そこに例えば違法薬物などを流せば、あっという間に流通ルートの上上がりである。レナリンスはそう考えたのである。しかも、1度しかチャンスがなく考える時間も1日2日程度である。切羽詰っている人間にとってはかなり短い時間であった。

「あくまでえ〜、何の証拠も無い憶測ですけどねえ〜」

あはは〜と笑うレナリンスだったが、あながち間違っていると否定できない怖さがあったので、ミリアの顔はひきつっていた。

「ん〜、それにしても動きが大規模だなあ〜。そういうのは普通、こっそりやるものだと思うんだけど・・・」

「そうですねえ〜、実は黒幕はどこかの国だったりして？まあそんなことないですよ〜」

「そこまでいくと収拾がつかないかなあ。まあ、元々情報は少ないし、この辺にしておこうか。折角の休日をごんごんに使いつぶしたくもないし」

「はい終了〜」といった感じでクヨウが店の奥へ昼食を作りにいった。すでに時間は2時近かった。

そして次の日・・・

「という訳で、お断りさせていただきますね」

「そうですかあ、いい話ではあったと思うんですが残念です。2度誘えないので、仕方ありませんね」

クヨウは商業連合の話を通った。元々断るつもりだった上に、昨日の話もあったからだ。今後、商業連合加盟の話は一切来なかったが、悪い知らせは届くのであった。

第14話「商業連合」(後書き)

こついのりは案外好きですね、つつい調子にのってしまいました。

もうちょっとギャグっぽいのを増やしたいんですが、なにぶんネタがないんです><。

もうちょっとがんばろうと思います。

第15話「旅行出発」(前書き)

初めての長期旅行。

しかし、今のところ誰かと誰かが特別な仲になる予定は無いです。

第15話「旅行出発」

第15話「旅行出発」

「さて、いきますか？」

「はい」

「おう」

道具屋リユミエールの面々はラングランを出発し、ガチンコ連合国へ向かう。目的は観光、マッジーナ選手権大会を見に行くためである。もつとも大会はすでに始まっているが、期間が2ヶ月ほどと長いため、問題は無い。この日のためにクヨウは馬車を借りてある。流石に歩いていくには長い距離であった。

「ん、快適快適。歩きは流石にきついからねえ」

「快適なのはわかるんですけど、お金は本当にいいんですか？なんだけ凄く悪い気がするんですけど・・・」

「気にしない気にしない、こいつも結構稼いでるからね。クヨウはこういう時じゃないと使わないからさ」

クヨウの普段の生活は店が主で暇つぶしに趣味の銀細工や魔法具作成などを行っている。なまじ売れるからお金になることばかりであった。

「それにしてもお、ハンターさんを雇わなくて良かったんですね
かあ？」

「何かあればレンヤがかたずけてくれるよ、僕も一応ハンターだし
ね」

普通長距離の旅には護衛がつく、賊に襲われることもあるからだ。しかし、今回はレンヤがいる。レンヤも一応Aランクハンターである。賊程度に遅れは取らないし、いざとなればクヨウや他の2人も戦闘に参加できる。なので特に問題はなかった。

「クヨウさ〜ん、なんだかあ〜荷物が少なすぎませんかあ〜？」

「ほんとね、私たちのほうが多いみたいだし・・・」

ミアとレナリンスは大きめのバッグをそれぞれ2つ。それに対し、クヨウとレンヤの荷物は中型サイズのバッグがそれぞれ1つきり、服を最小限でも入らない大きさだった。

「ん〜、実はね〜、これは僕の作った最新の魔法具なんだよ。完成したときは本当に嬉しかったよ」

「魔法具ですかあ〜？・・・え？」

クヨウは目をキラキラさせて嬉しそうに語った。レナリンスは少し考えると表情と動きが止まった。思い当たることがあったらしい。レンヤはそれを見て面白がっていた。

「え〜と、どんな魔法具なんですか？普通のバッグにしか見えないんですけど」

「クヨウさ〜ん？まさかとはあ〜思いますがあ〜・・・異空間創造と座標固定式を完成させたんですか！？」

「そ、そうだよ・・・リ、リンスちゃん？口調変わってない？」

「どうして教えてくれなかったんですか！私も研究してたんですよ！」

「リンスちゃん〜！落ち着いて〜、クヨウさんの首が絞まってる〜！」

鬼気迫るレナリンスにクヨウはたじたじであった。その上、あまりの興奮のあまりレナリンスはクヨウの首を絞めていた。レンヤが入り、レナリンスはようやく止まった。

「クヨウさん、ごめんなさい」

「ああ、うん、いいよ。言わなかったこっちも悪かったしね」

「ふう、リンスちゃんも慌てることあるんだね。いっつものんびりしてるから新鮮な感じがするね」

「え〜とお〜、まあいいじゃないですかあ〜。それよりい〜、先程の事は説明してえ〜いただけのんですよね〜?」

レナリンスが恥ずかしくて顔を真っ赤にしていた。とりあえず、話を強引にでもずらすことにした。

「このバッグね、ミアさんにも分かりやすく言うと、バッグの中に異空間を作って収納スペースを増やしたってことです。中は2m四方の空間だと思ってください」

もちろん、細かいことをいうと違うのだが、クヨウはイメージがしやすい説明をした。

「クヨウさん、そんな便利な物があるなら教えてくださいよ」。

結構荷物を纏めるのは大変だったんですから」

「いやあ〜、実は完成したのは昨日なんだよ。しかも2つしか作れなかったしね。荷物を纏めなおすのは苦労したんだよ?」

「もうちょい早く完成させて欲しかったな、昨日は大忙しかったんだからさ」

昨日は食料やら移動用の道具等をチェックしていたところであった。荷物纏めなおしてチェック漏れがないかの確認が大変だったのである

う。しかも、完成したのは夕方である。

「クヨウさ〜ん、あとでえ〜細かい術式などのお話は聞かせてもらえますよねえ〜?」

レナリンスはそんな話より、術式のほうが気になるらしい。クヨウもまだ術式をまとめただけであるので、細かい内容は話せなかった。

その後、若干ごたごたもあつたが、のんびり旅をするのであつた。

数時間後……

「ん〜? レンヤあ〜。戦闘の準備をしておいて」

「賊か?」

「かもしれないなあ〜、ミリアさんとリンスちゃんも一応準備しておいてね」

そういうとレンヤをはじめ、馬を止め全員戦闘準備に入る。遠目からでも盗賊だと分かったので、射程圏内に入りしだいクヨウは、とつとスピッドファイアを連射する。以前は3発に1発しかあたらなかったが今は全弾命中していた。ミリアとレナリンスは見たことも無い武器と音にかなり驚いていた。

「お〜、どうしたクヨウ!? 全弾命中してるぞ。以前は命中率30%くらいだったのに。密かに練習でもしてたのか?」

「まさか〜、そんな時間もないし暇も無い。魔法具で当りやすいようにしたただけだよ〜」

「うわ〜お前それチートじゃん。俺にも何か作ってくれよ」

「存在がチートのレンヤがそれを言う? それにリスクもちゃんとあるからそんなに便利なものでもないよ」

魔法具は通常効果を生み出す反面、相応のリスクが出てくる。使うたびに魔力を消費するものや、条件下のみの限定で効果を発揮する物がある。効果が高ければ当然リスクを増える。逆に言えばリスクが高いと高い効果を出すことができる。

クヨウはいくつも常備しているが今回使ったのは、探知と警戒の指輪、命中の指輪、鷹の目の眼鏡である（詳細はあとがきに記載）。ちゃんとリスクを負った上での効果であるのでチートではない。

瞬く間に盗賊は逃げていった。それは当然でもある。約百m先から音と共に不可視（速くて見えないだけ）の攻撃が来るのである。当たり前所が悪ければ即死もするので、近づけもしないから逃げるしかなかった。

レナリンスとミリアは呆然としていた。見たことも無い武器と音に驚いてた上に、クヨウの説明を理解するのがやっとで、気がつく盗賊は逃げていたのである。レナヤとクヨウは「盗賊ならあんなもんだろう」と普通に談話していた。

「ねえ、リンスちゃん。レナヤさんはともかく、クヨウさんって思ってた以上にすごいんだね・・・」

「そお～ですわね、けっこつ～驚きましたねえ～。それにい～、あの変わった武器の術式があ～気になりますねえ～うふふふ」

「リンスちゃん、ちょっと怖いよ」

魔法具のことになるとマッド気味になることがわかって、若干引いているミリアであった。

このあと、クヨウがレナリンスの質問攻めにあっただのは別の話である。

その後、この日は平穩に終わり丁度よさそうな場所にてキャンプを
して1日目を終了していった。

第15話「旅行出発」（後書き）

ちなみにクヨウとレンヤが戦った場合、勝つのはレンヤです。

いくら魔法具で底上げしても、戦闘能力は経験ともにレンヤが圧倒しているからです。スピッドファイアの弾もレンヤには見えていまずので防御も可能です。

魔法具の説明

『異空間バッグ？』 注意：どこぞの青狸の四〇元ポケットではないです。

見た目：中くらいのバッグ

効果：異空間を作り、入り口をバッグの入り口に固定させたもの。異空間は2m四方の空間になっている。物の出し入れには大きさを問わず、少量の魔力を使う。

『探知と警戒の指輪』

見た目：ちよつとごつ指輪

効果：半径2kmの動物の場所を探知できる。半径500mになると装備者への危険度がわかる。装備者が『移動していない』ときに少量の魔力で発動する。『移動していない』とは本人が歩いたりしていないことであり、馬などに乗って移動する場合は別。

『命中の指輪』

見た目：普通の指輪

効果：投擲などで狙った物に対しての命中精度が上がる。少量の魔力で発動できる。

『鷹の目の眼鏡』

見た目：オペラグラス

注意：片目用の鼻と耳に固定するタイプ

効果：少量の魔力で発動し、視力が大幅にあがる。2km先も視認可能。

改めて効果をみると、やっぱりチートかも？

第16話「旅行事情その1」(前書き)

ついに戦闘開始!

意外となんとかなりましたが、細かい描写は無理ですね。おおまかな表現ばかりですみません。

今回から一応R15にしようと思います。

第16話「旅行事情その1」

第16話「旅行事情その1」

2日目・・・

「暇だね」

「暇ですね」

「リンスちゃんはいいなあ」

「すうすう」

朝から移動しているが特に何も起きなかった。この呟きも本日何度目になることやら・・・流石に数時間何もおきなければ暇になる。レナリンスだけは昼寝を満喫しているが、普通は移動中の馬車の中で昼寝はなかなかできない。

夕方近くになり町へ到着。宿も速めに見つけたので4人は食べ歩きをしてこの日は終わる。

3日目・・・

朝早くから町を出発する。昼過ぎになり国境地域を通過、地図上ではガチンコ連合国に入ったが、目的の街まではまだ数日かかる。

夕方に川の近くで丁度いいキャンプ地を見つけたので、そこでキャンプの準備をする。そしてレンヤは妙な事に気付いた。

「変な空気だな・・・クヨウ！近くに危険がないか確認してくれ！」

「ちょっとまって・・・ん、東のほうの森に動物が一匹いるくら

いだね。距離は300mほどあるから・・・!?」

「それなら大丈夫「ちよつと待って、距離200!どどん近づいてきてる!」何!?!」

4人が戦闘準備をして東の森のほうを警戒する。森は川を挟んで反対側にあり、50mほど離れている。川幅も5mくらいあるので、余程の動物でも一気に飛び越えることはないだろう・・・とタカを括ったが、次の瞬間それが間違いであることに気付く。

黒い影が木を薙ぎ倒して出てきた。犬である。どこからどうみても犬であった。しかし、何かがおかしかった。

「ん、レンヤ?あの森って木が小さいんだね、1mもないんだもん、あはは」

「クヨウ?とりあえず、牽制で銃を撃ってもらえるか?あの犬の高さは6mくらいだな」

「えと、それ以前に戦えるんですか?いくらなんでも私は無理ですよ?」

「可愛い、おなかでえくふかふかしたら気持ちよさそう」

クヨウとレナリンスは若干混乱気味であった。

「こちらを見つけたか、ありゃユニークモンスター・・・『フェンリル』だな。この面子でなんとかなるかな?」

ユニークモンスターとはマジックモンスターが更に瘴気を吸い込み変異したモンスターである。知能を持っているため非常に強い。またマジックモンスターよりも大型であることが多い。しかも、マジックモンスターを従えている場合もある。

このユニークモンスターは辛いマジックモンスターを連れてはいなかったが、非常に手強い事には変わりが無い。

クヨウは近づかれる前に銃を連射するがあまり効果がなかった。この犬型のユニークモンスターは『フェンリル』という名前に分類される。魔法耐性が強く、すばやい上に爪での攻撃は非常に強力である。

「属性を変えても効果は薄いか・・・」

「でも、牽制にはなるな。俺が突っ込むから牽制で攻撃してくれ。

リンスちゃんも牽制程度でいいから魔法で援護を頼む！」

「ちよつと待つてください！」

レンヤが突っ込もうとしたときにミアアがとめる。ミアアは魔法剣士であるが、一番得意なのは補助魔法である。ミアアが補助魔法をかけ、レンヤがフェンリルに突進する。レンヤの攻撃は素手による接近戦のみである。非常に強力ではあるが、射程が短い。フェンリルは巨体に物を言わせて爪を使ってくるので迂闊に飛び込めなかった。このままいくとジリ貧になる、クヨウは何か無いか考えていた。

「リンスちゃんは上級魔法とか使える？」

「え〜と、無理ですねえ〜。本職が研究なのでえ〜中級位しか使えませんね」

「私の魔法は補助はそこそこできますが、攻撃魔法は初級程度ですし・・・何もできないですよ。レンヤさんほどの動きができれば援護できるんですけど・・・」

クヨウは流石にこの旅行でこんな大物が出てくるとは思っていなかった。盗賊や手強くてもマジックモンスター程度を考えていたが、フェンリルの出現は完全に想定外だった。もつとも、想定しても逃げるための手段しか用意するつもりはなかった。

「後悔先に立たずか・・・さて、レンヤが頑張っている間に手を考えないとなあ〜」

スピッドファイアの弾の威力は高くても所詮は初級魔法レベル。フエンリルの魔法耐性の前では目くらまし程度でしかない。物理耐性は高くもないので、それは弱点といえれば弱点だが、あの巨体では接近するのは非常に危険だ。ならば当然遠距離による物理攻撃が一番有効である。しかもフエンリルの注意はレンヤに向いている。他の3人がいくら牽制で魔法を撃とうともレンヤが一番危険なのはフエンリルが一番理解していた。そこが狙い目でもある。

「遠距離物理攻撃での一撃必殺か・・・賭けてみるかな？」

クヨウは馬車に戻り荷物を漁りだした。ミアとレナリンスは何事かと思つたが、レンヤが危険なので、魔法による牽制をとめる訳にはいかない。

レンヤの戦い方はヒット&ウェイである。前足に一撃入れた後に違う方向へ逃げる。本体への攻撃は危険すぎるので、こういう戦い方になるがそれでも堅実ではある。しかし、流石にレンヤも徐々に疲労が溜まる。長期戦をするわけにはいかないが突破口もないのでクヨウがなんとかするだろうと信じ、戦い続けるしかなかった。

そしてクヨウは荷物からいくつかの指輪と回復用の薬、ナイフを取り出した。そしてこの場でナイフに魔力を込めて魔法具にする。目指すは一撃必殺必中のナイフである。以前ゲームで見た『英雄の槍』の能力の再現である。不安要素はクヨウの熟練度であった。魔法具生成能力は熟練度次第でどんなものでも作ることが可能であったが、逆に言えば足りないと作ることができない。しかも目標は『英雄の槍』の能力という世界でも最高クラスの魔法具である。毎日魔法具を作ってきたが、ここまで強力な物は試したことが無かった。失敗

すれば大半の魔力を失い、下手をすれば気絶してしまう。回復道具はそろっているが、それでも疲労した状態で作れるものではない。

「チャンスは1度きりかな・・・でもまあ、やるしかない」

魔力回復用の薬を飲み、クヨウは精神を集中させる。運をあげる指輪などを装備した上で魔力を込める。リスクの設定も行う。そしてナイフは徐々に光りだす。

馬車から光と魔力があふれ出し、レナリンスとミリアは驚いて馬車を見る。フェンリルも光と魔力に気付くと馬車を見る、それが一瞬の間になりレンヤは渾身の一撃を顎に命中させる。いくらユニークモンスターとはいえ、元が動物であったので顎は弱点である。流石に顎の一撃は強力であったため、脳震盪を起こしフェンリルは倒れる。レンヤはそのまま倒れたフェンリルに飛び掛り右目をえぐった。フェンリルは痛みで倒れたまま暴れだしレンヤを吹っ飛ばしたが、レンヤも何とか着地しフェンリルの様子を伺っていた。

「はあっはあっはあっ、これで何とかなればいいけど・・・流石に無理か、あとはクヨウに任せるしかないな」

レンヤの一撃は強力ではあったが決定打にはならなかった。そして馬車ではクヨウが暴れだしそんな魔力を押さえつけていた。

「くっっ、これは・・・少々、きついか・・・」

しかし、諦める訳にはいかない。これが失敗すれば全員ただではすまない、というより全滅もあり得る。

「はあああああああ!!!!!!」

クヨウは一心に魔力をコントロールし、そして魔力と光が収まった。クヨウの手には強力な魔力を帯びたナイフがあった。

「はっはっはっ、な、なんとか成功・・・かな？」

かなりの魔力がナイフから放たれている。しかし、成功しているかどうかは使うまでわからない。効果はあっても弱いかもしれないからだ。息切れし、回復薬を飲もうとしたところで、ミアアが駆けつけてきた。フェンリルが今痛みで倒れたまま暴れているため、牽制の必要がなかったからである。今は立ち上がったても大丈夫のようにレナリンスが待機している。

「クヨウさん！一体何が・・・って大丈夫ですか！？ふらふらですよ！」

「ん、ちょっと大丈夫じゃないからそのポーション貰える？」

ミアアが急いでポーションを渡すと、クヨウは一気に飲み干した。ポーションは飲めば体力がある程度回復するからだ。一緒に魔力回復薬も飲む。流石に瞬間には回復はしないが、回復が早くなる。

「ふう、楽になった。ありがとう、ミアアさん」

「それよりも一体何があったんですか！？すごい魔力でしたよ！？」
「事情はあとで説明するよ、それよりフェンリルは今どんな状態？」

ミアアはフェンリルの状態を説明する、クヨウは体を休めつつ状況を確認していった。そして2個ほどポーションを一気に飲み干し、体力を無理やり上げる。

「ちょっとクヨウさん！そんなに飲んだらあとで危ないですよ！」

「今をどうにかしないと後も何もありませんか？」

そこへレナリンスが叫び声が聞こえた、フェンリルが落ち着き立ち上がったからだ。

クヨウは急いで馬車からだと指輪を交換し、フェンリルに向かって走っていった。

「2人はここで待っていて！」

「ちよつとクヨウさん！？って足が速い・・・あの指輪の効果か」

「でもおゝ、あのナイフでどうするつもりでしょうか？」

「わからないけど、あとは2人に任せるしかないね・・・」

下手に牽制で魔法を撃つとレンヤはともかくクヨウにあたる危険性があるからだ。2人はクヨウの成功を祈るしかなかった。フェンリルは右目を塞がれたが、未だ健在している。そこへただならぬ魔力を放っているナイフを持ちクヨウが走ってきた。本能で「あのナイフは危険だ」と感じ取り最大限の警戒をする。そして・・・

「はあああああ！いつけええええええー！ー！」

クヨウがありつたけの魔力を込めてナイフを投げた。かなりの速度ではあったが、最大限警戒しているフェンリルはそれを横に飛び回避した、そしてクヨウを危険と感じ一撃で仕留めるために飛び掛ろうとして重心をほんの少し後ろに下げた瞬間であった。

「ガアアアアアア！！！！！！」

横に飛びかわしたハズのナイフが何故か額に刺さっていた。それはクヨウの渾身の一撃だったが、刃が短く致命傷にはならなかった。それでも何が起こったのかフェンリルは全く理解できず動きが止ま

る、それが致命的な隙になった。知能があることが逆に仇になったのである。

「レンヤ!!!!!!!!!!!!!!」

クヨウが叫ぶと同時にレンヤが飛び、フェンリルの額に刺さったナイフに全力の蹴りを入れる。ナイフが蹴りの勢いで脳まで達してフェンリルが倒れた。フェンリルが倒れると同時に体から黒い霧『瘴気』が出てきて、体が縮んでいき、最後は普通の犬と同じ大きさになった。

「ふう~~~~~~~~、どうやら死んだみたいだな・・・」

「ん、これで終わりだね・・・ふう」

クヨウはそのままばったり倒れる。それは完全な疲労であった。ナイフに『因果律の逆転』というとんでもない能力をつけたのだ、威力が弱く脳を狙ったのが額で止まってしまったが、それでもかなりの力である。そんな能力をナイフにつけた上に使用までしたのだ。クヨウが倒れるのも無理はなかった。

「クヨウさん！しっかり！」

「ミリアさん、この薬を飲ませてください」

駆けつけてきたミリアとレナリンスは倒れたクヨウに薬を飲ませる。そうして息をしているのを確認して、座り込んだ。

「はあ、どうなることかと思ったよ、まさかフェンリルとはなく・・・とりあえず、馬車に戻ろう真っ暗になる前に安全を確保しないと。リンスちゃん、クヨウの指輪を使って周囲の警戒を頼めるかい？」

「わかりましたあゝ、昨日暇つぶしに教えてもらいましたのでえゝ大丈夫ですよゝ」

キャンプを作り終わると、レンヤもぼったり倒れる。流石に意識ははつきりしていたが、疲労で体が動かなくなったのだった。

「あゝ、疲れた・・・2人ともあとは任せた」

「え？ちよつとレンヤさん!？」

レンヤはそういつと同時に寝てしまった。残された2人は安全の確認をしてから交代で眠りについたのであった。

第16話「旅行事情その1」（後書き）

初のユニークモンスター出現。

ちなみに強さの基準として、ユニークモンスターはAランクハンターが数人で倒せるレベルです。いくらレンヤが強くても流石にまだ1人じゃ無理ですね。

現在のハンターランク

クヨウ：Dランク

レンヤ：Aランク

レナリンス：Eランク

ミリア：Dランク

クヨウは実力的にCランクくらいはありますが、ハンター活動をしていないためDのままです。レナリンスも似たような理由からEランクになってます。実力はDランクくらいです。

普通、このメンバーではユニークモンスターは倒せません。クヨウの能力があつたからこそですね。

あとはナイフの効果の説明です。ちょっと難しい説明になるので、めんどくさいと思う方は「超高性能な誘導」だと思ってください。結果は似たようなものなので。

『因果律の逆転』

普通物事は、「過程」の後に「結果」が発生します。「過程」がなければ「結果」は発生しません。

しかし、この『因果律の逆転』は先に「結果」を決めてしまいます。なので、どういう「過程」になろうとも「結果」は同じになります。

今回の話の場合に当てはめると、『因果律の逆転』で「脳にナイフが刺さる」というのが決定されます。ですので、たとえ「過程」に「かわされる」という事があっても、結果は「脳にナイフが刺さる」ということになります。

今回はクヨウの熟練度が足りずに、結果が弱くなっただけですのでご理解ください。

第17話「旅行事情その2」(前書き)

やっぱりギャグ要素があると楽しくかけるので、ギャグを多めにしたいですね。

ただ・・・ネタが無いので難しいです。

第17話「旅行事情その2」

第17話「旅行事情その2」

3日目

連合国の国境近くの町ミントの警備隊支部は朝から大騒ぎの真つ最中であつた。2日前に、警備兵からフェンリル出現の情報が入つたからである。その日のうちに周辺の各町へ連絡が回され、国境付近の川沿いに立ち入り禁止令が出された。当然討伐隊を編成しすぐにも討伐に行くところであるが、この街の警備兵は質は悪くないのだがフェンリルを相手に戦えるほどの者はいない。ギルドに緊急討伐隊の要請を入れたが、1日程度で集まる訳もない。なんとか2日で人数をそろえることができたが、何人まともに戦えるのかわからない状態である。今のところ人的被害は報告されていなかった。で、警備隊にあまり焦りは見られなかった。しかし、急ぎで討伐しなければいけないことには変わり無く、警備隊も大忙しであつた。彼らは知らない、既に討伐対象が死んでいることを。

その頃、クヨウ達はレンヤが目を覚まし3人はのんきに朝ご飯中であつた。食後に出発準備をしていたが、クヨウは未だ眠つたままである。そのうち起きるであろうと思つてはいるが、あまりに目を覚まさないと心配にもなる。これはクヨウがナイフにつけた能力の代償であつたが、3人に分かるわけもなかった。

「クヨウさん、まったく起きませんね」

「クヨウのことだから、そのうちのんびり目を覚ますだろう。それ

よりそろそろ出発しよう。準備はできているからな」

クヨウが起きるのをいつまで待たせても仕方が無いので、とりあえず出発することになった。レンヤが手綱を持ち、若干寝不足のミアは寝ようとしていた。レナリンスは警戒のために寝る訳にはいかなかったが、それ以上にレンヤに聞きたいことがあった。昨日、クヨウが見せた光と魔力、はずれたはずのナイフがどうしてフェンリルの額に刺さっていたのか？そしてクヨウとレンヤに対する疑問。今まではクヨウの事を天才だと思っていた。突飛な発想で新しい魔法具を作り出していたのだと。レンヤも努力家で天才的な身体能力を持っているのだと。もしかしたら自分は思い違いをしているのでは？と疑問に思う。そしてそれが全く否定できないのであった。自分の持っている情報があまりにも少ない事に気がつき、レンヤを問いただす決意を固めた。

「レンヤさん？ちょっと聞きたいことがあゝあるんですけどあゝ、いいですかあゝ？」

いつもと同じのんびりとした口調ではあったが、どこか剣呑な雰囲気をもし出していた。レンヤはそれを感じ取り、誤魔化しは効かないことを悟った。

「昨日の事かい？」

「はい、是非とも教えて欲しいのですがあゝ」

「昨日の事」と聞き、ミアも起き上がる。ミアも疑問に思っていたからだ。

「そう・・だね。けどまあ、今はまだ待ってくれないかな？クヨウが起きたら2人で全部話すよ」

レナリンスとしては、今すぐにも聞きたいところではあったが、クヨウの事を本人の知らないところで聞いてしまうのも気が引けたので待つことにした。ミリアも同じ気持ちであった。

一方ミントでは・・・

その日の昼、連合国街ではAランクハンター3人を含むハンター隊7人、警備隊12人で討伐に向かうのであった。メンバーとしては若干足りないが、2日で集まったにしては上出来な部類だ。警備隊が斥候をだしてフェンリルの居場所を探り、ハンター隊と残りの警備隊で討伐する算段になっていた。

そして、レンヤ達と遭遇する。

クヨウ一行・・・

「おや〜？随分物騒な団体さんがやってきたな。盗賊・・・じゃないな」

「あれは警備兵でしょうか？でも数が多いですね。一応用心しておきましょうか？」

「あちらからの〜敵意はありませんねえ〜。様子から想像するとお〜、フェンリルの〜討伐隊じゃないですかあ〜？」

レンヤもミリアも納得する。ちょっと考えれば分かることだったからだ。そうして一応討伐隊の邪魔にならないよう、馬車を街道から横へ移動させた。しかし、討伐隊の1人がこちらにやってきた。街

道の情報、主にフェンリルの情報を得るためだったが討伐済みの情報を得ることになるとは思わなかったであろう。

「え!!!? 本当ですか!?!」

大声を上げる兵士の声に気付き、討伐隊が一時停止する。そして討伐隊のリーダーをやっている兵士がレンヤ達のところに来てきた。

「どうした? フェンリルでも見かけたのか?」

「違います! この方々がすでにフェンリルを討伐した、と」

「何! 君たち、それは本当か!?!」

4人しかいない(クヨウが馬車の中で寝てる)、しかも1人を除き強そうに見えないメンバーでフェンリルを倒したと言われてもすぐに信じれることではなかった。

「まゝ、信じられないかもしれませんが事実です。実際危なかったし……」

「あ、証拠部位がありますけどご覧になりますか?」

「あ……ああ。見せてもらえると助かる」

ミアはバッグの中を漁り、布に包まれたフェンリルの犬歯を見せてる。フェンリルの犬歯は青く特徴的であった。見せられた犬歯は若干色が薄いものの、確かにフェンリルの物であったので、討伐隊のリーダーは夢でも見ている様な気分にもなったが、納得するしかなかった。

「なるほど、確かにフェンリルのモノだ。討伐に感謝する。よくあまり手傷を負わずに倒したものだ、重傷者等もいなさそうで安心した。ところでフェンリルの死体はどの辺にあるのかね? 疑うわけ

はないが討伐隊としては周辺も搜索しておきたいのでね」

フェンリルの目撃情報から一匹だとは推測されていたが、2匹以上いないとは断言できない。なので、死体周辺も搜索する必要があったのだ。それにユニークモンスターはマジックモンスターを引き連れている場合も多いので、手下であるマジックモンスターがいれば討伐する必要があるのだ。今回のフェンリルには手下はいなかったが、手下がいればクヨウ達はまず間違いなく全滅していたであろう。

「有益な情報に感謝する。後日僅かではあるが謝礼が贈られると思うので、受け取って欲しい。では失礼する」

そういうと、討伐隊はそのまま進んでいった。レンヤ達も特に用事があるわけでもないの、さっさと町へ向かうのであった。

「重傷者はなし・・・か。まあ、確かにそうなんだけどな」

「大丈夫ですよ、クヨウさんは疲れているだけですよ、きつと」

複雑な気分のままレンヤ達はミントへ入っていった。

宿は簡単に見つかり、クヨウを宿に寝かせてからギルドへフェンリルの犬歯を換金しに行った。窓口で犬歯を見せたときは周りが騒然としたが、事態が好転しただけなので、周囲は喜んでいた。

クヨウが目を覚まさない。なんとも複雑な気分のまま一行は宿へ戻るのだった。

4日目

レンヤが朝起きるとクヨウはすでにベットにはいなかった。ミリア

とレナリンスを起こして探そうとして食堂に向かうと、クヨウはのんびり朝食を食べていた。

「おはよ、どうしたのみんな？そんなに血相変えて」

この言葉に3人は若干イラッとしたが、同時に安心して深いため息をする。クヨウはなんのことがわからず？マークを浮べていた。

「いつも通りだな、まったく。こっちの気も知らないでよくまあ又ケ又ケと朝食を優雅に楽しんでやがるな」

「まあまあ、レナヤさん落ち着いて落ち着いて。それよりみんなで朝食を食べましょう、ね？」

安心すると急にお腹が減つたらしく、3人も席につき朝食を頼んだ。

「あ、心配かけてごめんね。あのナイフに能力を持たせるために色々トリスクをつけたんだけど、その中に丸一日眠るつてのをつけちゃってさ」

「丸一日？お前最低でも1日半は眠ってたぞ。その辺は個人差なのか？」

「いや、きつちり24時間だよ。本当は昨日の夕方起きたんだけどね」

「な・・・に？」

クヨウの聞き捨てならない言葉にクヨウを除く3人は動きが止まる。

「あんまりにも気持ちよくてさ、眠かったし2度寝しちゃったんだよ。朝起きたときの爽快感がなんともいえなくてね」

この言葉に3人から『ブチッ』という音がしたという・・・そして、

レンヤはクヨウの前で仁王立ちする。

「ほほう、2度寝とは随分優雅なご身分ですなあ」

レンヤから鬼のようなオーラを感じクヨウはびびって逃げようとするが、『かちやり』という音と共に、後ろからレナリンスが無表情でスピッドファイアの撃鉄を上げ、銃口をクヨウのコメカミに密着させた。

「へえ、いいですね、2度寝ですか。私たちがあ、どれだけ心配したとおもッテルンデスカ？ トツテモキモチヨサソウデスネエ……」

レナリンスは口調まで感情がなくなりクヨウの脂汗が止まることを知らないように流れていく。そして首元にミアアのショートソードが当てられる。

「これは『すこし』お仕置きが必要なようですね、アハハハハハハハハハハハ」

ミアアまでもが鬼のオーラを背負いショートソードを喉に滑らせるように動かしていた。

その後クヨウの悲鳴が聞こえ、1時間後クヨウはボロボロになってベットにダウンするのであった。

「え、と、すみません、本当にすみませんでした」

部屋でクヨウは土下座していた。流石に2度寝はまずかったと反省していた。

「まったく！私たちがどれほど心配したことが・・・」

「まあ、何はともあれ、無事そうであらう、何よりです」

2人は安心して、お茶を啜っていた。そしてレナリンスが真面目な雰囲気を出して、疑問を問い詰めるのであった。クヨウも流石に誤魔化すつもりはなかった。レナリンスと2人で全てを話した。能力のことから本当は異世界の住人であることまで全てである。

「なるほど、それならあんなに隠す必要はあんなに十分ありますよねえ」

「普通なら信じられないよね。私もあの事がなきゃ信じれなかったと思うよ」

クヨウは信じてもらえない可能性も考えていたが、思いのほかレナリンスとミリアが信じてくれたので正直ほっとしていた。

「そういえば、フェンリルを倒したあのナイフにはどんな能力と、リスクをつけたんですか？」

「あ、ちょっと難しい話になるけどいい？」

ナイフにつけた能力、『因果律の逆転』の説明をするとミリアは混乱した。レナリンスは理解しきるまで時間がかかったが、なんとか理解することはできた。レナリンスは元々知っていたので2人の様子を面白がって見ていた。

「あ、こんがらがらる」

「あはは、まあ無理に理解できなくてもいいよ。そういうモノ」

て思ってもらえれば。ちなみにリスクなんだけど、「使用後丸一日眠る」「使用后2日間の魔法使用不可」「使用時に大量の魔力の消費」というものをつけた。ぶっちゃけアレが効かなかつたら逃げるしかないし、戦い続けるのはどの道不可能だからこういうリスクにしてみたんだ。それでも完全には成功しなかつたけどね」

「あれで失敗なんですか!？」

ミアとレナリンスは驚いた。ナイフはちゃんとフェンリルに刺さっていたからである。

「実は、狙ったのはフェンリルの脳だったんだよ。能力が足りなくてナイフは額で止まっちゃったからね、致命傷にならなかったですよ?あれは失敗だよ」

「なるほど、相手があゝ防御できるかどうかとも関係ないんですけどね」

ようやく全てを聞いてミアとレナリンスは脱力する。今になって安心感が湧いてきたのであった。

「あはは、僕も今日は魔法を使えないし、今日はこのまま休みにしよう。どうせ急いでもないし、フェンリル戦の疲れをとらないとね」

クヨウは「今日の夕食は豪華にしようか」と3人を労う予定をたてるのであった。

一方討伐隊は、フェンリルの死体を確認後、周囲の捜索を行い安全を確認していた。

ハンター隊が森で瘴気が吹き出ている場所を発見し、封印した後各

町へ安全宣言が出されるが、それは次の日になってのことだった。

第17話「旅行事情その2」（後書き）

今回は暴露話になりました。

それにしても、マツジーナ選手権大会で話のネタにしようと思うスポーツがなかなか決まりません。ネタに走りすぎのよくないとは思いますが、常道もつまらないでしょうし・・・嗚呼悩ましい。

第18話「旅行事情その3」(前書き)

マジーナ選手権の種目も大体まとまりました。

ふと気がつくとい話毎の文章が徐々に長くなっているような？最初が短かったというのもあるですけどね。

フドウの名前が？のままでした。

第18話「旅行事情その3」

第18話「旅行事情その3」

5日目

昨晩はかなり豪勢な夕食になった。フェンリル討伐のお金がかかなりの額になっていたので少しくらいの散在は問題ではなかった。そのほかにも食道楽や買い物などかなり楽しんでた。そして今日、討伐隊からの早馬がきて、安全宣言がだされたおかげで、クヨウ達は気兼ねなく出発した。

そのころミントのギルドでは、早馬できた兵士から細かい情報もたらされていた。たまたま居合わせた2人のハンターもその情報を聞いていた。その2人とは数少ないSランクハンターであり、人間と竜人のペアである。人間の名前はサクラ・イザヨイ。竜人の名前はフドウ・カグツチという。

オオヤマ国とは大陸の東南の険しい山岳地帯にあり、人間と竜人が作り上げた少数国家である。場所が場所だけに戦争時には鎖国状態になり独自の文化が発展したりもしている。また武術に力を入れており、『刀』という独自の武器を使い1人1人がかなりの腕前でもある。基本的に中立国であるので、どこかに干渉することはない。現在でもある程度の交流があるとはいえ行き来には不便な場所でもあるので若干閉鎖的な国でもある。この国の若者はある年齢になると、旅をして無事帰ってくると始めて一人前として認められるという風習がある為、修行として旅をすることも多々ある。この2人も修行のために旅をしていた。ハンター家業は「ついで」ではあったが、実力が認められSランクハンターになった。

ちなみにSランクハンターは大陸中を探しても、数十人しかいない。一時期人間種には不可能であるとされていたこともあったが現在5名の人間のSランクハンターがいる。その中の1人がサクラである。ほかのSランクハンターは竜人やエルフなどである。SランクハンターとAランクハンターには大きな壁が存在する。Sランク以上は完全な実力主義であり、どれだけ依頼をこなそうとも実力がなければなれるものではなかった。ユニークモンスターもSランクハンターならば1人で討伐が可能であり、ハンター達の憧れでもある。

サクラとフドウは兵士の情報聞いていると引っかかりを感じていた。原因はフェンリルの死因だった。ナイフが額を貫通し、脳に刺さったのが原因と討伐隊はみていた。実際それは正しい、しかし、問題が1つある。一体誰がそれを実行できるのか、と。動物にとって額は急所の1つである。だからこそ、そこにナイフを突き立てるのは生半可なことではない。相手の真正面から攻撃しなければならぬ。故に奇襲ではまず不可能である。

しかも、相手はユニークモンスター「フェンリル」である。元が犬であるために、身体能力が高い上に知能があるため、できると思えない。サクラやフドウなどのSランク以上のハンターなら可能であっただろう。しかし、現場にはA〜Dランクハンターしかいない。そのAランクハンターがSランク並みに強い可能性もあったが、あまり現実的ではない。

そうなるにナイフに何か特別な能力があったかもしれない。しかし、フェンリルが死んだ後に砕けているところを考えるとあまりいいナイフではない。そんなものに、そこまで特別な能力をつけるとも思えない。

考えれば考えるほどに、サクラとフドウは泥沼にはまっていった。

「あとは、討伐した本人達に聞いてみるほうがはやいな」

「そうだね、幸い彼らが出発したのは今日の朝みただし。目的地も同じだから追いつけるっしょ」

そこまで気にする問題でもなかったが、「答え」が近くにいて移動方向も同じなら聞いてみようかと2人は考えていた。

そのころクヨウは新しい魔法具にチャレンジしていた。レナリンスとミリアには能力のことを話したので、特に隠す必要もなくなったからだ。もう無いとは思いが、このままフェンリルのようなモンスターにこられたら次は勝てるとは思えなかったからである。

「ん、やっぱり難しいね。流石にそう簡単にはいかないか・・・」
「あれほどの、魔法具は、まだ無理ですかあ」

クヨウとレナリンスは首を傾げつつ、新しい能力を考えていた。目標は「もっとり早く能力をつけれて、フェンリルクラスにも効果があるもの」というなんともお粗末な内容だった。

「あはは、そう簡単にはいかないですよね」

「ん、やっぱり前から考えていたものを作ってみようかな。それが現実的だ」

「あれ？何かアイデアがあっただんですかあ？」

クヨウが以前から考えていたもの、それはスピッドファイアの威力を上げるための物だ。今のスピッドファイアだと戦ってもマジックモンスタークラス、とてもユニークモンスターと戦えるだけの火力は無い。それは先のフェンリルが証明している。もともと、もう戦うことは無いと思うが、今回も偶然の遭遇だったことだし、1度

ある事は2度あるかもしれない。ということでは戦わないにしても抵抗手段くらいは用意しておく必要性はあった。

「クヨウさ〜ん、それが終わったら私にも何か作ってもらえませんか？正直フェンリルの時は何もできないに等しかったし・・・」

「ミリアさんには補助魔法で助かったけどね〜、あれがなかったらレンヤも危なかったし」

「私も〜同じようなものですよ〜」

ミリアは流石に主戦力になれるとは思わないが、せめてまともに援護くらいはしたいとフェンリルとの戦いから純粹に思っていた。

「そうだね〜、それじゃあ何か考えておいてよ。僕も考えておくけどね」

「じゃあ〜私にも〜作って欲しいです〜」

ミリアがいいなら私も〜とレナリンスが強請り始める。結局レナリンスにも作ることにになり、嬉々として武器と能力を考えていた。そのとき、後方から急接近する反応があった。

「レンヤとまって！何か後ろからくる！」

「なに！？」

敵意はなかったが、流石にありえないスピードで迫ってくるので警戒は必要であった。クヨウが眼鏡で確認すると、竜人が1人、背中に人間を背負って走ってきたのである。

「あ〜、なんだろう？あれ」

「「「は？」「」「」

危機感のないクヨウの発言に悩む3人。とりあえず危険がなさそうなので、警戒を解く。
そして4人と馬車の目の前で竜人は急停止した。

「こんにちは！ちょっとお尋ねしたいことがあるんですがいいですか！？」

「サクラ……声がでかい」

竜人に背負われた人間というなんともいえない状態に呆然とする4人であった。クヨウはとりあえず話をすることにした。

「ん、ご用件はなんでしょうか？一応聞いておきますけど盗賊の類ではないですよね？」

「ひどいな、こんな可愛い盗賊なんているわけ……それはそれでありかも！？」

「何を阿呆なことを言っているサクラ？すまん、悪気はないんだが」

一人で場を引つ掻き回すサクラと呼ばれる女性に額を押さえる竜人、クヨウ達は思う「こいつら一体なんなんだろう？」と。

「あ、おほん！気を取り直しまして……ああ自己紹介がまだでしたね。私はサクラ・イザヨイです。こっちが竜人のフドウ・カグツチですよ」

「あ、ご丁寧にどうも。僕はクヨウ・キサラギ。こっちがレンヤ・アオイ。後ろの2人が……」

「ミリア・カーディナルです。よろしく」

「レナリス・エンプレスです、よろしく」

自己紹介を順次済ませ、本題に入る。クヨウにとってはあまり聞か

れたくないことであった。

「よろしく。では単刀直入に聞きますけど、貴方たちがフェンリルを倒した一行ですか？」

急にサクラが真面目になり場の雰囲気が変わる。思わずレンヤが構えを取るが、その瞬間相手との実力差を実感する。

「そう警戒しなくてもいい。我々は別に危害を加えるために来たのではない」

「では何をしにきたんですか？」

クヨウが訝しげに聞く、クヨウも2人との実力差は実感している。今のこの場で敵対すると100%勝てないであろう事を理解していた。

「単純に聞きたいだけです。一体どうやってフェンリルを倒したのか？・・・と」

「死因は調べてないんですか？」

「討伐隊の方が調べましたよ。死因は額から脳へナイフが貫通したことによる刺殺ですね」

「では何故そんなことを改めて聞く必要があるんですか？」

クヨウは2人の聞きたいことは既に分かっていたが、遠まわしに勘違いしているように聞く。時間を稼いで何とか誤魔化そうと思っただけだが、2人には感づかれていた。

「死因はどうでもいいのですよ、私が聞きたいのは「どうやって倒したのか？」ということです。言い方を変えると「どうやってフェンリルの額にナイフを刺したのか？」ということですよ」

「・・・ノーコメント・・・ですね」

「ふむ、やはり何か特別なことをしたのだな」

フドウがそういうと2人は力を抜く、それは別に細かい内容を知ろうとは思っていなかったからだ。ハンターとして活動していれば隠し玉の1つや2つは持っているもの。実力者ならそれは当然である。しかもそれはあまり他人には知られたくないものだ。だから細かい内容を聞くつもりはなかった。ただ「隠し玉がある」ということがわかったなら上出来である。

「できれば内容を知りたいが、知られたくないことを聞き出すほど野暮ではないよ。我々はただ情報通りだと少々納得がいかなかっただけだからな。脅すような真似をしてすまなかったな」

「その通り！でも・・・本当にダメかな！？できれば知りたいな」とも思ってるだけど・・・ギャツン！」

桜が目を輝かせて聞き出そうとして、フドウが鉄拳にて止める。すでに「聞くつもりは無い」と言っているのでフドウは桜の暴走を止める。

「桜、このまま聞き出そうとするのは野暮だぞ」

「え、だって知りたいじゃ〜ん？・・・OKOKわかった、もう聞きに行かないから・・・だからその拳を解いて〜〜！」

焦る桜にうんざりするフドウ。さっきとはまるで雰囲気が変わり着いていけてない4人は苦笑いしかできなかった。

2人のコントが終わり、特に急ぐ用事もなかったが、流石にあの遣り取りの後に仲良く旅をする雰囲気にもなれなかったので2人は先に進んでいった。

「まるで嵐のような人達でしたね・・・」

「良く分からない人達でしたねぇ。クヨウさんとあゝレンヤさん
大丈夫ですか？」

突然座り込む2人にレナリンスとミリアは驚く、2人は汗だくであ
った。

「ねえレンヤ？あの2人と戦って勝てる？」

「無理だろう、つーか戦いにもなんねえよ」

「だよねぇ、世の中あんな化け物もいるんだねぇ」

2人の会話にミリアとレナリンスは驚く、そこまで実力差がある相
手だとは思わなかったからだ。クヨウとレンヤは、サクラとフドウ
の殺気を浴びていた。しかしミリアとレナリンスには殺気が向けら
れていなかったため、多少の圧迫感しかなかったのである。

レンヤは自戒する。それは自分が心のどこかで自惚れていた為であ
る。竜人の2〜3倍の身体能力をもったとしても技術がなければ意
味が無いと実感したからだ。また自分には圧倒的に経験が足りない
事も悟る。

「そのうち、旅に出てみようかな？」

レンヤの呟きは3人には聞こえていなかった。

その頃、先に行く2人は・・・

「やるとしたら、キサラギって人かな」

「そうだろうな。アオイのほうおそらくパワータイプだからな、流

石にナイフは使わないだろう」

「後ろの2人はちよつと残念だけど力不足だね。同じ女性とはして頑張って欲しいんだけどなあ」

「しかし、クヨウ・キサラギとレンヤ・アオイ・・・か。名前からして同郷か？」

「どうだろう？名前はそんな感じなんだけど、雰囲気が違うね。それにキサラギのほうはともかく、アオイをあんな未熟な状態で旅出すとは思えないよ」

「そうだな・・・。まあいい、縁があればいずれまた会う事もあるだろう」

2人はそのまま、ガチンコ連合国中心都市「リーブラ」を目指す。そして、思いのほか早く2人はクヨウ達と再会することになる。

第18話「旅行事情その3」（後書き）

異世界系では日本っぽい国はかせませんよね？

そろそろマッジーナ選手権をやっている都市に到着の予定でございます。

では次回をお楽しみに！

第19話「旅行事情その4」(前書き)

今回は少し短くなりました・・・

ギャグに走るのが難しいです。

第19話「旅行事情その4」

第19話「旅行事情その4」

6日目

今日も変わらず、クヨウは新型の魔法具を作っていたがイマイチ納得のいくものは作れなかった。強敵対策として、暫定的にミントで買っておいたガラス球を魔力爆弾にすることで対策とした。即興ですぐにいい物ができるわけもないので、それで我慢しておき、あとは訓練として道端の石に魔力をこめて即席魔法具としていた。

「なかなか良いアイデアがないねえ」

「思いつくものがあゝ、強力すぎるんですよねえ」

クヨウとレナリンスがそろって頭をかしげて悩む。ぱっと見、兄弟ではないか？と思えてミリアは笑っていた。

「スピードファイアの威力を上げたらどうだ？中級クラスを撃てれば結構違うと思うんだがな」

「それは考えているんだ。でもね、どうやったら威力が上げられるかがイマイチね」

「それはさ、クヨウの能力で『中級魔法を撃ちだす』とかすれば良いじゃん」

それができればクヨウも苦労することもなかった。魔法具とは魔力を使い相応の代償を得る物である。1の魔力で1の効果を生み出す工夫とリスク次第で2や3にならない事もないが10や20になることはない。スピードファイアの薬莖に込められる魔力には限りがある

ある。物質に込められる魔力はある程度決まっております限度を超えてしまうと、発動前か発動後に壊れる可能性がある。先のナイフもそれが原因で砕けていたのである。

「ん、まあのおんびりやるさ」

「それがいいですよ、それにフェンリルみたいなのが度々出てこられたら困りますしね」

そうこうしているうちに、目的地であるガチンコ連合国中心都市『リーブラ』が見えてきていた。ガチンコ連合国中心都市『リーブラ』はマジジーナ選手権大会でも特に人気のある大会を開いており、かなり混雑をしていた。元々世界の商業の中心でもあるので、人は多い。しかし、この時期はさらに多かった。クヨウ達はさっそく宿を探しにいくが、なかなか見つからなかった。しばらく探して丁度チエックアウトしたところがあり、そこに入ることができた。

「ラッキーだったな。ま、この人の多さじゃ見つからないのも無理ないな」

「予約できればいいんだけど、そんなのないしね」

クヨウとレンヤがようやく見つけた部屋で寛いでいると、ミリアとレナリンスが入ってきた。

「2人とも行かないんですか？」

「いきますよあ」

「2人ともちよつと速いよ、もうちよつと休もうよ」

「そんなことしてたら大会が終わっちゃいますよ」

期間中、様々な大会が各地で行われる。公式な大会でも50以上ある。非公式な野良試合を含めると数え切れないだろう。ガチンコ連

合国のバイタリテイの凄さが垣間見れるところでもある。なにしろ4年に1度の周期とはいえ既に100年以上つづいているのだから。

「ここのおばちゃんに、パンフレット貰いましたから、何を見るか決めましょう」

種目は様々、身体能力を生かした物から、魔法の技術だけで競うものまである。中にはボディビルっぽい大会もあるのだが……

「このガチンコマツスルグランプリって何をするんでしょう？国の名前を使っているところからみると、結構人気がありそうですね」

「いやあ……あまり見たくない『モノ』が見れるだけだと思うけどな……」

「この宿のおばちゃんの一押しい〜でしたよ」

「マジで!？」

クヨウとレンヤは良い笑顔をした超 貴的な人がたくさん集まっている風景しか想像できなかった。実際その想像が合っているのだから恐ろしい。

しかし、ガチンコ連合国を舐めてはいけない。ガチンコマツスルグランプリは大会期間中でも2番目に人気がある大会なのだ。もっとも、内容はボディビル選手権と同じだが、男性女性問わず種族別で『筋肉美』が競われている。しかも、この大会の恐ろしいところは、1日では終わらないところにある。2日置きに大会が行われ、その都度順位が決められる。そして最終的な総合順位で優勝を決めるのである。何故こんなことになっているかという理由がある。一番の理由は健康のためであった。

通常のボディビル選手権は舞台の上にいる数十秒が勝負であるため、選手の大半が脂肪を落とすすぎて体力がないのである。故に、舞台から降りると同時に倒れる選手が多い。そのため、継続的に大会を

行うようにすることで脂肪の落としすぎで倒れることを防止するのだ。

「恐るべし！ガチンコ連合国！」

「さっき外を見てても、妙に筋肉質の人が多いんだよね・・・」

「ま、まあ、これなんかどうです！？丁度やって面白そうですけど」

なんともいえない空気になりつつあったので、ミリアが強引に話を变える。ミリアが注目したのは『フリージングスタチュー』という種目だった。

「氷像を魔法で作るんですね。楽しそう」

「でも、普通に考えるとかなり難しいですよ？これ」

「あ、いいですね。これ。じゃあこれを見に行きましょうか？」

さっきまでの話をなかったことにし、クヨウ達は早速競技を見に行った。会場はそこそ大きく楕円鉢状になっていた。真ん中の舞台の上では2人の選手が氷像を作っていた。

「こういうときに眼鏡って便利だね」

「わ、すごい、遠いのはつきり見える」

クヨウは遠くからでも見えるように鷹の目の眼鏡を3人分用意していた。ちなみにレンヤは視力がいいので必要ない。

今対決中の2人の選手は対照的に氷像を作っていた。片側の選手は1mくらいの氷像だが細かく作られており、逆にもう片方の選手は2mサイズで荒いけど豪快な氷像を作っていた。この種目は氷像の大きさ、芸術性、速さが問われる。勝負事に条件が決められて、その都度条件が変わる。今回の条件は制限時間があるが、逆に言えば

速くても遅くても関係ないという条件だ。

「どちらの選手も魔法のコントロール技術がすごいですね、流石にこの大会はレベルが高いです」

「ふえ、私にはとても真似できないですねえ」

このマジジャー選手権大会の一番のすごいところは、ありとあらゆる要素が試すことができる点にある。魔力が低くても抜群のコントロールで勝負できたり、コントロールをほとんど無視して瞬間的な放出量だけで勝負できるなど、例え著しく才能が偏っていても活躍の場が探せば必ず存在する。まさに、天才・秀才の祭典になっている。またここではスカウト活動も盛んで、魔法の研究員から国の兵士に至るまで、様々な勧誘が飛び交っていた。

「あ、小さい氷像を作った人が勝ったみたいですね」

「次の試合の条件は……速さ勝負ですね」

次の試合の条件は「時間無制限」「対象の絵の人物を氷像にする」「大きさは1mサイズ」というものであった。そして問題の絵という……

「まじか……」

「あはは、ここでも、筋肉なんですね」

出された絵はマッスルポーズを決めて良い笑顔の男性であった。どれだけガチンコ連合国は筋肉好きなのかがわかるところでもある。

「作り始めましたね。リアルすぎて逆に気持ち悪いかも……」

この試合は優勝候補が出てきたため、かなりレベルの高い試合にな

った。つまりレベルの高い超 貴ができあがっていった。会場が沸く、中には「あにき〜〜!!!」という声も聞こえて4人は若干引いていた。

決勝戦は次の日に行くため、この日は夕食を食べに行くことになった。

普通に料理店に入り注文をしようとメニューを見た4人は固まった。

「あゝ、お肉系が多いね〜・・・」

「それよりこれ・・・これって筋肉増強剤じゃね?」

あまりバランスの取れた料理が少ない・・・というか筋肉を発達させようとする店の気概が見えてしまうメニューであった。帰る頃に体格が変わってないか心配になる4人であった。

そして、事件が起こったのは宿に戻る途中のことであった。

「クヨウ・・・あそこ見えるか?」

「ん〜?あれはまずいかもね・・・」

レンヤが見たのは路地で男数人が少女を誘拐するところであった。

「ミリアさん補助魔法とレンヤのサポートをお願いします。レンヤは突っ込んで、リンスちゃんと僕で援護するね」

クヨウの指示の元、3人は動き出した。

「おらあ!」

「くっ!なんだこいつ!」

「あ、このやろっ!」

レンヤが上手く突っ込み少女を救出する。ミアアがうまくレンヤと誘拐犯を分断し、クヨウとレナリンスが遠距離攻撃で誘拐犯を攻撃する。

「ちっ！一旦引くぞ！」

そして誘拐犯は引いていった。クヨウとレナリンスが警戒しながらレンヤとミアアに駆け寄った。

「レンヤ無事？」

「俺は問題ないぞ、流石にあんなのには負けんよ」

「いえ、レンヤさんはあくどうでもいいですけど、女の子のほうですよ」

「どうでもいいんかい！」

突っ込みを入れるレンヤをスルーして少女の方を心配する。実際レンヤは無事なので仕方が無い。とりあえず、少女を警備隊へ連れて行くことになる。これが発端になり厄介ごとに巻き込まれるになるのであった。

第19話「旅行事情その4」(後書き)

気がつけばアクセス数2万突破してました。

こんな文章を読んでくれている読者様には本当に感謝です、ありがとうございます。

では、次回をお楽しみに！

第20話「旅行事情その5」(前書き)

今回めでたく20話になりました。呼んでくださっている方には本当に感謝しています。

お気に入り登録数が増えたり感想もらえるのは嬉しかったです。これからもがんばっていきます。

第20話「旅行事情その5」

第20話「旅行事情その5」

6日目しじき

クヨウ達は誘拐犯から少女を救出し、警備隊の本部へ向かっていた。少女は気を失っており、今はレンヤがおんぶしている。

「ところでレンヤ、警備隊の本部ってこっちでいいの？」

「へ？知らないぞ、クヨウが知ってるんじゃないのか？」

警備隊の本部へ向かっていた……かも？

「大丈夫ですよ、もうちょっと先にありますね」

「2人とも適当だったんですか？」

一応警備隊本部へ向かっていたらしい。乾いた笑いで誤魔化す2人であった。

「誘拐犯が着いてきたりしないよな？奇襲されたらたまつたもんじやないぞ」

「それは大丈夫、一応つけている人はいないよ」

「あゝ見えました。多分あの建物じゃないですかあ？」

前方に『警備隊本部』の文字が大きく書かれた看板が見えてくる。もうすでに夜遅くになってはいるが、警備隊は休まずやっているらしい。少女を預かってもらうために4人は中へ入っていった。

「おや？どうしたんだい、こんな時間に？」

出迎えたのは40台くらいの人間のおじさんであった。警備隊の人間が妙に体格がいいのは気にしないことにする4人である。

「あゝ、実は先程誘拐らしき現場に遭遇しまして・・・この子が誘拐されそうでしたのでつれてきた次第です」

「なに！本当か！？いや、その子がいるんだから本当なのだろう。ありがとう、協力に感謝するよ」

数日前に似たようなセリフを聞いたような覚えもなくはないが、とりあえず、感謝は受けることにする。

「あ、どうも。まあ、たまたま見かけたというだけなんですけどね」

「たまたまでも何でも、犯罪を防げたのなら感謝するよ。この子は眠ったままかね？」

「ええ、助けたときから眠ったままですね」

そついいながら少女を近くにいた女性に預けようとしたそのとき、1人の竜人族の男性が駆け込んできた。

「誘拐だ！手を貸してくれ！」

「……何！？」「」「」

本部にいる警備隊員は騒然とする、急いで捜索の準備を始めた。クヨウ達は少女を近くのソファーに寝かせて帰ろうとしていた。このままいても邪魔になる恐れがあったためである。

「それで、その少女の特徴は！？」

「ああ、髪が金色で長く、肌は白い。あとは・・・」

隊員が少女の特徴を聞きだしているのを横で聞こえてしまったクヨウ達は、ふと自分たちが助けた少女を見る。

「え〜とお〜、もしかしてえ〜この子のことでしょうか?」

「リンスちゃんもそう思う? 僕もそうだと思うんだけど・・・どしよか?」

「どうするも何も、聞けばいいじゃん」

勘違いだったらそれは別に構わないので、駆け込んできた男性に聞くことにした。

「あの〜すみません。もしかしてこの子のことですか?」

「なんだ!? 今いそがし・・・何? 今なんと?」

「あ、いえ、この子は違いますよね〜?と・・・」

男性は相当焦っていたらしく、少女を見ると数秒間固まった。そして本部内の雰囲気も同時に固まる。そして・・・

「おおおお! よかった〜・・・ありがとうございます! 既に助けただいたのですね!」?

凄まじい男性の勢いに負けて隊員はろくな答えを返せずにいた。そして横から女性の隊員が出てきて事情を説明する。クヨウは「厄介ごとになりそうだな〜」と思っていた。

「なんと! 貴方たちがですか! 本当にありがとうございます!」

「あ〜いえ、たまたまですので、気にしないでください。それじゃみんな帰ろっ」

なんとか話を打ち切り宿に戻りたかったクヨウだったが、当然その男性はそれを許すはずも無く、「是非お礼を！」と詰め寄ってくる。結局勢いに負けて次の日に招かれることになった。そして帰る途中・

「すごい勢いでしたね」

「横で見えてて、とても面白かったですよ」

「善意の塊だからね、どうにもできないし」

「まあいいじゃないですか、面白そうですし。特に見たいものがあるわけでもないんですし」

クヨウ達はマッジーナ選手権大会を見に来てはいたが、この種目が見たいというわけでもなかった。あえていえば、大会の雰囲気を見に来たようなものである。故に特に予定は決めていなかった。

7日目

クヨウ達は朝早くからとある屋敷にきていた。リーブラの郊外にある住宅地に建っている一際大きい屋敷である。昨日助けた少女はエルミール家のご令嬢でミューズ・エルミールという。ちなみに昨日の男性はラウ・アークといって、ミューズの護衛をしている人であった。

「エルミール家・・ねえ。まさかとは思ったけど、エルミールグループのTOPの家とはね」

グループとは色んな店が共同で出資あるいは連携するなどで形成さ

れる共同体のことである。目的は様々であるが、利益の共有が一番の目的である。以前出てきた商業連合もこれになる。そして、エルミールグループは大陸でも有数のグループの1つである。武器の製造販売に力をいれており、Sランク以上のハンターも複数名協力している事で有名である。

エルミール家はその大元で仕切っている家系である。

「お礼は〜期待できそうですね〜」
「僕としては面倒ごとにならない事を祈るだけですよ」

妙に期待するレナリンスとは対照的に、クヨウはどうも嫌な予感しかしなかった。とはいえ、今更断るわけにもいかないので屋敷の呼び鈴を鳴らす。出てきたのは老執事だった。

「はい、どちら様でしょうか？」
「私クヨウ・キサラギといいます、昨日ラウ・アーク殿に呼ばれてきたのですが・・・」
「お待ち申し上げておりました。それではどうぞ中へ」

4人は玄関に入るとそこで既に圧倒される。正面にいきなり巨大な超 貴の像がマッスルポーズを決めつつ建っていた。大きさは3mほどであるうか、今にも「H A H A H A H A」と笑い出しそうで怖かった。

「うわ〜、これはないわ・・・」
「僕はもうだめかも・・・」
「「怖い」」

圧倒される4人をみた執事が苦笑しながら「少々お待ちを」と中へ入っていった。そして奥から出てきたのは屋敷の主であるバンガー

ド・エルミールであった。この人も例にもれずマツチヨである、しかも顔が輝いている（別の意味で）。

「ようこそ！エルミール家へ！私が当主のバンガード・エルミールです！」

「本日はお招きいただきありがとうございます。私はクヨウ・キサラギと申します」

バンガードの大声と迫力に圧倒されつつも、クヨウはなんとか礼儀正しく挨拶をする。3人もそれを真似て挨拶を行う。

「さて、こんなところではなんなので奥へどうぞ」

そうしてクヨウ達は客室へ案内される。ここには銅像はなかったが、絵画が存在し少々引く。「どこまで筋肉好きなのか」と悩むクヨウ達であった。そして、大きめなソファに座ると、奥からミュージックとラウが出てきた。ミュージックとしてはクヨウ達のことをまったく知らない。まあ、気を失っていたので当然であるが、ラウからの紹介で納得しお礼を述べる。その礼儀正しい姿は1つの絵になっていた。その後ミュージックは部屋をあとにする。改めてラウからのお説教が待っていたらしい。

「さて、お礼なのだが・・・皆様に合った武器というのはいかがでしょう？ご存知の通りエルミールグループは武器製造に力をいれていましてな、無料で最高級の武器を用意させましょう」

「随分太っ腹ですね」

「娘が無事に帰ってこられたのです、これくらいで済むなら安いものですよ」

そこでクヨウを除いた3人は武器をオーダーメイドで作ってもらう

ことにした。そこで2人のハンターが部屋に入ってくる、先日遭遇したサクラとフドウであった。サクラとフドウはエルミールグループに協力しているハンターであり、武器もオーダーで貰っている。もちつもたれつといった関係であるらしい。面識があったことにはバンガードも驚くが、特に険悪な仲でもないのでサクラとフドウに武器をみてもらうことになった。5人は別室へ移動していった。

「クヨウ殿はよろしいのですか？」

「僕の武器は特別製ですね。師匠と僕との合作です。なので変えるつもりはないんですよ」

「ほ、失礼ですが、少々見せていただいてもよろしいですか？」

「特殊な武器なので、同じものや類似品を作らないという条件ならいいですよ」

「恩人の武器をそんなことしませんよ。こちら商人の意地がありますしね」

「それは失礼しました」

バンガードはスピッドファイアを受け取ると興味深そうに眺める。

クヨウは念のため薬莢を抜いているため、間違っても暴発はしない。

「ふむ、なかなか不思議な形状ですね。それに良い仕事をしている。クヨウ殿と師匠殿の合作ということは、クヨウ殿は鍛冶をしているのですか？」

「いえ、僕は魔法具を作っているだけです。師匠は鍛冶もしていませんけど。それとその武器はこの薬莢をいれないと武器として作動しませんよ」

クヨウは薬莢見せてスピッドファイアの性能を軽く説明する。バンガードは唸りながら聞いていた。

「なるほど。すばらしい発想ですな。是非とも商品化したいところです。私共のグループへの参加を要請したいくらいですね」

「ありがたい話ですが辞退させていただきます。僕も店を持つ身ですのですね」

「それは残念、まあ仕方が無いでしょう。それよりその薬莢をうちで作りましたか？今は鉄で作っているみたいですが、ミスリルで薬莢を作れば込められる魔力量もあがるでしょう。クヨウ殿へのもの以外は一切作らないと約束しましょう。どうですか？」

クヨウにとってそれはかなり魅力的な話であった。正直スピッドフアイアの攻撃力のアップはしばらく無理だと思っていたからだ。クヨウはバンガードの提案を了承し、頼むことにした。

「こちらとしてもお礼ができて、何よりですよ」

その後、レンヤ達が戻ってくるまでバンガードがスピッドファイアを試射して過ごしていた。

第20話「旅行事情その5」(後書き)

話が予想以上に長くなったのでここで一度終わっておきました。中途半端な形かもしれませんが、次で一段落する予定です。

では、次回をお楽しみに

第21話「旅行事情その6」(前書き)

今回は日付が変わりませんでした。

当分このままオリンピックもどきの話になりそうです。

第21話「旅行事情その6」

第21話「旅行事情その6」

6日目しじき

レンヤ達は、武器を見てもらうために別室に来ていた。この別室には様々な武器が置かれている。しかし、素直な癖のない武器しか揃っていない。これは、その人の特性を見るためであり、その特性に合わせた武器を作るというオーダー専用の部屋であった。ミアとレナリンスはそれぞれ自分が使いそうな武器を手に取り、試していた。

「へえ〜ミアさんも結構筋がいいですね。思ったよりは実力があるなあ」

「サクラさんには到底及びませんよ。私の剣術は本格的に習ったとはいえ、一時期だけのものですから」

「ミアさんは〜、普段から訓練すれば〜もっと強くなれますよね」

女性3人は結構打ち解けていた。それはレンヤとフドウも同じであった。

「レンヤ殿は格闘ですか、それだけの膂力があるなら大型の武器もいけるでしょうに」

「肉弾戦は漢の浪漫ですからいいんですよ。とはいえ、大型モンスター相手に格闘はつらいのは事実ですけど」

「しかし、慣れない武器を使うよりは格闘一筋のほうがいいでしょう。実際知り合いにフェンリルを殴り飛ばした輩もいますし」

フドウの知り合いとはSSランクハンターのことであるが、レンヤからしてみれば遠い話であった。そうして、3人はそれぞれ武器のオーダーを決めていった。一方クヨウとバンガードはスピッドファイアの試射を終え、商売などの話をしていた。

「そついえばクヨウ殿は商業連合という組織をご存知ですか？」

「ええ、一度勧誘されましたからね。きな臭かったのでお断りしましたけど」

「それは安心した。実はですな、最近黒い噂が絶えないのですよ。昨晚のミューズの誘拐も、どうも彼等の仕業ではないかと」

「黒い噂があるのは知っていますか、それは少々突飛な発想ですね。何か根拠が？」

「彼らの目的まではわかりませんが、少なくともわがグループの武器製造技術を欲しているようなのです」

最近エルミールグループを切り崩しにかかっている勢力があり、その最有力が商業連合であった。もっとも、エルミールグループの結束は固く、易々とはいかないので今のところ問題はない。しかし、バンガードも黙っているつもりはなく、色々と情報を集めており、最近の情報では商業連合の一部の勢力が過激化しているということが分かったのだった。

「その一部の勢力が暴走して、誘拐に至ったと私どもは見えております」

「なるほど、でもそれだと目的がイマイチわかりませんね。非合法な手を使って武器の製造技術を盗めたとしてそれで手段に見合う利益が得られるとは思えません。情報が間違っていないと考えると他に目的があるのでしょうか……」

バンガード達も同じ考えではあった。しかし、武器製造から利益を得ようとしてもエルミールグループを追い抜くだけのことをしなれば到底割に合わない。切り崩せれば話は違うのだが、非合法な手を使って相手勢力を飲み込もうとすれば、ギルドからの圧力や場合によっては制裁がある。考えなしでやっているようにしか思えなかった。

「それで、クヨウ殿にも気をつけて欲しい。それと銃という新しい武器はあまり人目に出さないほうが良いでしょう。彼らに目を付けられると厄介ですから」

「そうですね、昨日のようなことがない限りは使わないようにしなければなりませんね。昨日の賊は流石に銃には気がついてないでしょうから、まだ大丈夫なはずです」

音に気がついても、夜の闇の中で火花のでない銃がわかるはずもない。実際、賊もオリジナルの魔法だと思っている。しかし、警戒するに越したことはなかった。

そこで、バンガードはクヨウに情報の共有という協力を求めることにした。クヨウが店をだしているラングランにもエルミールグループ系列の武器屋があるので、そこを通し何か情報が入り次第伝えるというものだ。何かあったときのために、対商業連合ですぐに協力体制を築けるようにするためのものだった。

バンガードとしてはグループに入ってもらうのが一番いいと思っただけなのだが、既に断られているし無理強いをするつもりもない。そのため情報の共有が最適であると判断したのだった。

クヨウもそれならばと快諾し、エルミールグループでも得られない所から情報をもらえる可能性があると判断した。若干物騒な話が終わった頃に、レンヤ達に戻ってきた。

「バンガード殿、ただいま戻りました」

「フドウ殿、サクラ殿、ご苦労様です。どのくらいかかりそうですか？」

「そうですね、3日か4日といったところでしょう。彼らもそのくらいならまだ、この町にいるそうなので、直接渡せるかと」

そうして、少し雑談をしたのち昼食をとってからクヨウ達は屋敷をあとにした。その際、ミューズのお転婆と猫かぶりが発覚し、ラウの気苦労がわかるエピソードもあつたりしたがそれは別の話である。その後、屋敷を後にしたクヨウ達は、本来の目的である観光に戻る。そのまま一番近くで妙に盛り上がっていた会場があつたので特に確認もせずに、入っていった。しかし、新しい武器の話で盛り上がっていた彼らは忘れていた、この都市、マッジーナ選手権大会の恐ろしさを・・・

4人は中に入り、席に着く。どうも今は休憩時間らしく、会場はちよちよこと席が空いていた。周りの人間が戻ってきて、立ち見をする人間が大勢出てきた頃にクヨウは自分の失態に気づいてしまった。

「しまった、ここはアレの会場だったんだ・・・」

「どうしたんですか？クヨウさん」

「すごい人だかりにいくなくなってきましたね、人気があるみたい？」

そこまでいき、レナリンスも気付く。しかし時既に遅く、人だかりで禁断の聖地から逃げる術は失われていた。それでも、なんとか逃げ道を探そうとした瞬間に会場が真っ暗になり、舞台にスポットライトが集中した。舞台に出てきたのはほっそりとした、かなりの美人であつた。この瞬間、クヨウはホッと息をつく。自分の予想は良

い方向に外れたのだと。しかし、それは淡い夢と消えるのであった。

「ようこそ皆様！これからマッジーナ選手権大会ガチンコマッスルグランプリツアー第6戦目！3回戦を行います！」

その言葉に会場全体が反応する。オオーオー！！という叫びとともに盛り上がる中、いくつかのグループはどん引きしていた。クヨウ達もその1つである。クヨウとミリアは気が遠くなる思いであった。レンヤとレナリンスは若干ひいてはいたものの、大分この筋肉属性に慣れてきた（侵されてきた？）のか平気そうな顔をしていた。

「本日、ここまで勝ち抜いてきた！猛者（筋肉）達は！どんなパフォーマンスを見せてくれるのでしょうか！？」

盛り上がる会場、盛り下がるクヨウ達、ここまできたらすでに覚悟を決めるしかないと決意するしかなかった。

「すごいアナウンサーさんですねえ、猛者をく筋肉って読む人は初めてみました」

「リンスちゃん、あのアナウンサーさんほっそりとした体系に見えるけど、よくよく見るとかなり筋肉質だよ」

ミリアとレナリンスはかなり他人事状態になっていた。早い話、現実逃避である。

舞台の上は「そんなの関係ねえ！」といわんばかりであった。

「それでは！3回戦1人目はこの人だ！」

どん引きする一般人には関係なく、グランプリは進んでいく。

「猛ろ筋肉！轟け筋肉！生涯を筋肉に捧げた筋肉奴隷！その名は！
！！アーノルド！！！！ネイビー！！！！！！」

「ウオオオオオ！！！！！！という大声援とともに完全にギャグとしか
思えない筋肉を纏った・・・いや、筋肉で武装化した男がでてきた。
音楽と共に全力でポーキングを決めていく、しかし、本人は笑顔で
ある。初めて見る人にとっては筋肉の塊が笑顔で動いているように
しか見えなかった。もっとも、本人にとってはそれも「筋肉の誉れ」
ということになってしまおうというある意味悪循環になっている。

「続きましては〜！アーノルドの永遠のライバル！筋肉の大小に貴
賤なし！美しい流線形の筋肉を生み出す、筋肉のイケメン！！！マ
キシマム！！！！！！クラウザー！！！！！！！！」

次に出てくるのはかなりかつこいい部類に入るエルフの男性であつた。
通常エルフは知力関係で勝負する人が多い上に、体力関係は苦手
である。しかし、世の中物好きはいるもので、それでも筋肉を鍛
えたのがマキシマム・クラウザーであつた。他のメンバーに比べる
と圧倒的に小さい筋肉ではあるが、表現するならば「鋭い筋肉」で
ある。実際その形状や鋭さが評価され、今では立派な優勝候補の1
人であつた。そしてほとんど人が舞台へ登場し、各々が一番の筋肉
であると表現する。良識ある一般人にとってはなんとも辛い空間で
あつた。

終には・・・

「本日！唯一の女性マッスルの登場だ！！！！！！！！！！」
「なんだ！？その女性マッスルって何の単位だ！？」

一般人達の混乱は益々助長されていった。

そして、出てきたのはなんとモ漢らしい顔に、明らかな女性用水着をきた筋肉の塊である。

「性別？何それ？筋肉に関係あるの?!」とでも言いそうな人である。

「この筋肉に悩殺されない人はいない！筋肉のプリンセス！いや、クイーンとでもいうべきか!?女性ナンバー1マッスル!!!カグラーーーー!!!イザヨイーーーー!!!!!!!!!!」

本気で脳死判定をうけそうなインパクトをうける一般人、後日聞いたところによると倒れた人もいるらしい。舞台上で筋肉の塊がなにやら動いているが、流石のクヨウ達も受けたダメージが大きかった。そしてレンヤがあることに気がつく。

「なあクヨウ？ちょっと確認したいんだが……今の人『イザヨイ』って言ってなかったか？」

「あゝ、確かそんな……名前だった……よう……な？」

「「あ!」」

ふと思い起こせば最近似た名前にあったことがあるような気がした。そう『サクラ・イザヨイ』だった。しかし、サクラはどこからどうみても女性である。あんな性別不明の筋肉の物体ではない。そして考えられることは1つ。

「「「姉妹!?!?!?」」」

舞台上の上にいる「カグラ」という名前の物体がサクラとどういう関係であるのかはわからないがサクラに聞くにはあまりにも失礼に思えたので、4人揃って出した結論は「「「忘れよう」」」であ

った。

結局このまま優勝決定戦が終わるまで会場をでることが許されず、宿にたどり着いた4人はゾンビの様な様子であったと宿の従業員は語っていた。

第21話「旅行事情その6」(後書き)

え〜と、後半は完全にギャグですが、作者の趣味ではありません。

ギャグは好きですけどね、筋肉はそこまで好きじゃないです。

では〜、次回をお楽しみに〜

第22話「旅行事情その7」(前書き)

今回は若干長くなりました。

しかも終わらない・・・

第22話「旅行事情その7」

「はあっ！はあっ！はあっ！」

走る！走る！走る！決して後ろを見るな！振り返るな！アレはまずい！そう自分に言い聞かせて女性は走る。後ろから奇声をあげ迫ってくる塊からなんとしてでも逃げ切らなければならぬ。自分を助けて散っていった仲間のためにも・・・

しばらく走り、ようやくアレを振り切りひと段落する。夜だから周囲は闇、今日は新月みたいでかなり暗い。ところどころ家の明かりで道が見えるが、それでも暗い。

「そつだ、警備隊の本部へいこつ」

警備隊なら何とかしてくれる。そう思い先へ進む。そして警備隊の本部に入ろうとしたときに、ふと窓から中を覗くとそこに広がっていたのは・・・

警備隊の変わり果てた無残な姿であった・・・

「キヤーーーーー！！！！」

そして逃げようと振り返るとそこにはかつての仲間が・・・いや仲間だったモノがいた。

そう・・・

全身気持ち悪いぐらいの筋肉を纏ったクヨウ達がいた！

「いやああああ——！！！！！！！」

ミリアが目を覚ますと、そこはベットの上であった。

「夢……か……あ~~~~よかつた~~~~」

本気で泣きそうになり、横のベッドをみるとレナリンスも「筋肉が~~~~」とうなされていた。

第22話「旅行事情その7」

朝食時、クヨウ達の体調は絶不調だった。ミアは若干トラウマ気味かもしれない。4人全員悪夢をみるほど凄まじい昨日のできごとをすっぱり記憶から消去し、今日を生きようと心に決めるクヨウ達であった。

朝食後、部屋に戻りまた何処の会場に行くか相談する。流石にもう、無計画で会場に入るという恐ろしい行為はできるはずもなかった。

「あゝそういえばあゝ、私これが見てみたいですよゝ」

「ん？どれだ？」

「このターゲットクラッシュってやつ？」

ターゲットクラッシュとは1対1の決闘から複数人のサバイバル、物理から魔法まで対応しているスポーツである。1対1の場合は2人を3mほど離す。2人の前に枰を作りその中が攻撃可能範囲とする。枰の外への攻撃は減点になる。(枰の形状は円形や方形がある)あとは色々な方向からディスク状の的を飛ばし、多く壊せたほうが勝ちになる。攻撃方法は魔法と物理攻撃のどちらでもよく相手への直接攻撃はなし。ただし、相手が的に飛ばした攻撃への妨害はあり。

「へゝ、でもさこれって魔法が断然有利じゃない？」

「それがゝ、そうでもないんですよゝ」

素人考えだと魔法が有利に思える。弾数の問題や発射が楽だからだ。しかし、上級者だと考え方が変わる。1戦での数は決まっている。弾数はそれに合わせれば良いし、的が出てくるタイミングもバラバラで連続発射されるわけでもない。それに極めると物理攻撃の方が速度がでるのだ。魔法はある程度速度が固定される上に、誘導弾は

弾速が遅くなる。空中に待機する魔法は相手に打ち落とされるだけなので意味がない。弾速重視の魔法にすると結局物理と大して変わらず、無詠唱じゃないとお話にならないのだ。

「学園の時に聞いたことがあるんですけど、数十年前のターゲットクラッシュは指弾で優勝した人もいるとか・・・」

「そいつは間違いなく人じゃないな」

そんな化け物もどきはともかく毎年高度な射撃戦になるが、手段はかなりバラつくスポーツである。なかなか面白そうであるということとで観戦することに決定し、宿を出る。

会場はすでに混雑しており、立ち見でしか見れなかった。舞台中央に選手の立つ場所があり、周りは池になっている。的を射出するための魔法具が各所に設置されており、射出場所は公平を期すためパターンはあるが、直前に決められる。観客席は全てシールドされており、余程のことがなければ観客席に危険はない。

「ん〜、思ったよりもかなり広いな」

「想像以上だったな。でもさ、これくらいないとできないってのもあるな」

午前中は予選が何試合も行われ、4人1組の1人勝ち抜けで行われる。各選手、それぞれ違う武器を持ち、色々な方法で的を落としていく。中には刀で斬撃を飛ばすものや、ブーメランみたいに武器を飛ばし、手元に戻す選手もいた。結局無駄が多すぎて負けてはいたが。

「クヨウさんもこれなら良い線いけるんじゃないですか？」

「あ〜、スピッドファイアね。速度と威力は問題ないけど、僕の命

中率がね〜」

クヨウは魔法具で命中精度を補正しているが、それだって100%になるわけでもない。大会に出ている選手は的になら100%当て当たり前のような連中だ。勝てるわけもなかった。

「そこはほら、練習で」

「ん〜、僕はあまり競技とか苦手だから無理かな〜？」

「男ならそこで『頑張る』の一言もいえなきゃね〜」

「え？」

「はろ〜、みなさんお元気〜？」

ふと横をみると、そこにはサクラ・イザヨイがいた。サクラもこの競技は結構好きらしく楽しみにしていたのだ。それと刀で斬撃を飛ばす選手が知り合いらしく、様子を見に来たということらしかった。

「あ〜、さっき負けたよな、その人」

「あ、やっぱり？どうせ勝てないだろうな〜とは思ってたんだけどね。まあここまでこれただけでも凄いとは思っけど」

競技をみつつ雑談をする5人。そこへ、サクラ宛にバンガードからの連絡が入る。この中心都市「リーブラ」の近くにユニークモンスターが複数目撃されたとの情報が入ったのだ。大会でパニックを起こされると大混乱になりかねないので、ギルドから優秀なハンターで即時討伐して欲しいとの依頼がきていた。バンガードも大会の出資者の1人なので、無用な混乱を避けたいらしくサクラに協力要請をいれたのだった。

「厄介ねこれは」

「どうしました？」

サクラはクヨウ達を会場から連れ出し、事情を話す。クヨウ達も同じ思いであるので協力を決めてギルドへ急ぐ。移動中にサクラはクヨウ達の戦力を簡単に把握することにした。

「じゃあ、正面から戦えるのはレンヤ君だけね」

「俺もミリアちゃんの補助がないときついけどな」

「ううん、それでも十分。他の人だって援護があれば結構違うものよ」

いくら1対1で戦えるSランクハンターとはいえ、簡単に倒せるわけでもない。しかも、場所が特定できていないのでどうしても人手は必要になってくるのだ。クヨウの探知系魔法具ほどの高性能アイテムはそうあるものでもない。

「人数にも依るんだけど、最悪みんなバラバラで他のハンターの補助へ行ってもらうことにもなるかもね」

レンヤ以外はDとEランクである。補助や援護しか期待できないのは当然であった。ギルドへ到着すると、すでに複数のハンターが待機しており、その中にはフドウもいた。

「サクラか、遅かったな」

「場所が場所だけにね、時間かかったのよ」

「フドウさん、こんにちは」

「クヨウ殿か、昨日ぶりだな。あと30分後に集まったメンバーで簡単な打ち合わせを行うらしい。それとクヨウ殿、バンガード殿からこれを預かっている。受け取って欲しい」

フドウから受け取ったものはバンガードがお礼として作ると言って

いたミスリル製の薬莢であった。まだ術式が彫つてはないので属性変換はできないが、魔力を込めて発射するだけなら能力付加だけできる。この状況で必要になるだろうと、バンガードが早目に渡して置くように伝えていたのだった。もつとも、まだ2個しか完成していない。

「フドウさんありがとうございます。これで少しは役に立てそうですね」

相手次第では以前の薬莢でもいけるが、保険ができたのは大きかった。時間が少し空いてたので、用心のために以前作った魔力爆弾を3人に渡しておく。

「それにしても、今回は急な話ですね」

「確かに。あり得ない訳でもないんだが、不自然なのは確かだ」
「魔王でも攻めてきたんじゃないの？」

「大陸中央まできたのなら、ユニークモンスターを大勢連れてくるだろう。複数しか目撃情報がない、ということは数匹いるだけで大勢ではないということだ」

ユニークモンスターは瘴気の濃い場所に出現する、逆に言えば瘴気が濃くなければ出現しないのだ。ガチンコ連合国周辺で瘴気が濃い場所などなく、あるとすれば突然出現する瘴気噴出しかない。しかし、それはかなり稀な出来事であり、それにより必ずユニークモンスターが発生するわけでもないのだ。

そして、魔王とは大陸南部の『闇の島』と呼ばれる瘴気に覆われた島にいとされている。出生は不明であり、瘴気に犯された魔物に対し、絶対的な命令権をもつ。魔王自体は人間に対しまり干渉してこない、もつとも理由は定かではない。なので稀に攻めてくる魔王もいて、年単位での戦争状態へ陥ることがある。しかし、ここ2

00年以上攻めてきた魔王はいない。

「自然発生した瘴気噴出が原因っばいですね」

「不自然なのだが、それが一番自然ではあるな」

結局、いくつかの瘴気噴出が同時に起こりユニークモンスターが生まれただけという予想で落ち着いた。

「うーん、緊張しますね……なんだか、眠たく……な
つてきましたね」

「リンスちゃん、それ絶対緊張してないだろう」

「私たちはどの道援護くらいしかできないからね、緊張しても仕方がないわよ」

しばらくしてから、ギルドと警備隊の偉そうな人がやってきた。今回のメンバーはSSランクが1人、Sランクが4人、Aランクが1人、B〜Eランクが15人であった。なのでチームとしては、Sランクは1人。Sランク1人にB〜Eのメンバーが3、4人つき、Aランクが5人と6人に分かれる。合計7チームになる。

警備隊の予想では4体とみてはいるが、取りこぼしの無いように7チームになった。すでに警備隊の斥候が出ており、詳しい位置を探っている最中である。目撃情報があるのは「キングゴブリン」「クインアント」の2種類のみ。どちらも手下を多く連れていることが多く、時間をかけると厄介な相手である。

チーム分けができたところでそれぞれ警備隊に案内され建物を出て行った。

クヨウはサクラのチームに配属された、他のメンバーとは違うチームである。

クヨウの配属されたチームは以下のメンバーである。

チームリーダー：S - サクラ・イザヨイ

メンバー：D - クヨウ・キサラギ

：B - カズイ・ククルツク

：C - リリン・オルマス

：B - アイン・コートス

「とりあえず、自己紹介くらいしておきましょう。私はSランクのサクラ・イザヨイよ」

「僕はDランクのクヨウ・キサラギです」

「僕はBランクの・・・カズイ・ククルツクです・・・」

「Cランクのリリン・オルマスよ。よろしくね」

「Bランク・・・アイン・コートス・・・です」

全員自分の武器や得意なことを紹介し、それぞれ役割を確定させる。とはいっても、相手や状況次第で臨機応変に対応しなくてはならないが、それはサクラが指示することになる。

「とりあえず、全員私の意見には従ってもらおうよ。死にたくなければね」

すこし、殺気を滲ませ本気である事をわからせる。一応全員ちゃんとしたハンターなのでその辺りは弁えてはいるが、たまに変なのがいたりもするので半脅しをやっておく。全員うなずいたところで、警備隊の斥候が戻ってきた。

「報告します、ここより街道沿いに5kmほど行ったところの森にクイーンアントを発見しました。すでに巢作りを開始している模様です」

「ちっ！速いわね、となるとすでに兵隊はいるか・・・わかったありがとう。他のチームへ応援を要請してもらる？単純に人手が足りなくなるかもしれないから」

「わかりました！御武運を！」

状況は若干悪くなっている。クイーンアント相手なら1対5で挑めればそれほど苦労しないのだが、クイーンアントの嫌なところは兵隊を生み出すところにある。無論限度はあるが、1匹1匹は通常モンスター並みでもかなりの数を生む。発見からすでに2時間ほど経っており、すでに40か50くらいは生まれているだろう。労働力の確保が必要だからだ。

急ぎ馬に乗り、出発する。そして30分程して森につくとすでに巢がある程度できあがっていた。クイーンアントは土を使って山のよくな巣を作る。まだこれでも小さいほうだが、すでに高さが4mほどあった。

「ちょっと時間がかけすぎたわ」

「サクラさん、僕はすでに射程圏内ですけど撃つていいです？」

「うん、お願い。カズイさんとリリンさんもお願ひします」

カズイとリリンが詠唱にはいると同時に、クヨウはスピッドファイアを取り出し連射する。ユニークモンスターならともかく、通常の雑魚モンスター相手なら遅れは取らない。

他の4人は見たことも無い武器と攻撃、ついでに音に驚いていた。

「へえ、良い武器ね。これなら雑魚の掃討は任せれそうね」

数匹死んだところで、クヨウ達を敵とみなし、兵隊達が向かってくる。そこをカズイとリリンの魔法で一掃する。そしてその攻撃の取りこぼしをクヨウが狙撃する。

ここは3人でもいけそうだと判断し、サクラはアインを連れて少々迂回しながら森へ入る。

そして3人は見えている範囲は駆逐したところで、森へ移動する。

「クヨウさん、Dランクって言ってたけど、結構実力あるじゃない。隠してたの？」

「いえいえ、僕の本業は道具屋ですから。ハンターはおまけ程度の事しかしてませんからDなんですよ」

「あら、そうなの？それにしても良い武器ね、何処で買ったの？私も欲しいなそれ」

「これは師匠に作ってもらった物ですから、僕ではどうにも」

「僕も・・・欲しいな」

やはり高評価なスピッドファイアである。とりあえず、今はその話を置いておき、サクラの援護へ向かう。所々で出てくる兵隊を倒しながら、かなり広い場所へでた。そこではサクラとクイーンアントが戦っており、アインは周りの兵隊を始末していた。

サクラの武器は白刀「此花咲夜」というオオヤマ国でも上位に入る刀である。刀は大まかに分けると3種類あり、『常刀』『白刀』『黒刀』がある。『常刀』は普通のバランス型であり、『白刀』は軽くて柔らかく、『黒刀』は重くて硬い。『白刀』は斬撃の鋭さを求めたものであり、柔らかいのは脆くしないためである。

サクラの一撃は速過ぎてクヨウには見えない。残像として流れるような白い軌跡が見えるくらいだった。しかし、その白い軌跡は綺麗

だった。3人は一瞬その輝きにも似た白さに見とれる。サクラはオヤマ国で一般的な『心刀流』の免許皆伝の実力を持っている。特に斬撃の鋭さは歴代でも上位にはいるといわれているくらいだ。

そのサクラはというと・・・

「しっつこいわね〜!!!」

悪態をついていた、流石にサクラが強くてクイーンアントもただではやられなかったからだ。しかし、時期終わりが来る。苦戦してもサクラはほぼ無傷、クイーンアントは致命傷をさけることしかできなかった。そして・・・

「もらった！心刀流『断』!!!」

クイーンアントの一瞬の判断ミスをつき一刀両断にする。そして真つ二つにした後その場から飛び退く。そこへクヨウ達が遠距離攻撃を一斉掃射しクイーンアントを蜂の巣にした。

「うん、みんなご苦労様〜」

「流石はサクラさんといったところですか・・・ユニークモンスターと1対1で無傷なんですね」

「何言ってるの！ここ見てよ〜擦り傷できちゃったのよ〜！乙女の肌に傷がついたんだから無傷じゃないわよ!」

本人は気にしているが、周りは気にするはずも無い。普通ならそんなものじゃ済まない。とはいえ、クイーンアントを倒し一旦情報を貰いに町へ戻ることにした。まだユニークモンスターがいるかもしれないからだ。

そしてこの騒動がこれで終わるはずもなかった。

第22話「旅行事情その7」(後書き)

つづきます……

心刀流はオオヤマ国では一番主流な剣術です。
ちなみにフドウも同じ設定です。

では、次回をお楽しみに！

第23話「旅事情その8」(前書き)

旅事情もそろそろ終盤にしようかと思えます。意外と続きましたね・・・

第23話「旅行事情その8」

第23話「旅行事情その8」

7日目しじき

クヨウ達がクイーンアントを倒しリーブラに戻ると、警備隊が斥候からの情報をまとめている最中であった。特に問題無さそうで、ギルドで一時待機するように指示されてギルドの支部へ戻る。

「そういえば、クヨウさんの武器ってどこで手に入れたんですか？」

「僕も・・・欲しいです・・・」

「ん、これは僕と師匠の合作でね、非売品なんですよ」

えくと、不満の声が上がる。しかし、あまり広めたくなかったので、そこで話を切る。

丁度ギルドの支部も見えていたので、そのまま支部の扉を開ける。

そこにいたのは・・・筋肉の塊であった・・・

クヨウは扉を開けた瞬間に硬直し、そのまま扉を閉める。

「??入らないんですか？」

「えくと、僕的にはユニークモンスターより凶悪な生物がいたんですけど・・・」

「え!?」

サクラを含む他のメンバーがそつとドアを開けるとやはり筋肉の塊が椅子の上に鎮座していた。

「……………」

3人は固まる、どうやらあの生物をみたことがなかったようだ。しかし、意外なことにサクラはその生物に向かって話しかけた。

「あれ?こんなところで何やってるの?」

「ん?あゝ!やゝと帰ってきた。遅かったじゃないサクラ」

「知り合いですか!」

「え?あゝいや、その……知り合いつていうか……ね?」

「何なのこの子達?」

状況は混乱を極める、いきなり動く筋肉の塊が現れたと思ったら、サクラと知り合いだというのだ。しかし、クヨウはあることに気がつく……それはクヨウ達にとっては思い出たくも無い出来事であったが思い出してしまったものは仕方が無かった。

「サクラさん?つかぬ事をお伺いしますが、サクラさんに姉妹っていらっしやいますか??」

クヨウは切に願う、予想が外れて欲しいと。しかし、現実はそのもいかなかった。

「クヨウさん、なんで知ってるの?まあいいか、この肉の塊は私の姉よ」

「サクラ、肉の塊とかそんなに褒めないでよ。ちょっと照れる

わ。おほん、私がサクラの姉のカグラ・イザヨイよ」

「「「え〜〜！！！！女性だったんですか〜〜！！！！？？」」

3人はそれぞれ「あれが女？どうみても男だけど・・・」「負けた・・・」「姉妹？・・・」と壁際で話し合っていた。

実際カグラの服装はジーンズにTシャツというかなりラフな格好である。しかも、顔はごつい。女性だというほうが無理である。

カグラにとっては「男らしい」とか「肉の塊」等の言葉は全て褒め言葉にしかならないので、サクラにとっては頭の痛い姉であった。

クヨウのテンションは下がる一方である。すでにトラウマになりかけていた。

「あ〜、みんな混乱してるわね〜。ところで姉さん、なんでここに？」

「そりゃ〜事件が起きそうっていうから、一応ここで待機してたのよ。その様子じゃ大丈夫そうね」

むしろあんたが起こすんじゃないのか？と心配になる周囲ではあったが、筋肉以外のことは常識的であるらしく問題ないらしい。話している内容は割りと常識人であり、他の3人も安心して話していた。クヨウはトラウマになりかけのため、ダメージが大きく復帰できていなかったが。そこへ、警備隊の斥候をしていた兵士が急ぎで入ってきた。

「大変です！新しいユニークモンスターが出現しました！急いで討伐に向かってください！」

「え〜、まだいたの〜？というか他のチームはどうしたの？みんな探し中なの？」

「いえ！すでに戦闘中です。SSランクのゲイル殿はすでに3匹仕留めています！」

「え、ちょっとまってください！今何匹見つかっているんですか？」

「すでに15匹ほどです！サクラ殿のチームが討伐した場所からも新しく3匹のユニークモンスターが見つかりました！その討伐をお願いします！」

カグラ以外絶句する。当初の予想だと4匹、もし仮に増えたとしても2、3匹であろう。それが15匹である。予想外にもほどがある。しかし、今は行動するしかなく、クヨウ達のチームは先程討伐したクイーンアントの場所まで向かう。

「あの……何故、彼……じゃなくて彼女も……その、来ているんですか？」

その声に4人が振り向き、そこにはカグラがいた。

「何？みんなに見られると恥ずかしくて筋肉が沸き立っちゃうわ」

（ ）（ ）（気色悪いわ！）（ ）（ ）と全員思うが口には出していえないかった……

くねくね恥ずかしがる物体に全員引く。が漫才をやっている場合でもない。そこからはカグラも真面目になり手伝うのだという。実際ユニークモンスター3匹相手にするのはきつかったため、サクラもOKを出す。カグラもランクこそAのハンターだが、実力はサクラほどにあるという。ただ、普段はハンターとしてあまり活動していないため、Sではないというのだ。実際カグラもSランクに興味は無い。

「姉さんもいるし、3匹ならなんとかなるかな？私が1匹、姉さんが1匹、3人で1匹の足止めをお願いね」

手堅い作戦にも見えるが、B 2人とC、Dが1人ずつでユニークモンスターを相手にするのはきつい。なので、サクラも足止めということにしたのだが、それでもきついことには代わりが無かった。

「ん〜、どうしようかな〜？」

クヨウは考える、今のままじゃ足止めもきついかもしれない。相手次第ではあるがそこは最悪の状況を考えておく。状況がよければそれに越したことは無い。想定外の事がおき、やられてしまうほうがまずいのだ。

そして、クヨウが考えているうちに森へ到着する。そこにいるのは「グランドサーペント」、「フェンリル」、「ドラゴンワーム」であった。状況はかなりまずい。この3匹はユニークモンスターのなかでも大型なタイプである。しかもスピードもある。サクラとカグラで瞬時に作戦を練る。当初の作戦でいくと、低ランクのチームがもたないのである。

「まずいわね・・・姉さんどうしようか？」

「そうね〜、あの子達だけだと無理そうか〜・・・サクラ、これでいきましょうか」

カグラの作戦は、カグラがまず囿になり、2匹と戦う。もっとも正面から戦うわけじゃなく、時間稼ぎだ。そのうちに1匹を5人で仕留めて、その次に1対3×2に以降する。いかに1匹目を早く倒すか、またどれだけカグラがねばるかにかかっていた。

「姉さんはそれでいいの？」

「当然、この筋肉が私を守ってくれるわ。だから大丈夫」

そういつて、カグラは囿になるべく3匹の方へ向かう。サクラも心配にはなるが、すぐに気持ちを切り替える。そしてクヨウがフェンリルに攻撃し、フェンリルの注意だけをこちらに向けて2手に分けさせた。

「では、がんばりましょうか」

「負けない……」

前衛2人で切りかかる、残り3人は牽制と援護を行う。サクラが急いでいるが、フェンリルも素早くなかなか決着はつかない。サクラはかなり焦っている。自分がなんとかしないと姉が危ないのだ。焦らない理由がなかった。

一方カグラも苦戦を強いられていた。グラントサーペントの素早い攻撃と、ドラゴンワームの特攻にも似たタツクル。どちらもまとものに1撃貰えばかなり危ない。しかも、連携しているらしく、体力の消費が激しかった。今はまだ大丈夫だが、長期戦は不可能である。そして状況は更に悪化する。「ヴァンパイアハウンド」と呼ばれるユニークモンスターが突如現れたのだ。大きさは3mほどで、他の3匹よりは小さい。しかし、血を飲むと巨大化し、凶暴化するという性質を持つ。

これで4匹。しかも「ヴァンパイアハウンド」は後ろからきた。つまり囲まれている状況である。もはや、猶予はない。

「僕がいく！少しの間援護頼む！」

「ちよつとまちなさい！貴方一人じゃ無理よ！……あゝもう！知らないわよ！」

クヨウはリリンに援護をさせてヴァンパイアハウンドの方へ向かう。そしてヴァンパイアハウンドの注意を向けるために銃を連射する。そのまま森の奥へ入り木を使いながらヴァンパイアハウンドの攻撃をかわす。

「くく、かなりの想定外だ……でもやるしかない！」

ヴァンパイアハウンドは爪を使い木々をなぎ倒しつつクヨウを追いかける。援護の攻撃に注意を向けようともしるがその度にクヨウから銃撃を食らうため、完全に狙いをクヨウに絞った。

クヨウの手持ちはスピッドファイアと魔力爆弾1個。あとは補助魔法具のみ。手段としては少なすぎるが、手も足もでないわけでもなかった

「はああああ〜！」

ドン！ドン！ドン！

狙うは目や鼻などの急所。別に当たらなくてもいい。相手がひるめばいいのだ、そしてその際に移動する。冷静にと自分に言い聞かせる。クヨウがやるべきことは、ヴァンパイアハウンドの足止め、出来れば討伐がベストだが、かなり難しい。ならば、相手との距離を保ちつつ、牽制で時間を稼ぐ。これが最善であった。

ドン！ドン！ドン！

しかし、ヴァンパイアハウンドも知能がある。ワンパターンは効かないし、させてくれなかった。時間がたちヴァンパイアハウンドがついに銃を見切り、攻撃をかわした。それはクヨウにとって絶体

絶命の危機であった。

「ガアアアアアアア！！！！」

ヴァンパイアハウンドが噛み付いてくる。クヨウはなんとか避けるが、その瞬間を狙って頭突きでクヨウを吹っ飛ばす。

「があっ！」

クヨウは吹っ飛び、木に背中から激突する。一瞬意識が飛びそうになるが、なんとかこらえる。

「ぐっ！なんとか・・・」

ヴァンパイアハウンドはこれを好機とみて全力で迫ってくる、そして全速で高く飛び上がり噛み付いてくる。クヨウは飛び上がったことに反応が遅れ、スピッドファイアを構えれなかった。

口を開け迫るヴァンパイアハウンドに対し、クヨウは魔力爆弾のガラス玉を投げつける。ガラス玉は握りこぶし程度の大きさである。ヴァンパイアハウンドは気にもせずそのまま突っ込んでくる。

クヨウはスピッドファイアのシリンドーを回転させ、ミスリルの薬莢をセツトする。

そして魔力を込めながら詠唱をする。

『我・汝を・捻り・穿つ者』

スピッドファイアが急激に魔力を吸い込み充填する。そして、放つ。

『貫け・ジャイロブレイク！』

放たれた砲撃は白い回転レーザーの様だった。ヴァンパイアハウンドの口を抉り、貫通する。そして、先程投げた魔力爆弾を爆発させて、頭を完全に吹っ飛ばした。そのまま横に逸れていき、クヨウの横に落ちる。

「はあはあはあ……やったかな」

「人間やればできるもんだな」と一人呟き立ち上がる。

「いつつ……あたたたたあ」

どうも背中を痛めた上に、アバラも1本か2本折れたらしい。しかし、そのくらいで済んだならいいかとクヨウは思う。実際死んでもおかしくはない状況だ。生きているだけでも御の字だった。

アバラを抱えて、木に寄りかかりながらなんとか先程の場所へ戻る。そこには驚愕の光景があった。

「うおらああああああああ————！！！！！！！！どっせ〜
~~~~~い~~~~！！！！！！」

筋肉の塊が数mはあるドラゴンワームを吹っ飛ばしていた、素手で……

「はっ」

思わぬ事態に目が点になるクヨウ。横をみるとサクラもグランドサーペントを4分割にしたところであった。あまりの光景に呆然としていると他のメンバーがクヨウに気付き駆け寄ってきた。

「クヨウさん無事だった！？大丈夫怪我は・・・アバラね、ちょっと待って」

「よく、ああのヴァンパイアハウンドに・・・あの、勝てましたね」「え？あ、うんなんとか・・・ね」

リリンがほつとした表情で回復魔法をかける。少しすると大分痛みが和らいできた。そこへサクラが駆け寄ってくる。

「クヨウさん！無事！？」

「あゝサクラさん。ええ、まあなんとかまりました」

「あゝじゃないわももうゝ、結構心配したのよ」

「ところで・・・あれは・・・」

サクラの説教を回避するために、話をそらす。サクラの後方ではドラゴンワームが宙を舞っていた。そして・・・

『沸き上がれ筋肉！！！！轟け筋肉！！！！マッスルジャイアントブロー！！！！！！』

妙な詠唱と共に、カグラの右腕が直径2mほどに膨らみ、そのまま宙を舞っていたドラゴンワームを殴りつけた。殴られたドラゴンワームは碎け散った・・・

「は？碎け散った？？？」

「あゝ、姉さんのあれはねゝ・・・ギャグなのよ。最初はギャグだったのよ」

カグラは最初、魔法で筋肉を膨らませていただけであった。しかしそれだけでは面白みが無いとナツクルブローとして活用した。そしてそのまま有効活用していき、しまいには筋肉を高速振動させて、殴ったものが四散するようになってしまったのだと・・・  
元々のアイデアはサクラが100%冗談で言ったのだが、現実  
に凶悪な威力をもったというなんとも、笑えない話であった。

サクラ曰く、「あの攻撃をまともに受ければドラゴンも四散するでしょうね」

それを聞き、アレはやっぱり化け物だ、と思うクヨウだった。

## 第23話「旅行事情その8」（後書き）

ギャグってある意味最高のチートですよね？

カグラの攻撃は、「ワンピース」のルフィが使うギガントピストルっぽい技だと思ってください。

ここでミスリルの薬莢の説明をしようと思います。

ミスリルの薬莢は普通の薬莢より遥かに魔力が込められます。中級魔法くらいですね。で、それプラス詠唱を行うことで上級魔法並みの威力にするということですよ。

リスクは「詠唱が必要」「1日4発しか撃てない」「移動中に発射不可能」といったところですよ。

結果回転レーザーのような感じになるということです。ちなみに直径500mmくらいのレーザー砲を想像してください。あんな感じですよ。

では、次回をお楽しみに。

第24話「旅行事情その9」(前書き)

意外とかかっけてしまいました。

仕事が忙しいと小説も案は練れてもかけませんね。

## 第24話「旅行事情その9」

第24話「旅行事情その9」

8日目

昨日起こった謎のユニークモンスター多発事件の詳細は、まだわかっていない。結局発見されたユニークモンスターは全部で30体おり、すべてギルドのハンターが討伐した。初期のメンバーだけでは足りず、追加で複数のハンターが協力し、1人の死者もださずに終わった。

クヨウ達も少なからず傷を負っており、重傷者はいないが、あまり無理できない状態ではある。次の日は大人しく宿で養生することになった

「いや、一時はどうなることかと思っただが、全員無事で何よりだな」

「そうですね、あの状況下で大怪我がなかったですからね」

「僕は死にかけたけどね・・・」

いくら養生するにしても、流石に動けないわけではないので、男性側の部屋に集まって4人でお茶を飲んでいた。筋肉痛が酷くて、外出するなれなかったらしい。

「クヨウさんも、よく1人でユニークモンスターを倒しましたよね。ヴァンパイアハウンドでしたっけ？」

「僕だっであんなことは2度とごめんだよ。バンガードさんが気を

使ってミスリルの薬莢を用意してくれなかったら倒せなかったよ」

「あゝ、バンガードさんにそんなの頼んでたのか」

「なるほどゝ、ミスリルならゝ込められる魔力はゝ鉄とは段違いゝですからねゝ」

お茶を飲みつつレナリンスは感心する。来るときに問題になったことが解決したのでほっとしたようだった。そのあとはどんなモンスターにあつて、どんな倒し方をしたということを皆で話していた。その時、『コンコン』とドアがノックされる。クヨウが「どうぞ」と声をかけると入ってきたのはサクラであった。

「おはようゝ、みんな元気してるゝ?」

「朝から元気ですねゝ、こっちはみんな筋肉痛で元気があまりないですよゝ」

「あゝ、まああんなのと戦ったらそうなるわよねゝ」

普段あまり戦わない人間がユニークモンスターと戦うなどと、普通ではあり得ないことをしたのだ。しかも、1匹ではなく複数である。体に異常がでないほうがおかしいくらいだ。

「サクラさんは流石ですよゝ、常に前線に出てたのに、もう回復してるなんて」

「あははゝ、まあ師匠のシゴキのほうがきつかったから・・・」

元気な姿が一変して哀愁を漂わせ始めた。どうも師匠関連の話題は禁句らしい。サクラが遠い目をして外を見つめていた。そのままにしておくのもアレだったので、話題を変える。

「んで、サクラちゃんは今日は何の用事?一緒に大会見学に回るのか?俺としては2人でいきたいところなんだけどなゝ」

「安心していいよレンヤ。それはまずないから」

「あはは、今日の用事はちょっと違つてね、バンガードさんがクヨウさんと話がしたいって」

「バンガードさんが？」

「昨日話をしたばかりではあつたが、おそらく商業連合に関係してのことだろうと予想する。流石にサクラも要件は知らないが、バンガードから連れて来るように頼まれていた。」

「という訳で、クヨウさんは連行していきます。皆さんはどうします？皆さんに関しては特に何も言われてませんが・・・」

「そうですね、どうしましょう？」

「俺はパスしておこうか、呼ばれてないならいく必用もないし、込み入った内容だと気を使わせるから・・・な・・・それだとクヨウとサクラちゃんが2人きりになってしまふ！？それはまずい！サクラちゃん俺とデー、ゴバツ！！」

いきなり暴走しだすレンヤに見事なアツパーカットを決めたミア。そして倒れたレンヤの顔をレナリンスは踏みつけていた。

「何を変なこと言ってくるんですか、まったく。」

「踏み踏み、ん、良い感触ですね、癖になりそうです、踏み踏み」

「痛い、痛いってば、あ・・・いい・・・じゃなくて！変なのに目覚めちゃうからやめて〜」

「クヨウさんたちは行っていいですよ、少しレンヤさんにはオシオキが必要ですね」

まだ暴走しそうではあつたが、レンヤのことはミアとレナリンスに任せて、クヨウはサクラと共にバンガードの屋敷へ向かうことに



なった。

「クヨウさん、昨日はありがとうございました」

「ん？それはこっちの台詞ですよ。昨日はサクラさんに負担をかけてしまったからね。正直男の子としてはどうかな」という感じですから」

「あははは、それは実力差つてところですよ。私も一応Sランクですからね。クヨウさんはDランクですランク的にもそれが自然でしょう。でも、昨日それができなかった。姉さんに困らなってもらったのね・・・クヨウさんが戻ってきた時にはほっとしたけど、同時に自分の不甲斐なさを実感しちゃってね・・・」

「それで自信喪失中ですか・・・あの状況下では仕方が無かったことだ、とは言っても納得しそうに無いですね・・・どちらかと言えば、僕のほうが間違えている気がしますけど」

「でも、私をもっと強ければ・・・せめてあのときもうちよつと冷静にしていれば・・・」

「多分、あまり変わらなかつたでしょうね。サクラさんは少し気負いすぎですね」

「そう・・・なのかな？」

「ええ、まあSランクだからというプライドも少しはあるんですけど。あのチームのメンバーは全員サクラさんが頑張っているのは見ていますよ。それに人間はどんなに頑張ってもできることと、できないことがあるんですよ。それは強くなるのが弱くなるのが同じことです。あの時、サクラさんは最善を尽くしていた、それを否定する人間はいません。そして、サクラさんが1人でできなかったことを他のメンバーと協力して成し遂げた・・・それだけです。だから気にしなくていいんですよ」

「それでいいのかな？」

「それでいいんです」

2人はそのまま無言で歩く。サクラにはしばらく考えることが必要だろうと思い、クヨウも話しかけなかった。そのまま屋敷の入り口まで到着した。

「うん！ここは切り替えなきゃね。じゃあ、クヨウさんはちょっと待っててくださいね」

そういつてサクラは屋敷の中へ入っていった。心なしかさっきより明るい表情ではあった。そのまま待っていると、中へ案内され、バングードのいる部屋へ通された。相変わらず顔が輝いていた……

「おはようございます、そして昨日はお疲れ様です。クヨウさんはなかなか活躍されたそうですね」

「おはようございます、もうそんな話がいつてるんですか？」

「それはある意味当然ですね。ドラックハンターが1人でユニークモンスターを倒したとなれば話題性は十分ですからな。もっとも、限られた人間の間で……という条件付ではありますがね」

昨日の出来事はあくまで秘匿事項だ。大会が終わって落ち着いた頃に公表する予定ではいたが、余計な混乱を生まないよう、現時点ではまだ秘匿事項である。

「それでお話というのは？」

「ええ、実は昨日のことなのですが。クヨウさんは昨日のことをどう思われていますか？」

「作為的である、とは思いましたが……流石に何故そうなったのかはわかりませんね」

「私も今回の騒ぎも実は商業連合の仕業の可能性があると見ています」

「え???」

クヨウは疑問に思う。何故ここで商業連合が出てくるのかと。今回の騒ぎは全てモンスターがらみだ、ユニークモンスターを倒せる人間がいても、従える人間などいない。ゆえに、商業連合が絡んでくるとはとても思えなかったのだ。

「突拍子も無いとお思いになるかもしれませんが、あくまで可能性という範囲内でお聞きください」

エルミールグループが手に入れた情報では、どこぞの研究所と商業連合が繋がっているとのことであった。その研究所の研究内容が『瘴気とモンスター』についてであるらしかった。今回はその実験だったのではないか？という見解である。

「つまり、人工的にユニークモンスターを生み出すことに成功した・・・と。そんなことが可能なんですかね？」

「正直それが一番可能性が高いと思っています。実際現場に瘴気の噴出場所がありませんでした。まあ確証がないのも事実ですので、あくまで可能性という話になりますけどね」

「一体何がしたいのかわからないですよね、いつその事魔王と手を組むとか？」

「はははは、流石にそれはないでしょうね」

元々商業連合が出てくるのも可能性という話なのに、魔王がでてくる理由もなかった。ただ1つわかっていることは、今回の事件は明らかに人為的であるということである。

とはいえ、人為的ではあるが誰がやったという証拠も確証も無い。すべて状況からの推測である。

「まあ、今考えられるのはそんなところでしょうな。ところでクヨ

ウさん、近いうちにそちらへスカウトがいくかもしれません」

「スカウト？グループへの参入はお断りしたはずですよ？」

「いえいえ、私どものではなく・・・」

「あゝ、ということはコレがばれましたか？」

クヨウがいう「コレ」とはスピードファイアのことである。少ない魔力で当たり所次第では殺傷力も高くなる。意外と物騒な物であった。商業連合の目に付けばおそらく勧誘してくるという話があったが、思ったより早くなる。一緒のチームになったハンターから漏れたのである。もしかするとユニークモンスターも倒せるかもしれないと思わせた可能性もある。なにしろ、Dランクのクヨウがユニークモンスターを1人で倒したのだ、常識で考えられない。格下が格上を倒すには反則するしかないのです、正体不明の武器を使っているというのであればそれに結びつけるというのは、想像するに難しくは無い。

「おそらく、ハンターとしてのクヨウさんを勧誘しに行くでしょうな。前は普通のお店ということで勧誘しているので」

「すごく屁理屈ですよゝゝ、でもそれできそうですねゝゝ」

どの道100%面倒になる。となれば、とっとと戻ったほうがいいかもしれない。店にいれば、ある程度勧誘活動も遠のくであろう。最悪営業妨害でギルドへ訴えることもできる。

「さっさと帰るのが得策かな。明日ラングランへ戻りましょう。どのみちあと2、3日しかいられませんでしたし、まあいいでしょう」  
「それが懸命でしょうな。明日は護衛を1人つけましょう、何かあっても困りますしね」

「いえいえ、そこまでしてもらわなければならないよ。みんないますし」

「それはこちらのお節介ということ、それに本人も乗っってくれるでしょうから」

はっはっはと笑うバンガードに、不思議に思うクヨウであった。そのあと昼食をとって屋敷をあとにする。丁度サクラとフドウも大会を見に行くということだったので途中まで一緒にいくことになった。

「そうか、クヨウ殿達は明日帰るか。もうすこし話をしていたがったが、残念だな」

「まあでも、1泊するだけでも結構かかるもんね。しかも厄介事もあるし・・・」

「そういえば、バンガードさんが護衛を1人つけるようなことも言っていました、誰だったんだらう？御二人のうちどちらかだったりします？」

「ん？バンガード殿が？そのような話は聞いていないが、まああるかもしれない」

「バンガードさんも急な話が結構多いもんね。・・・そっか護衛か・・・」

フムフムと1人納得するサクラを不思議に思う2人だった。クヨウが部屋に戻ると案の定だれもいなかった。流石に暇つぶしがなかったのである、若干あれた部屋に書置きが残っていた。

「え」と『旅に出ます、探さないでください by レンヤ』・・・  
「って一体なにがあったの!？」

若干混乱したが、ただのギャグであろう、裏に普通のメッセージが書かれていた。

「何何？『暇なので先に行ってますね、もし速めに帰ってきてたら  
-----』……ここでレンヤの妨  
害かな？……『帰ってきてたら』の続きが気になるんだけどなあ  
」

とりあえず、クヨウもどこかに出かけようと外に出る。外にはサク  
ラが待っていた。

「あれ？どうしたんですか？」

「多分みんなないだろうから、クヨウさんとどこかの見学にでも  
いこうかな？ってね。嫌だったかな？」

「ううん、大丈夫だよ。じゃあどこいこうか？適当にぶらつくつも  
りだったから決めてないんだよね」

「じゃあ、どつか面白そうな競技でも探しましょう」

2人はそのまま町をぶらつき始める。会場は町の各地にあり、遠い  
ところもあるので、案内板のところへ行くことにする。

「クヨウさんって強さを求めたりってことはしないんですか？」

「ん？凡人の僕にはそれは似合わなさそうだね。なんでまたそ  
んな質問を？」

「実際アレを倒してるからね、やろうと思えばSランクにもなれる  
んじゃないかな？と思ったの」

「なるほどね、でも僕は基本的に『創る人』だからね。『戦う人』  
じゃないから特に強さには思い入れはないかな。あ、でも最低限  
身を守る程度の強さは欲しいね」

「そっか」

何故そんなことを聞き出したのかわからないが、ご期待には添え

なかったとクヨウは感じた。とはいえ、嘘をつくつもりもないので仕方が無いことではあった。

「まだ、昨日のことを気にしてるんですか？」

「かもしれないね、すつきりしないのよね」

「今はまだ答えが出ないのかもしれないね」

「???どうゆうことですか？」

「物事はそれにてきした機というものがあるんですよ。機が熟さないと知ることではできても本当の意味で理解はできない、ということです。ま、これは師匠の受け売りですけどね」

「機……か……」

「そう難しく考えないほうがいいと思いますよ、早い話そのうちわかるってことです」

「ふふふ、そうゆうことね。ありがとう、少しすつきりした」

「それは何よりです」

このあと2人は適当な会場に入り、適当に町を散策してから帰っていった。

第24話「旅行事情その9」（後書き）

伏線をたくさん立ててきましたが、ちゃんと回収できるかもものすごく不安だったりします。とはいえ、旅行事情も次で終わりの予定  
です。

では、次回をお楽しみに



第25話「旅事情その10」（前書き）

今回は若干短いです。

旅事情も今回がラストです。いやあ、長かった・・・

もうちょっと計画的に進めねば、と思う今日の頃です。

## 第25話「旅行事情その10」

第25話「旅行事情その10」

9日目

「荷物は大丈夫？忘れ物はないね？」

「お前は母親か！」

朝早くからクヨウ達は荷物整理をしていた。今日からラングランへ戻るからである。

昨晚、クヨウはレンヤ達と合流した際に事情を説明した。そして急な話ではあるが、次の日にラングランへ帰るということである。レンヤ達はもう1日2日くらいはいたかったみたいだが、面倒ことが起きるかもしれないということで納得させた。

「おはようございます、もう準備できましたよ」

「おはよ、そっちはもう準備できたの？」

「はい、元々片付けてありましたから」

準備完了後、朝食をとってから、バンガードのところへ挨拶に行く。護衛をつける話もあったので、それを断るためでもあった。

「すみませ、バンガードさんはご在宅でしょうか？」

バンガードの屋敷から出てきたのはバンガード本人であった。

「おはようございます、皆さん」

「おはようございます、バンガードさん。バンガードさん本人が出

てくるとは思いませんでしたよ」

「そこまで長話をする予定でもないでしょうから、軽いお見送りをするためにですよ。それと護衛は彼女に頼むことになりました」

「え？」

続いて出てきたのはサクラであった。しっかりと旅支度をしており、クヨウは一瞬誰かわからなかった。

「おはようございます、皆さん。護衛を勤めさせていただきます、サクラ・イザヨイです。よろしく願います」

「サクラさん？あ、いや・・・バンガードさんそこまでご迷惑をおかけするわけには・・・」

「いえいえ、サクラ殿も丁度用事でラングランへ向かうとのことでしたので、そのついでということでお願いしたのですよ。なので、迷惑と思わないでいただきたいですな」

「それとも、クヨウさんには迷惑でしたか？」

若干不安そうなサクラではあったが、レンヤが大喜びで了承していた。クヨウもそこまで言われたら断れないなあ〜と思い、ラングランへ行く用事のついでなら・・・ということでした。ミアとレナリンスも軽いノリで了承していた。

「では、皆さん良い旅をお祈りしております」

「ありがとうございます。バンガードさんもお元気で」

こうして、色々・・・色々な意味でいろいろあったガチンコ連合国中心都市リーブラをあとにした。

「そつえば、サクラさんの用事ってどんなことなんですか？」

「え？私の用事ですか？」

全員興味津々だったらいい。全員うなずく。サクラは若干困ったような感じで答える。

「そうですね、例えていうならお勉強ってところですね。細かい内容は秘密です」

「勉強？学園にでも用事があるのか？」

「レンヤ……例えて言うてるからそのままの言葉でとらえても意味がないよ」

「む、そりゃそうか」

クヨウとレンヤは悩ましげに頭をかしげる。しかし、ミリアとレナリンスは検討がついているみたいであった。

「クヨウさん、ちょっととサクラさんをお借りしますね」

「クヨウさんとレンヤさんは移動に集中してください」

「え？あ、ちよつと2人とも??？」

そういうと、レナリンスは小さい防音結界を作り、その中へ慌てるサクラを連行する。そしてミリアとレナリンスがサクラを詰問……尋問？していた。

残された男2名は仕方が無いので馬車を進ませつつ、雑談をすることにした。

「ん、まあ仕方が無いかな、後ろは放っておいて、のんびり行きますか」

「ま、そうだな。気にしても仕方が無いし、変なことしたら女性3人にボコボコにされそうだ」

なんだかんだいって、女性陣には勝てない2人であった。しばらく普通の話をしてからレンヤが急に真面目な雰囲気話出した。

「なあクヨウ、俺「いいよ」っておい！俺はまだ何も話してないぞ！」

「どうせ『旅に出る』って感じの話でしょう？レンヤの考えていることはお見通しだよ」

「なんだ、バレバレだったのか」

「レンヤは単純だからね」。にしても随分決断が遅かったね、もっと早く旅にできると思ってたのに」

「そりゃ簡単だ、異次元バックの完成を待ってたんだよ。これがないときついだらう？」

「一応そついうことにはしておいてあげようか」

随分軽いノリだったが、レンヤが旅に出ることが決定した。とはいっても一度ラングランへ戻って準備してからになる。そうこうしているうちに女性陣のところの結界が解除された。みんなの顔が若干赤いのは気のせいではないだろう。

「なんで結界なんて張ってたの？」

「内緒話を聞かれたくないからですよ」

「何もこんなところでしなくてもなあ？」

「え〜とですね〜、それは〜早急に〜聞かなければならないことが〜できたからですよ〜」

「へ〜、でそれは？」

「内緒です、わざわざ結界張って話してたのに、ここで話したら意味ないじゃないですか」

「まあ、そりゃそうだわな」

そんなこんなで、あっという間にラングランへ到着。特に何も起こ

らず（何か起きても困る）のんびり旅で終わる。そしてサクラは一度ギルドへ行くそうで一旦別れる。夕食は一緒に食べる約束をしているので、後で合流予定。そして、道具屋リユミエールの店内へ入る。ミリアとレナリンスは一旦荷物を持って帰宅。2人もあとで合流予定。

「ん〜ただいま〜と、2週間も空けると流石に埃がたまるなあ〜。明日は掃除だ」

「いやあ〜久々の我が家って感じだな。掃除は確かに明日だな。もう飯作るう、夕方になる」

「サクラさんも来るから鍋にでもしようか、食材余ってるやつ全部使っちゃえ〜」

「オーライ。んじゃ、ちゃっちゃと準備するか〜」

2人で料理の準備をしていると、ミリア、レナリンス、サクラの3人がやってきて、そのまま食事になった。

「~~~~~かんぱい~~~~~」

「いや〜、今回の旅は色々あったね〜。何度か死に掛けたし・・・」

「そうですね、でも楽しかったですよ。また皆でどこかにいければいいですね」

「今度は〜、安全な〜旅がしたいですねえ〜」

ユニークモンスターに襲われたり、見学で精神的に死に掛けたりと盛り沢山であったのはいうまでもない。通常ならそんなことは無いのだが、こればかりは不幸というしかない。そのまましばらく食事を楽しみ、終わりがけた頃だった。

「みんな、聞いてくれるかな？実は俺、今度旅に出ようと思うんだ」  
「レンヤさんは〜、まだまだ〜楽しみたかったんですか〜？」

「あ、いや、そうじゃなくてな・・・ハンターとして、各地を回ろうと思ってるんだ」

今回の旅でレンヤは自分の力の無さを思い知った。元々實力はあるのだが、経験不足が響いたのだ。

「へ、もう何時頃行くかは決めてるんですか？」

「一週間後だな。準備は何もしてないからさ」

「そうですね、レンヤさんは元々身体能力が凄いので旅をして経験を積みSランクにもなれますよ」

「サクラちゃんに保障されるとは心強いね。まあ、元々ハンターはそんなもんらしいけどなあ」

ハンターは各地を放浪するのはよくあることだ。元々各地を転々としているハンターが多い、一箇所に留まるのは何か事情がある人しかいないからだ。ここにいるサクラも修行の一環で旅をしていたのだ、経験を積んでどこかに留まる可能性もあるし、放浪し続ける場合もある。勿論故郷に戻るかもしれない。レンヤも無制限で各地を放浪し、實力をつけるつもりである。

「ああそうだ、クヨウさん。お願い事があるんですけどいいですか？」

「ん？僕に？えと、できる範囲でならいいですよ」

「ふふふ。大丈夫ですよ、そんなに難しいことではないと思いますから」

「ミリアさんも知ってるんだ。まあいいか、それでお願い事とは？」

「実は、道具屋リユミエールに私を雇ってくださいませんか？」

「へ？」

「なにいいいいいいいいいいいいいい……!!!!!!」

このとき、レンヤが旅に出るのを辞めようか本気で悩んだという。  
旅から帰ってきて、まだまだドタバタしそうな道具屋リユミエ  
ルだった。



第25話「旅行事情その10」（後書き）

サクラの参戦決定。元々モブキャラで終わる予定だったんですけどね……

この辺は、完全にノリでした。

今後は当分はゆったりいきたいと思います。

では、次回をお楽しみに！

第26話「新しい日常」(前書き)

キャラが一部入れ替わって、再スタートといったところでしょうか。

今後はもちよっと他の種族のキャラを出していきたいですね。

## 第26話「新しい日常」

第26話「新しい日常」

クヨウ達がラングランに帰ってきてから数日後、レンヤが旅立つ日になった。必用最低限の荷物を異次元バッグに詰め込み、バンガードさんに作ってもらったミスリル製の手甲を装備している。

「じゃあな、皆元気で」

「気をつけてな。生きて帰ってこいよ」

「レンヤさん、これを」

サクラがレンヤに手紙を渡す。それは紹介状である。もしオオヤマ国に行くことがあれば、それを見せれば少なくとも不振人物扱いはされないとのことであった。

「サンキュー、できればラブレターのほうがよかったんだけどな」

「じゃあ、紹介状は破棄しますか？」

「いやいや、冗談冗談。ありがたく貰っておくよ。それじゃあ、いつてきますー!」

「「「「いつてらっしやい」」」」

軽い挨拶のあと、レンヤは旅立っていった。少々騒がしいレンヤがいなくなったが、かわりにサクラが入ったので楽しくはありそうである。

帰ってきた当日、サクラはリュミエールで雇って欲しいとお願いをしてきた。ミアアとレナリンスは元々知っていたので驚かなかつたがクヨウとレンヤは驚いていた。元々の用事というのがこれであつ

ただ。しかも、ギルドとバンガードからの紹介状つきである。断るほうが無理な話だ。もつとも、クヨウは断る気はなかったが。住居はミリアと一緒に住むことになった。サクラは最初、住み込みでもいいと思っただけだが、流石にそこはミリアとレナリンスに止められた。ほとんど同棲になるので、流石にそれはどうかというものだ。もつともサクラは気にしてなかったが、その辺の常識には疎いだけであった。

実際、ミリアの説明を理解しきると顔を真っ赤にしていた。ただ、ぶつぶつと「それはそれでも・・・」となにやらつぶやいていたらしいが、詳しいことはわからない。

それと、クヨウとレンヤの秘密（異世界の出身やら、能力やら）はその日のうちに話した。すでにミリアとレナリンスにも話してあるし、身内になるなら隠すつもりもなかったからだ。

サクラを雇う準備とレンヤの旅準備で若干慌しくあったが、無事完了し、今日を迎えたのだった。

「さーて、今日も1日ががんばりましょうか」

「そうですね、やっと服も届いたし、やっと私もちゃんと店番できますから」

「僕が教えることはもうないから、ミリアさんとリンスちゃんにあとお願ひしていいかな？」

「大丈夫ですよ、サクラさんはしっかりしてますから」

「僕は奥で魔法具作ってるね。今日もしかしたら、カレーさんが来るかもしれないから、来たら教えてもらっていいかな？」

「もしかして、あのバッグの商品化ですか？」

「うん、術式も完全になつたし。安定して売り出せれるからね」

あのバッグというのは、旅に出る直前に完成した「異次元バッグ」のことであった。見た目が中型サイズでありながら、異次元空間に接続することにより2m四方の空間を扱える便利アイテムである。

そのうち小型化や空間の増大を考えているが、まだ作るつもりはなかった。

「それじゃあ、よろしく」

そういうとクヨウは奥へ入っていった。残された3人は仕事内容を確認、分担しつつ雑談をしているのであった。

「あのバッグはすごいよね、重さも関係ないし。本当にクヨウさんの能力って反則モノね」

「そういえば、クヨウさんが「こんなのがあったらいいな」ってアイデアがあったら、何でもいってね、と行ってましたね」

「いいね、それ。今度何か作ってもらおう」と

「そういえば、私たちも何か作ってもらおう予定だったね。旅の途中だったからすっかり忘れてたけど」

「私は覚えてましたよ。まだいいアイデアがありませんけど」

女性が3人もいれば話題は尽きることがないらしい、お客がくるまで雑談がとまることはなかった。

「おはようございます、店長さんいますか？」

「「「いらつしやいます」」」

「おや、新しい人を雇ったんですね。美人さんが多いなあこの店は来るのが楽しみになっちゃいますよ」

「店長ですね、今呼んで来ます」

「カリイさんですね、初めましてサクラ・イザヨイといいます。今後ともよろしく願いますね」

「カリイ・マルゼフです。こちらこそよろしく願います。これだと新しい従業員はもう増えそうにないですね」

カリイが聞いた所でも、リュミエールの求人がないか調べる人は結構いるらしかつた。給料もいいし、従業員用の服装に人気があるらしい。サクラは内心「ラッキーだったなあ」と思うのだった。

「3人で、十分楽できますからね。これ以上増えても意味ないですし」

「おはようございます、カレーさん。わざわざすみません」

「いえいえ、クヨウさんのおかげで最近は新商品が沢山出回るようになったので私も楽できますから。それと、私はカリイです」

「まあ、いいじゃないですか。それで今回の新商品なんですけど……」

そこから異次元バッグを取り出し、話を進める。説明を聞いているカリイにとっては驚きの連続であった。3人の女性陣はそれを面白おかしく見学していた。

「ポーシヨンの時もそうでしたが、よく思いつきましたね。というか良く作りましたね」

「たまたまというか、偶然できちゃったものでね、あははは」

「これも確実に売れますね……というか旅人には必需品じゃないですか？これ」

「この間の旅で実際に使いましたが、このバッグのありなしで、手間が相当変わりますね」

「下世話な話になりますけど……一体いくら儲ける気ですか？」

すでに、ポーシヨンの売り上げだけでもかなりの贅沢はできる額になっていた。その上、このバッグである。カリイが気になったのも無理はなかった。

「僕としてはそれなりに儲ければいいかな？くらいだったんですけどね」

「もう既にそれなりじゃないですから。そういえば、この店では魔法具は売らないんですか？」

「小さい物を少々売るだけですよ、大きいものは置くのも売るのも大変ですから」

「ちょっとした、アクセサリーくらいですか。クヨウさんならそのうち『アーティファクト』くらいのもを作っちゃいそうですね」「流石にそこまでは無理ですよ」

『アーティファクト』とは魔法具の最上級版のようなものである。一般に神が創ったとされており、数こそ少ないが、威力や効果は一般の魔法具の遙かに上である。今でもたまに、どこかの遺跡から発掘されることはあるが、『アーティファクト』を作ったという話は聞いたことがない。そんなレベルの話である。もっともクヨウの能力が最大限に発揮されれば不可能ではないが、今はまだ無理であった。

異次元バッグの説明が終わり、カリイは大急ぎで帰っていった。異次元バッグを速く広めたかったかららしい。

「クヨウさん？？実際、今どのくらい稼いでいるんですか？」

「リンスちゃん？？どうしたの一体？」

「やっぱり気になるじゃないですか？何かあればクヨウさんに奢ってもらおうとかは考えてないですよ？」

「ミリアちゃんはどうして最後疑問系になるのか問い詰めたところだね。まあいいか、えと1週間平均で大体このくらいだよ」

クヨウが金額を見せると、3人は固まる。普通の店の売り上げ1年

分くらいあるのだ。驚かないほうが無理な話である。もつとも、ポーションに至っては大陸中の店で売られており、大量生産でかなりの数が毎日売られていけば、5%の収入でもこれだけの額になるのだ。まさに塵も積もれば山となるであった。

「給料アップしてほしいくらいだね。私たちの仕事にはあまり関係ないから無理でしょうけど。そういえば、さつきリンスちゃんに聞いたんだけど、何かアイデアがあれば言って欲しいって。それって例えば私たちにとつても臨時収入になるの??」

「あ、私もそれは気になってた。どうなんですか、実際」

「あの3人とも??おどけている様に見せて目が真剣ですよ?ええとですね、一応特許商品になってもならなくても、利益の半分はあげますよ」

「「「ほんと!?!」」」

「おお!凄いいついできた」

3人の勢いが凄まじく、流石のクヨウも若干引いた、もつともポーションの売り上げを聞いた後だとそうなつてもおかしくはない。しかし、あれほど売れるものは稀であるので、そこまではいかないが、アイデア出すだけでもそれなりの収入が得られるのならそれに越したことはない。ちなみに、3人が定期的にアイデアを考える集会を開くようになったのは別の話である。

「あ、そうだ。クヨウさん?ミリアちゃんとリンスちゃんに何か作ってあげる約束してるんですよ?私にも何か作ってもらえたりしますか?」

サクラがおねだりのような、脅迫のような雰囲気でお願いだした。雰囲気にもまれてクヨウも思わず了解してしまう。結局、アイデアがないので後日になるが、サクラとしては嬉しかったらしい。素直



に喜んでいた。そして、昼過ぎとなり、クヨウも店にでていた。今は新しい魔法具のアイデアがなかったらしい。

「クヨウさん、次はどんなのを作る予定なんですか？」

「ん、まだ何も考えてないよ。とりあえず、作るだけ作っちゃったしね」

「前から思ってたんですけど、ポーションの上位版みたいのは作らないんですか？」

「あ、作るうかとも思ってたんだけどね。でも考えてみると、それって結構リスク高くてね」

ポーションは傷を瞬時に治す薬である。回復量こそ少ないが回復時間はかなり短縮されている。その上位版、ゲームでいう「ハイポーション」にあたるものだが、クヨウはあまり作るつもりはなかった。理由はリスクが高いからだ。

瞬時に大量の傷を治す。それは同時に体にかかる負担も大きくなるということだ。ポーションの様に少しなら問題はないだろうが、大きい傷を瞬時に治すとなると負担が大きすぎる可能性がある。下手に体に負荷をかけて、体を壊すような真似になれば本末転倒になりえる。それにもし傷口に異物があったり毒が残るようなことになれば、それも問題になる。ゲームのようにHPが回復する程度ですめばいいが、そんな都合よくいかないのが現実である。

「あ、確かにそれはあるわね。回復魔法のやりすぎは体に良くないって聞くから、それと同じだ」

「どうやって作るかも考えてないから、作れるかどうかもわからないんだけどね」

「あ、なるほど、私も少し考えていたんですけど。リスクは確かに高いですね」

所詮過ぎたるは毒ということなのだ。もし、本当に作るなら、それこそエリクサー並の状態異常も直す物を作ることになるが、そんな万能薬なんて作れるはずもない。

「ということで、アイデアがなくいつものトレーニングしかできないんだ」

「私クヨウさんが前に住んでいた世界の話が聞きたいですね」

「あ、たしかに、どんな世界なの？」

「ん、まあいいか、暇つぶしにはなるかな」

そうして、道具屋リュミエールの新しい日常が始まっていった。

## 第26話「新しい日常」(後書き)

ポケ役のレンヤがいなくなったので、ポケが難しくなったかも・・・  
そろそろ終わり方が固まってきたので、それに向けていこうかと思  
っています。

では、次回をお楽しみに！

## 第27話「新しい厄介事」(前書き)

今回は初の1人称視点で進めてみようと思います。

## 第27話「新しい厄介事」

第27話「新しい厄介事」

くクヨウ SID E

レンヤが旅に出てからも数週間が経ちました。基本的に平和です。商業連合からの勧誘もありましたけど、普通にお断りしています。今のところそれで済んでいるので、問題は特にはないです。問題があるとすれば他のことです。なんか弟子にして欲しいとかいう人が出現し増えつつあります。理由は簡単、魔法具が原因でした。

異次元バッグはかなりの発明品で、すでに大陸中にかんりの数が出る次第。しかも、今まで他の研究者が考えもしなかった術式で作られているため、どうも僕のことを天才的な発明家だと思っている輩が出てきたらしいのです。元々ポーションの開発である程度知名度があつたのも原因みたいですよ。それに関してはどうしようもないのですが。

「ん、随分面倒なことになってきましたね」

「クヨウさん、仕方がないことだとお思いますよ。あんな術式思いもしませんでしたからね」

「ただ単に、最適化しただけなんだけどなあ……」

どうもやはり発想が違うみたいで、困ったものです。

「そうそう、クヨウさん、お姉ちゃんが今度、クヨウさんを学園の講師に勧誘できないか？って言うてましたよ」

「お姉さんにはお断りしておいてください。面倒ですの」

「あはは、クヨウさんモテモテね」

「勘弁してくださいよ、サクラさん」

思わぬ所で注目を浴びちゃいました。まあ、これが抑止力になって商業連合の動きが抑えられているようなので迷惑ばかりでもないのですが・・・まあ面倒です。普段は面倒くさがりじゃないんですが、ここまで厄介ごとが続くとどうも面倒くさがりになってしまいますね。

こういうのは一過性なので、落ち着くのを待つしかないですね。

「そろそろお昼なんで、昼食を作ってきますね。弟子入り関係とお誘い関係は全部断って置いてください」

さてさて、お昼は何にしようかな？

レナリンス SIDE

「そろそろお昼なんで、昼食を作ってきますね。弟子入り関係とお誘い関係は全部断って置いてください」

クヨウさんは、そのまま奥へ行きました。クヨウさんのご飯は結構美味しいので、お昼の賄いは1日の楽しみの1つでもあります。

「ねね、リンスちゃん」

「はい？なんでしよう？サクラさん？」

「クヨウさんの術式ってそんなに凄いものなの？私って戦闘専門だから、そんなにわからないのよね」

「あ、それ私も知りたい」

なるほど、確かに専門家じゃないとなんでなのか、わからないですね。

「簡単に説明しますと、・・・そうですね、と、つても強い、モンスターがいたとします。みんなが協力しても、いくら研究しても、弱点もわからないモンスターです。クヨウさんが、したことは、そのモンスターを簡単に誰でも倒せる方法を作った・見つけた、ということなんですよ。」

「へ、それが2回も3回も続けば騒ぎになるか。なるほどね。」  
「確かにそれはすごいですね。」

まあ、おかげで大変なことになっていますが・・・私も弟子入りしたいくらいです。

半分はクヨウさんの能力があるとはいえ、効果を解析して術式に直すのはそれなりに難しいんですけど、クヨウさんは結構簡単に直しますからね。どういう風に考えているかくらい聞こうかな？

クヨウ SIDE

「うん、上出来だ」

結構手間がかかったけど、ついに・・・ついに！カツ丼の完成だ！意外とパン粉の代わりになるものがなくて、完成に時間がかかりました。

異世界にきてから、食べ物が劇的に変化してしまい。たまに思い出す日本食が恋しくなります。とはいえ、共通している食品もあれば、全然違うのがあるので再現ができないことが多々あります。

こうして再現が完成すると今までの苦労が吹き飛びます。うん、楽しみだ。3人が驚く顔もまた楽しみなんですよね〜ふふふ。

「おまたせ〜、今日はカツ丼です〜」

「……カツ丼?」「」

「故郷の料理でね、なかなか美味しいんですよ」

3人にも結構好評なようで、嬉しいものです。いつそ料理店でもひらこうかと思いましたがそんな気力もないので、即刻却下ですね。

「へ〜、本当に面白いね。器に米と具を載せるっていう発想が独特よね」

「ん〜、なんでも元々は働いている人に「お疲れ様」という意味をこめて丼料理が出来たとか聞きましたよ」

「丼料理ってことは似たようなものか他にもあるんですか?」

「親子丼、あんかけ丼、うに丼、海鮮丼等など、バリエーションは沢山ですよ」

「多いですね〜、でも〜簡単に〜食べれるので〜こういうのは〜好きですよ〜」

そして、昼食後、今度はなにやら物騒な行列が店の前にきました。僕としてはそのまま通り過ぎて欲しかったのですが、その願いは淡く消えていくのでした……

「クヨウ・キサラギ殿はいらっしゃいますか!?!」

「え〜と僕です、何の御用時でしょうか?」

「私はオールウェイ・レオハルドと申します」

はい、ここでまたも大物が登場です。エルミールグループと肩を並



べる商業グループで、主に魔法具を扱っているレオハルドグループの総帥です。レオハルドグループは本拠地をエルフ族が主体である「ムーンミラーージュ国」においてあり、魔法具の開発や量産を仕切っているグループです。ムーンミラーージュ国は魔法文化の中心地であり、魔法具の技術は最先端にあたります。組織の観点からいくとバンガードさんと同じような立場の人ですね。わざわざこんな人まで勧誘してくるとは・・・

「クヨウ殿、単刀直入にお願いしますが、我がグループの一員になってほしい。クヨウ殿ならかなりの高待遇で迎えましょう」

「え〜と、ありがたいお話なんですがその手の勧誘は全てお断りしています」

「全て？エルミールグループに協力をしているのではないのですか？」

あゝ、バンガードさんの件で勘違いをしているみたいですね。

「エルミールさんとは商業連合について情報を共有しようと約束していますが、お店としてはまったくの無関係です」

「むむ、そういうことですか。しかし、そこをなんとか曲げてお願いしたい」

完全に頭を下げるレオハルトさん。そこまでされると若干気が引けますが、あくまで独立していたいので、やっぱり断ります。

「そうですか、仕方ありませんね。今日のところは諦めましょう。この人意外としつこいです。また来る気ですか。」

「ところで、先程商業連合の話が出ていましたが・・・どうして商

業連合について情報共有を？」

「あまり細かい内容は言えませんが、不穏な動きがあるので・・・ということですよ」

「む、エルミールもそうなのか・・・」

エルミールも？ということとはレオハルドグループにも何かしているのかな。あのグループは一体何がしたいんだらう???

「ふむ、失礼ですがクヨウ殿はエルミールグループの誰と情報のやりとりをなさっているのですか？」

「ええと、バンガードさんです」

「なんと、クヨウ殿もなかなか顔が広いですね。益々欲しい人材だ・・・。つと話が反れますな。情報ありがとうございます。お礼代わりに1つ情報を。商業連合なのですが、どうもあまりよろしくない連中と繋がっている模様です。最近はモンスターの研究をしているとか、どうも普通のグループとは違う動きがありますので、くれぐれも御気お付けください。この話はエルミールに流していただいても構いませんので、ではまた近いうちに」

「ああはい、ありがとうございます・・・」

レオハルドさんはそのまま店を出て行った。商業連合はどこも警戒しているんだなあ・・・。それにしても、なんか最近大物とよく会う気がします、僕としては日々平穩にいききたいんですけどね。

「クヨウさんってやっぱり大物ですね」

「そうね、ある意味、かなりの重要人物になったわよ」

「2人とも、完全に他人事ですよね？」

「それは当然ですね」「」

「リンスちゃんまで・・・」

能力はともかく、僕自身は結構平凡なんですけどね。

「それはともかく、サクラさん」

「ええ、今行つてきますか？」

「お願いします」

サクラさんはなかなかカンがよく、たまに主語抜きでも会話ができます。それにしても商業連合か・・・、本当に魔王と繋がっているのかもしれないね。

「「???」」

2人とも混乱真つ最中ですね。和みます。

「サクラさんには先程のことをバンガードさんへ伝えてもらいにいっただけですよ」

「あゝ、なるほど」

「随分仲良くなりましたね・・・ほとんど夫婦じゃないですか？」

「ある程度仲良ければできなくはないでしょう？夫婦とは飛びすぎですよ」

夫婦か・・・まあ、恋人でもないサクラさんとそうなるわけありませんよね？

第27話「新しい厄介事」（後書き）

とまあ、がんばってみましたが・・・

性格変わってないか？と疑問になりますね。  
多分今後も3人称視点でいくと思います。

では、次回をお楽しみに

第28話「天国と地獄」(前書き)

今回はギャグに走ってみました

## 第28話「天国と地獄」

### 第28話「天国と地獄」

「完成しましたね〜。ふふふ〜嗚呼〜楽しみ〜ですね〜」

「やっとだね〜、次のお休みにみんなでやろうか?」

これが波乱の幕開けだった……

「第1回、天国と地獄ゲーム〜〜〜〜!」

休日と呼ばれたミリアとサクラは訳も分からず混乱していた。クヨウとレナリンスはやけにテンションが高かった。

「え〜とクヨウさん?随分テンションが高いけど、これは何なの?」

「それは〜これから〜説明しますよ〜、あはははは〜」

「リンスちゃん?妙に浮かれてない?」

若干引き気味のミリアを無視して、話を進める。『天国と地獄ゲーム』とは、レナリンスのアイデアの元、クヨウの能力を最大限、無駄に活用した魔法具である。

ルールは、ボードゲームなので100マス目を目指してサイコロを振り、コマを進めるというもの。そして、プレイヤーはコマに意識を移し、色々なイベントをこなしていかななくてはならない。

あくまで、幻術で意識をコマに移すだけなので、何があるうとも安全である。例え首をきられようとも問題はない。トラウマはできるかもしれないが、肉体的には問題ないので無視する。

「へ、面白そうね」

「そうですね、ちなみにそのイベントってどんなことが起こるんですか？」

「それは、私も知りません。知っているのはクヨウさんだけです  
ね」

「ん、内容は笑って済ませるレベルですよ。効果は長くても1時間ですので、ずっとそのままってことはないです。ではさっそくやってみましょうか」

4人はそれぞれコマを取った。クヨウが青、レナリンスが赤、ミアが黄、サクラが白のコマで進める。最初に全員でサイコロを振り順番を決める。そして決まったのは、レナリンス・ミア・サクラ・クヨウという順番である。

「では、お先に……えい！」

サイコロを振り、出た数だけ進む。各マスにはそれぞれ色があり、止まったマスの色のカードを引きカードに書かれている内容を「強制的に体験する」というものだ。レナリンスが止まったのは青のマスだ。止まるとそこでカードが5枚目の前に現れて、その中から1枚引く。

「えと……『トライが落ちてくる』？」

その瞬間、ガン！という音とともにレナリンスの頭に金トライが直撃した。

「いったい……」

あうあうと涙目になりつつ、レナリンスは手で頭を押さえる。ミアアとサクラはクヨウに「説明しろ」と言わんばかりに視線を向ける。

「さつきも言ったけど、内容は強制的に受けてもらいます。ああ、カードの中身はランダムで、色に関係なく良い事が3枚で悪い事が2枚入ってます。ちなみに、色は効果の大きさになってます。青は小、黄は中、赤は大です。それ以外の色は、特殊カードになってるので、そのときに説明しますね」

「うん、なかなかきついゲームになりそうね」

「それより、赤が怖いんですけど・・・」

次にミアアがサイコロを振る。止まったのは青のマスだ。

「お願いします！これ！」

気合をいれて、カードを引く。そこに書かれていたのは・・・

「え〜と、『パフェ1個食べる事』・・・え？ほんと？」

ミアアの前に、ポンという音と共にパフェが出てきた。

「へ〜、あんなのもあるんだ〜」

「ミアアちゃん〜、うらやましい〜です〜」

「でも、あれって本当に食べてるわけじゃなくて、記憶を読んで疑似体験しているだけだからね」

なので、太りはしない。あくまで、仮想空間にいるようなものなのだ。

「次は私ね、ほいっと」



サクラが止まったマスは赤だった。

「え？ちよつとまだ心の準備が・・・」

「ああ、十秒以内に引かないと、自動で確定するから気をつけてね」  
「ふっ・・・？ちよつとまっつて」

サクラは慌てて1枚引く。そして裏側を恐る恐る覗くと・・・

「ん？『巨大ケーキに埋れる』？まさか・・・キヤー！」

サクラがカードを読んだ直後に、サクラの上から巨大ケーキが降ってきてサクラが埋まった。ちなみに、サクラはなんとか避けようとしたが、体が動かなくなっており、避ける事ができなかった。

「あくまでも、強制体験なので、避けられません。まあ、あれでも良  
いほうだからいいじゃないですか」

「私の、タライよりはいいですよね？」

「他人事だと思っつて、ちよつと怖かったよ」

とかいいつつも、サクラはケーキを摘みつつ這い出てきた。最後はクヨウの番である。

「さてさて、何が出るかな？つと！」

クヨウが進むと黄のマスだ。何の気なしにカードを引く。

「何々？『30分間ギックリ腰になる』って・・・あ痛！！！！」

突然倒れるクヨウ、どうやらギックリ腰になったようだ。30分間

とはいえ、なかなかきついものがある。

「さて次はつと、この黒いのは何？」

「ああ、黒いマスはもう一回サイコロが振れるんですよ。ただしその後に出てくるカードで進めるか戻るかが変わりますけど・・・」

「あ、進めるんだ。次は灰色だよ」

「矢印に従って移動してください。移動先は何も起きませんので」

こんな感じで進んでいく、この後響き渡るのは歓声か悲鳴か。

さて、長いのでここからはダイジェストでお届けします。

「次は～なんでしよう～??」次のプレイヤーの腰に蹴りを入れる  
・・・あはは～クヨウさん～ごめんなさい～」

「ここでそれが来るんですか!? 痛い!」

「他の人を巻き込むのまであるのね」

「無事にゴールできるんでしょうか?」

「次はつと、足の小指をぶつける」って痛い～～!」

「私ですね～・・・」1分間耐久くすぐり地獄??」。クツ! あは  
はははははははは!! はははははははは、ひひひひきつい～あ  
ははっははははは

「僕は既に結構やばいかも・・・」3分間リラックスできる」助  
かった・・・」

「『体重が20kg増える』え・・・これ1時間もやるの???」  
嗚呼私の体形が・・・」

「『野犬に襲われる』ってなんかきた〜〜〜」

「『ケーキ食べ放題』か〜、なかなかいいねこれ」

「『金タライが5個降ってくる』？ちよつと〜〜〜！」

そして……

結構ボロボロになりつつも、ミリアが一番にゴールした。やっと終わった……というのが全員の感想だった。

「結構きつかったね、これ」

「思ったより〜楽しかったですけど〜疲れますよ〜」

ゴールすると、意識を自分の体に戻せるで、体力的には大丈夫なのだが、精神的に結構疲労度が大きかった。

「なんだか、妙に疲れたね……」

「サクラさん、まだ顔が赤いですよ？」

「え〜！あ〜もう〜恥ずかしい。誰にも見られてないんだからいいんだけど、恥ずかしいことには変わりがないわ」

「私は〜、サクラさんが〜何を体験したのかが〜ひじょ〜に気になるますね〜」

最後のほうでサクラが『自分が想像する恥ずかしいこと』を幻覚で味わったのだ。プライバシーの問題もあるので、他のプレイヤーには見れないようになってはいるので特に問題はないであろう。

「これどうしよう？売る？」

「暇つぶしにしてはきついものがありますよね」

「私としては、もうやりたくはないわ」

「一応製品化してみようかな？それとも、リンスちゃん専用にする？」

「うん、とりあえずお姉ちゃんとかやってみてから決めますね」

「まだやる元気があるんだ……」

後日、レナリリスがいたく気に入ったらしく、販売することになった。

そして、意外なほどの売り上げを記録したのは別の話。

第28話「天国と地獄」(後書き)

なんだかのりきれないというか……

最初から最後までギャグは難しいですね。

では、次回をお楽しみに。

第29話「動き出していた闇」(前書き)

前回ギャグでしたので、今回は真面目です。

シリアスのほうが書きやすいかもしれません。

## 第29話「動き出していた闇」

第29話「動き出していた闇」

「ん〜、高く見積もっても200万というところですね」

「そんな・・・なんとか500万くらいにはならないんでしょうか？」

それはある日のことだった。ある女性が1mくらいの像を買って欲しいと言ってきたのだ。一応美術品でそこそ良い物ではあったが女性の希望額には程遠い金額である。

「うちでは、これ以上は出せませんね」

「そう・・・ですか・・・わかりました。他を当たってみます。ありがとうございます」

女性はかなり落ち込んでいた。雰囲気も普通の状態ではないことは1目で分かる。サクラもその辺が気になっているみたいで、先程からこちらをちらちら見ていた。

「すみません、1つ伺ってもよろしいですか？話したくなければ話さなくてもいいのです」

「なんででしょうか？」

「どうしてそこまで、お金が必要なのですか？かなり切羽詰った用なのでしょうけど、雰囲気が普通じゃありませんでしたので・・・」

「多少なら相談に乗るよ、だから話してもらえないかな？」

「わかりました、お話ししましょう」

女性はココロ・サムエルという名前で、郊外に弟と2人で暮らして

いた。ある日、弟が誘拐されて身代金を要求されたのだ。1回目の要求金額はなんとか払えたものの、2回目になり桁が上がってしまった、なんとか家にあるものを売り払って都合をつけようとしていたところだったという。警備隊やギルドにも相談をしようとしたのだが、犯人から監視されているらしく相談をする直前に警告を受けたというのだった。

「なるほど、それだと相談もできないね」

「なかなかしたたかだね、要所要所を押さえて心理的に通報できないようにしているのね。とは言っても今は監視されていないみたいだから大丈夫よ」

「貴方達にも迷惑をかけるわけにはいかないのです、なんとか別の方法でお金を工面します」

ココロがそうはいっても、既に売るものもないし、当てがないの見え見えである。クヨウはとりあえず、ココロに500万を渡して、弟をなんとか帰してもらおうように言った。ココロも申し訳なさそうにはしていたものの、これ以上どうにもならないので後日返金すると言い、店を出て行った。

「よかったですか？お金を渡しても弟さんが帰ってくる保証はありませんよ？」

「ん？そこはね、手を打つから大丈夫」

そう言つてクヨウは店の奥へ入っていった。気がつくときサクラがいなかった。数分後、武器を持った状態でサクラが店に入ってきた。それと同じくしてクヨウも戻ってきた。

「僕とサクラさんで救出まではいかなくても、なんとかしてみるから店番お願いしますね」



「クヨウさん大丈夫なんですか？それに警備隊に連絡もしないと・・」

「警備隊には連絡しておくように頼んだから、大丈夫」

「僕もこれがあるから大丈夫だよ」

サクラは一旦家に戻ると近所の子供に手紙を渡したのだった。警備隊へ渡すように・・と。それと、クヨウもただ犯人を追うわけじゃなく、隠密用マントを作っているものでそれで犯人を追跡するのだそうだ。

「へ〜、それがこの黒いマントですか。見た感じは普通でけど？」

「でも〜、裏にちゃんと術式が書いてありますね〜」

「無理はしないから、大丈夫ですよ。それではサクラさん行きましょ〜」

「クヨウさん？ココロさんの行き先知ってるんですか？」

実はクヨウはココロに渡したお金の追跡用の魔法具の印をつけておいたのだ。勿論、ココロはそんなこと知らない。印は発信機のようなもので、クヨウが作ったもの以外は大陸上存在すらしていないのだ。

「相変わらず、クヨウさんの発想はすごいですね」

「ん〜、これは前の世界であったものをこっち用に作っただけですよ」

「こんなのまであるんだ。まあいいわ、行きましょ〜」

クヨウとサクラが急いで、印を追っていった。ついた先で、ココロがお金を持ったまま所在なさげにしていた。クヨウとサクラは多少離れた所で監視する。クヨウが作った隠密マントは存在感を無くす魔法具であるので、見えないことはないが、認識できないようにな

っているという物である。

しばらく待つと犯人らしき男が現れる。ミリアの想像通りココロの弟を渡すつもりはないらしく、なにやら揉めていた。結局男は金を持ちそのまま去っていった。ココロさんは流石にそのまま呆然としていたが、帰っていった。

「ココロさんに教えたいの山々なんですけどね」  
「確実に救出できるわけでもないから、言わないほうが懸命ね」

クヨウとサクラはすでに、犯人を追跡している。結構離れている上にマントで気付きにくいようにしているのでまず気付かれることはなかった。

「サクラさん、相手の実力のほどは？」  
「大丈夫、あんなの何人いても敵じゃないわ。スピッドファイアを使えばクヨウさんでも楽勝よ。そういえば、クヨウさんは武器を何使うの？スピッドファイアじゃ音が大きいから、あまり使って欲しくないんだけど」  
「対策済みですよ、この手袋でいけます」

クヨウの手袋には手のひらの部分に膨らみがあった。魔力を流し発動させると衝撃が飛ぶというものである。ぶつちやけて言ってしまう、ワンピースに出てくる「インパクトダイアル」のような物だ。逆方向への衝撃がないのと、発動に魔力が必要、衝撃の吸収ができない等の違いはある。

「へ、便利ね」  
「漫画のネタ武器ですよ。とはいっても、当たり所が悪いと致命傷にできますけどね」

衝撃が出るだけなので、音は出ない。隠密用にはぴったりの武器であった。

しばらくして、犯人の男はそのまま森の中の小さな小屋へ入っていた。

「あんなところに、拠点が？」

「多分地下室があるのよ、逃げ道もあると思ったほうがいいわね」

特に見張りもいなかったもので、警戒しつつ中へ入る。サクラの予想通り地下へ行く階段を発見し中へ入る。

クヨウは魔法具で周囲の人間の位置を把握しながら、進んでいく。いくつか通路があり、奥の方へ行くとはやら中でもめている様な声が聞こえている。残念ながら内容までは聞き取れないが、中を覗いてみると、立派な服を纏った男と犯人らしき盗賊が複数話していた。

「ん〜、どうでしょうか？このまま突入・・・ってサクラさん？？」

サクラはクヨウのマントを掴んだまま震えていた。クヨウは驚く、何故ならサクラはSランクハンターなのだ。ユニークモンスターとも1対1で余裕で戦えるほどの実力がある。そのサクラが震えているのだ。

「クヨウさん・・・あの、奥の・・・立派な服を着た男は無理よ。戦えば100%殺される・・・最低限SSランククラスの実力がないと、戦いにもならないと思う」

「！！！それは・・・一旦逃げようか？」

2人が相談しているときに、立派な服の男は黒い霧に包まれて消えていった。

転移魔法をしようしたのである。周囲に気配は増えていないので、少なくとも周辺にはいないのが確認できた。

「どうしようか？今なら一網打尽にできるね」

「そうね・・・あの男以外なら余裕よ。多分、奥の部屋にココロさんの弟さんがいると思うから・・・私が突入して全員を気絶させます。クヨウさんは先に奥の部屋へ向かってください。もし、いけないようならスピッドファイアで盗賊の足止めをお願いします」

「了解」

そして2人はタイミングを合わせて中へ突入する。突然の事で驚いた盗賊は呆気なく全員捕まえられた。

「うん、余裕ね。あとは奥のお宝を開放しますか」

「流石にサクラさんは強いね、Sランクは伊達ではないです」

奥の部屋へ入ると、子供が数人牢屋に入れられていた。

「何人かいる・・・被害者はココロさんだけじゃないんですね」

「多分、奴隷として売り飛ばすつもりだったようね」

クヨウは魔法具を使い、レナリンスへ連絡する。レナリンスには予め通信用魔法具を渡しており、何かあったら連絡すると伝えてある。しかも、店には警備隊へきてもらうように子供を通じて連絡してあった。

すぐに、警備隊へ場所を連絡し、来てもらう。一応全員縄で縛った上に、電気ショックで気絶させているので逃げることはできないが用心をするに越したことはない。

しばらくまって、やってきたのは警備隊ではなく、先程の転移魔法で消えた男だった。灰色の紙で目が鋭く、余裕のある笑みを浮かべている。が、どこか冷たく見えるそんな印象だった。

「ふむ、予想通りということか。君ら2人には感謝しておこう」

「あ、あなたは何者なの？そこの雑兵じゃないわよね？」

「ああ、そう警戒しなくてもいい。私は素直に君らに感謝しているのだよ。こいつらには上納金を要求したのだが・・・まさか、誘拐等という手を使うとは思わなくてね。先程君らが見ていた時の口論がそれだよ」

男には全部お見通しだったらしい。しかし、妙な話だとクヨウは思った。こいつらには見た目からして盗賊だ。やることは犯罪以外ないだろう。そんなやつらに上納金を要求しても、犯罪以外で金を稼ぐとは到底思わなかった。

「そうそう、私が何者か・・・だったね。私の名はアゲイン・ルイゼフという。一般に『魔王』と言われている者だよ」

「「！！！！！！」」

サクラはある意味納得する、勝てないのは当然だと。魔王は1人でも1国の軍事力に相当する実力の持ち主だと言われておりSランクのサクラには勝てるはずもない。ランクで言えばランク最高のSSS以上だ。

「安心したまえ、ここでは君らには感謝していると言ったであろう？今君らに危害を加える気はない」

「じゃあ、いくつか質問したいんだけど、答えてもらえますか？」

「内容次第だな。もっとも大抵の事は答えよう。時間制限があるみ

「ただだから、それまでだがな」

クヨウが呼んだ警備隊が来るまでは数分の時間がある。それまでということだろう。

「一つ目・何故彼らに、上納金を要求したの？魔王って通常はこっちの大陸にはこないんでしょ？お金を欲しがるとは思えないんだけど」

「簡単なことだよ、彼らは実のところ盗賊ではない。商人崩れと言った方がいいかな？まああまり変わらないが。彼らは僕が作った組織の傘下に入りたいと言ってきたんだ。そこで上納金を要求したんだよ。それが済めば彼らは僕の作った組織の末端になったわけだ」

アゲインは恐ろしいことをサラツと告白した。それは「魔王が組織を作った」ということである。しかも、口ぶりからしてかなり大きい組織を。はつきり言ってしまうえば国際的な問題になる。下手すれば戦争にもなることであった。

「随分簡単に言うわね」

「別に私からしてみれば隠すことでもないんだがね」

「二つ目・貴方の目的は？」

「ふむ、短的に言ってしまうえば、そうだな暇つぶしだよ。娯楽といてもいいかもしれん。魔王というのは存外暇なものでね。その一環だよ」

3つ目の質問をしようとしたとき、警備隊が近づいて来るのがわかった。魔王も同じく気がついたらしくため息をしていた。

「そろそろ時間切れだ。楽しい時間というものはこうも短いのか・・・まあよい、存外楽しめたので良しとしよう。所で私からも1つ

答えてもらおう。難しいことはない、君らの名前を聞かせて欲しい」

「クヨウ・キサラギ」

「サクラ・イザヨイよ」

「ふむ、しかと覚えておく。ところで君ら、私の仲間にならないかね？幹部の地位を約束できるかどうかね？」

「お断りさせていただきましよう。今の仕事は気に入ってますので」

「私も、あなたのところへ行く気はないわ」

「そこは予想通りか、残念だが仕方があるまい。では私はこれで失礼する。また会おう」

アゲインはそのまま転移魔法で消えていった。残された2人は椅子に座り込んだ。2人にはかなりのプレッシャーが掛かっていたのである。しかも、相手に命を握られている状況だ。流石のサクラもひどく疲れていた。

そのまま、まっついていると警備兵が来て、犯人たちを連行していき、誘拐されたと思われる子供たちは保護された。

こうして、誘拐事件は終わったが、幕はまだ上がったばかりであった。

第29話「動き出していた闇」（後書き）

初魔王登場〜。

見た目はぶっちゃけると貴族っぽい男性です。魔王なので種族はあまり関係ありませんが、見た目は人間と同じです。

では、次回をお楽しみに〜。



### 第30話「悪化する事態」（前書き）

もうちょっとほのぼのさせる予定が、若干ピリピリした感じになってきました。日常が一番難しいですね。

それと、そろそろ更新のペースを落としてじっくり話を練ろうと思います。

### 第30話「悪化する事態」

#### 第30話「悪化する事態」

クヨウが魔王であるアゲインから得た情報はそのままギルドを通じ世界中へ流されることになった。内容が内容なので極秘事項ということとで一定の人物にしか流されていないはずなのだが、人々の間で噂されていった。それにあわせて、少しずつ各国の間にも緊張感が出てきている。最悪の事態『魔王の侵略』を考えると軍備の少なさが逆に不安になるのだ。ここ100年以上戦争がなく、軍備の縮小が平和の象徴であったので、その不安は仕方がない。また、大陸各地でユニークモンスターと思われるモンスターの出現や突発的で短期間の瘴気の噴出が確認された等の情報が多くなっており、『魔王が動いているかもしれない』という話が現実味を帯びているのだ。

「サクラさんの情報でも同じ感じですか」

「ええ。ああ、これが内容と細かい件数よ。こんなの調べてどうするの？」

クヨウは情報量の多さに少々の違和感を持っていた。具体的にというわけではなかったが、とりあえず、情報を集めて整理しようと思いついたのである。

「サクラさん、ちょっと、この棚の整理を手伝ってもらえますか」

「はい。ミリアちゃん、今行くね」

一応今は営業中である。とは言っても、常に客がいるわけではない。むしろ比較的暇である。いつも魔法具を作ったりしてすごしている

のだが、今日はたまたま店にでている。とはいってもウンウン唸って情報を整理しているだけだが。

「ん、となると・・・かなあ？」

「何をぶつぶつ言っているんですか？」

「ああ、最近ね妙に噂が多いから、元になった情報を整理してただ」

「あ、瘴気の噴出がどうの・・・っていう話ですか？」

そこへ棚の整理が終わった2人がやってきた。

「こっちの棚の整理終わりましたよ」

「お疲れ様。で、さっきの話の続きなんだけど・・・」

「ご苦労様、一応みんなにも聞いておいて貰おうかな」

クヨウが整理してたのは瘴気の噴出やユニークモンスターの出現場所などである。ついでに件数でもある。整理した結果わかったのは、今各地で流れている情報は大半が人々が不安になっているだけの情報であるということだった。具体的な場所か日付、件数を調べると多少増えているように見えるのだが情報の重複等があり、実際はあまり増えていないのである。確かに以前よりは増えているのだが、増加のタイミングはかなり前であったので、今回の魔王の情報とは無関係であろうというのがクヨウの推測である。

「結局そこへ落ち着くんですね。でも何で今更こんな噂になっているんでしょう？」

「そこが人の不安感という所ですよ。今までは安心していて、多少の事は気にしていなかったんです。しかし、何か不安になることが起こってしまうと、少々の事も気にしだすようになり、益々不安になっていくんです」

「不安が更に不安を呼ぶのよ。でも、ここまで不安感が広がるのかなかなか収まらないでしょうね」

一部の人間は誇張された噂だと確信している。何故なら一商人でしかないクヨウが集めた情報でデマが確認できるのだ、ならば、ある程度要職についていたり情報に詳しい人間ならわからないはずはない。クヨウも時期収まるだろうと見ていた。

「まあ、簡単にでも確認したかったんだよね。それで気になるのは魔王のほうなんだよね。目的がさっぱりわからない」

「でも、暇つぶしとは言っていたんですよね？」

「そこが問題よ、暇つぶしって何をして暇をつぶすのかわからないから」

「あ、そっか。暇つぶしに戦争をなんて可能性もなくはないんですね？」

「極端な話、そうなんだよね」

何をもって暇をつぶすのかわからない。あの時、アゲインは自分が組織を作ったとも言っていたが、それで暇つぶしが終わっているのかもしれない。

「そういえば、あのときに捕まった盗賊さんはどういう組織に入るうとしてたんですか？」

「あ、それがね、裏の組織っぽいんだけどね・・・まだ、あるかどうかもわからないんだよ」

「現在捜査中ってことですね？」

「そゆこと」

その後は特に新しい情報もないので、そのまま魔法具の話で盛り上

がっていた4人だったが、ギルドからの呼び出しがあったので、クヨウはギルドへ向かった。

昼間のギルドはいつも賑わっているが、この日は少々騒がしさが違うようだった。気にしてもわかるはずもないので、クヨウはとつと受付に要件を聞きに行く。すると会議室のほうに行くようにいわれ、会議室に入るとすでに何人が話している人間がいた。

「失礼します、クヨウ・キサラギです」

「おお、キサラギ君か。入りたまえ。あと数名来る予定だから、好きのところへ座っていてくれ」

「マスター、彼は？」

「彼は道具屋リユミエールの店主だよ。ポーションの開発者といえは、わかりやすいかね？」

「おお、彼があの開発者か」

「はじめまして、クヨウ・キサラギです」

各々自己紹介をしておく、メンバーは男性中心だが、女性も何人かいる。職業は様々だが、商人が中心になっていることだけはわかる。このあと数人が入ってきて、会議室は30人ほどの大人数になった。

「さて、今回集まっていたくださりありがとうございます。私が主催者であり、このギルドマスターを勤めているソルド・シルバースです。今回の集まりは緊急の上、誰にも要件を話していないので困惑されている方も多いでしょう。なので、端的に話を進めたいのですが……その前に注意事項を先に話しておきます。今回の要件は最重要機密であり、当ギルドとしてSランク情報として扱います。故にここ以外での情報のやりとりは堅く禁じさせていただきます。ご家族や近い人にも話されないようお願いします」

会議室全体が困惑する。そもそも情報にはある程度ランクがあり、ある程度のやりとりはしている。しかし、今まではどんなに機密が高くてもAランクなので、Sランクは今回が初めてなのだ。例えて言えば、Sランクは国家機密にも相当するような情報である。いくら商人であろうとも、国家機密に関わる人間などそういるわけはないので、困惑するのは当然であった。

「それでは、今回の要件を話させていただきます。実は先日・・・とは言いましても2、3日前ですが、世界樹のある森の南側に魔王と思われる一団が要塞を建設しました」

会議室に驚きの声飛び交う、「馬鹿な」「そんな」等々ソルド以外全員意表をつかれていた。クヨウも例外ではなく、内心はかなり困惑していた。

「お静かにお願いします。要塞といいましたが、見た目は一種の砦のようなものです。もっとも、ユニークモンスターが多数目撃されておりますので、内情は要塞と言っても過言ではないでしょう。各国はまったく気付かずに対応が遅れましたが、すでに連合して討伐軍を送る予定ではあります。そこで、みなさんには物資の補給の協力をお願いしたいのです」

「具他的に、どのような協力なのですか？無料で物資を渡す・・・などは流石に無理ですぞ。こちらにも生活がある」

「流石にそれはないです。協力とは物資を優先的に回して欲しいということですよ。無論数が多くなるので、ある程度代金を割り引いてもらえるとお助かりますが、そこは個々の裁量にお任せします。はっきりと言ってしまうえば、戦争になります。これはもう絶対です。魔王が何故そこに要塞を建設したのかは謎ですが、世界樹に危険が迫っているとも考えられます。故に放っておくわけにはいかないのです」

ソルドからの要件とは、物資の流通を加速させて、後方支援を充実させようということだった。戦争をするにあたり、後方支援は士気にもかかわる大事なことだ。そこを疎かにするわけにはいかないの  
で国からの要請でギルドと商人ギルドが後方のまとめ役をするとい  
うことである。

各国の連携も意外な程早く行われている。それは平和で戦争もなかつたので、交流が盛んだった恩恵でもあった。今のところ、魔王が具体的に動いているようには見えないが、世界樹の森の近くに要塞を作るというある意味各国への宣戦布告ともとれることをしている  
ので、戦争の準備をするのは当然であった。

また、世界樹の森は神の聖域とされており、出入りは自由だが、侵略することは不可という特殊な環境になっている。その近くへ要塞を建てたとすると、神への侵略、つまり最高神であるアマス神へ  
敵対することだというアマス教からの圧力もあった。

「現在の状況は以上になります。それで、具体的な数値を国から貰っています。あくまでも指標なので、各々はある程度余裕をもって  
対応できるようにお願いします」

具体的な数値とは今後、戦争で必要になるであろう物資の数だ。負担が一箇所に集中させないよういくつかの店で分担するというこ  
とだった。そして、内容は滞りなく分担が終わる。今後も定期的にこの会議を行っていき、物流を加速させる予定なのだそうだった。  
最後に魔王に関する情報等をアンケートの形でこの場でのみ募集し、回収することで会議を終了した。

「ああ、キサラギ殿。少し話があるので、この場に残っていただき

たい。他の方は解散で構いません。くれぐれもここで話した内容は内密にお願いします」

ソルドの解散の言葉と同時にメンバーがそれぞれ帰っていく。その中、残ることになったクヨウは何を言われるのか不安であった。クヨウとしては秘密にしておきたいことは沢山ある。ある程度近い人には話しているが、流石に権力のある所にまで情報がいくと厄介ことになることも多いのだ。

「それで、僕にどのようなご用件でしょうか？」

「実は、貴方が持っている『銃』という武器を作って欲しいのです」  
予想通りの範囲だったか、これはこれで困る。今まで秘匿してきた理由はその危険性。一般人の魔力でも一般人を楽に殺せるだけの威力を持つてしまう銃は危険だからだ。

例え兵士にしか配らないとしても、情報が漏れれば似たようなものを簡単に複製できてしまう。剣や魔法も似たような物といってしまう。ええそれまでだが、それでもクヨウは乗り気にはなれなかった。

「銃を・・・ですか。一応理由をお聞きしてもいいですか？」

「何、簡単な話だ。君はその銃という武器を使いユニークモンスターを倒したのであろう？ならばそれを複製できれば、強力な力になる」

「は・・・い？」

実はクヨウの知らないうちに銃の話はかなり肥大化されていた。本当の決定打は魔力爆弾なのだが、あまり知られてはいなかったのである。そして、クヨウは内心（実情を知らないならこのまま誤魔化し通せそうだ）と少し安心する。



「噂なので大袈裟になっていきますね。実際は銃で倒したわけではありませんが」

「何？しかし、それ以外の武器を持っていないであろう？」

「あの時は魔力爆弾を持っていましたから。僕が作ったやつですけど、それを口の中で爆発させただけです。死体は頭が破裂していませんが？」

「銃のせいではなかったのか……では銃の威力はどのくらいなの？」

「初級魔法より少し上くらいです。フェンリル相手に撃つたときは無効化されてまして、牽制にもなりませんでしたよ」

無論ミスリルの薬莢を使えば話は別だが、とりあえず、隠し通す方針なので、このまま誤魔化す。

「量産しても、ユニークモンスター相手にはあまり意味はないか……」

「……そうか、残念だ。しかし、冒険者用にはいいのではないのか？キサラギ殿は銃をあまり広めたくないようだがそれは何故かね？」

「初級魔法より少々上の威力……と言っても、当たり所が悪いと人によつては致命傷にもなり得るからですよ。あまり人殺しの道具として銃を扱いたくはないです。自分が愛用しているものもありますしね」

「量産するつもりはない……か。残念だが仕方がないな。現在必要なものではないので、これ以上追及しないが、私としては量産していたけるとありがたいがな。護身用にもすれば中々いい武器になるだろう」

「それは、まあ気が向けば考えておきますよ」

元々流石にスピッドファイアを量産するつもりはないので、劣化品で量産させるくらいの妥協は必要になるかもしれないとクヨウは考

えていた。まだ、逃げ道はあるのでそれで耐えようと思っていた。

「用事はこれだけですか？」

「いや、むしろ本題はここからだ。君を国で保護することが決定した」

「は????????」

「まあ、混乱するのも無理はなかるう。とりあえず、こちらの事情を聞いてもらえるかな？」

クヨウは本人が思っている以上に周りから注目されていた。理由はその魔法具の獨創性にあつた。クヨウとしては、作っているのは漫画やアニメ等のネタを元に作っているだけの二次創作に過ぎないのだが、周りから、特に同業者からしてみれば恐ろしい程の発想と開発力である。今はまだ生活に近いものしか量産しておらず、戦闘用なものは自分の周りでしか使っていない。しかし、クヨウの身柄を押さえて戦闘用の物を作ればかなり危険なことにもなる。なので、グランパレス国としては戦争の間だけでも、身柄を確保してその危険を取り除こうということでもあつた。もっとも他の思惑もあるかもしれないが……

「なるほど……それって僕だけですか？」

「一応、国としては何人が保護するつもりでいるそうだ。お店の方は流石にしばらく閉店してもらうしかないがね。ちなみにこれはすでに決定事項だそうだ。なので、拒否権はない」

「ん……いくつか条件をだして、それが通らなければ保護されるつもりはないですね」

「条件?どついうことだ?」

「はつきり言ってしまうえば、自分の身を守るためですよ」

クヨウからしてみれば、身柄を押さえてよからぬ物を作らせようと

するのはこの国かもしれないということだ。国の目的が本当に保護かわからない。内情は知らないが、クヨウからしてみれば警戒するのは当たり前のことだった。

「ふむ、あまり国を信用していないようだな。何かやましいことでもあるのか？」

「どんな組織にも裏があるということですよ。大きい組織なら尚更です」

「そうか、すまないな、失言だった。しかし、どの道条件は意味がないな。もう決定事項だと伝えただろう？どんな条件であろうと国がそれを飲む理由がない」

「別に国がどういおうと僕には関係ありませんね。もし軟禁、もしくは監禁を強いられるくらいなら旅に出ようと思えますので」

「それでは最悪の場合、君が反逆罪で捕まってしまうぞ」

「そこは覚悟するしかありませんね。最悪の場合死ぬ覚悟をね・・・」

両者はしばらく睨み合う。クヨウとしては条件をつけて、ある程度の拒否権を確保しなければどうなるかわからないからだ。そこがクヨウの譲れる最低ラインだ。それ以上は譲ることは出来ない。そして折れたのはソルドのほうだった。

「ふう、仕方がないな。その条件とは何かね？私としては強制監禁などはあまりしたくないのでね。できれば穏便に事を運びたいが君が折れない以上こちらでなんとかしよう」

「わかってもらえて何よりです。条件はいくつかあるので、文章にしてまとめますよ。明日くらいに提出でかまいませんか？」

「仕方がないな。人材の流出よりはマシだ。よかるう、ただし明日の朝には持ってきてもらおう。私にも都合があるのでねそれと、条件も内容次第だ。あまり変な内容だと本当に監禁を強いることにな

るかもな」

「先に言ったはずですが？身を守るためだと」

「そうだったな・・・失礼した。では明日の朝まっているぞ」

クヨウは急ぎ店へ戻るが、嫌な予感拭えなかった。

### 第30話「悪化する事態」(後書き)

事態は急降下中です。次の展開で進み方がまったく、変わるの分岐点ですね。

まあ、2ルート書くことかいつ無謀はしません。そんな気力も無いですし……

今現在悩み中です。

とりあえず、次回をお楽しみに……またちよつと更新が遅くなると思います。

第31話「いろんなことが急展開」（前書き）

なんかもう、表現力の無さに絶望しそうです。

思ったことを表現できないのはなかなか辛いですね。

### 第31話「いろんなことが急展開」

第31話「いろんなことが急展開」

クヨウは店に戻るとミリア達に状況を説明した。

「どっちみちお店はしばらく閉めないためそうですね」

「そうなんだよね、こうなるとは思わなかったよ」

「まあ、私たちにはどうしようもない問題だから、仕方がないと諦めるしかないんだけど・・・クヨウさんはどうするつもり？」

「僕？とりあえず、条件を突きつけてなんとか安全は確保するつもりだけど、できなきゃ逃げるよ」

「逃げる・・・って、そんなことできるんですか？」

「奥の手があるから、まあなんとかなるんでないかな？条件を飲んでくれれば別に逃げる必要はないんだけどね」

「どんな条件を要求するつもりなんですか？」

クヨウが考える条件は、1・クヨウは魔法具の作り方を教えない。  
2・魔法具を作成等を監視しない。3・魔法具の作成を強要させない。4・銃に関しては一切情報を明かさない。以上の事を考えている。1個でも約束されない場合は全力を以って逃げるつもりらしい。

「なるほど、まあ保護が建前だから強要はできないと思うけどね」  
「それで、皆さんはどうしますか？正直保護とやらがいつまで続くかわかりませんので、店は閉めるつもりですが。辞めるなら退職金は出せますよ」

「店が再開できたら再雇用してもらえたら一度辞めますね」

「私も同じかな。またみんなと店をやりたいもんね」





あまりの急な展開に残念ながらクヨウの頭はオーバーヒートしていた。その後、クヨウが落ち着くまでに2時間掛かった。

「やっと落ち着きましたか？」

「いや、女性から告白されたことなんてないし、想像もしてなかったから驚いたよ」

自分のヘタレ具合に若干凹むクヨウだったが、気持ちをすぐに切り替える。

「それで？返答は？」

「リンスちゃん？どうしてそんなに楽しそうなのかな？」

みればミリアも興味津々という顔をしていた。やはり女性陣はこの手の話が好きなのだろう。サクラは告白した張本人なので、流石に不安げにしていた。

「あ、その、僕でよければ別に構わないですよ。サクラさんの事は好きですし」

「本当！？」

きょろという感じで女性3人が盛り上がる。流石に人前での告白は恥ずかしいのかサクラも顔を赤くしていた。その場が落ち着くまで、更に1時間かかる。

「それで、どうするの？」

「ん、まあ保護の場合はサクラさんも一緒に〜という風にすればいいだけかな。最悪護衛ということだ」

「なるほどね、バンガードさんの紹介状もあるしそれもありね」

「素直に恋人だから〜って言えばいいじゃないですか？」

「クヨウさんも〜なかなか〜初心ですね」  
「2人ともうるさいよ」

ニヤニヤしているミリアとレナリンスをクヨウはなんとか押さえる。  
若干顔が赤いのはご愛嬌だ。

「逃げる場合はね、これを使う予定」

「????お札??」

「魔法札ですか?随分古いものを用意しましたね」

魔法札とは魔法を簡易的に発動させれる札のことである。使いきりであり、作成にも時間がかかるので今はあまり使われていない。今主流なのは、水晶に魔力を込めて複数回使えるマジッククリスタルである。

クヨウが札にした理由はある。札は術式を書かなければいけないので、作成に時間がかかるのだが、魔法を細かく設定できるという利点もあった。それともう1つ、使用の難しい魔法も設定次第では使えるのだ。クヨウはそこまで魔法を使えるというわけではないので、札のほう扱いやすかった。

そして、当日へ向けて準備をする。最悪の場合に備えて。

次の日……

「マスター、おはようございます」

「おはよう、キサラギ殿。早速で悪いが、条件を書いた紙を見せてもらえるかな?」

クヨウはソルドに手紙を渡す。ソルドは前日の会話である程度条件

の予想をしていたので、条件は想定範囲内だったようで納得していた。

「ふむ、多少疑問に思わなくもないが、予想した通りかな。いいだろう、最大限配慮してもらおう言っておく」

「それはありがとうございます。ところで、聞き忘れてましたが保護って実際にはどこに行くことになるんですか？まさか、王宮に住むわけではありませんよね？」

「流石にそれはないな。郊外の屋敷に住んでもらうことになっていく。もっとも警備兵がいるがね。大まかに言うと、広い敷地に屋敷がいくつもあり、その1つに住んでもらう。基本敷地の外にはでれないが、こちらで信用できる行商に行ってもらう様にしてあるので、物資の心配はない。敷地は塀で囲まれているし、警備兵も巡回し、敷地の中にも少々の警備兵が巡回しているというものだ。敷地は王宮の一部でもあるので警戒はかなり厳重になっている。そんなところだ。ちなみに屋敷といってもそんなに大きくはない。1家族は楽に暮らせる程度の広さはあるがね」

「わかりました、じゃあ今日のところは店に戻っていていいですね？まだ店の片付けが終わってませんので」

「うむ、今日中に連絡をまわすよ。しかし、軽い片付けだけでいいのではないのかな？店をたたむ訳でもあるまい？」

「いつまで、保護されるのかわかりませんがね。薬が駄目になる前にどうかしておかないと、損害が大きいですから」

そういって、クヨウは店に戻っていった。この後はギルドマスターであるソルド次第だからである。もっとも、最悪のための対策はしている。あとは待つだけである。

ギルドや他の店への用事を片付け終わる頃にはすでに夕方になっていた。店に戻ると、ミリアとレナリンスが鍋の準備をしていた。ち

なみに、当然ながらガスコンロなんてものはないので、クヨウが魔法具でコンロもどきを作った。意外に好評だったため、ミリアとレナリンスにプレゼントしておいた。

ミリアとレナリンスとサクラが期間限定の閉店をするにあたり、一度ぱーっと騒ぎたいらしい。もしかすると、しばらくお別れにもなりかねないのでお疲れ様とありがとうを込めてみんなで飲み食いしようとのことであった。ちなみにお金は全部クヨウもちである。

「ただいま」

「おかえりなさい」

「準備はどう？」

「順調ですよ、今は足りないものをサクラさんが買いだしに行っています。とはいっても、もうちょっとで帰ってきますよ」

「了解、じゃあ僕も何か手伝おうか」

そういつてクヨウも料理の準備を手伝う。そしてサクラが帰ってきて、準備が完了したら、4人だけのささやかな宴会が始まった。

「クヨウさん、挨拶を」

「え？やるの？」

「こういう行事は大事にしないとね、さあはやくはやく、お酒が温くなっちゃうよ」

「まあいいか。じゃあ、みんなお疲れ様でした。みんなで働けて本当に楽しかったです。結構助けられることが多くて感謝もしています。一度店は閉店して、ひと段落ついたらまたやろうと思います。ひとまずご苦労様ということで、今日は楽しんでください。はい、グラスもつて。これからの皆新しくがんばっていけるように！乾杯

「！」

「「「「「「「「「「「」

こうして宴会が始まった。この世界では鍋料理はあるのだが、こうした食べ方はないので、3人は驚いたものの新鮮で楽しんでいた。

「そういえば、ミリアさんとリンスちゃんはこれからどうするの？」

「私たちですか？そうですね・・・少しハンターでもしてみようかと思えます。サクラさんにも鍛えてもらいましたので」

「私は、また魔法具の研究を続けるつもりですよ」

「ん、ミリアさんはサクラさんの剣術でも教えてもらってたんですか？」

「いえ、剣の練習相手になってもらってただけですよ」

「実際、心刀流は刀じゃないとね。剣じゃ無理よ、精々練習相手つてところよね」

心刀流は刀専門の流派なので、剣では無理なのだそうだ。剣用の流派もオオヤマ国にはあるのだが、サクラはそこまでは習得していない。

「そういえば、サクラさんの白刀でしたっけ？綺麗ですよね」

「あ、確かに。最初戦つてるところみたら踊つてるようでしたね」

「そ、そこまで言われると照れるわね。一応刀にも名前があつてね、『此花咲夜』って名前なの。オオヤマ国でも名刀の部類に入る一品らしいわね」

「らしいって、細かいところはわからないんですか？」

「あまり刀には詳しくはないもの。でも1目で気に入った刀だったわ」

懐かしそうに昔の話をするサクラだった。そのまま全員の昔話やら、営業直後の失敗談などで、盛り上がり夜は更けていった。

そして、当日。クヨウはサクラと共に集合場所へ行くと、既に複数名の人間がいた。どうも一緒に保護される人達らしい。ソルドや国の関係者はまだきていなかったので、適当に時間をつぶすことになる。その後、時間になって現れたのは、ソルドと国の大臣とその護衛複数名であった。

「全員お集まりのようですね。今回皆さんを保護という形ではありませんが、移動の制限をすることを先に謝罪させていただきます。それとご協力ありがとうございます」

「ん、ここにいるものはある意味、選ばれた人間ということでもある。それを光栄に思うが良い。それでは、中を案内させよう」

ソルドはまだ態度は良かったのだが、クヨウの大臣への第一印象は最悪であった。どうみても此方を見下している。おそらく、民衆ならば自分には絶対服従するものだと思っているのであろう。そう考えると、自分の条件を飲んでくれるとは思えないのでクヨウはサクラにも一応警戒するように伝え、自分も警戒する。

ソルドが先頭に立ち、敷地内を軽く案内する。とはいっても敷地内での注意事項や屋敷の案内だけだが。一通り案内が終わり、それぞれが決められた屋敷に入っていたが、クヨウとサクラはそのまま残る。

「ソルドさん、条件の方は大丈夫でしたか？」

ソルドは聞かれると同時に、苦い顔をする。その瞬間、クヨウは飲んで貰えなかったのだらうと内心あたりをつけて、逃げる心構えをする。クヨウの質問に答えたのは大臣であった。

「お主は何か勘違いをしているようだの。ワシらは別にお主らをどうこうするつもりはない。『協力はあくまで要請であり、自発的にして貰う』だけじゃ。お主が何を危惧しているのかはワシにはわからんが、少なくとも『強要』はするつもりはないぞ」

言葉だけなら、確かに信用できるかもしれない。しかし『条件を飲む』とは一言も言っておらず、しかも自発的に協力して貰うと言っているその顔には『拒否権などはない』とつぶうに見える。

「そんなことよりも、お主。ワシの元で働かないか？有望な魔法具の技術者が不足しておってな、お主にとってもそのほうがよからう。給金も道具屋なんぞより遥かに良いし、お主ならワシの子飼いとしてみんなりの権力も持てるようになる。それ、悪い話ではなからう？」

クヨウにとっては論外の話である。元々お金には困ってないし、権力なんて眼中にない。それよりも、自由を制限されるほうが遥かに嫌だった。

「ありがたい申し出ですが、お断りさせていただきますね。正直興味ないですし。そんな話より、僕と1つゲームをしませんか？」

「ふむ、ゲームとはどういうことだ？」  
自分からの誘いを断られて若干不機嫌な大臣であった。横にいるソルドはあくまで、傍観者に徹しているらしく、口を出しては来なかった。

「僕としてはここにいてもいいつもりはありませんので逃げたいのですが、下手に指名手配されると厄介ですのでお互いにメリットのある賭け

をしようということ。条件は簡単、僕らが逃げた5分後にこちらが追う。僕らがラングランの外に、逃げ切れれば僕らの勝ち。その時は見逃してもらいましょう。もし、捕まってしまった場合はそちらの言うことに従う。どうですか？」

「ふむ、逃げ切れる自信はありますか。こちらは兵士を投入するが構わないであろう？」

「ええ、構いませんよ。大臣に何かあつては申し訳ないですからね」

「よかるう、その条件で受けるがしばし待て。兵士に状況を説明せねばならぬのでな」

「その言葉確かに聞きましたよ、ソルドさんが証人ですからね」

大臣が部下に集合をかけさせる。流石に集合が早く10分ほどで50人近くが集まった。

「では、この砂時計が5分なのでこれが合図です。よいいどん」

クヨウが砂時計を逆さまにしてゲームスタートになった。クヨウはすぐにサクラを連れて、敷地の外に出る。そのまま人目のつきにくいところへ入っていった。

「この辺でいいかな？サクラさん周りは？」

「大丈夫よ、監視はいるけど、今は見えてないから」

「了解、じゃあ、この札を」と

クヨウが用意していた札を使うとそのまま2人の姿はその場から消えていった。大臣が兵士を総動員させ、ラングランを探すが見つかることはなかった。クヨウが用意した札には転移魔法の術式がかかれており兵士が搜索を開始する頃にはラングランを出ていた。こうして、クヨウは指名手配されることなくラングランをあとにするのだった。



「ん〜大臣が単純でよかったよ」

「でもね、クヨウさん。転移できる魔法札を用意してるとは普通は思わないわよ。魔法札自体古いものでもあるし、転移できるものになるとかなり高額だから」

「ま、自作だからね。転移実験には成功してるから問題ないけど」

「それで、本当にこれからどうするの？ハンターでもする？私は元々専門だから問題はないけど」

「そうだね〜、ハンターか・・・それもいいね。各地を行商で回って依頼を少しやるって感じにしようか」

クヨウとしてはあくまで道具屋を続けたかったらしい。お金は商人ギルドにあるので、どこでも引き出す事が可能であるし、色んな街の特産品を漁るのもいいだろう。

こうして、波乱はあるもののクヨウの行商生活が始まった。

### 第31話「いろんなことが急展開」（後書き）

ということ、道具屋は一旦終了しました。

まあこういうのはなかなかないから、いいんじゃないかな〜と思います。

人生波乱万丈、多少職業が変わったっていいじゃないか、というノリです。

ただ・・・終わリまでたどり着けるかが酷く心配になってきました。途中でやめることだけはなないように頑張っています。

では、次回をお楽しみに〜

### 第32話「現状把握」(前書き)

今回はあまりストーリーとは関係ないです。

題名そのまんまです。まあ、大分成長してて、このくらいならできますよ〜というのがわかれば幸いです。

### 第32話「現状把握」

#### 第32話「現状把握」

クヨウとサクラがラングランを出て数日が経った。一応指名手配がされていないかどうか不安ではあったが、ギルドマスターであるソルドがなんとかしてくれたのであろう、特に問題はなかった。

特産品になりそうなものは道具屋を開いていたときの情報で確認済みである。勿論、現地で見ないとわからないものはあるがオリジナルの魔法具と一緒に細々とはあるが行商として稼ぎをあげていた。

「ん〜今日もそこそこの収益確保、といったところだね」

「魔法具だけでもいけると思うけどなあ」

「それだけだとつまらないじゃない？特産品漁りはなかなか楽しいでしょう？」

「まあ、それもそうね〜。ところでさ、クヨウさん。前から気になってたんだけど・・・魔法具生成能力だっけ？どこまで創れるの？」

その質問にクヨウは詰る。何しろ本人もあまりよくわかっていないのだ。既に冒険者には必須になるであろう魔法具の生成には成功しているので結構高い技術レベルにはなっていると思うのだが、限界地点はあまりわからなかった。

「どうなんだろうね〜、僕自身よくわかってないからなあ・・・何かで試そうにも明確な基準があるわけでもないし・・・」

「基準ね・・・そうだ！いいのがあるよ〜」

サクラが何かを思いつき、そのままクヨウを引きつれ魔法具店に入っていた。そこそこいい店らしく、品物は初心者ハンター用から

中上級者ハンター用までそろっていた。クヨウも店内に入ると漸く  
どういうことが察しがついた。

「ん、高そうな物は・・・っと。すいません、これはどういう  
効果があるんですか？」

サクラが見つけたのは古そうな2組の指輪であった。値段は100  
0万ゴールドする。店員がいうには2組の指輪をそれぞれ別の人物  
が装備することにより、物理的な距離に左右されずに会話が可能に  
なる魔法具であるということだった。クヨウは「携帯電話みたいな  
もんか」と軽く考えているが、魔力だけでそれを実現するのはか  
なり難しいことであった。

「準アーティファクトクラスね。じゃあ、これは??」

そんな調子でサクラはどんどん品物の効果と値段を聞いていった。  
クヨウもやることは予想がついているので値段と効果を把握してい  
った。その後、宿を取りいくつか魔力の籠ってない装備品を並べた。  
安い値段の効果から順々に試していき、結局全ての魔法具を作る事  
ができた。

「案外簡単だったね。あの指輪の効果は試してないけど今の所問題  
なさそうだし」

「いずれ使う機会もあるんじゃないかな? 装備してれば、少なくと  
も逸れる心配はないでしょう?」

「そうだね、常時つけておこう。いざという時に使えないとね」

「ふふふ、そうね」

妙にサクラが嬉しそうだったか、よくわからなかったのでクヨウは  
スルーした。しかし、とクヨウは疑問に思う。今まで一部を除き生

活用や旅人用など戦闘には関係ないものを中心に作ってきた。これを戦闘向けにした場合どこまで創る事ができるのかと。どこまで『凶悪な武器』を創る事ができるのか・・・そう考えると自分の能力を恐ろしくも思うが、武器は所詮武器である。それは師匠であるヨージェフにも言われたことだった。

『武器は対象を傷つけるためにある。それは武器の存在意義であり、それは誰にも否定できない真実である。しかし、武器はどこまでいこうとも武器である。それが人を傷つけるか守るかは使い次第。だから武器を否定するな、恐怖を抱くな。』

クヨウは師匠の言葉を思い出し、自分を戒める。それと同時にチャレンジしてみようと思う。どこまで創れるのか・・・と。

「じゃあ、武器をちよつと作ってみようかな」

「へえ、珍しいねクヨウさんが武器を作るの」

「ちよつと試したくてね。こちら辺で剣とか刀って売ってるところ分かります？」

「あ、それはこつちよ。ところでさっき作った魔法具はどうするの？指輪以外は使わないでしょう？」

「あ、他の町で売りますよ。ここで売るのもね」

そういつて、2人は武器屋へ行き、素材の良さそうなものを買い揃える。刀と剣と槍を数本買った。目指すは某ゲームの宝具だ。効果は基本的に同じにする。リスクも同じ。どこまで再現できるか・・・

「がんばったよ、僕も。うん、がんばった、けど・・・そりゃ無理だよね・・・」

結果惨敗。少し考えればわかることではあったのだ。端的に言えば、素材の差だ。伝説上の武器は大抵（例外もあるが）特殊な素材で出来ている。中には神が創り、星が鍛えた武器なんて物もあるのだ。それをそこらの一級品とはいえ、鋼鉄や安物のミスリル程度で再現しようというのが土台無理な話だったのだ。大抵の物は魔力に耐え切れずに砕け散っていた。なんとか耐え切った物もあったが、能力発動の瞬間に砕け散ってしまった。

「でも、逆に言えば素材さえあればできるってことよね？」

「まあ、そうなるね」

「じゃあ、素材がありそうなものを作ってみたらどう？それなら再現できるのよね？」

「そうだね、気分を変えるためにもそれでいこか……」

簡単なことに気付かず、クヨウは結構落ち込んでいた。とはいえ、いつまでも落ち込んでいないで、まずはできそうな素材を思い出そうとするが、思い出せない。普通、武器の名前や効果が分かってても素材は知らない。そこまでクヨウもマニアではなかった。

「ん、結局わからないね。どうしようか……っと、そういえば1個あったな」

「なにか思い出したの？」

「確か、刀で出来るやつが1個あった！」

結局使わず、バッグの中にしまっておいた刀を取り出す。そして魔力を込める。そして、それは完成する。

「できた！あとはちよつと効果を試したいんだけど……宿でするわけにもいかないね……」

「今日はもう時間があまりないから、明日ギルドで簡単な依頼を受

けましよう。森へいければいいよね？」

「そうだね、今日はここまでにしておこうか。疲れた疲れた」

クヨウはぼったりベットに倒れる。意外と魔力より精神的に疲れるようだった。

「クヨウさんの能力が段々反則染みてきてるよね・・・あ、最初からかな？」

「ん、それでも数年間、毎日鍛えてるんだからそれくらいのメリツトがあってもいいんじゃないかな？」

「それは・・・確かにそうかもしれないね。そういえば、レンヤさんは無事でいるかな？そろそろSランク位に強くなつてるといいんだけど」

「どっかで、適当に何かやってるんじゃないかな？そういえば、レンヤって才能あるの？とりあえず、身体能力だけでもかなりになるはずだけどさ、技術もないと上には上がれないんでしょう？」

「レンヤさんは結局経験が足りないだけだからね、それを補えれば私よりは強くなるはずよ」

「まあ、僕からしてみればどっちも強すぎてよくわからないんだけどね」

「何言ってるの？クヨウさんも実のところAランクの実力はあるわよ。魔法具を使いたい放題にしたらSにもなれるんじゃない？」

実のところ魔法具の能力はすでに一般レベルを超える物が作れる。ちょっとした訓練をすればクヨウも実はSランクもそう遠くはないのだった。クヨウ本人はその自覚が全くないため、少々啞然としたが、一番最初に能力を貰ったときに考えてたことがやっとできるとなると、乗り気になってきていた。

「ん、そうだな・・・ちよっと指輪とかそろえてみるかな・・・



」

「クヨウさん？今度は何をやる気？」

「ん〜とね〜……………ってことをしようかね。一番最初に考えたことなんだよ」

「完全に反則レベルね。まあいいけど。良さそうな物があつたら、私にももらえる？」

「ええ、いいですよ。そこまで数は増えないでしょうし」

指輪やその他につける能力は現地で調整しつつ、つけることにしたその日は何か面白い能力はないか考えて終わっていった。

次の日……………

「え〜と……………サクラさん？これ簡単な依頼なんですよね？」

「そつよ？みるからに簡単じゃない？」

「僕からしてみれば強敵が沢山いるように見えるんですけど……………」

「強敵？唯の雑魚モンスターじゃない、余裕よ余裕」

クヨウとサクラは朝早くにギルドへ行き簡単な依頼を受けたはずであった。少なくともサクラはそうである。しかし……………

「リザードマンは普通に強いですよ！こいつら倒すのはAランク以上ですよ！」

「大丈夫大丈夫、クヨウさんならいけるって」

依頼を選んだのはサクラである。Sランクであるサクラにとっては、リザードマン等は雑魚と変わらないが、Aランクにもなっていないクヨウにとってはかなりきつい相手である。サクラは平然とリザー

ドマンと戦っている。3対1だろうが4対1であろうが差ほど変わらないくらいだ。それに対し、クヨウはなんとか逃げつつスピッドファイアで応戦している。刀を使う余裕はなかった。しばらくしてリザードマンはほぼ全滅。7割をサクラが倒し、2割をクヨウが倒した。残りは逃げてしまった。

「依頼は完了、どう？クヨウさんだつて無傷じゃない」

「はあつはあつはあつ・・・余裕どころか、こっちは・・・必死・・・ですよ・・・」

「うん・・・ちよつとやりすぎかな？」

クヨウは「ちよつとじゃない！」と反論したいところだったが、生憎息を整えるので精一杯であった。

「仕方がないなあ・・・あ、私はその刀を使えばよかつたのか・・・ねえクヨウさん、私でもその刀使える？」

「ふう、え？あ、使えますよ。魔力量が足りなくなるかもしれないが、やってみますか？」

「うん、使ってみる。使い方を見せてもらってもいいかな？」

クヨウは口で説明する前に一度何もないところで実演してみる。

「いきますね・・・」つばめ返し』！

クヨウが刀を振ると同時にもう一本斬撃が起こった。普通ならあり得ない現象だった、事実サクラはかなり驚いている。

「クヨウさん？今どうなつたの？なんか、同時に2回斬つたよね？」

「本当なら3回同時攻撃なんだけど、2回しかでなかつたか、失敗だな・・・わかりやすくいうと、3方向からの同時攻撃です。

ゲームの中では多重次元屈折現象って言ってたかな？元は技だから

なあ、使っている武器が名刀とはいえ素材が鉄だからいけると思  
ったんだけどなかなか上手くはいかないね」

「それでも十分強いんだけどね・・・素材、か・・・此花咲夜で  
やったらできるかな？」

「できるかもしれないけど、最悪刀がダメになっちゃうよ？」

「まだ確証がないから無理か？」

「残念だ」とサクラが言っているが、どことなくあきらめた様子  
はない。元々やる気がないので、確証ができたらやるつもりのもどち  
らかであろう。この後、クヨウが持ってきたアクセサリーに戦闘用  
の能力を付加してサクラとの模擬戦を延々と繰り返しくヨウが死に  
そうになっていた。

### 第32話「現状把握」（後書き）

つばめ返しはできるようにしてもよかったですけどね、どうもチートにはしたくないので、完全にはできないくらいにしておきました。

正直能力はリスクがあつてこそ効果が上がるイメージが強くて、ノールスクはあまりしたくはないですね。ギャグ補正は別です。

次からまたストーリーを進めようと思います。

闇の皇子様感想ありがとうございます。おかげでいいネタを思いつきました。

では、次回をお楽しみに

### 第33話「幻獣」(前書き)

なんというか、勢いとノリだけで書く予定だった内容とえらく変わってしまいました・・・

予定通りに書くのって難しいですね・・・

### 第33話「幻獣」

#### 第33話「幻獣」

ラングランを出て早1ヶ月ほど、クヨウ達はグランパレス国とムーミンライージュ国の国境沿いの街に来ていた。ここで手続きをして関所を通過しないと不法侵入になってしまうからだ。最も今は魔王関係で戦争に近い雰囲気になっているとはいえ、現在の各国間の関係は別に悪いものではないので、少々面倒な手続きがある程度である。ハンター等は特に必要ないのだが、商人はお金に関わることもあり、こういう手続きをすることになっている。

しかし、商人にとつては不利な条件ばかりではない。関所のある街にはどうしても商人が一時的にとはいえ必ず集まる。故にここでもかなりの物流が発生し結果的に1つの流通拠点になっている。なので、ここでもそれなりに商売ができるので、国境を越えない人も集まるようになるのだった。

また街の構造も少し変わっていて、関所の門を中心に左右に大きく分かれている。グランパレス側とムーミンライージュ側で町並みが激変する。意図してそういう作りになっているので、門を通過すると別世界にきたかのような錯覚を起こすのだ。

「へえ、話には聞いていたけど、結構大きい街なのね」

「あれ？サクラさんは来たことないの？」

「ハンターは国境を越えるのに手続きはいらないから。わざわざ関所を通るより、近いルートがあるのよ」

「まあ、たしかにそっちのほうが簡単だね」

最初にクヨウ達は商人ギルドへ向かう。ここで街道の情報や、危険情報等を仕入れておかなければならないからだ。立ち入り禁止区域

等があつた場合はそこを避けなければならぬ。下手に立ち入ってしまうと、罰則が適用されてしまう。今回はそうした危険な情報は特になかったが、1つ奇妙な情報が回されていた。それは今まで見たこともないような動物の報告が多数あつたのだ。人を見ると逃げるので、モンスターと違い危険性はない。なので、ギルドのほうでは特に重要視はされていないが一応気にはしているらしく、ギルドからの依頼も「無傷で捕獲」と出ていた。

「無傷での捕獲ね、随分と難しそうだ。その割には安いけど・・・」

「危険はないけど、何かあつた場合は大変だからね。こういう依頼は労力に報酬が合わない場合が多いのよ」

「まあ、僕らにはあまり関係のない話だね」

一応ハンターのランク持ちとはいえ、一端の商人であるクヨウにはあまり関係のないことだった。動物を売買していれば話は変わったのであるが、クヨウにはそのつもりはない。

商人ギルドを出る頃には夕方近くになっていたので、この日は宿をとって早目の休憩になった。クヨウ達の移動は徒歩のため、疲れをとておかないと次の日に影響が出てしまうのだ。普通商人は馬車で移動するのだが、改良した「異次元バッグ？」のおかげで荷物は全て手持ちで移動できるのである。

ちなみに、「異次元バッグ？」は初期のバッグを更に小型化させて見た目は完全なショルダーバッグである。中は4m四方の空間になっているので、荷物は完全に収納可能であつた。またこのバッグはまだ市場に出回ってはいないのである意味希少品でもある。

次の日、特に問題もなく関所を通過する。門を通過した2人は例に漏れず驚いていた。

「おう、話には聞いていたけど実際にみると違うね」  
「ムーンミラージュには何度も行ってるから、町並みには慣れてい  
るんだけど・・・ここまで一気にかわると流石に驚くわ」

とりあえず、気を取り直しこちら側でも宿を取る。明日からの旅の  
準備と街の見学のためである。

「随分徹底してるのね、食べ物も完全にムーンミラージュのもの  
になってるわ」

「なんかもう、完全に観光地になってるよね」

周りを見ると結構一般人が多い。2カ国共同の観光地にでもしたい  
のであるうか？そんな疑問も沸いて出てくる。その後、特に問題も  
あるはずもなく普通に街を見て回る2人だった。

「ん？」

ふと、クヨウは何かに気付き、路地のほうを見る。そこには何もな  
かった。

「どうしたの？クヨウさん」

「え？いや、その路地で白い物が動いたような気がしたんだよ」

「・・・何もいなさそうね」

「多分気のせいかな」

改めて路地を見ても特に何もなく、忘れてそのまま街を見て回る。  
クヨウ達が過ぎ去ったあと、路地には白い動物がクヨウの方向を見  
ていた。



夕食後、宿に戻ったクヨウ達は部屋に戻るとサクラはそのままクヨウの部屋へ行く。サクラの荷物も異次元バッグ？1個なので、部屋に特に置いてある物はない。

「ん〜、見事に食べ過ぎたね・・・」

「でも、あの店美味しかったからね〜。そういえば、ムーンミラージユ国は何処までいくの？首都まで行っちゃう？」

「必要があれば、だね。魔法具技術が最先端とも言われてる街だから、一度は行ってみたいしね」

「じゃあ、もう行くのは確定ね」

「サクラさんは行きたい場所はないんですか？」

「私？う〜ん、元々ハンターで旅して一通りは回ったからね〜。

あえて言うならヨーゼフさん？だっけ？のいる街には行ってみたいかな」

「あ〜、一度ヨー爺（ヨーゼフの愛称）のところにもいかないとね〜。連絡してあるから心配はしてないだろうけど、久々に顔もみたいしね」

その時であった。コンコンとドアがノックされる。

「???はい、なんでしよう？」

クヨウが返事をするが、何も応答がなく、サクラは瞬時に戦闘態勢になる。少々遅れてクヨウもスピッドファイアを構える。依然ドアが定期的にノックされているので、誰かがいるのは確定であるが何が目的かはわからない。クヨウが扉の前に進もうとした所をサクラが手で止める。そのまま先日作った通信用魔法具での会話に切り替える。

『クヨウさんはそのまま壁を背にして、扉に向かって構えてて。私

が扉を開けるわ。間違っても扉の正面には立たないでね。合図したら撃っちゃって」

『了解、合図は任せるね』

流石にサクラのほうが場慣れしており、的確な指示をクヨウに出す。クヨウもサクラのほうが経験、実力共に上回っているのは十分承知しているので指示に従う。そして、いつ戦闘になってもいいようにいくつかの戦闘補助用の魔法具を発動させ待機する。

サクラが扉の横の壁を背にして、ドアを勢い良くあけると、そこには誰もいなかった。

「あれ？」

一瞬気の抜けたクヨウだったが、サクラが通信で直ぐに注意する。

そのあと2人で廊下を見ても誰もいなく、ホッと一息入れドアを閉めようと部屋の中に向いた時であった。

「な！？」

「え！？」

ベットのの上に白い狐のような動物が座ってクヨウ達を見ていたのだ。見た目は白い狐だが、良く見ると純白ともいえるべき毛皮を纏い体の左右に顔から尻尾の先まで一本の青い横線が入っており、尻尾は3本ある。そして目が青い。

クヨウとサクラは一気に緊張し、構える。何故ならいつ部屋に入ったのがまったくわからなかったのだから。窓が開いていないので恐らく扉を開けた時に入ってきたのであるが、あの瞬間ドアの外を注視していた。にもかかわらず部屋に入ったことさえ気付かなかった。

この動物がその気ならクヨウもサクラでさえも生きてはいないであ

るう、なので危害を加える気はないのかもしれない。しかし、まったく安全というわけでもない。正体不明の動物が放つ威圧感に、クヨウは今にも逃げ出したい衝動に駆られるが、なんとか冷静を保ち動物を見る。そしてふと思い出す。路地で一瞬見えた動物はこいつだったのでは？と。

一方サクラはどう対応しているか、決めかねていた。ここまで実力差がはつきりしていると、襲われた瞬間に2人ともやられるのが目に見えている。かといって、サクラとしてはクヨウだけでも逃げたいが、頼んでもクヨウは逃げないだろうし、下手をすると逃げられるから仕留めにかかる可能性もある。

自分がなんとか抑えられればいいが、どうにもできる自信がない。不甲斐なさに泣けてきそうにもなるが、今は目の前の動物に集中するしかなかった。

そして、2人にとっては長い数分間の硬直状態が続き、先に動いたのは動物のほうであった。

「ほほう、ここまで動かないのは珍しい。じゃが、なかなか見込みがありそうじゃのう」

動物が威圧感を解いた瞬間喋りだしたのでクヨウもサクラは一瞬混乱する。そのあと2人揃って・・・

「「しゃべった!?!?」」

「ん?なんじゃ?ワシがしゃべるのはおかしいのか?」

「いえ、でもまさかしゃべるとは思わなかったので・・・」

「貴方は一体何者なの?」

クヨウは若干警戒を解いたが、サクラはまだ警戒を解いていない。まだ、この動物の真意が見えてないからだ。

「そう構えるな・・・といいたいところじゃが、警戒させたのはワシのほうじゃからのう。まあよい、そのまま話を聞いてもらうのだが・・・」

動物はそのまま部屋の中に結界を張る。防音らしく、外には聞こえて欲しくないようだった。

「ワシは一般には幻獣と言われておる存在じゃ。お主らを取って食うつもりはないから安心せい」

一般的に幻獣に関しては基本的に分かっている事が多く、一部の人には御伽の存在ではないかとも言われている。しかし、歴史の節目などに目撃されて、場合によっては助言や予言を受けることもある。文字通り、『幻』のような存在なのだった。

「・・・そうね、貴方がその気なら私たちはもう死んでるし、信用しましょう。クヨウさんは？」

「僕も信用するよ、動物がしゃべるのは人以外だと初めて見るし。そういえば、ここ数日目撃されてた白い動物は貴方ですか？」

良く見るとかなり綺麗な毛並みだ、抱きしめると気持ちいいかな？とサクラが思っていたりもする。

「ふむ、そりゃ恐らくワシじゃな。まずは自己紹介しておこうか。ワシの名はトワという。ハクメンコウ白面狐光という種族じゃ。もっともワシ以外では2、3匹しかいないがのう」

「僕はクヨウ・キサラギです」

「私はサクラ・イザヨイよ。それで、トワさんは一体何のご用件ですか？」

流石にサクラも警戒を解いてはいるが、さつきとは別の意味で緊張している。話にしか聞かない、しかも御伽のような存在が目の前にいるのだ。緊張しないはずがない。

「ワシの要件は簡単じゃ、その男を見に来ただけじゃよ」

「……僕ですか？なんでまた？」

「異世界よりの訪問者じゃ、それに『引き鉄』になった奴が気になるの」

「あゝ、『引き鉄』ってどういうことですか？」

「ん？なんじゃ、管理者からは何も聞いてないのか？」

そついわれて、この世界に移動したときの事を思い出し……完全に忘れたようだった。

「そんな、数年前のことを言われてもなあ……ん、たしか……暇だとか言ってたような？」

「随分適当なのね、その管理者って」

「暇か……あながち間違っていないのじゃが。まあ、当たらずとも遠からずって感じじゃな」

「8割合ってれば合格でしょう？」

「クヨウさんテストじゃないんだから……」

クヨウのずれた認識に、サクラとトワが呆れる。しかし、流石に数年前の会話を覚えているのは難しいので、仕方がないと思うことにする。

「まあよい、速い話お主は池に投げ入れた小石じゃな。普通なら波纹が少し広がってそこで終わりなのじゃが、生憎その池は莫大な広さと微妙なバランスので成り立っていたのじゃよ」

「つまり、管理者はクヨウさんを世界に招き入れることで何かをしようとしているの?」

「それは違う、何故ならもう起こっておるじゃろ?色々とな」

ほっほっほと笑う白い狐は若干シニールな絵になっていたが、クヨウとサクラは気にしないことにする。何故なら妙に似合っただけからだ。それはともかく、トワのいうことが本当なら、最近の異常等はすべて管理者の仕組んだことということにもなるが、管理者がそこまでやる理由が分からなかった。暇つぶしといわれれば、そこまでののだが、暇つぶし程度でそこまでするかどうかは疑問に思うところではある。

「僕が全ての原因ということになるんですか?」

「ふむ……それはちと違うのう。お主はあくまで『切欠』であり『原因』ではないのじゃ」

「え〜と、何が違うの?」

クヨウもサクラもイマイチわからなかった。しかしクヨウは、とりあえず最近の異常が自分のせいではないということだけでも一安心だった。

「まあよい、最初から話そう。数百年前、この大陸全土を巻き込む戦争が起こった。エルフやドワーフ等の種族が連合した人と魔王との戦争じゃな。侵略戦争というか、生存競争というべきかはわからぬが、勝ったのは人のほうだった。

しかし、戦争は1000年単位で行われたためどの種族も疲弊しておった。人、動物問わずじゃ。その戦争を教訓に各国の長は平和への協定を結び国力や戦争の傷跡の回復に努めていったのじゃ。しかし、もう1つ疲弊しているものがあつた。それは世界じゃ。長い戦争で世界も疲弊しており、そのせいで限りない平穏を望んでしまったの

じゃ。

通常、世界は平穩を望んでいるが、それは弱肉強食などのバランスの取れた平穩じゃ。そうでもしないと世界自身が退化してしまうので。じゃが、限らない平穩を求めなければならぬほど世界は疲弊しており、世界中で平和な状態になった。

その状態が200年くらいかのう？続いたのじゃが、世界は一向に動く気配がなかったのじゃ。世界自身は既に回復しておるし世界中ですでに戦争は過去のものになっている。戦争の傷跡も癒えているのだが、世界は変わらず限らない平穩を望んでいた。

いや、限らない平穩に慣れてしまいそれが普通になってしまったのじゃ。そのままいけば世界が退化してしまう、世界の退化は世界の滅びと同義じゃ。故に、管理者がお主をこの世界へ招きいれることよって刺激を与えて、変化を促したのじゃ」

クヨウとサクラは驚きすぎて声を出すどころか、動くこともできなかった。まさかクヨウ達がきたのにはそんな事情があるとは思わなかったからだ。最初に言った『暇』の意味がここに来て漸く理解できる。しかし、まさか『暇』の意味の中に世界の滅びの危機なんてものがあるとは普通は思わないだろう。

「ふう、久々の昔話も楽しい物じゃ。すまんが茶をもらえるか？咽が渴いての」

「え？あ、はい。ちょっとまってくださいね」

クヨウは手早く3人(?)分のお茶を用意する。勿論、瞬間湯沸かし器でお湯を用意してから茶葉でお茶を入れる。瞬間湯沸かし器はクヨウの作った魔法具で、温度調節から、文字通り1秒にも満たない時間で冷水をお湯にできるクヨウの自信作である。

「うむ、うまい。しかし、なかなか面白い道具じゃの」

「僕の自信作ですからね。リュミエールに戻ったら売り出す予定ですよ」

「ほう、便利じゃのう……こんな機能まで……」

世界の話より、瞬間湯沸かし器の話で盛り上がるクヨウはやはり所帯じみている。サクラも「まあ、確かに便利なんだけどね」と先程の驚きが冷めてしまい、完全に脱力していた。なんとなく「他に盛り上がる話題があるでしょう」と突っ込みを入れたくなったのは気のせいではない。

「お主なかなか見所があるのう。しかしなぜ、その力を武器にしないのじゃ？」

「武器に？」

「うむ、効果を限定的にして便利道具にしているが、やりようによっては凶悪な武装にもなるはずじゃ。なぜそうしないのじゃ？」

「僕の世界では……特に僕の住んでいた国は基本的に平和なんですよ。なので、人を殺すどころか動物を傷つけるのもしない人たちはばかりですし、そういう教育をしています。」

こちらの世界とは常識事態が違いますからね。でもまあ、強力な武装がないわけじゃないんです。それこそ爆弾一つで国が吹っ飛ばすこともできます。もし、あっちの世界で世界的な戦争が起きた場合は「世界の滅びになってしまふんですよ。そのイメージが強いのであまり派手な武器は作りたくはないですね」

サクラはそれを聞き驚く。サクラの知っているクヨウはモンスターや盗賊なら普通に撃ち殺している。こちらの世界ではある意味聖人とも非常識人とも思えそうな人間ではない。

「でも、クヨウさんは普通に戦っていたじゃない？」

「ん、あれはヨー爺の教育の賜物だね。流石に初めて人を殺した



時は吐きもしたし、悪夢でうなされた事もあつたよ。でもまあ、慣れ・・・と、あとは覚悟のおかげかな。それでもレンヤと2人で散々苦労したんだよ」

「そうなんだ」

「ほっほっほ、殺しを慣れるとはお主もなかなかの外道じゃのう」

「別に奇麗事を並べるつもりはないですよ。ただ僕はこの世界で生きる覚悟をしたんだ。自分の身や大事な物を守るためなら殺しも厭わないよ。まあ、進んで人殺しをするつもりもないけどね」

クヨウも別に後ろめたいことはないので、当然だと言い張る。国が変われば法が変わるし、人が変われば常識が変わる。それに適応しなければ、生きていくのは不可能である。だから、それに適応していった。つまりはそういうことである。

「いい目じゃ、うむ気に入ったぞお主。あゝ、クヨウと言ったなお主の名は覚えておこう。ワシはなこの近くの山に中腹に住んでいる。気が向いたら遊びに来るといい歓迎するぞ」

「近くの山???.もしかしてエルスン山脈のこと???.広すぎよ！中腹なんて適当に言われてもわかるわけないじゃない」

エルスン山脈はグランパレス国とムーンミラージュ国の国境にもなっている山脈で、この世界でも有数の高さを誇っている。つまり、『山の中腹』程度の説明で動物の棲み処を探し出せるほど狭くはない。

「む、そういえば人間には無理じゃったか。ではこの石をやるう」

そういつて、トワの前に勾玉らしき綺麗な純白の石が出てきた。

「この石を持って山の麓へ来るといい。ワシの住処へと辿りつける

じやろう」

「へ、綺麗な石ね」

「なんか、不思議な感じの石だね。まあ、首飾りにでもしておこうかな」

クヨウはそのまま、勾玉を首飾りにつける。

「ついでに、これもやろう」

クヨウの目の前に不思議な銀色の玉が現れる。直径10cm程の大きさの真球であった。

「これはなんですか？」

「それはワシら白面狐光の卵じゃ、お主の魔力を吸って大きくなるじやろう。持ち主の魔力によって性格と多少だが体の模様が変わるからのう。どんな子が生まれるか楽しみじゃわい」

「「ええ~~~~~!!!!!!」」

クヨウとサクラが驚くのも無理はない。いきなり幻獣の卵を渡されたのだ、何処の国でも国宝扱いされるほどの物である。先程トワは「ワシ以外には2、3匹しかない」と言っていたので多くても4匹しかないのだ。扱いも自然と丁寧になる。

「随分とまあ・・・なんというか、大盤振る舞いですね」

「それだけクヨウを気に入った、ということじゃよ。では、そろそろお暇するかの。もういい時間じゃし、いつまでも2人を邪魔するのも悪かろう」

「へ？」

「え!?! ああ、いやその・・・」

クヨウとサクラの顔は一瞬にして真っ赤になる。

「ほっほっほ、なかなか初心でよろしい。しかし、今日くらいは大胆になってもいいんじゃないかろう？ほっほっほ」

完全にトワにからかわれている2人であった。その後散々いじられ、トワが帰った後は完全にお互いを意識してしまいどうにもならなくなっていた2人が残されていた。

### 第33話「幻獣」(後書き)

今回は結構なネタバレになってます。もっと後にする予定でしたが・  
・・そこはノリでつい・・・

ちなみにこの後の2人の行動は皆様の豊富な想像力にお任せします。

では、次回をお楽しみに。

第34話「増える謎と疑問」(前書き)

最近忙しくてなかなか執筆する時間がないです>>

なんとかがんばらねば……

### 第34話「増える謎と疑問」

第34話「増える謎と疑問」

トワが来た次の日、クヨウとサクラは町を出て、ムーンミラージユ国の町へ向かった。

「それにしても、昨日は本当に驚いたわね。幻獣が出てきたと思ったら卵まで貰っちゃって……」

「しかも、僕らは何も質問できなかったしね」

クヨウとしては聞きたいこともあったのだが、トワがあっさり話を打ち切ったので質問することもできなかった。

「そういえば卵のほうはいつ孵化するんだろう?」

「そこは気長に待つしかないんじゃないかな? 卵は今もってる?」

「うん、ここに」

そういって、クヨウは卵を取り出す。よくよく見ると薄く青がかっていて、綺麗だった。

「本当に綺麗な卵よね。流石は幻獣の卵か……」

「生まれたら僕らが親ってことになるのかな?」

「そうね、私たちが……親?……っていうことは夫婦?」

「どうしたの? サクラさん?」

若干想像が暴走してしまい、思考停止に陥るサクラだった。後半部分はクヨウには聞こえておらずクヨウは頭を傾げるだけだった。

街を出て数時間、そろそろ夕方になるうかという頃に、奇妙な一団を見つけた。商人とその護衛だと思われる人達が全身白装束の集団に襲われているのだ。盗賊はそんな格好はしないが、体のシルエツトから判断すると少なくともモンスターではない。しかも、かなり連携が取れているらしく護衛は身を守るどころか、時間を稼ぐくらいしかできなさそうであった。

「クヨウさん！ここから狙撃を！私は彼等の援護に行きます！」  
「了解、気をつけて！」

まだ100mほど離れているが戦闘補助用の魔法具を使えば狙いが外れることはない。クヨウがそのまま狙撃で3人ほど倒す。白い集団が狙撃に気付くと、驚くほど早く全員散開し、クヨウを見つけると全員揃ってクヨウへ向かって走ってきた。

「嘘！速いな・・・仕方がない・・・」

クヨウは倒すことは諦めて、足止め用の薬莢に切り替える。風の属性の薬莢で、弾速が速く当たれば10秒ほど、その場に拘束することがができる。そのまま、数人拘束し更に連射する。そして、そこへサクラが切りかかる。謎の集団はサクラの危険度を認識し、残りの10人ほどがサクラへ向かって行った。

「狙い通りね。さうて、かかってらっしゃい！」

10人同時に相手をするのは流石のサクラもきついのだが、クヨウの牽制と拘束で実質2、3人ずつでしかサクラを襲えなかった。そして、30分も経つ頃には白い集団は全滅した。

「サクラさん大丈夫だった？」

「うん、大丈夫。クヨウさんもなかなかできるようになったじゃない、結構助けられたわ」

「魔法具のおかげだけどね」

クヨウは以前に戦闘用魔法具を作った際に、サクラと戦闘時の連携等の訓練もしていたのだ。遠方で敵を見つけた場合、索敵をしつつ超遠距離からの攻撃をする。その間、サクラがクヨウの護衛になる。近距離であった場合は、クヨウは一気に距離をとり、遠距離からの支援攻撃へ移行する。サクラはそのまま敵と戦いクヨウの方へは行かせない。クヨウの支援攻撃も弾速と拘束を重視した薬莢を使用することで、サクラの安全性を高める。しかも、サクラはその弾を無効化させる魔法具を装備しているので例えサクラに当たろうとも、何も問題はないのである。

「さて、彼らは無事かな？」

「あいつら、一気に仕留めようとはしてなかったから無事・・・とはいかないまでも重傷者は少ないはずよ」

そのまま、2人は商人の一団へ向かった。

「大丈夫ですか？」

「君らか、俺たちを助けてくれたのは。助かった、本当にありがとう」

「流星にあの人数での奇襲は厳しかったな。1人1人はたいしたことないんだが、連携がうまいんだ」

彼ら雇われているハンターも実力がないわけではなかった。1対1なら相手を圧倒していただろう。しかし、多勢に無勢、4人で20人近くを相手にするのは厳しく、奇襲までされては彼らもなすすべがなかった。



「奴らは何者だったんですか？」

「わからない、奴らはいきなり襲ってきたんだが、何も言葉を発しなかったんだ。無言で連携が取れていたのはすごいんだが、何か妙な感じがしたな」

「おい！これを見てくれ！」

ハンターの1人が彼等の仮面を取ってみたのだが、そこに顔がないのだ。細かく言えば、目や鼻や口が一切ない。のっぺらぼうのようなやつらだった。

「口がないんじゃない……しゃべれないね……」

「とういかなんなのこいつら？」

「わからないな……実際何を目的に俺たちを襲ってきたのか……」

「俺はそんなに危ない品は扱ってない。金目的なら納得もできるが、こんなやつらが金を目的にするのか？」

色々と推測はできはするが、結局結論はでない。一応念のためということで、全員の顔を確認したが全員同じ『顔』をしていた。流石にそのまま放置しても気持ち悪いので、街道から少し避けたところへ集めておく。そうすることで、警備の巡回が気付き回収もしくは片付けをしてくれるのだ。

「君らはこれから何処の町へ行くんだい？」

「僕らはオットーゼの町へ向かう予定です」

「そうか、なら一緒に行かないか？彼らも少なからず怪我をしていてね、戦力が少しでも多いほうがいい」

「構いませんけど、私はあくまでクヨウさんを第一に守りますからね」

「それは構わないさ。俺も恋仲をどうこうするつもりはないからな。ようは共同戦線を張ろうということだよ」

「なるほど、ではそうしましょう」

一応クヨウは自分が商人であることは隠す。幸いハンターでもあるので嘘は言っていない。商人であることを話すと自動的に異次元バツグ？の存在を明かさなければならぬ。元道具屋リュミエールの店長だと、今はあまり知られたくないので2人組みのハンターだということにしたのだ。ちなみに、クヨウとサクラのランクを明かすと護衛のハンター達は自分を仲間に入れてくれと頼んできたのは別話である。

そのまま彼らと一緒に移動する事になったクヨウとサクラであったが、それ以降は特に問題もなく無事オットーゼの町へ到着した。彼らと別れたあと、商人ギルドへ向かう。そこで情報を手に入れるのだが、今回はかなり重要な情報があった。

クヨウ達が行商へでるそもその原因になった魔王なのだが、各国連合の軍隊とほぼ五分状態になっているらしい。内情は、魔王の作った要塞へ軍隊が侵攻してモンスター等を倒していく。そして魔王が現れるとそのまま撤退するのだ。その状況が1ヶ月ほど続き、今は睨み合いの最中だそうだ。

各国ともあまり犠牲者を出したくないので、こういう作戦になっている。魔王を倒すとすれば、それこそ各国共に総力を挙げなければならぬだろう。そうするくらいなら魔王の手下を削っていき、撤退させたほうが良いという結論になったようだ。

「完全な長期戦だね。まあ、変な攻め方をして全滅するよりはよっぽどいいけど」

「でも、魔王も何がしたいのかしらね。魔王がブルーシードの探索に出かけているだけじゃないわよね？」

「流石にそれはないと思うよ、しかも何かの組織を作ったって言うてたけど、ブルーシードには全く関係ないしね」

「それもそうね。あゝあ、いつになったらラングランへ戻れるのかな？」

「少なくとも、この戦争が終わってくれないとね。今戻っても軟禁か監禁されるのが目に見えてるし」

「帰ったら、また鍋パーティーしたいね」

「あゝいいね、みんな揃って鍋でもつつこうか」

ラングランへ帰れるのはいつになることやら・・・実はそう遠くないのだが、このときの2人は知る由もなかった。

そして、ひとまず宿をとる。数日は滞在するつもりなので夕食を楽しんでから眠るはずだったのだが、その予定はドアのノックと共に脆くも崩れ去る。

コンコン・・・

「来客ね」

「敵意はないみたいだから大丈夫かな。はい！どちら様ですか？」

「私、ムーンミラージュ国、魔道科学研究所の者です。クヨウ・キサラギ殿はこちらに泊まっておいででしょうか？」

また厄介ごとか・・・と内心がっかりするクヨウだった。

第34話「増える謎と疑問」(後書き)

なかなか收拾させるのが大変になってきたような？

ちなみに白面狐光の子供の名前はまだ決まってません。なかなかいい名前がないんです><

では、次回をお楽しみに！

第35話「兵器と平和」(前書き)

若干迷走気味になってます。

無事収束できる・・・といいなあ。

### 第35話「兵器と平和」

第35話「兵器と平和」

オットーゼの町の宿で、クヨウを訪ねてきたのはミラージュ国の魔道科学研究所の使者だった。

「ん、それでご用件はなんでしょうか？」

現在、クヨウの部屋で交渉をするつもりはなかったもので、食堂にきている。ここならば変なことにはならないであろうとの判断だ。

「単刀直入に申し上げますと、私たちに協力して欲しいのです。できれば所員になっていただけるとありがたいのですが、キサラギ殿はそのような申し出は全てお断りしているとお聞きしましたので、そこは考えておりません」

しかし、内容を考えるとどっちも同じようなものだろう。協力なら多少の融通をきかせられる、その程度の違いだ。

「協力とはどんな内容なのですか？」

どんな内容だろうと拒否するつもりだが、何を考えているのかを把握するためにあえて少しのってみせた。

「あまり……このような場所では言いたくはないですが……」

「つまり、危ないこと……ということですね」

「端的に言えばそうなってしまいますね。しかし、これは最終的に

世界の平和のためなのです」

「そういわれても、実際危ない行為なのでしょう？今の僕は行商をしています。そういうのにはあまり関わりたくはないですね」

半分旅行のような物なのだが、一応営業をしているので嘘ではない。ちなみに、サクラは話を聞いているだけで、口出しをするつもりはないので黙っている。

「わかりました、話せるところまで……ですが、お話ししましょう」  
向こうも、流石にこれ以上は交渉が進まないと判断したらしく、譲歩してくる。

「我々が研究しているのはある武器……いえ、兵器といったほうがいいでしょう、その研究です。対人ではなく、対ユニークモンスターといったほうがいいでしょう」

「ということは、最終目標は魔王ですか……」  
「そうなります。具体的な内容は言えないので、ここまでですが、どうかご協力をお願いできませんでしょうか？こちらが、契約内容になります」

クヨウも一応契約用の用紙に目を通す、流石にサクラも気になるのか一緒にみている。全て確認した上でクヨウが口を開く。

「ん、折角のお誘いで申し訳ありませんがお断りさせていただきます」  
「そんな……一応理由を聞いてもよろしいでしょうか？」

「早い話、兵器を作るための協力ですよ？僕は兵器を作るつもりはありませんので。それが理由です」

「しかし、世界の平和、安定のためですよ？それに対ユニークモン

スター用です。魔王を倒すための協力を何故拒むのですか？」

「対ユニークモンスター用ですか・・・尚更作るわけにはいかないですね。貴方たちとはどうも認識は違うようです」

「それはどういう意味ですか？」

流石にここにきて、この人物も言葉に怒気が混ざる。クヨウが平和の為の協力を何故拒むのかが全く理解できないからだ。しかも、対ユニークモンスター用の兵器しか作らない、平和の為だと言っているのに・・・

「貴方は対ユニークモンスター用だとおっしゃいましたが、その兵器は人にとっては無害なのですか？」

「どういうことですか？」

「兵器・・・まあ武器全般そうですが、結局向けた先の対象を傷つけるんですよ。対ユニークモンスター用兵器なんてもの、人にとって無害なはずがない。例えば魔王をその兵器を使用して倒したとしましょう。じゃあ、その兵器は全て廃棄されるのか？答えは否です。まずありえませんが、何故なら魔王を倒せるほどの優秀な兵器だからです。人が一旦身につけた力を放棄することはないでしょう。例えば人にとって無害な兵器であったとしてもいくらでも転用は可能でしょうから、どうにでもなります。平和のために兵器を作るのですか、その理念は否定するつもりはありませんが、人を傷つける可能性を『見てない』人達と作るつもりはありませんね」

いくらこの世界がクヨウにとってはファンタジー満載であろうとも結局は現実である。前の世界での可能性、経験はこの世界でも十分通用する。実際に目の前の交渉に来ている男も反論できずにいた。それと、クヨウには1つ疑問に思うところがあったのだ。この町へ来る前に商人を襲っていた白い集団。あれはもしかしたら兵器なのではないか？と。少なくとも目も鼻も口もない生き物が存在すると



は思えない。あれは生き物ではなければなんなのか？そう考えていたところにこの話である。魔道科学研究所が具体的に何を作っているのかは知らないが、あの白い集団も研究所が作った兵器である可能性がある以上それに加担するつもりはなかった。

「残念ですが、お引取りください。貴方ももう少し視野を広くすべきた、平和の為に兵器を作ることの矛盾に疑問を抱かないのだから」  
「わかりました、今回は諦めましょう」

男はそう言っ、頭を下げるとそのまま宿を出て行った。サクラは少し疑問に思う。例えば少し具体的過ぎないかと。

「クヨウさん、随分具体的に言っただけだと思います事があるの？」

クヨウも少し驚くが、隠すことでもないので訳を話す。

「僕のいた世界でね、世界戦争が起こっ、それを終わらせるために強力な兵器が使われたんだ。それは半径数km圏内は生物の存在を許さないような兵器。そして、戦争が終わっ、勝った国は何をしたと思っ？結局更に強力な兵器を作ったんだ。威力を数倍に高めた物をね。そして、世界の国々も負けじと研究が進められた。一応社会の為に転用できる技術ではあっただけど、そんな物が世界中に存在するようになっただ。『抑止力』といえは聞こえがいいかもしれないけど、結局は国家間の睨み合いだね。そして、そのうちこう囁かれる様になっ。『次に世界戦争が勃発したら、地上に人が住める場所はなくなる』ってね。その兵器は人も環境も破壊した上に毒まで撒き散らすような物だから、世界のバランスも崩すんだ。この世界までそんな状況にしたくはないでしょう？」

「そうね・・・それにしてもクヨウさんのいた世界は安全な場所かと思っただけど・・・結構物騒なのね」

「安全性は国によって違うよ、内戦がひどい国もあれば子供1人でお使いにいける国もあるし」

「世界が変わって人種が変わっても、人の性まではかわらないのね」  
できれば、あとは何事もなければいいなあ〜と思うクヨウだった。

そんな中、クヨウのポケットの中で少し動いている物があつた・・・

次の日・・・

この日、クヨウは営業に出ていた。一応行商人なので、赤字にするわけにはいかなかったのだが・・・

「なかなか売れ行きが悪いなあ・・・やっぱこれの値段が違ったのが痛いなあ・・・」

「時期によっても変わるからね〜」

ここに来る前に買った物の値段が時期の関係で変動しており、赤字覚悟で売るしかなかったのであつた。

「魔法具で辻褃を合わせたら駄目なの？」

「それはあくまで最悪の手段にしたいねえ〜、普通の道具は普通の道具の売り上げだけで黒字にしたいし」

通常の商品の売り上げを魔法具の売り上げでカバーはできるのだが、それをやってしまうと行商に出ている意味がないのである。クヨウ

としてはそこは譲れない一線でもある。

「ん、参ったな。・・・」

結局3日ほど粘ってはみたものの、赤字で終わった。

「難しいな、値段の変動までは気がつかなかったなあ。次の町でなんとかしてみよう」

「仕入れは大丈夫？討伐依頼ついでに薬草とか取ってくることもできるけど」

「そういえば、そろそろ薬草が足りなかったね、忘れてた。明日いってみようか」

「一応依頼は見てきたから、候補は絞ってあるよ」

「できるだけお手柔らかにね」

「クヨウさんなら大丈夫だって」

何度か討伐依頼を2人でこなしたのだが、全てAランクの依頼だった。Sランクの依頼は元々少ないので仕方がないのだが、クヨウとしてはBとかCランクの依頼にして欲しかったりする。しかし、そのおかげでクヨウはそろそろAランクになってしまおうのだが・・・

次の日・・・

「これもAランクの依頼？」

「でっかいのがある時点で間違いなくSね。これは追加報酬が期待できそうね」

「いや・・・僕としては難易度を下げて欲しいかな・・・」

クヨウとサクラは薬草関係を収穫するため、討伐依頼を受けた。討伐して安全性を確保してからゆっくり収穫するつもりだったのだが・

討伐対象は確かにAランクの依頼になるモンスターだ。そこは間違いないではない。問題は討伐対象と一緒にいるモンスターがどうみてもSランク対象になるモンスターなのである。

ロストティコアという名前で、巨大なライオンに3対の翼が生えたような外見をしており、瘴気の影響もなく知能をもっており、魔法を使う厄介なモンスターである。ちなみに、本来の討伐対象のモンスターはミミガルンというワーム型のモンスターである。物理障壁を張って突進してくるが、側面からの攻撃に弱い。なので、慣れれば簡単に倒せるモンスターだ。ただし、今回は3匹討伐することになっている。

「ロストティコアにミミガルン3匹ね。なかなか厄介な組み合わせだけど、どうしましょうか？」

「空にロストティコアで、地上はミミガルンだね・・・双方を引き離すしかないよねこれ」

「じゃあ、クヨウさんはミミガルン3匹を攻撃して。引き離したらちやっっちゃと倒してね。私はロストティコアをなんとかするから」

「3匹同時か・・・というかサクラさんは大丈夫？あいつも相当強そうだけど・・・」

「久々のSだから張り切っちゃうわ。大丈夫、全力でやればまだなんとかなる相手よ」

細かい打ち合わせをしてから、クヨウがミミガルンに攻撃する。ミミガルンは単純に攻撃したクヨウを見つけて突進していった。ロストティコアも一緒に行きそうになったが、サクラが攻撃し引き止め

る。

「さてと……ここまででは完璧ね。さてテートの準備はよろしくて？」

ロストティコアもサクラが危険だと認識する。そしてSランクハンターの戦いが始まる。

一方クヨウはというと……

「よっと……おっと……うわっと……」

魔法具で瞬発力とジャンプ力を高めているので、ミミガルの突進をかわせてはいるのだが、何分相手は3匹もいるので結構苦戦(?)していた。

「ん〜まあ、セオリー通りにやりますかね」

3匹の動きを把握しつつ、側面に銃撃を加えていく。ミミガルがいくら3匹とはいえ、連携ができていないので回避に重点をおいておけばそうそうやられることはない。まして、それなりの大きさがあるので的は大きい。適当に撃つてもあたるくらいだ。

「それにしても、タフだね……少し疲れたな」

既に10発以上撃ち込んでいるのだが、あまり影響が見られない。スピッドファイアの攻撃は威力はあるのだが、あたりが小さいためあまり大きいダメージにならないのだ。

クヨウは薬莢を変える、変えたのはミスリルの薬莢だ。この薬莢は数秒溜めの時間を必要とするが、6発まで連射可能であたりも大きくかなりの威力になる。

「これで、なんとか、なるかな」

クヨウはミミガルの攻撃をかわしつつ一発ずつ丁寧に打ち込んでいく。10分ほどでミミガルを3匹仕留めることに成功する。

「ふう、なんとかなったなあ。さてサクラさんの援護にいかないと」

ダメージは受けていないものの、魔法具を使ったことによる反動でかなり疲労感があるがロストティコアと1対1で戦っているサクラを放っておくわけにもいかないの、急いで援護に向かう。

クヨウはサクラの援護へ向かい、現場を見て啞然とする。一言で言えば『レベルが違う』そんな思いをクヨウは抱いた。

「ハッ！・・・ハアアア！」

「ガアアアア！！！」

ロストティコアは体に似合わない素早いステップと爪による攻撃、魔法も交えてひたすらサクラを狙い続ける。しかし、当たらない。サクラはそれ以上のスピードをもって回避し、攻撃する。サクラも無傷ではないが、かすり傷が体のいたるところにあるくらいだ。それに比べロストティコアは满身創痕で、翼も2枚切り落とされている。圧倒的であった。このときクヨウは初めてサクラの本当の凄さを知った。

「これって、援護いるのかな？」

援護攻撃するのが無粋に思えるように軽やかに戦うサクラを見てみると、まるで舞っているように見えてくる。クヨウが下手に攻撃するとサクラのリズムを崩しかねないような感じもしたが、何もしなという選択肢はありえない。薬莢を変えてクヨウは援護射撃を始めた。クヨウはロストティコアの動きを封じるために拘束用ではなく、あえて妨害用の薬莢を使った。魔法障壁はおかしなもので、攻撃関係は全て防ぐ。当然拘束も防ぐのだが、ゆるく体に負荷をかけるものは防がないのである。クヨウが使った妨害用の薬莢は、即効性はないものの、相手が気付かないような微妙な負荷をかける物である。ゆうなれば透明な紐を体に巻きつけるようなものだ。当然1発2発ではほとんど効果はない。しかし、10発20発と重ねるごとに少しずつ効果を発揮していく。気がついたときには強固な拘束具になっているという物である。

ロストティコアも最初はクヨウの出す音に警戒し注意をしていたが、風の紐など見えるはずもなく、まして何も効果がないと思えば牽制か、脅しと勘違いし無視するようになった。そして動きが鈍くなつて初めて気がつくが既に術中にはまっている上に動きが鈍くなると、当然サクラの攻撃の回数も増していき尚更どうにもできない状態になっていく。そして、最後はサクラに首を落とされて絶命した。

「うーん、本気で動いたのも久々ね。クヨウさん、援護ありがとう」  
「いえいえ、あまりいらないうような気もしたけどね」  
「援護が無かったらもっと苦戦してたわ。クヨウさんは無傷みたいね、もう十分Aランクじゃない？」

「全部魔法具のおかげだよ、明日は筋肉痛が酷そうだ・・・」

次の日、クヨウは歩くのに非常に苦労したそう。

第35話「兵器と平和」(後書き)

後半はほとんどおまけです。

Sランクハンターは強いんだよ、ってことがわかればいいなあと思  
ってます。

では次回をお楽しみに〜



### 第36話「光」(前書き)

リアルが忙しくて更新が遅れ気味ですいません。

今週はもつちちょっと遅れないようにがんばります。

### 第36話「光」

#### 第36話「光」

クヨウが筋肉痛でうなされてから数日が経った。最初は首都方面へ移動していたのだが、移動するにつれ魔道科学研究所をはじめとしたムーンミラージュ国の様々な研究所の勧誘活動が増えていった。最後は行商の邪魔になる始末である。流石にクヨウもそこまでして首都に行きたいわけでもないので行き先を変更し、ガチンコ連合方面へ向かうことにした。

「行き先を変更したから、しばらくは大丈夫だと思うんだけど・・・」

「流石にしつこくなってきたものね」

「少しは変装でもしようか。偽名も使えばなんとかなる・・・かな？」

「そうね、やらないよりはマシね。でも、変装道具なんてもってないわよ？」

「あゝ・・・あ、そうだ」

クヨウはバッグからある物を取り出し、そこに魔力を込めてとある能力をつけることにした。

ガチンコ連合国とムーンミラージュ国の関所の街に到着した、クヨウとサクラは何故かメガネをしていた。

「本当にこれで大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫。呼び名は全部偽名でお願いね」

クヨウはそのまま関所へ手続きをしに行った。その間サクラは外で待っているのだが、不思議なことにより視線を感じなかった。少し適当にぶらついてみるが、それでも視線はあまりない。確認が終わったところで、タイミングよくクヨウが戻ってきた。

「おかえり」

「うん、ただいま。どう？追跡はなさそう？」

「大丈夫みたいね。でも驚いたわ、こんなのも作れるのね」  
「漫画のネタだけどね」

クヨウがメガネにつけた能力は認識障害であった。某漫画に出てきた物と同じ能力である。

「さて、宿でもとろうか。今日はゆっくりできそうだ」

「そうね、ク・・・じゃなかったルミナスさんもお疲れだろうからね」

「あはは・・・」

筋肉痛は既に治っているが、体力はまだ全快していないクヨウだった。ちなみに、クヨウはルミナス、サクラはリコという偽名にしてある。

そのまま宿で部屋を取り、2人は休憩がてら荷物の確認などを行う。

「目録通りだね、まあ順調なほうかな」

「でも、これで生活していくのは難しいわね。収支がなんとか黒字でも、ぎりぎりラインだし」

「やっぱり普通の道具屋が一番ってことだ。とっとと戦争が終わってくれればいいんだけどね」

「魔王をどうするか・・・よね。そこをどうにかできないと、結局意味がないし」

国家間の連合軍は未だに魔王に対して有効な手段をもっていない。最終的には数で押し切るのかもしれないが、犠牲が多く出る。その犠牲を連合軍は嫌っているため終結の兆しが見えないのである。

「そもそも魔王も何がしたいのかな？世界樹にブルーシードがあるなんて結局噂レベルだし、有力視されているけど戦争起こすほどの動機にならないよね」

「それともつと別の目的があるのかもしれないわね、何れにせよ私たちにはどうすることもできないのだけどね」

「僕は一般人は普通に暮らしてればいいんだよね」

「クヨウさんは一般人じゃないと思うわよ、クヨウさんの魔法具はどんどん性能上がってるし」

専門家の間ではすでにクヨウは天才魔法具師として扱われていたりもするが、本人はそれを知らない。

「僕は一般人だよ。地位や名誉なんて興味ないし、ほどほどに平穩に暮らせればいいんです」

「きゅ〜〜〜」

「え〜、やろうと思えば戦争だつて起こせるわよ」

「きゅ〜〜〜」

「ん？さっきから何か聞こえない？」

「ほんとね・・・なにかしら・・・」

「きゅ〜〜〜」

ふと机の上を見てみると、クヨウの上着がなにやらもぞもぞ動いていた。

「上着が動いてる!」

「え!?!上着つていうより、上着の中に何かいるっぽい気がするんだけど・・・」

「きゅ～～～～」

「そういえば、幻獣の卵を入れてたな。孵化したんだ」

クヨウは上着のポケットを覗き込んでみると小さい丸い目が見えた。

「この子が・・・よしよし、おいでおいで」

もぞもぞと出てきたのは、トワを小さくしたような白面狐光だった。

「わ、かわいい。触ってもいいかな?」

「大丈夫・・・じゃないかな?」

サクラは扱いに注意しつつ綿の塊の様な白面狐光を持ち上げてみる。大きさは手のひらに乗る程度。尻尾は3本あった。

「はあ・・・いいわ。この子。癒される」

「きゅ～～～～?」

「流石に話せないんだね。生まれたばかりだから仕方がないか」

「そういえば、クヨウさん名前は決めた?」

「あ・・・すっかり忘れてた」

「きゅ～～～～?」

クヨウは「直ぐに考えておく」といくつか案を紙に書き出していた。一方そうとは知らずにまだ生まれたばかりなので、かなり眠そうな表情の白面狐光だった。サクラはしぐさの1つ1つがハマったらしくかなり魅了されていた。

「あゝ、ダメね・・・本当に可愛いわ」

「きゅ～～～～？」

「あはは、随分気に入ったみたいだね」

「きゅ～～、きゅ～～」

「可愛すぎるって本当に罪ね、今実感したわ。この真ん丸の目がな  
んとも・・・それで、名前はもう決めたの？」

クヨウは幾つか考えた名前をサクラに見せる。しかし、サクラはあ  
まり気に入らなく全部却下した。

「可愛さが足りないからダメ」

「そういう問題なんだ・・・そういえば、この子ってオスかな？メ  
スかな？」

「そういえばそうね、え〜と・・・メスね」

「じゃあ・・・どうしようかな〜。『ヒカリ』っていうのはどう  
？」

「ヒカリちゃんね。可愛いからよしとしましょう。貴方の名前はヒ  
カリよ〜」

「きゅ〜？」

名前が決まったところで引き続きヒカリと戯れるようにするサクラ  
だったが、ヒカリは欠伸をすると直ぐに寝てしまった。

「生まれたばかりだから疲れてたのかしら？」

「まだ赤ん坊だからね、今は放置しておこう。あゝ、首輪とか用意  
しておかないと不味いね」

「それ以前に、あまり人前には出せないわよ。この子も幻獣なんだ  
から。でも行商をする以上はどうかしないかね」

クヨウとサクラにとっては、幻獣といえども唯のペット同然なのが、見る人が見れば研究対象や保護対象に十分なりえる。下手をするとまた厄介ごとになってしまう可能性が高い。

「首輪に認識障害でもつけようかな。そうすれば遠目からはなんとかなると思うし」

「それが無難ね。益々人目を気にしないといけなくなったわ」

認識障害をつけるのである程度は何とかなるのだが、絶対ではないためある程度は自分でなんとかしなければならぬが、ヒカリはまだ赤ん坊であり、自衛の手段など持っている訳もなくクヨウとサクラがなんとかするしかなかった。

次の日、ヒカリはクヨウの服についているフードの中で熟睡したまま、関所を通過した。幸い門番には気付かれなかったため、素通りできた。そのままドワーフ族の村を目指す。ヨーゼフの住むドワーフ族の村までは歩きだと数日かかるので、多少遠回りにはなるが、近くの町を経由して向かう。食料の問題もあるからだ。

幸い道中では特に問題もなく、無事オズワードの町に到着した。

「ん〜、なんか街中の雰囲気かピリピリしているね」

「そうね、何かあったのかしら？」

「こついつときは先にギルドへ向かおう」

物資の補給のためなので、長居するつもりはないのだが、何も知らないで変なことに巻き込まれたらたまったものではない。安全策をとったつもりのクヨウだったが、町に入った瞬間には既に手遅れに

なっていた。

商人ギルドに入りめぼしい情報をもらうが、特に注意すべき情報はなかった。

「おかしいな、全部関係無さそうだね」

「そうね、直接聞いてみたら？」

クヨウが周囲の人間に聞き込みをしたり職員にも直接聞いたりしたが、皆一樣わからないようだった。

「気のせい・・・じゃないよね？」

「大丈夫気のせいじゃないわ。でもみんな気にしなさすぎね、そこが一番おかしいわ」

クヨウはこのまま町を出ようかとも思ったが、時間はすでに夕方になっていたので物資の補給もないまま、町を出るのは危険だった。

「ん、常に注意しておこうか。じゃあ、まずは宿を取ろう」

「そうね、ヒカリちゃんとも遊びたいし」

ヒカリは現在クヨウのフードの中で熟睡している。クヨウのフードがヒカリにとってはかなりお気に入りなので、寝るときは常にフードの中である。また寝る時間も多く、夜は完全に寝ている上に日中も半分以上は寝ている。まだまだ子供なので、その辺はしかたがないとクヨウとサクラは思っているので特に問題視はしていない。しかし、よく寝る理由もつと別だったりするのだが、それがわかるのはもつと後の話である。





朝食を食べてから、2人はさっそく買い出しへでかける。ヒカリは変わらずフードの中で熟睡中。ある程度買い物が終わってから妙なことにきがついた。

「なんか、今日は昨日より人が少ないね」

「そうね、昨日の変な雰囲気がないだけマシんだけど・・・なんだか暗いわね」

「なにかあったのかな？」

クヨウはギルドへ行き、情報集めるが特になにも起きていない。起きていても多少の争いや喧嘩くらいなものだった。

「ん、どうしようかな」

「出発するんじゃないの？もう準備は出来てるわけだし」

「そうなんだけど、どうもこの町の様子になってね・・・」

「うん、確かに気にはなるわね。でも解決できるのかしら？」

「できなかったら、それはそれで仕方がないよ。無理そうだったら諦めるし」

気にはなるが、解決しなければならぬものでもない。そこが畏れなくなっていることには2人はまだ気がついてはいなかった。

### 第36話「光」（後書き）

白面狐光の子供の名前が一番悩みました。

もうちょっといい名前にしたかったのもあるんですが、あまりやりすぎて仕方が無いのでこうなりました。

では、次回をお楽しみに！

第37話「人形と感情」(前書き)

考えている通りにはなかなか進まないですね。この辺りはなかなか難しいです。

### 第37話「人形と感情」

#### 第37話「人形と感情」

オズワードの町についたクヨウとサクラは町中の妙な雰囲気在不審に思い、町を調査することにした。

「特に何か起きてる様子はないんだけどね、町中の雰囲気がどうも変だよな」

「そうなのよね、でも調べるって言うても何を調べればいいのかな？」

「まずは町中を一通り見てみよう」

まずは何が起きてるのかを調べるのが先決なので、不審なところがないか町中を確認することになった。とはいっても、普段の状況を知らないので特別怪しい物がないかどうかの確認程度しかできないのだが……

しばらく町中を見ているとヒカリがもぞもぞと動き出した。

「きゅ〜」

「おはよ、ヒカリ。ゆっくり寝れたかい？」

「きゅ〜、きゅ？きゅ〜」

「ヒカリ？」

ヒカリは何かに気がついたのかある方向を睨んでいた。

「向こうに何かあるのかな？」

「あっちの方向には……確か古びた屋敷があったわ」

「行くだけ行ってみようか」

ヒカリが向いていた方向へ10分ほど進むとそこには古びた洋館があった。  
かなり長い間放置されているのか雑草が生い茂っている上に、建物もかなりボロボロであった。

「怪しい・・・といえば怪しいかもしれないけど、どうしようか？」  
「そうね、中に入って調べて見たいところなんだけどね、ヒカリちゃんが怯えちゃってて。ここは後回しにしましょう」

「きゅ〜」

「人が入った形跡も無さそうだし、ここは最後に調べようか」

そのまま2人と1匹は洋館を後にする。しかし、ヒカリは洋館をずっと怯えながらも見つめていた。

クヨウとサクラがこの町の調査を始めて数日が経った。本当は2、3日の予定だったのだが、妙にこの町の状況が気になり残ることにしたのだ。数日たって分かったこともある。街の雰囲気はその日によって変わっており、活気に満ちている時もあればピリピリしている時もある。

そして、人の流入も少ない。いや、少なくとも入ってくる人は多いしかし、出て行く人が妙に少ないのだ。特に用事のない者はかなり長時間とどまる事が多いようだった。クヨウ達もこれに近い状況にあり、出て行くことと思えばいけるといふ曖昧な状況だと尚更留まってしまうようになっていくことがわかった。

「ん〜、残りはあの洋館くらいですね」

「そうね、ヒカリちゃんが怯えるからあまり行きたくなかったけど、そうもいつてられないしね」

「行くだけ行ってみよう」

2人と1匹は洋館へ向かった。洋館は最初に見たときと同じ様にポロボロであった。壁に囲まれており、正面には鉄柵の扉がある。ちなみに、過去住んでいた人は既に死んでいるらしく、今は放置されていると商人ギルドで教えてもらっており侵入しても特に罪にはならない。

「じゃあ、慎重に行きましょう。変な罠があっても困るし……あれ？」

「そうね、ってどうしたの？」

「いやこれ」

クヨウが鉄柵の扉を見て気付く。鍵が掛かっていないのだ。いくら所有者が死んでおり放置状態にあるとはいえ、何かあつてはまずいのでギルドで鍵を掛けているのだ。今回はギルドから鍵を借りてきたのだが、クヨウが見たときには既に開いていたのだ。

「鍵の掛け忘れかな？」

「クヨウさん、念のため誰かがいるかもしれない可能性も考えておいたほうがいいわ。最悪の場合、犯罪者の隠れ家になっている可能性もあるし」

「ん、了解。一応警戒用の魔法具も発動させておこう。誰かいればそれでわかるし」

クヨウは以前作った警戒用の魔法具を発動させる。幸い洋館の中には特に変な生き物がいなさそうなのでほっとするが、後から入ってくるかもしれないので最低限警戒をしたまま、洋館へ入っていった。

「埃が積もってるね。結構多いから隠れ家もないんじゃないかな？」

「いえ、安心はしないほうがいいわ。カモフラージュを兼ねて洋館

の一部しか使っていない場合もあるし。一通り見回ってから結論を  
だしましょう」

「なるほど、了解。さっすが頼りになるね」

「盗賊の討伐とかは結構やったからね」

そのまま警戒しつつ、各部屋を回っていく。しかし、どの部屋も埃  
が積もっており、今なお人が住んでいる形跡は見当たらなかった。

「とりあえず、1階は見たから次は2階ね」

「ん、そうだね……」

「クヨウさん？どうしたの？」

特に何もないので、サクラも何もないのかもしれないと思い始めて  
いたが、クヨウは逆に違和感を感じているようだった。

「洋館に入っただけでしばらくしてから気がついたんだけど、ヒカリが怯  
えてないんだよね」

「きゅゅ？」

「ヒカリちゃん、平気なの？」

「きゅゅ？」

洋館に入るまではクヨウのフードの中で怯えていたのだが、クヨウ  
が気がついたときにはすでに怯えは消えていたのだ。2人の心配を  
他所に、ヒカリは首をかしげつつのんびりしていた。

「本当ね。どうして……!!!!!!」

「サクラさん？」

サクラが急に周囲を警戒し始める。クヨウは驚くが警戒しているこ  
とに気がつくとそのまま魔法具を発動させいつでも動けるように準



備する。

「今一瞬物音が聞こえたわ。・・・多分、誰かいるわね」

「僕ら以外には大きい生き物はいないはずなんだけどな。・・・今も反応がないし、僕は聞こえなかったし」

「私の聞き間違えならいいんだけど、多分こっちから聞こえたわ」

サクラが先頭に立ち、ある方向へ向かって歩き出す。クヨウは後ろを警戒しつつサクラについていった。そして、ついた先は厨房らしき部屋だった。しかし、特に何もなく、一通りみても何かが動いたような形跡はなかった。

「僕らの足跡以外は特に足跡もないね」

「そうね。・・・気のせいだったのかな？」

「ん。・・・ん？あれ？」

クヨウが気になったのは大きい釜だった。人が1人入れるくらいに大きい。

料理用かとも思ったのだが、違和感を感じ、よくよく見てみると覗き穴がなかった。普通釜を使う場合は覗き穴が必ず必要になる。しかし、その覗き穴がないのだ。そう考えると用途が違うのでは？と思いつくにはそう時間はかからなかった。

「サクラさん？」

「ええ、ここね。一応注意してね、何もなければそれに越したことはないのだけれど。・・・」

サクラが釜の扉を開けるとそこには階段があつて、上の階へ続いていた。

「クヨウさん、何かいる？」

「ううん、相変わらず反応なしだね。注意はしておくね」

「きゅ」

サクラが入ろうとした瞬間に、ヒカリが飛び出して階段を上がって行ってしまった。

「え？ちよちよっと！」

「ヒカリ！？サクラさん、注意しつつ急ごう」

サクラが畏を警戒しつつそのまま階段を上っていくと、そこには何かの研究をしていたような部屋があった。薬品棚が並び、机にはいくつか薬品が無造作においてある。しかし、そこは今までと違って埃が一切なかった。

「誰かが研究を？でもどうやって出入りしているんだろう・・・」

「何にせよ、早くヒカリちゃんを探さないかね。変なのがいたら危ないわ」

ざっと見渡しても何もいないが、奥に扉があり少し開いている。ヒカリは多分そこへ入っていたのだらうと予想する。しかも、扉の奥から少しだが物音がする。

「私が扉を開けるわ、クヨウさんは援護の準備を」

「了解」

2人は警戒しながら扉を開けると、そこにはヒカリを抱き上げヒカリをじっと見つめている女性がいた。

「え〜と、できればヒカリを降ろして大人しくしてもらえますか？」

「……………該当ナシ……………該当ナシ……………該当ナシ……………」

女性はヒカリを見つめたまま、ひたすら呟いていた。クヨウの声は聞こえているのであるが、恐らく認識できておらず、表情は固まったままである。

「まさか、魔道人形？なんでこんなところに？」

魔道人形とはムーンミラージュ国で昔から研究されている人型の人形で、ぶつちやけてしまえば、魔力で動くロボットである。かなり長い間研究されているにも関わらず、未だに完成には程遠いと言われていた。しかし、今クヨウ達の目の前にいる彼女は自律型でも、見た目は人となんら変わりなく、完成型と言っても過言ではない。

世界的に魔道人形が完成した話はなく、しかもここはムーンミラージュ国内でもない。何故ここに彼女が存在しているのかクヨウにはまったくわからなかった。

「あゝ、もしもくし？聞こえてますか？」

「該当ナシ……………検索終了。新種ノ可能性アリ。情報ノ更新必要アリ」

「えっと……………ヒカリちゃんを降ろしてもらっていいかしら？」

本当ならもつと警戒しなければいけないのだが、ヒカリを抱えて見つめている様子はなかなかサマになっていてクヨウとサクラが毒気を抜かれていた。見た目は黒い髪に黒い目。白い肌でまるで人形のような整った顔をしていると言っても人形なのだが。メイド服をきているが少しボロボロになっており汚れも少し目立つ。数年間同じ服をきているのであろう。

「……認識……認識……認識……該当ナシ……  
ドチラ様デシヨウカ？」

「その子の飼い主なんだけど……貴方はこの住人であつていますか？」

「……失礼イタシマシタ御客様……私ハコノ館ノ主ニ仕エテオリマス」さき・しるふいーど』ト申シマス。現在御主人様八留守ニシテイル為、後日改メマスヨウ御願イイタシマス」

「いえ、私たちは貴方に用があるのよ」

クヨウ達は女性の魔道人形のサキに自己紹介をしたあと事情を一通り説明した。

「申シ訳アリマセン。現在コノ町八、コノ試作型魔法具ノ影響下ニ  
アリマス」

「試作型魔法具？」

「ハイ。シカシ、人ニ害ヲ与エル物デハアリマセン」

「説明してもらってもいいですか？」

サキの主人である『ラバーズ・シェフィールド』は元々ムーミラー  
ジユ国の天才魔法具師と言われていた程の人物だった。ラバーズは  
サキを完成させたまではよかったのだが、人としての感情を再現す  
ることができなかつたのだ。元々ラバーズがいた研究所では自由に  
動かせる魔道人形の開発をしていたので、感情はいらないと判  
断が下つたのだ。しかし、ラバーズは魔道人形を人と同じ存在にし  
たかつたのでこの判断に反発した。当然その反発は通るわけもなく、  
ラバーズはそのままサキを引きつれ研究資料ごと逃亡を図り、知り  
合いの伝手でここに逃げ延びた。そして、人の感情の再現をサキを  
使って研究していたのである。

「あれ？でもこの主は既に死亡しているって聞いていたけど・・・」

「ハイ、御主人様八数年前二死去サレテイマス。私八独リデ『感情ノ再現』ヲ研究シテイマス」

「それで、何故この町に魔法具をつかっているの？」

「私八人ノ感情ヲ理解出来マセン。コノ魔法具八元々私ニ感情ガ芽生エルヨウニ御主人様ガ作ツテクダサツタ物デス。シカシ私ニ八何モ影響ガナカッタ。ソコデ町ノ人ノ感情ヲ強クスルコトデ観察ヲシヨウト考エマシタノデス」

感情のないサキは淡々と語っていたが、クヨウとサクラはそれがどこか悲しんでいるようにも見えた。

「シルフィードさんはどうしてそこまで、感情の再現をしたいのですか？」

「ソレガ私ノ存在理由ダカラデス」

「そつか・・・でもねシルフィードさん。そんなことしても多分感情の再現はできないと思うよ」

「???ソレハ何故デシヨウカ？」

「観察をしても、それは所詮その人の感情でしかないの。人はみんなそれぞれ何に対してどういう思いを抱くかは違うのよ。貴方が感情を再現したいのであれば、あなた自身が人と触れ合っていかなければならないわ」

「そうですね、まあ人だつて感情を理解できているわけじゃないです。理解したいのであれば貴方も1人の人として生きてみてはどうですか？」

「・・・理解・・・不能・・・理解・・・不能・・・」

目に見えてサキは止まってしまった。おそらく理解が追いついていないのだろう。クヨウ達にはそれが驚いているように見えて少し笑ってしまう。その時、ヒカリがサキの肩までジャンプしてサキの顔を舐め始めていた。

「クヨウさんどうしようか？」

「ん、どうしようね。変にうるついても研究材料にされるだけだし・・・」

「ヨーゼフさんの所まで一緒に行くのはどうかな？このまま放つておいても可哀相だし」

「それがいいかもね、ヨー爺ならなんとかしてくれるかもしれないし」

若干ヨーゼフに丸投げしている感はあるのだが、それ以上の事は2人にはどうしようもないので仕方がない。フリーズしていたサキをなんとか元に戻し、説得する。サキも「感情の再現」ができるのならばと了承。

こうして、少しの間だがサキ・シルフィードと一緒に旅をすることになった。

### 第37話「人形と感情」（後書き）

補足・・・

ちなみに洋館には人払いの結界が張ってあったのでヒカリが怯えていました。

街にも人が無意識に残りたくなるような結界を張って人を少しでも多く観察しようとしていたわけです。

神代ふみあき様感想ありがとうございます。感想1つもらえるだけで、元気がでるのは私だけではないと思います。これからも頑張っていきます。

では、次回をお楽しみに！

### 第38話「急変」(前書き)

更新がかなり遅くなってすみませんでした。

原因はちょっとしたネタ切れと息切れです。今後の展開を考えているとなかなか難しくて・・・



### 第38話「急変」

#### 第38話「急変」

オズワードの町を出て数日、クヨウ達はヨーゼフが住んでいる洞窟へ到着した。

「ねえ、クヨウさん。前から思ってたんだけど、なんでドワーフの人達って洞窟に住んでいるの？」

「ん？別にドワーフ全員が洞窟に住んでいるわけじゃないよ？」

「それは知っているけど、結構こういふ洞窟に集落というか村をつくってるじゃない。なんでわざわざ？ってね」

「あゝ、まあ簡単だよ。元々ドワーフ族の人は採掘業をしていたんだよ。その影響もあって土の精霊を大事にしているわけだけど。でね、採掘から派生して鉱石を武器にしたり、宝石を装飾品にするようになったんだ。それで元々洞窟内で行動する事が多いから、採掘したものを外へ持ち出すより、そのまま洞窟でやったほうが速いんじゃないか？ということ、洞窟内で行けるように洞窟内部に住むようになったんだ。細かい理由は別にあるらしいけど、これが一般的な話らしいよ」

洞窟内部は光の水晶や光ゴケ等で照らされており、基本的に1日中明るい。なので、1日中洞窟内部にいても特に問題はなかった。

「さて、いきましようか。サキさん、ヒカリ、いくよ」

「きゅ」

「ハイ、ワカリマシタ」

「サキちゃんとヒカリちゃんは本当に仲いいわね」

何故かヒカリはサキに懐いており、会ってからずっと一緒にいたり遊んでいたりもする。

クヨウとサクラから見ると、子供同士が遊んでいるようにも見えてくるのが不思議なところだ。もっともヒカリは子供なのだが。

洞窟に入り、多少くらい道を多少進んだところで大広間のような場所にでた。洞窟内部がドーム状になっている、天井には光ゴケがあり、町の中央に巨大な光る水晶がつるされておりかなり明るい。その中に様々な建物があり普通の町になっていた。

「ここがドワーフの町『ノームグラウンド』だよ。天井があるだけで普通の町とそんなに変わらないでしょ？」

「へえ、でもなんだか凄い場所ね。天井と壁がある分だけ町の広さがわかるから、逆に広く感じるわ」

「きゅゅゅ？」

サクラが呆気にとられているのを苦笑しつつクヨウは門番へ挨拶しに行く。元々外に監視がないのは監視していないわけではなく、単に魔法具を使って中からでも外を監視できるので外にいないだけである。ついでに不審人物は通路で足止めもできるので、防犯もかねている。ある意味、天然の要塞になる。クヨウは一時期ここに住んでいたこともあり、特に問題なく通過できるのだが、見張りに知り合いもいるので挨拶くらいはということであった。

見張りへの挨拶も終えて、クヨウはサクラ達を引き連れヨーゼフのいる鍛冶場へ向かった。

「ヨー爺いる？」

「ん？おお！クヨウか！？久しぶりじゃのう！」

クヨウが鍛冶場へ入ると、丁度休憩に入っていたヨーゼフが出迎えてくれた。

「はっはっは、もっと遊びに来んか！元気にしてたか!？」

「ヨー爺も変わってないね、相変わらず声がでかいよ……」

ドワーフ族は基本的に身長が低く小柄だが、かなり筋肉質である。しかし、手先が器用な人物が多いので通称『職人種族』とも呼ばれたりもする。ヨーゼフも基本は鍛冶職人だが細かい細工もできる、ごつい外見に反してかなりマルチな種族だったりする。

「ははは、ん？クヨウ、そっちのお連れさんは？」

ヨーゼフの大声に呆気を取られていた2人はここで再起動する。

「こんにちはは、サクラ・イザヨイです。クヨウさんにはいつもお世話になってます」

「ワタシハ自動人形ノさき・しるふいーどデス」

「きゅ〜」

「あと、サキさんが抱いているのは白面狐光のヒカリだよ」

「ほほ〜……クヨウちよつとこい」

一通り顔を見た後、ヨーゼフはクヨウの首を捕まえて声が聞こえないように壁際まで移動する。クヨウも尋問内容は大方予想がついてるので、黙って着いていった。

「クヨウ、ちよつと見ない内になかなか遊ぶようになったじゃのう？ん？ハーレムか？女2人と旅だなんてうらやましいのう」

予想してた内容とは180°方向が違っていたのでクヨウは頭を抱

える。

「そっち！？もつと聞く事が別にあるでしょう!？」

「いやいや！昔は女に大して興味を示さなかったから心配してたんじゃないぞ！一度男色かと思っただくらいじゃ。で？どっちが本命じゃ？」

クヨウとしては色々と反論したいが、藪蛇になりそうだったので黙って質問に答えることにする。

「付き合ってるのはサクラさんですよ。サキさんはたまたま……というかちよつと訳ありで一緒に行動しているだけです」

「訳あり？浮気じゃないだろうな？」

「僕はサクラさん以外と付き合う気はないし、浮気もしません！ヨ一爺？そろそろ本題に移ろうよ」

「なんじゃツマランのう。まあよい、ちよつと待っておれ」

そういうと、ヨーゼフは奥に入っていった。クヨウも2人のところに戻ったが、結局会話はほとんど聞こえていたためサクラが顔を赤くしていた。

「くようサン、さくらサンノ顔ガ赤イノデスガ、風邪デシヨウカ？」

「サキちゃん、そこは黙ってて」

「恥ずかしかったの？」

「いや……あの……そうじゃないんだけどね。何と言うか……嬉しいというか……あまりクヨウさんがそういうこと言わないからね、その……慣れてなくて……」

サクラは照れて更に顔を赤くしつつ、徐々に声が小さくなっていった。クヨウからしてみれば「何この可愛い生き物」状態である。

「ん？何をやっとる？お嬢ちゃん風邪か？顔赤いぞ・・・なんだ惚気か」

「おかえり〜ヨ一爺、あれ？もう帰り支度したの？」

「今は急ぎの仕事も無いしのう、今いる面子でもお釣りが来るくらいじゃ。それに折角お前が帰ってきたんだ、じっくり話を聞かせてもらっても罰は当たらんじやろう。ほれ、ついてこい」

「了解、じゃあ行こうか」

そうして、程なくヨ一ゼフの家に到着。ヨ一ゼフが住んでいるのは普通の一軒屋である。クヨウとレンヤが住んでいたこともあるが、基本は1人暮らしだ。

「さて、お茶も用意できたし話でも聞かせてもらおうかのう」

「そうだね〜。とりあえず、先に相談事をしてもらいかな？実はサキさんのことなんだけど・・・」

とりあえず、サキの状況と事情を説明する。そしてその後をどうするかという事だ。

クヨウの考えは、サキをヨ一ゼフに預けることだった。確かにクヨウ達と旅をすれば色々な人と会えるし刺激にもなるだろうが、それは町にいる間だけである。移動の間はほぼ3人だけなので、深い人付き合いがあまりできないからだ。

ヨ一ゼフに預けた場合はヨ一ゼフの仕事の手伝いもあるだろうが、店の手伝いにもなればほぼ毎日色々な人に会うことになる。しかも、ドワーフ族は団体行動が基本なので広範囲の人と深い付き合いになっっていく。そう考えた場合はこちらのほうがいいだろう。

「なるほどな、まあよかつ。感情が薄い奴もいるし、起伏の激しい奴もいるからのう。そんな中にいれば、そのうち何とかなるじやろつ」

「うん、助かるよ。サキさんはそれでいいですか？」

「ハイ、私八特二問題アリマセン」

サキにとつては感情を得られれば特に場所は関係ないのだろう。それにヨーゼフも特に自由を奪うつもりもないので、何かあればここ出て行くこともできる。

「クヨウ、いつまで行商の真似事をしておるつもりじゃ？それとも婚前旅行だったか？」

「どうしてまたそっちへ行くの！？もう・・・とりあえず、ラングランへ戻っても大丈夫になるまでになるね。魔王が出てきて戦争状態になっているからそれが終わらない限りはね〜。当然無理かな〜？」

今戻れば国に攻撃用魔法具の製作を強要されかねない。クヨウはあの大臣をまるつきり信用していないので、戦争状態で戻ることはありえなかった。ただ、クヨウの心配も杞憂に終わるのだが。

「だがのう、もう魔王はいないぞ」

「へ〜・・・えええええ！ヨー爺！それどうゆうこと！？」

「まあ、これは最新情報でな。なんでも、ある日突然モンスター諸共消え失せたそうさ。今は周辺調査をしているといったところじゃ。魔王がいなくなったと確認できるまではそうかからんじやろう」

連合軍が数日時間を置いて攻め込んだ時には既にもぬけの空だったのだ。魔王がいない事を確認し、周辺が安全だと確認できるまで辺りを調査しなければならぬが、実質戦争は既に終わっているといつてもいいくらいだ。ただし、それが大陸中に広まるのはしばらくかかるだろう。

「ヨーゼフさんそれは驚きなのですが、何故そんなことを知っていらっしゃるのですか？ここから魔王のいる砦まではかなり距離があるはずなのに・・・」

「サクラちゃん、ワシのことはヨー爺でいいぞい。皆からはそう呼ばれておるでう。それで先ほどの質問じゃが、あまり他言せんよにな。この町は小さい国のようなものなのじゃ。一応ガチンコ連合国の1つの町という位置づけになっておるが、自治権を持っておるわけじゃ。それでこの町専用の情報収集組織があつてな、そこから情報を貰ったのじゃよ」

勿論普通ならその組織から情報を個人で貰うことはできないのだが、ヨー爺が特別な伝手でしかもクヨウに関連することだということだけで特別に貰うことができたのである。

「ん〜、それは嬉しい情報なんだけど・・・魔王は何をしたかったのかな？」

「それはワシらにはわからんことじゃよ、魔王が気まぐれで侵攻しただけかもしれんし、何か目的があつたのかもしれない。どちらにせよワシらが持つておる情報じゃ少なすぎて正確なことはわかりはせんよ」

考えることは確かに大事だが、情報が極端に少ない状態では正確な事が予想できるはずもないし、変な偏見をもつてしまつかもしれない。だったら、「こつという情報があつた」程度にとどめておいたほうがいいのだ。

「確かにそうですね、あまり変に考えても仕方が無いもの。クヨウさん、この後はどうするの？ラングランへ戻る？」

「そうですね〜、数日ここに留まってから戻るとしましょうか。僕に行商が向いてないとわかつたので、戻ってからゆっくり道具屋で

もしたいですしね」

「うむ、確定の情報が出るまでは泊まっていきたいじゃろう。じゃあ、そろそろ旅の話や2人の話を聞かせてもらおうかのう。」

こうして、ギルドから戦争終結の話が出るまで留まることになった。



### 第38話「急変」(後書き)

後半ヒカリとサキが完全に空気状態になってしまいました。

真面目な空気だと絡ませるのが難しすぎて、仕方が無く空気に・・・

ということ、ヒカリの事は次回話す予定です。

では、次回をお楽しみに〜

第39話「サキのこれから」(前書き)

・ 今回は随分かかってしまいました。思ったより難しくくて難しくくて・

### 第39話「サキのこれから」

第39話「サキのこれから」

連合軍が皆に魔王がいなくなり、戦争が終わったことを確認できるまでクヨウ達はヨーゼフの所に留まることになった。

ヨーゼフの町についた次の日、クヨウはサクラを案内するため朝から出かけて行き、ヒカリは窓際で熟睡している。そして、ヨーゼフの元で生活することになったサキは店の手伝いや、子供の世話などをすることになっていた。

「よーぜふ様、私八具体的ニ何ヲ才手伝イスレバヨロシイノデシヨウカ？」

「ん〜、ワシのことはヨー爺で構わんよ。ついでに様もいらんし敬語も不要じゃ」

「シカシ、私八魔道人形デス。私ノ目的ガアルニセヨ、魔道人形ハ人ニ仕エル物デス」

一応研究目的があるにせよ、魔道人形製造の根本的な理由は人の補助である。そのため、サキの言いつ分は間違っているものではない。ただ、サキの目的の場合だと少々勝手が違ってくるのだが。

「お嬢ちゃん、それは違うのう」

「????ドウイウコトデシヨウ？」

「確かに魔道人形は人の補助を目的に作られているのう、そこは否定するつもりはない。じゃがのう、お嬢ちゃんは感情を再現したいというのじゃろう？感情を持つとは極論を言えば人になるということじゃ。人形のまま過ごしてもお嬢ちゃんの目的は達成できないと

思うぞい」

「人形ガ人二ナレルモノナノデス力？」

「別に体ごと人になるというわけではない、自分の考えを持ち、笑い悲しみ怒り楽しめれば、それは十分人だとワシは思うがのう」

「・・・理解不能デス」

「はっはっはっはっは、焦ることはない。ゆっくりゆっくり理解すればええんじやよ。さて、まずは店に案内するからついてきなさい」

ヨゼフに案内されて行った先には、かなりの広さを持った店があった。ノームグラウンドに店は基本的に一件しかない。ドワーフ族は1つの事を複数人で行う習慣がある。なので、商人がいたとしても2つ3つと店を増やすわけではなく、共同で1つの店を経営、運用していくのだ。職人も似たようなもので、流石に工房はいくつもあるが、それでも1つの工房に10人前後が働いている。そのうえ、各工房の交流は盛んで、競争・競合をするのではなく協力をすることにより発展を遂げている。

サキが案内されたのは店の中で道具を扱っている場所であった。その中で、ちよつと年配の女性に声を掛けていた。名前はクウ・イルムといって、この道具関係の売り場の責任者でもあり、売り子たちのお母さんの人だ。

「クウ、この嬢ちゃんに接客等を教えてやってくれ。この嬢ちゃんは少し訳ありでの中。大丈夫か？」

「あら、ヨゼフが売り子になれそうな子を連れてくるなんて珍しいわね。訳ありってどういうことなの？」

「ソレニツイテハ、私ノ方カラ説明イタシマシヨウ」

サキは自分がどういふ存在かをあまり理解してはいたため、全て正直に話す。本当なら自動人形ということには隠さなければならぬ事柄なのだ。もし、変な人間に目を付けられたら最悪バラバラにされ

てモルモット行きである。ただ、ヨーゼフも面倒を見てもらうクウには全て事情を説明するつもりだったので、止めはしなかった。

「へえ〜すごいわね〜、魔道人形が完璧に動いているだけでも驚くのに、感情をね〜」

「クウ、分かっているとは思うが・・・」

「大丈夫よ、この子については私がきっちり教育するから。ちゃんと守ってもあげるしね。だから、爺さんはとっとと自分の仕事に戻りなさい」

「おいおい、年寄りはおうちちょっと労わってほしいのう。ではな、頑張るんじゃぞサキ」

「了解イタシマシタ」

ヨーゼフはそのまま工房へ向かっていった。そして、ここからサキの感情を再現するという目的が再スタートすることになる。

「クウ様、御命令ヲ御願シマス」

「へえ〜、これはなかなか手強そうね。まあ、良い子みたいだししつかり教えれば大丈夫でしょう。サキちゃん、まずはいくつか注意事項があるからよく聞いてね」

- 1つ目・一緒に働いている従業員へ様付けをしないことと、極力敬語も禁止。
- 2つ目・サキの事は基本的に従業員以外へは話してはならない。
- 3つ目・クウの許可なく店の外へ出てはならない。
- 4つ目・従業員以外の人に着いて行ってはならない。
- 5つ目・何か困っている人がいれば、周りに報告した後できるだけ助けること。

以上である。若干子供向けのような内容もあるが、クウからしてみ

ればサキは体は大きいが、まだまだ子供のようなものでそういう内容になっている。実際何かあったら危ないので、予防策である。

「サキちゃんのこととは私から皆へ話すからあまり話さなくてもいいわ」

「了解イタシマシタ」

「ああ、そうそう。大事な事を話していなかったわ。サキちゃんはこれから自分のことを人と同じように扱いなさい」

「?????ソレハ何故デシヨウカ?」

「簡単な事よ。貴方はもう人形ではないわ、自分で考え行動する事ができるもの。だから貴方にはもっと自分を大事にしてほしいの」

「私ハ既二人形デハナイ?自分ヲ大事ニ?理解不能デス」

「そのうち分かるわよ。さあて、皆に紹介するわね」

クウはサキを従業員を集めた部屋に案内し、各自自己紹介をさせた。その際に、クウからサキのことについてはある程度説明した。何かあったときに事情をしなければその分早く行動できるからである。

「じゃあ、各自持ち場へ戻っていいわよ。サキちゃんには私が仕事を教えるわね」

「了解イタシマシタ」

こうして、サキの感情を再現させる為の新しい日常が始まったのだ。った。

ノームグラウンドは基本的に明るい。中心部で光るクリスタルは一

日中光を発しているからだ。ちなみにいうと夜もない。中心部で光るクリスタルは光と同時にある程度の熱も出している。ほぼ小さい太陽のような物だ。当然光が当たるところは暖かいので、窓際はヒカリにとっては絶好の昼寝スポットになっていた。

「くく……くく……くく……」

時刻が昼を過ぎたあたりでヒカリが目を覚ます。周りを見渡してみても誰もいなかった。ヨーゼフとサキは仕事に行っているし、クヨウとサクラは街を回っている。クヨウはヒカリも連れて行こうとはしたのだが、ヒカリがあまりにも気持ちよさそうに寝ていたため、そのままにしておいたのだ。

「きゅ……きゅ……」

ヒカリは弱った顔をする、何故なら朝から何も食べていないのでお腹を減らしていたのだった。しかし、窓際から飛び降りると、そこにはクヨウが置いておいたヒカリ用のご飯があった。

「きゅく」

クヨウの用意したご飯を綺麗に食べきると、そのままヒカリは窓際へ移動した。そのまま寝るのかと思いきや、窓を開けて外へ飛び出して行った。ちなみにクヨウ達は知らないことだがヒカリは既に結構な知恵を身につけているので大抵のことはできる。まだ言葉を発することはできないが、そう遠くない内にヒカリは普通に会話もマスターするであろう。ヒカリはご機嫌なようので、3本の尻尾をゆくりゆらしながら食後の散歩に出かけるのであった。

ヒカリが散歩していると珍しい外見な為、結構人目を集めやすい。

しかし、ヒカリの周りには人ばかりどころか人はあまりこない。ヒカリは自分がどういう種族で、どういう存在なのかを本能的に理解している。故に独自の魔法を使い回りの認識を誤魔化している。なので、ヒカリはゆっくり周りを気にせず散歩をしていた。

ある程度歩いていると、公園のような場所に出た。公園の中では子供が遊んでおり、ヒカリにはとても楽しそうにみえたので、ヒカリは魔法を解除し、子供たちと遊ぶことにした。

「ご苦労様サキちゃん、午後は子供の面倒をみるんだってね？」

「ハイ、よーぜふ様・・・サンカラハウスルヨウニ言ワレテオリマス」

午前中は四苦八苦しつつもサキは仕事をこなしていた。もっとも仕事よりも表情など人間らしさを出すほうが苦労していた。

「え〜と、エレン、ちょっといいかい？」

「クウさん、どうかしましたか？」

クウが呼んだのはエレン・クーリンスという女性だった。赤い髪をポニーテールにしており身長も高めで顔も整っているの、この店の看板店員だった。サキも仕事を教えてもらうために何度か話したことがあった。

「サキちゃんを学習院に案内して欲しいのよ。貴方も今日は学習院に行く日でしょ？ついでで構わないから頼めないかしら？」



「サキも子供たちの世話をするんですか？」

「ええ、あの子は感情に乏しいでしょう？だからね」

クウはあえて、「無い」ではなく「乏しい」という表現をした。クウやサクラも感じていたことだが、実際サキには感情がすでに芽生えている。しかし、本人に自覚は無い。しかも、一見すると本当にないように見えてしまうのでわかりづらいのだ。エレンも遠目で様子を観察していたが、「無い」というより「乏しい」という印象をもっていたのだった。

「なるほど、でも・・・子供たちが怖がらなければいいんですけど・・・」

「そこは大丈夫よ、あそこの子供がこの子を怖がるとは思えないけど？」

「・・・それもそうですね」

普通の子供なら一見して人形のようなサキを怖がるかもしれないが、良くも悪くもこれから行く学習院にいる子供は普通と言う枠組みから少々外れた子供が多かった。

「じゃあ、あとは任せたよ、エレン」

「はい、わかりました。お疲れ様、サキ。仕事のほうは大丈夫だった？」

「ハイ、皆様ノオカゲデス」

「それはなにより、じゃあ学習院に行くから着替えて裏口で待っててもらえる？」

「ハイ、了解シマシタ」

それからサキはエレンに案内してもらい学習院へ向かった。学習院はノームグラウンドの教育現場であり、平たく言えば学校である。

ただし、保育所の一面もあり子供を預ける人もいるので子供の面倒を見る人が必要になっている。そのため、子供好きな男性女性問わずここに交代で手伝いにきている。

「あゝエレンお姉ちゃんだ〜。こんにちは〜」

「はい、こんにちは。元気にしてたかな？」

エレンもよくここの手伝いに来るので子供たちとは面識があり、結構人気があった。

「後ろのお姉ちゃんはだ〜れ〜？」

「ワタシハさき・しるふいーどトイイマス。ヨロシクオネガイシマス」

「サキお姉ちゃん？言葉がなんだか面白いね」

「面白いデスカ？」

「うん！わたしはね〜、ミア・ミュートっていうの。そっだ！さっき可愛い子がいたんだ！こっちきて〜」

そのままサキとエレンは庭の方へ引っぱられていった。

「ミアちゃん、可愛い子って？」

「おきつねさんかな〜？とにかく可愛いの！ここで飼っちゃダメかな？」

「狐？こんなところに？」

「アレハ・・・」

子供たちに引っぱられていった先には、何故かヒカリがいた。事情を聞くと子供たちと遊んでいるうちにここへ移動したようであったのだ。

「きゅ」

「へえ、白い狐って珍しいわね、どこから来たんだろう？入り口には警備兵がいるから、簡単には侵入できないはずなんだけど」

「えれんサン、アノ子八知り合イガ飼ッテイル幻獣デス」

「へ、サキちゃんの知り合いのね、……って幻獣！？うそ！本当に？」

「ハイ」

流石にエレンは絶句した。しかし、普通に考えれば御伽噺の存在が目の前にいれば誰でも驚くだろう。ただ、子供たちはその重大さを認識できていないし、そもそもただの狐だと思っているので理解できてはいなかった。

「しかも、幻獣って飼っていいのかしら？大丈夫なの？」

「親カラ託サレタラシイノデ、大丈夫ナノデハナイデシヨウカ？」

「ならいいんだけど……」

「きゅ？きゅ……」

子供と遊んでいたヒカリがサキに気付き飛びついてきた。子供たちのところからそんなに距離がないとはいえ、子供たちを飛び越してきたのでサキ以外は全員驚いていた。

「サキちゃん随分懐かれてるわねえ。ちよつと触ってもいいかな？」

「ハイ、大丈夫デスヨ」

「あ、可愛いわ……私も欲しいなこの子……」

「エレンお姉ちゃんだけずるい、私も……」

子供たちに囲まれてそのままヒカリを含めて子供たちの世話をすることになったサキ達だった。

そして夕方になり親が子供を迎えにきたところで、一日の仕事が終わった。

「サキちゃんお疲れ様、どうだった？働いてみての感想は？」

「ヨクワカリマセン、該当スル適切ナ言葉ガアリマセン」

「へえ、まあいいんじゃないかな？多分、そのうちわかるよ」

「ソウイウモノナノデショウカ？」

「うん、よく聞くよ？『考えるより、感じる』ってね。それが『感情』なんじゃないかな？」

「感ジル・・・理解不能デス・・・」

「あはは、考えすぎよ。それじゃあ、今日はお疲れ様でした。また明日ね」

「ハイ、マタ明日才会イシマシヨウ」

サキはエレンと別れ、眠っているヒカ리를抱えたまま家に戻る。

「ラバース様・・・私モイツカ、アノ子達ノ様ニ笑ウコトガデキルノデショウカ？」

思い出すのは子供たちの屈託の無い笑顔だ。サキは感情はないが、表情を作ることはできる。しかし、子供達からは変な顔と言われていた。笑顔の練習を子供と一緒に練習したこともあったのだが、結局『変だ』ということと終わっていた。

いつか自分も子供達のようになりたいと思うサキであった。

第39話「サキのこれから」(後書き)

サキはどういう扱いにするか正直物凄く悩みました。  
出して後悔したことも若干あったりも・・・

では、次回をお楽しみに・・・

更新速度は遅いと思うので気長にお待ちください。

#### 第40話「帰宅」(前書き)

更新がかなり遅くなってきました。申し訳ないです。

ネタはあるのですがね、話の進め方を非常に迷うようになってきました。

少々冒険しすぎたのが原因ですね。今後は注意していこうと強く思います。

## 第40話「帰宅」

### 第40話「帰宅」

クヨウ達がヨーゼフの元へきてから二週間ほどが経過し、ようやくギルドから戦争終結と安全宣言が出された。名目上は連合軍が魔王を撤退させたということになっているが、魔王がいなくなった理由が不明であったため、確認に時間をかけたのだった。

結局確認ができた訳ではないが、魔王が戻ることがなかったためそういうことにしたのだった。

「じゃあ、そろそろ行くね」

「ヨー爺さん、お世話になりました」

「いやいや、こつちも随分と世話になった。何かあったらまた来なさい。歓迎するぞい」

ギルドから連絡を受けて、クヨウ達はラングランへ帰ることになった。帰りは早くつきたいので馬車を用意してある。

「ヨー爺、元気でね」

「サキちゃんも頑張ってたね」

「くようサン、さくらサン、才気ヲツケテ。ひかりサンモ元気で」

「きゅ〜」

こうしてクヨウ達はラングランへ向けて出発した。

「天気もいいし、順調に帰れると思ったんだけどね・・・」  
「魔王騒ぎであまり稼げなかったんじゃないかしら？騒動が治まって気が抜けてる今が稼ぎ時なのよ、きつと」

2人はのんびり話しているが、現在盗賊の団体が接近中である。とはいえ、この旅で2人はかなりの数の盗賊を追い払っており、ある意味いつも通りであった。

「クヨウさん、バインド系だけでお願いしていいかな？最近訓練だけで実戦をしなかったから、思いつきり動いておきたいのよ」

「ん、了解。でも、僕のほうにきたのは順次倒していくよ」

「うん、お願いね」

クヨウがスピッドファイアを連射し、少しずつ動きを鈍くする見えない網のような物を発射する。盗賊の一団は銃声に驚き、動きを止めるが自分たちには特に影響がないと思うと構わず突進してくる。ある程度近くなったら、サクラが真正面から次々と切り捨てていった。

「くそ！あの女かなり強いぞ！」

「困め！数で攻めれば勝てる！相手は1人だぞ！」

盗賊たちが困もうとするが、サクラは絶えず動き回り、常に1対1の状況を作り出しているのうまく攻め込めずにいた。しかも、徐々にクヨウの攻撃の効果が効いてきており、盗賊たちの動きが鈍ってきている。結局盗賊側は何もできずに全滅と言うクヨウとサクラにとってはいつも通りの状態だった。

「さて、と・・・生きている連中は全員縛り上げたし、あとは放置しておけばいいね」



「そうね、自業自得だし、運が良ければ助かるから頑張つてね」  
運が良ければ巡回の警備兵に見つかりそのまま連行され牢屋行きではあるが傷の手当てくらいはしてもらえる。しかし、運が悪いとモンスターに襲われて胃袋行きになる。どちらがいいかは言うまでも無いだろう。

あれから数日、特に目立った事も無くラングラン近郊に到着していた。というのも、盗賊にもある程度情報網があり、クヨウとサクラはブラックリスト入りしていたのである。なので、情報を持っている盗賊は積極的に襲う対象からはずしていたのだった。本人達はある意味そんな大事になっているとは知らず、のんびりしていた。

「最初はどうなるかとも思ってたけど、意外とゆっくりできたね」

「そうね、初日に襲われて以来特に音沙汰ないもの。気を張り詰めないくていいのは助かるわ」

そうこうしているうちに、ラングランへ到着。まだ昼前なので早めに終わらせようとクヨウは商人ギルドの方へ挨拶と、道具屋再開の手続きをしに行った。サクラは一足先に店の方へ行っていた。掃除等の準備をしなくてはいけないからだ。幸い、予めミアとレナリンスには連絡してあったので手伝ってもらえる事になっている。

「うん、2人と会うのも久々ね。今度3人で食べ歩きでもしようかな？」

これからの事を考えて、なかなかご機嫌なサクラだった。ちなみに、ヒカリは熟睡中だ。

「あゝ、きましたね〜」

「サクラさん、お久しぶりです」

「2人とも久しぶりね〜。元気そうで何よりね」

店の前で久しぶりの再会に喜ぶ3人だった。流石に声が大きかったらしく、ヒカリが目を覚ました。

「きゅ〜?」

「あ、この子が例のヒカリちゃん?可愛いな〜・・・」

「可愛すぎてね〜、手放したくないのよ」

「へ〜・・・これが幻獣ですか〜。なんだか不思議〜な感じが〜しますね〜」

「きゅ〜」

レナリンスは興味深そうにヒカリを観察しつつ撫でていた。実のところ撫出た時の感触が気に入っていたりもしていた。

「ヒカリちゃんを愛でるのもいいけど、大事な用件を済ませないとね〜」

「そうですね〜、名残惜しいですが〜、続きは〜またあとで〜」

「さっさと終わらせて、ヒカリちゃんと遊ぼう!」

「きゅ?」

微妙に目標が変わっているようだが、特に問題は無いのであろう。

一方商人ギルドで手続きを行い、各所への連絡を済ませていたクヨウは一通り終わってのんびりしていた。

「あゝ、疲れた。面倒だからこういうことは懲り懲りだな〜」

「お疲れ様です、キサラギさん」

「お疲れ様です、エミックさん。おかげさまで、一通り終わりましたよ」

「クヨウさんは意外と面識広いですね。グループを仕切っている人にまで連絡が必要だとは思いませんでしたよ」

クヨウの手続きや連絡等を手伝っていたのはティナ・エミックという商人ギルドの受付をしている事務員だ。手続きの多さは異世界でも変わらないらしく、事務員でも正確に把握している人は少ない。ティナはそういう複雑な手続きを引き受ける事が多いので、かなり事務仕事に精通しているベテランだった。

「そうそう、クヨウさん宛に手紙がいくつか来ていましたね。来た日付と一緒に後でお渡ししますね」

「ありがとうございます。ん、レンヤからの苦情がきてそうだな」

実は道具屋を一旦閉めてからレンヤに連絡していなかった。というのも、旅をしているレンヤの行き先が分かるわけも無いので仕方がないと言えば仕方がなかった。

「ふふふ、楽しそうですね」

「後が怖いけど、どうしようもないですよ」

「それもそうですね。そういえば、新しい従業員の募集もしますか？」

「あつと、まだいいです。どうせ再開したばかりだと人も少ないでしょうし。宛があるので」

一旦離れた客を戻すのはなかなか難しい。しかも、なんだかんだで一年以上も店を閉めていたのだ。他の店の常連になっている場合も

当然あつたりする。となれば早々客足を戻すのは難しい。

「そうですか、わかりました。でも、お客さんは行くと思えますよ？」

「へ？どうしてですか？」

「各方面、色々な方から連絡要請がきているのですよ。『道具屋リユミエールが営業を再開したら連絡して欲しい』とのことでした」  
クヨウは首をかしげる。心当たりが全く無い訳でもないが、人が来るほどでもない。精々懇意にしてくれたお客さんだろうと予想するが『各方面』というのが凄く気になる。もしかすると、またどこぞの研究所の勧誘がくるかもしれない。

「面倒なことにならないといいけどなあ。一応理由はわかりますか？」

「簡単なことですよ。みんなキサラギさんに注目しているのです。前に売り出した『異次元バッグ』は何人も研究者のプライドをへし折ったらしいですからね」

クスクスと笑いながら面白そうにティナは語ってくれたが、張本人であるクヨウは100%面倒なことになると確信し、肩を落としていた。

「あとは学生さんも行くでしょうね。弟子入りもそうでしょうけど、純粹に働きたいとおっしゃっていた子もいましたので」

「また弟子入りですか・・・その手の話は面倒事になるので全てお断りします。従業員のほうは必要になったら募集という形ですね。とはいっても、店の準備もありますし、当分先でしょうけど」

「開店は何時ごろを予定していますか？」

「一応一週間後には開店する予定ですね。各方面の方々へは連絡し

てもらっても構いませんよ」

一通り書類関係を見直した後、細かいところはティナに任せてクヨウは買い物にでかけた。以前出発する時に帰ったらまた鍋をやるうと約束していたので、掃除等の手伝いのお礼として鍋をするつもりなのだ。クヨウが買い物を終えて帰宅するころには既に夕方になっていた。

「ただいま〜・・・と思ったより結構進んでいるね」

「おかえりなさい〜、それとお久しぶりです、クヨウさん」

「お久しぶりです。ん〜お変わりないようですねによりです。あの2人は？」

「店のほうの掃除は大方終わったので、住居の方の掃除ですよ。夕飯ですか？随分買い込んだみたいですけど」

「ん〜、また鍋をやるうと思ってる〜。台所はもう使えるかな？」

サクラも鍋をやるうとしてたのは知っていたので台所は最初に掃除を終えていた。クヨウとミアは鍋の準備をさせたところで、この日の掃除は終了となった。

「それでは、無事帰ってこれたことと、皆のこれからを祝して・・・

「~~~~~かんぱ〜い〜!!!」

今までの苦勞を労うように、これからも楽しくやっていけるように、鍋パーティーは盛大に夜遅くまで盛り上がっていった。

ちなみに、全員二日酔いで次の日は掃除ができなかったことは余談である。

#### 第40話「帰宅」(後書き)

ひとまず、一段落というところでは。

色々伏線をばら撒きつつ少しは回収しつつきましたが、そろそろ本格的に回収する予定です。

今後の展開も決まっているのでそこはいいんですけど・・・話の終わりを全く決めていないことに後悔しています。

いくつか案はあるので、今後はゆっくり進めていこうかと思っています。

では次回をお楽しみに。

## 第41話「再開と再会」(前書き)

やっと道具屋再開!

今回ちょっと説明文が多いので、ゆっくり読んでください。

## 第41話「再開と再会」

第41話「再開と再会」

営業再開まであと4日、道具屋「リュミエール」の面々は準備に追われていた。魔法具の準備はある程度できているので主に薬草等の必需品だけなのだが、店頭に並べるだけに数量がそれなりに必要だった。

「クヨウさん、薬草等のギルド依頼は済んだわ。あとは薬品の作成だけ？」

「ご苦労様。そうだね。ポーションが圧倒的に足りないね。なんとか大量生産はしてるんだけどね」

「まあ四日もあるんだし、なんとかかなるわよ。あとは従業員ね」

元々ミアとレナリンスを再雇用する予定であった。しかし、レナリンスは現在アルカディアス国立総合技術学園の教師をしていた。レナリンス自身はリュミエール再開までの繋ぎのつもりだったのだが、現在教師の数が若干少なめというのもあり、辞めるに辞めれない状況になっていた。ミアも臨時講師という立場で週に2度授業の手伝いへ行っている。

ミアは学園の授業日以外なら働くことはできるので再雇用となった。無論、学園側も了解している。

「ん、当分は3人でも大丈夫だと思うよ。忙しくなりすぎるようだったら募集はするけどね」

「了解。それにしてもリンスちゃんが教師か、案外面白そうよね」



「サクラさんもやりたいの？」

「ううん、そういう意味じゃなくてね。授業が面白そうだなってね」  
レナリンスの授業風景を思い浮かべると、確かに楽しそうではあったが、眠くなりそうだな〜と思うクヨウだった。

「さて、残りの薬を作らないとね」

「そういえば、ヒカリちゃんは？」

「ヒカリならそこで寝てるよ」

ヒカリは窓際で丁度日が当たって気持ちいいのか熟睡していた。やはり元になった人物同様で寝ることが好きらしい。

そして数日後、準備もなんとか終了し無事道具屋を再開することになった。朝店の扉をあけるとすでに数人ほどの人が待機していた。

「開店〜、って………なんでこんなに人がいるの??？」

「そりゃ〜、勿論敵情視察つてやつですよ」

「それに、新しい物があるかどうか楽しみにしていたしな」

みんなわいわいと扉の前で待っていたそうだ。このとき、思っている以上に自分が注目されているということにクヨウは実感した。

「あ〜、まあいいか。どうぞ、いらっしやいませ」

店舗の広さ的にそんなに大勢入ると窮屈なのだが、視察にきたメンバーは営業妨害に来たわけではないので他の客に対しての配慮をしていたので十分対応することができた。視察メンバーが帰っていくと、以前常連だった人達もちらほらやってきて、挨拶を交わしていた。そんな中、ヒカリは大人気でマスクト的な地位を確立して

いた。

「ヒカリちゃんは可愛いからね、ヒカリちゃん目当ての客もききうね」

「ん、予想以上だね・・・ちっちゃいヒカリちゃんのぬいぐるみでも作るうか？常連客へのプレゼントくらいにはなるかも？」

「あ、私もそれ欲しいわ」

「本物をいつでも可愛がれるのに、ぬいぐるみなんているの？」

「それはそれ、これはこれよクヨウさん」

クヨウはあきれるが、サクラの目が何気に真剣だったので、内心で作ることを決定した。道具屋「リュミエル」の営業初日は無事に終了。本當なら次の日に備えての準備等に追われることになるのだが、営業時間後、ある人物が来ることになっていた。

それはリュミエルの再開に向けて準備中、ギルドマスターから預かった手紙を処理している時だった。

- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -  
- - -

「ん、疲れた。意外と手紙が来てるから返事がめんどくさいな」

「まあまあ、もうちよつとで終わるんでしょう？あと少し頑張ろう

ね

手紙といっても、クヨウ個人宛から道具屋宛だったり種類はいろいろある。中には新商品の紹介というのもあったりする。各方面に世

話になっている人からの手紙は返事をしないわけにいかないの、  
今現在返事を書いているのだった。

「あ、見てクヨウさん。レンヤさんからの手紙もあったよ」

「本当？どれどれ・・・へえ、Sランクになっただけ。日付  
がこれだから半年位前だね」

「すごい、Sランクの試験はなかなか厳しいから相当頑張ったん  
だろうね。帰ってきたらお祝いしないとね」

「あれ？1ヶ月くらい前にも手紙がきてるね。・・・あはは、こ  
れはまた・・・」

それはレンヤのお怒りの手紙だった。

『久しぶり。Sランクになって大分経ったしそろそろ一度戻るか  
と思つてラングランへ帰ってきたんだが・・・どうして、リュミエ  
ールがないんだ！？リンスちゃんに聞いたら婚前旅行だと！良い御  
身分でなによりだ。今度会ったら納得の行くまで説明してもらっ  
かな。PS・リア充ハゲろ！BY青井連也』

お怒りといつても、半分以上逆恨みというか嫉妬だ・・・しかも  
何気に勘違いもしている。

「リンスちゃんが変な冗談を吹きこんだんだろうなあ。それにし  
ても、リンスちゃんからは何も聞いてないな。サクラさんは何か聞  
いてる？」

「こ・・・婚前旅行だなんて・・・あ、いや、でもまだ・・・そ  
んな・・・」

「サクラさん？」

「え！？何？大丈夫、変なこと考えてないよ？本当だよ！？」

「あ、うんわかった。わかったから、そんな涙目で睨まないでく

ださい」

ちっとも怖くないサクラの睨みを横目に他の手紙に目を通していく。そして最後の手紙を見たときにクヨウは止まる。

「どうしたのクヨウさん？」

「ん〜、いやまあどうしたものかな〜？と思ってね」

「道具屋再開初日の閉店後に来るって随分変な人ね。名前は……  
……え？」

書いたであろう人物の名前を見るとサクラも止まる。まさかこんな人物から手紙をもらうとは思わなかったからだ。差出人のところには『アゲイン・ルイゼフ』と書かれていた。

-----  
-----

当初はギルドに通報でもしようかとも思ったが、アゲインからの手紙には『依頼したい事がある』と書かれていた。以前一度会ったときも紳士的に対応してくれたので、こちらから仕掛けなければ大丈夫であろうとクヨウは判断した。もし何かあった場合はどうしようもないというのもあるが、若干依頼内容に興味を惹かれたのも事実であった。

「この場合鬼が出るか蛇がでるか……っていつのかな？」

「鬼や蛇じゃなくて魔王が出るっていうのは流石に笑えないわね」

リュミエール閉店後、しばらくしてあたりの雰囲気が変わる。リュミエール前の通りに人がいなくなる。ただならぬ雰囲気を漂わせてそのアゲイン・ルイゼフはやってきた。

「こんばんは、クヨウ・キサラギ殿、サクラ・イザヨイ殿。それとお久しぶりですな。御壮健で何よりだ」

前にあったときと変わらない紳士的な雰囲気をかもし出している。クヨウは用意しておいたテーブルへ案内し、話を進める。

「こんばんは、それといらっしやいませ。本日はどのような御用件でしょうか？」

「まずは謝罪をさせていただこう。こんな時間にすまないね、私の身の上もあるが貴方たちにそれを強要することになってしまった」

「いえ、前もって連絡をいただいていたので大丈夫ですよ」

逆に連絡なしで、昼間こられたら町中が大混乱になっていただろう。どちらが迷惑になるかはちょっと考えれば誰でもわかる。

「さっそくで悪いが本題に入ろう。実は君にある物を作っていただきたいのだ」

「あるもの？武器や兵器の類はお断りしますが・・・」

「安心したまえ、その手の物ではない。実はな瘴気を浄化できる魔法具を作ってもらいたい」

「え??？」

クヨウは激しく混乱する。それもそのはず、一般的な知識でも魔王というのは瘴気を操れるということはわかっている。つまり武器にもなるのだ。それを浄化するということは武器が減ることに等しい。魔王という立場から考えればデメリットしか存在しないように思え

る。

「混乱するのはある意味当然か。キサラギ殿、何故こんな依頼をするか説明するので、しばらく聞いていたください」

流石にクヨウが混乱するのは予想の範囲内だったようで、アゲインは落ち着いている。ちなみにクヨウの隣で話を聞いていた。そして後ろで控えていたサクラは混乱以前に驚きすぎて思考が止まりかけていた。

アゲインは元々瘴気を浄化させる研究を組織にさせていた。これ自体は元々暇つぶしでしかなかったのだが、ブルーシードを手に入れたしまったため必要性が高まったのだ。それは何故か？そもそもブルーシードとはただの魔力の塊でもなければ神々の秘宝でもない。いかなれば『世界の種』なのだ。適正がなければ手に入れることはできず、手に入れた者は例外なく半ば強制的に世界の管理人の1人として新しい世界を作らなければならない。

そして、その世界はブルーシードが適正者を元に構築する。

魔王というのは元々この世界の人であり、瘴気を取り込んで力を持った存在である。普通なら瘴気に飲み込まれモンスター化するのだが魔王は種族に関係なく瘴気を飲み込み自分の力とした存在だ。故に力の根源が瘴気となっている。

今のままアゲインが世界の管理人になると新しい世界は瘴気に溢れた世界になってしまうのだ。仮に瘴気に溢れた世界というと単にユニークモンスターや魔王クラスがその辺にいるという世界ではない。

瘴気は世界の循環作用の中で出てきた『ゴミ』や『毒』の塊なのである。故に瘴気の溢れた世界というのは生まれた瞬間から猛毒を宿すウイルスになる。今ある世界は木の葉のような物で、ブルーシードは枝分かれのような物だ。つまり全ての世界は根本では繋がっている。その葉が猛毒を宿すウイルスになればいずれ木全体を食らい尽くすだろう。アゲインが新しい世界の管理人になるのは確定して

いる。なので、解決するにはアゲインの中にある瘴気を浄化するしかないのだった。

「そして、僕に浄化できる魔法具の依頼をしにきた。というわけですね？」

「そういうことだ。もちろん、他の分野にも協力を要請している。期限は1ヶ月ほど。報酬は前払いで相応の額を払おう」

「期限が短いですね、瘴気の研究をしないといけないならかなり厳しいですね」

「ブルーシードを手に入れてしまった以上、早々先延ばしにできる状況でもないのだ。これがこちらの限界だ」

1ヶ月は流石に短いが、アゲインも管理人になるのをなんとか引き伸ばし稼いだ時間だった。元々瘴気の研究自体はしていたので、その研究を論文の形でクヨウに渡すことになった。

「何かあれば私の組織へ連絡して欲しい。直ぐに対応できるように伝えてある」

「最初から断ることは考慮していないという感じですね。まあ、あの意味世界の危機ですから、最大限協力はしますけど」

「うむ、交渉成立。ということでもよろしいかな？」

「ええ、大丈夫です」

なんとか交渉はひと段落。クヨウもそうだが、サクラも魔王のプレッシャーと衝撃的過ぎる話の内容に大分参っていた。とはいえ、以前から幾つかの疑問がある。今ここで聞かなければ聞く事ができなくなる。まだ気を緩める訳にはいかなかった。

「アゲインさん、いくつか質問があるんですけどよろしいでしょうか？」

「内容にもよるが、契約内容に不備でもあったのかな？」

「いえ、契約とは関係しないことです」

「ふむ、まあよいか。先ほど言ったとおり内容次第で答えよう」

サクラの疑問は先の戦争のことであった。

「世界樹の近くに要塞を築くようなことを？本格的に攻めるつもりもなかったみたいですし、世界樹の探索にしても意味がありません」

「ああ、あれか。あれはまあ、後片付けといったところかな。君らは商業連合は知っているかな？」

「ええ、若干きな臭い噂の絶えないグループですよな？」

「うむ、恐らくそれであっているだろう」

実は商業連合はアゲインが作った組織と手を結ぼうとしていたのだ。実際、一度は協力関係になり商業連合のほうでも瘴気の研究等を行ったのだが、商業連合の上層部の目的は瘴気の研究を行い、ユニークモンスターを生み、操ろうとしていたのだ。

アゲインはそれに気付き商業連合の研究施設を全て潰したのだが、既に生み出されたモンスターを処分することはしなかった。ほとんど同属に等しいモンスターを処分するのは嫌だったらしく、かといって放置すると多大な被害がでる。それに、人工的に生み出されたためか、アゲインにもあまり隷属的ではなかったらしく、闇の島へ連れて行くわけにもいかない。そこで、各国を挑発するように世界樹の近くに要塞を築き、そこにモンスターを集結させたのだ。そして連合軍にモンスターを討伐させ、自分はたまに出て行く程度で戦いもせず世界樹を探索（散歩）していたのだ。

「へー、あの戦争にそんな裏があったのか」

「訳も分からない戦争だとも思ったけど、そんな理由があったのね」

「ちなみに、商業連合は上層部を潰したからそのうち瓦解するだろ



う。ああ、殺していないから安心していい。少々廃人になってもらったがな」

「どのみち十分物騒だと思えますけどね」

クヨウはそこでふと気付く、連合軍はそれをわかってて最初からアゲインが出たら撤退などという形をとっていたのではないかと。となると、アゲインの真意を知っている人物が各国の上層部にはいたということになる。つまり、『アゲインと通じている人物がいる』という結論になるのは当然であった。

「さて、どうだろうな？」

アゲインが口を若干歪めながらクヨウに言った。多分、クヨウの辿り着いた結論に気がついたのであるが、結局なんの証拠もない推論に過ぎない。ゆえに、若干そうだと臭わせながら放置するつもりだろう。クヨウもそれに気付きそこで考えを止めた。

「案外意地悪ですね」

「まあ、今は依頼の方に全力を尽くしてもらいたい。そうそう、これを渡しておかねばな」

そういつてアゲインが出したのは、黒い煙が漂っているガラス玉だった。

「これはちょっと特殊なガラス玉だな。中に瘴気が入っている。これを外側をそのままに浄化するか、取り出す事ができれば、依頼成功というわけだ」

「なるほど、分かりました」

「さて、そろそろ私はお暇させてもらおう。随分話し込んでしまったしな」

「では、1カ月後に？」  
「ああ、期待しているぞ」

そのままアゲインは自分の影の中へ潜っていった。アゲインがいなくなり、クヨウとサクラは一気に気が抜けて椅子と床に座り込んだ。

「相変わらず、すごいプレッシャーね。戦うつもりは欠片もなかったのしょうけど、目の前にいるだけで疲れるわ」

「あゝ、疲れた。でも、これからもっと疲れるなあゝ。まさか魔王から『魔王退治』を依頼されるとは思わなかったよ」

実際に世界の破滅が迫っているのだ。アゲインも言っていたが、自分以外にも同じ依頼はしていても、他のところが成功するかかわからないので、実際自分でどうにかするしかない。

道具屋再開直後、難問に悩むことになったクヨウだった。

## 第41話「再開と再会」（後書き）

一応世界滅亡の危機なのですが、かなり危機感が感じられない内容になってしまいました。

最初は成り行きで魔王とガチバトル・・・とも考えたんですが、クヨウはあくまで道具屋店主であり、勇者ではないです。で、道具屋として魔王を倒すという考えで進めていき、こういう形にしました。

あとは、どつやって魔王倒すか！？という感じでしょうか。

あとは今後のお楽しみということで、次回をお楽しみに！

第42話「痺気って？」（前書き）

投稿がまた遅くなってしまった><。

何にせよ3月中に投稿できてよかったです。

## 第42話「瘴気って？」

第42話「瘴気って？」

アゲインが依頼に来た次の日、クヨウは細かい事情をミリアにも説明していた。

「随分すごい事態になってるんですね、その割には落ち着いてるみたいですけど」

「あんまり実感がないからね。実際いつ世界が崩壊するかわからないっていう状況でもないし、焦ってもしかたがないんだよ」

「きつちり1ヶ月っていう期限があるから、逆に気楽にもなれるわよ」

補足をするならば、1カ月後に世界が滅亡するわけでもない。仮に対策が取れなくても、アゲイン自身が管理人になってからなんとかする可能性もあるし、他の管理人がどうにかする可能性もある、最悪瘴気に満ちた世界をアゲイン毎切り捨てれば済むのだから。

「まあ、重大な依頼として最優先でなんとかするけどね、他人任せにするつもりもないし、してもいけないから」

「リンスちゃんにも相談して対策をとりますか？」

「ん、僕が行き詰ったら相談するよ。リンスちゃんはうちの従業員じゃなくなつたから、依頼を受けた側としてはあまり、内容を漏らすわけにもいかないからさ」

「そうね、基本的に依頼内容は秘密厳守だもん」

依頼を受けた側は基本的に依頼内容は秘密厳守である。信用問題にも関わってくる商売人としては譲れないところだ。なので、現在従業員であるミリアには話すがレナリンスには話さないのだ。ミリアにもそれを徹底させる。

「とりあえず、アゲインさんから瘴気に関する論文が届くまでは何も出来ないからいつも通りでお願いね」

流石に瘴気というものがどのような物なのか？というのを知らずにただ浄化させるといっものはまず不可能である。事前にある程度案は考えておいてはいるが、論文の内容次第ではまったくの無意味になる可能性もある。なので、今は待機状態なのであった。

そして、この日も朝から開店したのだが、客はあまりこなかった。1年以上の閉店というのは流石に大きかったらしい。事実、開店したことも知らない人もいて「たまたま店の前を通ったら開店してた」と言う人もいたくらいだ。

「当分新しい従業員はいらなさそうだね」

「そうね、昨日は結構人が来たから忙しかったんだけど。これが普通なのかもね」

「何か新しい目玉商品を出すしか方法はないでしょうね」

「家電系じゃインパクトに欠けるのかな」

クヨウが新しく商品として出した『給湯器』や『コンロ』は初日の反応が悪かった。すでに機能が新しすぎて普通の人じゃ手を出しづらいというのもあり、実際に売れ行きが伸びるのは相当後になってからである。

「クヨウさん、学園の生徒がここを見学したいって言ってただけ

ど、いいかな？」

「学園の？別にいいですけど、何でまた？」

「世間で人気の『天才魔法具職人』が出してる店ですからね、生徒でも憧れている人は多いんですよ？」

「ん〜見学はいんですけど、その『天才魔法具職人』っていう響きは嫌だな〜」

クヨウ自身、マンガやゲームのネタをパクってるだけなのだが、事情の知らない人に見ればわかるはずもない。この世界ではクヨウのオリジナルということになる。

「そういえば、学園に道具科っていうのがあるんだっけ？」

「ええ、聞いた話だと異次元バッグとかが売れ出した時は道具科の生徒数かなり増えたらしいですよ」

「子供にとつての憧れっていうやつね。まあ、目標があつていいんじゃないかな？」

そんな話をしていたときであつた。作業着を着た見知らぬ男性が店内に入ってきた。普通にお客さんかな〜？と思つたが、ふと見ると、男性は分厚い紙の袋を持っていた。

「すみません。クヨウ・キサラギ殿はいらっしゃいますでしょうか？」

「ああ、それは僕です。どのような御用件ですか？」

「私配達業をしています、クルルと申します。アゲイン・ルイゼフさんからのお届け物になります」

「っ！あ〜と、ありがとうございます」

「この紙にサインをお願いします。はい、ありがとうございます。では失礼します」

「お疲れ様です〜……まさか本名で送ってくるとは……」

アゲインの組織の人が来ると思っていたのだが、まさか一般の配達業を、しかも本名を使って送ってくるとは思ってなかった。一応世界指名手配の魔王なのだから、その辺りはある程度自重して欲しいなと思うクヨウだった。

「こんな形で送ってくるとはね」

「あははは、なかなか大胆ですね。でも、悪くは無いです。こんな形で送ってくるなんて誰も思わないから、変なところに疑われることもないです」

「こっちの心臓にはあまりよくないけどね」

クヨウは論文が入っているであろう袋を持って店の奥へ入っていった。

流石に100ページ以上の論文を最初からじっくり読むのはきついで、軽く目を通していき・・・そのままぱったりテーブルに頭を打ち付けた。

「・・・眠い・・・」

内容が難しいのと、普段ならまったく興味を惹かない内容だったので、集中力がまったくもたなかった。

「これはなかなかの難敵だな・・・」

それでも悪戦苦闘しつつ論文を読んでいるとヒカリがトコトコと近くへ寄ってきた。

「お父様、大丈夫？」

「ああ、ヒカリか。眠いたいだけだから大丈夫だよ・・・あ



れ？え？」

ゆっくりヒカリに視線を向けると、ヒカリは首をただ傾げているだけだった。混乱するクヨウであったが、ふと店のほうをみるとサクラとミリアがお腹を抱えて笑いを堪えていた。

「まったくもう。いや、流石に驚いたね」

「えっと・・・ごめんなさいお父様」

「ヒカリは気にしなくてもいいよ、それより何時から話せるようになったの？」

「今日です。さっきお昼寝から起きたら話せるようになってました」  
やっと笑いが収まったのか、サクラが店の方からやってきた。

「面白かったよ、クヨウさん」

「驚いたよ、ヒカリがいきなり話し出すからね」

「お母様、ヒカリ言うとおりにしたよ？」

「うん、ばっちりよ。もう、話すと余計に可愛く見えるわ」

サクラがヒカリを抱きしめている光景をみて和んでいたクヨウだったが、ふと疑問がわいた。

「サクラさん？僕とサクラさんへの呼び方はサクラさんが教えたの？」

「え？ううん、最初からそうだったわよ。だからこそ、余計に可愛くてね」

「あの・・・駄目ですか？」

「ああ、大丈夫。大丈夫だから泣かないで！」

ヒカリが涙目になると慌ててフォローするクヨウだった。ヒカリは

元々育ててくれたクヨウとサクラを親と認識していた。もっとも今まで話せなかったものでわからなかったが、話を聞いてクヨウもサクラもそれを了承した。

「私も驚いたわ、窓際で昼寝してたヒカリちゃんが目の前で『おはようございます』って言ったんだから。いつも『く〜』って鳴いてただけだから」

「へ〜、まあいいか。これからもよろしくね、ヒカリ」  
「はい！」

ヒカリは返事と同時にクヨウに飛びつき顔をペロペロ舐めていた。余程嬉しかったのか、尻尾をかなりの速度で振っていた。それを横目に、サクラが若干不機嫌そうな顔をしていた。

「ねえクヨウさん？」  
「はい？なんでしょう？」  
「……ずるい」  
「え？え〜と……サクラさん？」

サクラはかなり不機嫌な様子であったが、クヨウは理由がわからない。恐らくヒカリが思い切り抱きついてきたのが羨ましかったのか？と予想してみるが、生憎と的外れもいところだった。

「クヨウさん？私たちって付き合いはじめて結構経つよね？」  
「うん、1年以上にはなるね」  
「じゃあ……そろそろ敬語は禁止！」  
「はい？」

クヨウがヒカリに対しての認識をペットから娘に変わったため、口調を変えたのだがサクラはそれが羨ましかったのだ。そもそもクヨ

ウは基本的に敬語っぽい話し方をしているが、例外がある。それはレンヤとヨーゼフだった。レンヤは前の世界からの付き合いで、ヨーゼフはこの世界にきてからのある意味、2人目の父親のようなものだ。つまり、クヨウは極めて近い人にはあまり敬語を使わないのだ。サクラからしてみれば、自分はまだまだ先なのか？と思いがあつた。

しかし、ここであつさりヒカリがそこへ入り込んでしまったので、サクラが不機嫌になるのも無理はなかった。もっとも、クヨウのでの位置付けはサクラが一番高かつたりするのだが、態度に出てこないため誤解してもしかたがないのだろう。

「というわけよ。だからせめて呼び捨てて呼んで!」

「あゝうん、ごめん。えっと・・・サクラ・・・でいいかな」

「よろしい」

ようやく満足したのか、サクラが笑みを浮かべる。それと同時にヒカリがサクラに抱きつき「お母様」と顔を舐めていた。

ちなみに、店番をしていたミリアは『お腹いっぱいです。ご馳走様』といった気分であつたという。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

夕方になつたころ、クヨウは大の字になつて天井を眺めていた。論文を一通り読んだ後どうしたらいいか、わからなくなつた為である。クヨウの『瘴気』に対するイメージは一言で言えば『呪い』のようなものであつた。瘴気に汚染されたモンスターは凶暴化し、汚染さ

れた人間は廃人になる。呪われることによりそういう現象が起こりうる。とある種ゲーム的に考えていた面は否定できない。しかし、実際の瘴気とは別物だった。実際は『汚染物質』というのが正しい表現である。地球と言う大きな化学工場から廃棄された汚染物質が瘴気なのだ。ではどうやって浄化もしくは無力化するのか？といったところで行き詰ってしまった。

「どうしようかな」

普通、化学工場の汚染物質は何らかの薬品を混ぜるなりして無害な物へと変化させる。今回の場合もそうするのが手っ取り早いのだが問題があった。それは瘴気という汚染物質をどうすれば無害な物へと変えられるのかということだった。何かの薬品を混ぜればいいのか。いっても、薬品の数は膨大であるし、何より効果があるのかもわからない。結局地道に試していくしかないのだが、そんな時間はない。1ヶ月という期間は短すぎるのだ。じゃあどうすればいい？と考えてみても答えはせず、一旦クヨウは考えることを止めた。

「あゝ疲れた・・・サクラさん・・・じゃなかったサクラにも相談してみようか」

こういう時は無理に1人で悩むよりはまず誰かに話すほうがいい。他人に話すことにより、自分の考えが一旦整理されて違う考えが生まれたりする。また、相談相手の何気ない一言で考えが進むこともある。

「ヒカリと遊んで癒されにこころ」

とりあえず、一旦店の仕事をしつつヒカリと遊ぶことを決意するクヨウだった。

第42話「瘴気って？」（後書き）

今回からヒカリが喋ります、話します。でも見た目は人型じゃないですよ？

見た目はあくまで御狐様です。

今回はよくよく考えればわかることなんですけど、星が出してる『廃棄物質』が『瘴気』なので早々浄化できるわけないんですよ。それを何とかできるかは今後次第です（笑）

では、次回をお楽しみに。

### 第43話「伝説」(前書き)

今回はちょっと短めです。ぶっちゃけるとネタが・・・ネタが・・・

## 第43話「伝説」

### 第43話「伝説」

アゲインから論文が届いて数日が経ったが、今のところ依頼を達成できそうな目処はついていなかった。サクラにも相談してクヨウもアイデアを考えてはいたのだが、あまり効果的なものは出てきていないのが現状である。

「本当に、どうしようかな？」

クヨウも結構参っていた。まだ20日以上あるとは言え、目処がつかない限り何も進まないのだから。汚染物質をそのまま無害な物に変化させるのは無理。かといって取り出すのも無理。いつそアゲインの体ごとどうにかしてしまえ、とも考えたがブルーシードもあるのでそれも却下。

「八方塞だ〜。」

瘴気の入ったガラス球を転がしながらどうしたものかと悩んでいるが、特に思いつく物はない。

「汚染物質ね・・・ん？」

そこでクヨウは気がつく、論文には瘴気が汚染物質であると書かれていた。そこは多分間違えてはいないだろう。ただ、一言で汚染物質といっても種類は多種多様にある。そもそも瘴気はどんな成分でできているのだろうと疑問に思う。論文では詳細な分析ができなくて、呪いを物質化させたような物だと推測している程度だった。

「まずはそこからはじめよう。」

クヨウは行商時に面白半分で購入していたオペラグラスを能力で分析用魔法具にした。これで、瘴気の分析にとりかかった。

一方その頃店の方では、学園の生徒たちが見学に来ていた。

「生徒を見てみると若干老けた気分になるのは何故でしょうか？」

「奇遇ね、私もそう思った。そんなに年は離れてないんだけどね。」

「

生徒たちは大体13前後のメンバーに対してミアとサクラは20近い。生徒たちが子供っぽくはしゃいでいるのと、ミアとサクラが比較的落ち着いているために酷くギャップが生まれているのだ。そのため年が妙に離れているように感じてしまっていた。

とはいえ、逆に生徒が落ち着いていて、彼女等がはしゃいでいる状況になればそんなに年の差は感じはしないのであるのだが、それはそれで納得できないものがあつたりする。女心とは複雑怪奇なものがある。

「ミア先生、ちょっといいですか？」

「どうしたの？」

生徒たちが一番注目しているのは、魔法具……ではなくヒカリだった。一応道具科の生徒とはいえ、簡単な戦闘訓練はしている。それは基礎的なモンスターや動物に対する知識も同じである。それ故に、ヒカリが気になるのだ。見た目動物のだが、話す事ができ



る。動物は基本的に話す事ができないので、モンスターか？とも思えば、ヒカリはモンスターとは違いサクラに懐いている、というか親として認識している。

動物ではなく、モンスターとも思えない、ではこの生き物は一体何なのか？という疑問で生徒たちは埋め尽くされていた。

「ああヒカリちゃんのことね？この子はね、幻獣なのよ。変なはずらはしないようにね、私が怒られちゃうから。」

「幻獣！なんで幻獣がこんなところにいるんですか！？」

「すっげ〜、幻獣なんだ〜。初めて見た〜。」

「可愛い、私も欲しいなあ・・・。」

生徒たちの反応は人それぞれ。意外な事に疑うことはあまりしていないようだった。まあ、ある程度ヒカリの異常性をみれば幻獣であることのほうが納得するのだが。

「はいはいはい、落ち着いてね。簡単に言うと店長さんが幻獣と知り合いなのよ。それでこの子を授かった・・・と言えいいのか？別に捨てられたとかじゃないから勘違いしないように。一応店長が親だからね。」

クヨウはあくまで白面孤光の卵を受け取っただけだ。とはいえ、栄養分としてクヨウの魔力で育ててはいたので、クヨウの子供だと言ってもあながち間違いではない。そんな渦中のヒカリは生徒たちの勢いに押されて、サクラに抱きつき避難していた。

「みんな、今日はお店の見学に来たんでしょう？あまり本題から離れるとミリア先生が怒るよ？」

「サクラさん、そんなことで怒りませんよ。ただ、授業態度としては関心ないので評価を下げざるをえませんけどね。」

「くくえ〜〜!!」「」  
「横暴だ〜」

ブーイングは多々あるものの、一応授業として道具屋の見学に来て  
いるのだから、ヒカリのことはあまり関係ないことでもある。授業  
中に関係のないことをしていると評価が落ちる。単純に言えばそれ  
だけの話だ。若干渋々に生徒たちは見学の続きをしてから、他の店  
へ移動していった。

「嵐が過ぎ去った。そんな感じですね。」

「元気がいいのも考えものね。もう大丈夫よ、ヒカリ。」

「うん、でもちよっと怖かった。」

無邪気な悪魔が過ぎ去ったことにヒカリは安堵し、そのまま窓際の  
定位置に移動するとすぐに眠りについた。

「よく寝ますね。白面狐光ってそういう種族なんでしょうか?」

「ああ、本人から聞いたんだけど違うみたいよ。どうも育ての親の  
影響が大きいみたい。クヨウさんもヒカリの立場なら一日中窓際で  
昼寝をするって断言してたから。クヨウさん、昼寝好きだし。」

「そういえば、一度丸一日寝てみたいですからね〜。」

ミリアが思い出しているのは以前ユニークモンスターに襲われた時  
のことだ。人が心配しているさなか二度寝で1日費やされると思わ  
なかった。

「そういえば、話が変わるけど白面狐光って何か伝説があったりす  
るの?」

「え?伝説ですか?あ〜、そういえばありましたね。人間の勇者が  
魔王を倒す際に知恵を貸したとか。まあありふれた話ですけどね。」

「へえ〜・・・知恵をね。今クヨウさんが抱えている問題もトワさんの知恵でなんとかできないのかしらね？」

「あゝ、一応魔王退治・・・ですからね。ただし、あくまで御伽噺ですよ？本当にそういう話があったとは限りません。」

「トワさんが何も知らなきゃ意味はないか。ハイリスク、ハイリターンか・・・リスクが大きすぎるわね。」

トワに頼るにしてはリスクが大きすぎた。トワの棲み処はおおよそしかわからない。しかも、本人がその時いるかどうかもわからないのだ。トワが棲み処について、何事もなく見つけたとしても、解決方法を知っているかどうかもわからない。また方法がわかっててもその実行に時間がかかっては意味がない。すでに搜索でかなりの時間を費やしているだろうから、即解決できる方法でないと時間的に厳しい。何か1つでもかなわなかった場合はそのまま依頼未達になってしまう。はっきり言えば運任せに等しい行為だった。

「一応クヨウさんには話してみるけど・・・まあ、実行するとは思えないわね。」

「そうでしょうね。」

2人そろって肩を落とす。実はこの話が解決の切欠になるのだが、2人はそんなこと知る由もなかった。

クヨウも同じ頃肩を落としていた。瘴気の細かい分析は上手くいった。問題は次だった。成分がよくわからない。何種類もの成分が出てきてしまい、ほとんど未知の成分だったからだ。元の世界の知識ではあり得ない成分まで出てきたものだから、どうしようもなかった。いっそ伝説級のアイテムでも創って解決してしまいたいのだが、

生憎そんな都合のいいアイテムをクヨウは知らなかった。

「治療……でもないよね。瘴気を除去して変異を元に戻さないと無理だよなあ。」

最初は瘴気を吸い取ればそれで終了だと思っていた。しかし、問題があったのだ。それは『変異』である。瘴気を吸っているだけであればそれを取り除けばいい。だが、瘴気を吸い込みそれによって変異を起こした場合は、瘴気を取り除いただけだとバランスを崩し、崩壊する可能性がある。相手は魔王だ。瘴気を取り込んで変異した存在である以上、ただ瘴気を取り出しただけでは解決しないのだ。結局振り出しに戻ってしまうクヨウだった。

夕方クヨウは店に出る。閉店まであまり時間はないが、店の品ぞろい等の確認や、追加販売したい魔法具を考えるためだ。

「クヨウさん、そちらの進みはどう？」

「ん、さっぱりだね。もう解決策がさっぱり。」

「流石のクヨウさんでも、無理な物は無理なんですね。」

「そりゃそうよ。駄目元でいいなら、いっそのことトワさんでも探してみる？分の悪い賭けになっちゃうけどね。」

「トワさん？なんでまた？」

サクラは昼間にミリアと話していた内容を話す。サクラも実現性が限りなく低いことは分かっていたが、クヨウも恐らく同じ判断をするだろうと思っていた。しかし、サクラの想像とクヨウの反応は違っていた。

「あ~~~~~！その手があった~~~~！」

「え？まさか本当に探すの？冗談……よね？」

「ちょっと出かけてくるね、夜には戻るから後はよろしく！」  
「あの？クヨウさん？？」

クヨウはそのまま店を大急ぎで出て行った。残ったサクラとミリアは呆然としてるのだった。

### 第43話「伝説」（後書き）

ちなみに生徒からのミリアの呼ばれ方ですが、最初は「カーディナル先生」にしようと思っただんですが、正直わかりにくそうなので「ミリア先生」にしておきました。

クヨウが何処へ行ったのか？勘の良い方は多分わかるかと・・・

では、次回をお楽しみに。

## 第44話「準備」(前書き)

今回はちょっと速い更新。次回は更新が遅くなる予定です。

## 第44話「準備」

### 第44話「準備」

「ただいま。」

クヨウが突如出かけて行き、帰ってきたのは2時間後だった。

「おかえりなさい、クヨウさん」

帰ってきたクヨウを出迎えたのは、青筋を浮かべてにっこりと笑うサクラだった。ヒカリはサクラの黒いオーラに負けて部屋の隅で怯えている。

「で？きつちりと説明してもらいましょうか？」

「あ〜っと、はい、すみませんでした。」

クヨウがサクラ達の話の聞いて向かった先は学園だった。クヨウが学園に向かった理由は調べ物をするために学園の図書館を利用したかったからである。尤も、部外者がいきなり行って利用できるわけもないので、レナリンスに話を通してもらい、明日に利用できるように許可をもらったのである。

「というわけ。夕方だったし、あまり遅いと明日まで待たなきゃいけないから大急ぎだったんだよ。」

「それでも、一言言ってくれなきゃわからないでしょう？本当にトワさんを探しに行ったのかと思ったわよ。全くもう。それで、何を調べようとしたの？」

前の世界だと瘴気なんてものはないから、その手の伝説とかはない



んだけど、この世界なら昔からある瘴気に関する事があっても不思議じゃないからね。」

「なるほど、あわよくば瘴気の浄化の仕方が載ってるかもしれないってわけね？」

「ううん、違うよ。そんな浄化の仕方なんて載っていれば、この世界に瘴気は残ってないよ。僕が知りたかったのは瘴気を浄化できる武器とか道具の情報だね。」

「ああ、なるほど。」

クヨウは今まで理詰めで瘴気を浄化、或いは無効化させようとしていたが、どうも知識が足りないのか元々不可能なのかはわからないが、手段が見つからなかった。そこで発想を変えたのだ。そもそも瘴気の浄化なんて無理難題に等しいことなのだ。理詰めでやるうとしても、相応に時間が掛かる。ならば、余計な手間は省いてご都合主義的に解決してしまえばいい。

伝説や伝承にある武器や能力は、ぶっちゃけて言えば不思議の塊のようなものだ。因果律を操作する呪いやら、時間逆行等、普通にやるうとすればほぼ不可能な事を武器レベルで行使している。ある意味ご都合主義的なところを今回は利用すればいいと思いついたのだ。

「つまりクヨウさんが探していたのは……」

「瘴気を浄化させることのできる道具。ってところだね。それを僕の能力で再現できれば一挙に解決だよ。」

「無理難題にはご都合主義をもって対処するか、まあそれもありませんね。」

「まあ、まだそんな道具があるとは限らないけどね。」

一応突破口が見つかったと言え、まだあるかどうかわからないのだ。そもそも元がこちらの住人ではないクヨウにとって伝説や伝承などはさっぱりわからない。精々なまはげに近い話がある程度にしかわ

からない。あとはレナリンスや教師陣にそんな話があるかどうか聞くくらいだ。

「伝説ね、あるわよ。話の中に瘴気が出てくる程度なら2つ、3つくらいなら知ってるわ。」

「え？そんなにあるの？」

「まあ、伝説や伝承には少なからず瘴気は関わってくるわね。特に闇の島に関しての伝承もあるし、物によっては世界中の瘴気をすべて浄化させるなんて物もあったわね。」

「それを後で、教えてもらっていい？」

「ええいいわよ、とりあえずご飯にしましょう。いい時間だしね。」

- - -  
- - -  
- - -

次の日、クヨウは学園にきていた。伝説や伝承を調べるためである。許可を取ってくれたレナリンスと共に学園の図書館へ向かっていた。

「昨日はありがとうね、あんなに急な話をしてもらって。」

「いえいえ、なんでもないですよ。それにクヨウさんからの頼みごとは珍しいですからね。はい、ここが図書館になります。」

パッと見は重厚感溢れる建物で、図書館というより博物館に近い建物である。中に入ると受付があり、いくつかの机とテーブル、長椅

子が置いてある。そしてそこからかなりの数の本棚が確認できる。階段があり本棚だけ3階建てになっていて、奥行きは数十mは軽くあるだろう。本棚の横の通路はかなり間が空いており探しやすいなっているのは幸いなところだ、

「うわ、これは凄いな。なんだか体育館をそのまま書庫にした感じだね。」

「そうですね、書籍の数は数十万冊以上にのぼりますからね。一応右側の壁の向こうは学習部屋になっていて、大量の机とテーブル、イスがあるんですね。それに、地下は一部教師以外立ち入り禁止区域になってますからね。全体像はもっと広いですよ。」

嬉しそうにクスクスと笑いながら説明をしてくれるレナリンスだった。

「これは・・・探し物をするのは難しいな。」

「そうでもないですよ。一応分類ごとにある程度分けられますし、探索用の魔法具もありますからね。」

そういつてレナリンスが取り出したのはテレビのリモコンのような魔法具だった。この魔法具は探したい本のタイトルや種類を入力すると大体の位置を探してくれるのだ。

「調べたい本の名前は？受付で聞けば調べてもらえますよ。」

「なるほどね、ありがとう。じゃあ、ちょっとがんばりますかね。」

クヨウはレナリンスに教えてもらいつつ、目的に合いそうな本を調べていった。

- - -  
- - -  
- - -

一方リユミエールではいつも通りサクラとミリアが店番をしており、ヒカリはたまに来るお客さんと遊びつつ暇な時は昼寝をしていた。

「あの後、クヨウさんはそんなことをしていたんですか。」

「一言言ってくればよかったのにね、よっぽど焦ってたんでしょね。」

やれやれと言った感じでサクラはため息をつく。サクラの行ったとおり実際クヨウは焦っていた。もっとも期限に余裕があるとはいえ、一週間ほど何も進んでいないのだから、焦るのも無理はなかった。

「後のことはクヨウさん次第でしょうね。私達は店番とかしかできませんし。」

「そうね、まあサポートも重要な要素の一つだから私達は私達で、できることをするだけよね。」

戦闘経験が豊富なサクラはサポートの重要性を知っている。戦闘に例えるならクヨウが今は前線で戦っており、サクラとミリアは補助や補給等の後方支援にあたる。クヨウが安心して前線に行くためには後方支援がしっかりしてなければならぬ。そう考えるならば、クヨウには店のことは気にせず依頼に集中してもらえ今の状況は最善と言える。

「そうですね、でも・・・もう少しお客さんが来て欲しいですね。徐々に増えているとは言っても、まだまだ暇が多いですから。」  
「そうね・・・流石に暇が多いのはお店としてはよろしくはないわね。」

未だリユミエールの客足は復活してはいない。これから少しずつ増やしていくしかないのだが、暇な物は暇なのである。

「そうだ、サクラさん。2週間後くらいにお祭りがあるみたいですが、出店とかするんですか？」

「あ、そういえばそういう連絡があったわね。依頼の事ですか？忘れてた。クヨウさん次第じゃないかな？依頼の件もあるから多分無理だと思うけどな。」

その頃何をしているかにもよるのだが、どの道クヨウがどういう手段をとるかで変わってくる。サクラには判断できないことであった。

「まあそうですね。なら2人でデートですか？いいなあ、私も彼氏欲しいな。」

「え！？あ、いや・・・それいいなあ・・・じゃなくて！からかわないですよ！」

ミリアはチラチラと若干にやけた笑いでサクラを見ながらいじっていた。サクラもサクラで、顔を赤くして怒ってはいたが満更でもなさそうだった。

- - - - -

夕方になり、クヨウが帰ってきた。疲れたような感じは受けられるが、悩んではいないようだった。

「ただいま。」

「おかえりなさい、何か進展はあった？」

「流石に疲れたけど、進展はあったよ。」

ふと見るとクヨウはいくつかの本をもっていた。多分これから更に調べるのだろうとサクラは予想したが、それははずれていた。

「ん？ああ、この本？これが目的の物が載ってた本だよ。それとその物が使われた伝記だね。」

「載ってる本はわかったけど、何でその伝記まで？」

「能力を付加させるのは僕だからね。一応細かい経緯とかも知っておくとまた違うかと思ってね。」

クヨウがやるうとしている能力は、神が杖に与えた能力だ。再現性を増し、確実にできるようにするためにはその話自体も知っておいたほうがいいと判断したのだった。クヨウの能力付加は実際にその能力を詳しく知る必要もあるが、それに関するエピソードを知ることにより再現性が増す気がしたのだ。伝説等で使われた武器や防具、道具などは大抵それに付随する話がある。元々そういう能力がある場合もあるが、物語上のエピソードを経験する事でそういう能力をもった場合も少なからずあるのだ。知っておいて損をすることはない。

「ということ、あとはこれを熟読しておいて、イメージを完全に把握できればそこで完了だね。」

「へへ、じゃあもう一気に解決したようなものですね。」

「あーいや、そうでもないんですよ。」

「そっか、素材ね？」

「はい。」

素材が能力に合わない、あるいは質が足りないと能力を与えた時点で物が壊れてしまう。それは以前に確認済みだ。なので、今回は杖なのだが、どんな木できていて、どんな工夫、細工がされているか等かなり詳しく調べた。この日一番時間をとられたのがこの作業だった。素材等はすでにバンガードに依頼しており、組み上げをヨ―ゼフに頼めるよう手配してある。

「多分お金は相当かかるだろうけど、事が事だけに、金に糸目はつけない方針でお願いしたよ。」

「まあ、実際素材の質を落とすわけにはいかないものね。でも相当掛かりそうよ？」

「今まで貯めたお金があるからなんとかなるでしょう。最悪の場合はアゲインさんに報酬の上乗せを要求するし、準アーティファクトクラスの魔法具を作って荒稼ぎすることもできなくはないからね。あまりしたくはないけど。」

「この依頼だけで破産しそうな勢いですね。」

実際今までに貯めたお金は相当なものであるし、今でもクヨウの資産は右肩上がりである。仮に一日で全て使いきっても、次の月には大量のお金が入ってくる。仮に破産しようとお金に困ることは当分ないのだった。

「お金は特に問題ないでしょう、当面の問題はこれで解決ね。」

「そうですね。そうだ、クヨウさん。2週間後くらいにお祭りがありますけど参加しますか？物が出来上がるまで暇なんですよね？」  
「あ、お祭りね。そういえば連絡を受けてたな、すっかり忘れてたよ。そうだね、かなりぎりぎりまで暇だから出店でもしようかな。何かしたいことでもある？」

「私ですか？ん、特にないです・・・というか魔法具店とかじゃないんですか？クヨウさんならそういうのをやると思っただんですけど。」  
「いや、それじゃ面白くないかなって思って。お祭りだし、一風変わったことをしてもいいかな？と思っただけなんだけどね。」

前に一度参加したときは出店も出さずにレンヤと食べ歩きをしていた。途中常連のハンター達と回ったりみんなで飲みに出掛けたり等々もしたが、出店はやってはいなかった。

「そうだ！クヨウさんの世界にあって、ここのお祭りに無い物で出店をしませんか？そのほうが面白いと思いますよ？」

「なるほど、いいわねそれ。」

「あ、それもいいね。ん、向こうにあってこっちに無い物ね。型抜き、ピンボール・・・金魚すくいとかかな。」

お祭りでお店といえば大体相場は決まってくる。そこは世界が変わっても同じである。

型抜きやピンボールは地味すぎて却下。金魚すくいも、魚を飼うという習慣があまりないので、これも却下。流星に即席で良いアイデアは思いつかなかった。

.....



数日後、クヨウからの手紙を受け取ったバンガードは嬉しそうに狼狽していた。何故なら・・・

「実際に頼りにされたのははじめてかも知れんな。それにしても、無茶な内容を言ってきたものだ。」

クヨウが作るうとしていた杖の素材のだが、物によっては貴族が持っている高級品すらも霞んでしまうような物だった。要でもある杖は生命の樹と呼ばれる大樹の枝を使うことになる。これは国宝に指定されている。そんな樹の木材が普通に手に入れる分けがない。早い話、裏で手に入れるしかない。ついでに言ってしまうえば、値段も相応に掛かるのだ。

「まあ、頼られては仕方がない。手紙には重大な依頼を成功させるためとしか書かれていなかったが、彼なら悪用することはないだろう。」

バンガードは早速手配をかける。なるべく迅速に調達できるようにと。

.....

ヨゼフもクヨウから手紙を受け取っていた。しかし、内容はバンガードとはかなり異なっている。それはクヨウが受けた依頼内容が書いてあるのだ。クヨウがヨゼフを信頼しているのもあるが、一番の理由は他にある。それはクヨウがやりたい事を完璧に理解してもらったためだ。クヨウが伝説上の杖を再現させる。これはある意味世界中で注目されてもおかしくはないことだ。国家プロジェクトで遂行しても不可能なことをクヨウの能力でやろうとしている。それを明かすのはリスクが大きいけど、そうしてでも成功率を上げたかったのだ。完全に理解しないと完璧な物は作れないからだ。

「この間まで、鼻たれ小僧だったと思っと思ったが・・・中々良い依頼をしてくるじゃないか、くくく・・・はーはっはっはー！」

素材は超一流、依頼主は自分の弟子でもあり、息子のような存在でもあるクヨウから。しかも自身にかかる多大なリスクを犯してまで自分に依頼をしてきた。ここまでされて、クヨウの保護者としては勿論だが、一流の職人の誇りも燃え滾ってきた。

「よっしや〜！受けてやるクヨウ！ワシに任せとけえ！」

手紙を読んで1人燃えるヨゼフだった。少し離れたところから見ていたサキには、一人言を言って奇行を行っているようにしか見えなかった。

「御医者様ヲ呼ンダハウガイイノデシヨウカ？」

まだまだサキには理解できない物が多かった。

#### 第44話「準備」(後書き)

全然気がつかなかった。ヒカリが一言も喋ってない！

気がつくと空気になってますね〜・・・マスコットの予定なのに活躍の場がない〜。

次回とかはたくさん出せるといいなあ・・・

では、次回をお楽しみに。

第45話「お祭りの準備」(前書き)

今回はなかなか難産でした。予想以上に手間がかかって・・・

## 第45話「お祭りの準備」

### 第45話「お祭りの準備」

アゲインからの依頼に目処がついて一週間ほどが過ぎた。バンガードから『頼まれたものは一通り揃った』という連絡を受けたので、クヨウも一安心していた。ただ・・・掛かった費用はある意味クヨウの予想通りで半端な額ではなかった。今までの稼ぎの9割を使うと言う事態になっていた。クヨウは元々そこまで金のかかる生活をしているわけではないので、問題ないといえば問題ないのだが、それでも支出は大きかった。

「ということなので、お祭りで新しい商品でも出そうかと思えます。」

「結局普通に道具を売るのね？」

「面白いアイデアも出なかったからね。」

本当は少し変わった出店でもしようかという話になっていたが、あまり良いアイデアがなかったため、結局そこで落ち着くことになった。

「でも、お祭り時に買う道具なんてあるんですか？」

「いやまあ、道具というか装飾品になるかな？一応向こうの世界では人気があった物をこっちで商品化しようと思ってるよ。」

クヨウが考えているのは蛍光の腕輪等の玩具だ。勿論、向こうのよくに科学技術があるわけではないので同じ材料で作れるわけもないのだが、そこは、簡易魔法具として作って売る予定だ。内容はできるだけ簡単にしてある。腕輪用の太目の紐を編みこみそこに模様と

して術式を作る。術式も大気中の魔力をほんの少し吸い取りその魔力で紐を少し明るくするだけだ。腕に巻きつけて、結ぶと明るくなるようにしてある。あとは紐の色で明るくなる色も変えてあるのでそれなりの種類を出せる。価格もかなり抑えてあるので、子供でも買えるようにしてある。薄利多売になるが、ラングランの街の規模から考えてもかなりの数が売れるだろう。あとは似た感じの指輪やイヤリングを多少値段が上がるものの売る予定にしてある。

「へえ、でもそんな紐作れるの？かなりの数を売ることになるんでしょう？」

「商人ギルドを通して職人に依頼してあるよ。向こうの職人さんとも話したけど、なかなかノリが良い人だったね。」

「何時の間に・・・もしかしてヒカリちゃんと一緒に散歩しに行ったときに？」

「うん。向こうにもアイデアを出してもらったから特許に関しては共同になったけど、おかげで良い物ができた。当日は2人につけてもらう予定だよ。」

「へ、どんなのが楽しみね。」

.....

次の日クヨウは出店で出す物がある程度決めて、店の奥で休憩ついでにヒカリと遊んでいた時だった。

「クヨウさん、お客さんが来てるよ。」

「ん？誰だろう？ヒカリも行く？」

「うん！」

クヨウに抱きついてたヒカリはそのままクヨウの後頭部へ移動する。

人でいうと肩車をしている状態だ。それがヒカリの最近のお気に入りだった。クヨウは既に慣れきっているので、そのままの状態で店に出て行った。行った先にいたのはクヨウが蛍光に光る紐を依頼した職人だった。

「どうも、お世話になってます。」

「どうも、お疲れ様です。トルネさんが来たってことはもう出来上がったんですか？」

「ええ、とつてもやりがいがありましたからね、楽しくて楽しくて仕方がなかったですよ。」

クヨウが頼んだ職人、トルネ・ネルウィークは人懐っこい性格が特徴のエルフの女性だ。青白い若干パーマの掛かった髪に大きな丸い眼鏡をかけている。エルフの特徴である耳は横に尖っており、垂れ目とも相まってやさしそうな印象のする人だった。エルフの中でも彼女は少々変わり者で、エルフの種族は選民意識が強い者が多く、他の種族を見下す傾向が全体的にある。彼女は特にそういう傾向はない、というか興味がなかった。服飾の職人としてのプライドは高いがそれは自分の実力に対する自信と誇りであり他の種族を見下すということはない。

「クヨウさん、彼女はどちら様ですか？」

「昨日話した紐を依頼した職人さんだよ。」

「トルネ・ネルウィークと申します。服飾作成をしていますので、何かあればよろしく願いますね。お二人はこの店員さんですか？ああ！奥様でしたか！？」

「お、おお・奥様！？」

「私はただの店員です。奥様はこちらですね。」

「ミリアさん、僕らはまだ結婚してないですよ。」

「あれ？反応がイマイチ。奥様はなかなか良い反応で面白いんです

けど、クヨウさんは案外淡泊なんですね。」

「僕は開き直ってるだけですよ、大袈裟に反応すると格好の獲物ですから。」

やれやれといった感じでクヨウは答える、実際色々な人から散々からかわれているので既に慣れているのだった。それに比べサクラはどうも慣れないのか未だにテンパっている。

「サクラさんは戦闘時はキリッとして凄いですけど、中身は乙女なのでこういう方面は物凄く弱くて可愛いですね。」

「そうだね。」

「お母様、大丈夫？」

「大丈夫だよヒカリ、サクラは照れてるだけだから。」

「おほん、あまり世間話をしているのも何なので仕事の話をお願いしますね。」

自分から話をかき回しておいてその言い方はどうなのよ？と思うミアリアだったが、話が進まなくなるのであえてスルーした。トルネは持っていたカバンから3種類ほどの紐を取り出す。主体の色が赤、緑、青の3種類あった。

「これが試作品の紐になります。基本的な構造はクヨウさんと打ち合わせした通りです。光の色の変化は紐の色で変えられるようにしてあります。」

「ああ、なるほど。そっちのほうが簡単だった？」

「いくつか案があった中で、難しさで言えばこれが一番難しかったですよ。ただ、一度作ってしまえば応用が簡単ですからね。後々のことを考えるとこれが最適でした。」

色つきで光らせるのはいくつか案があった。術式で色を指定して光



らせたり、紐の中に光らせる専用の物を入れる等である。どれでも掛かる費用はあまり変わらないのだが、後々他に使ったり、或いは応用させて使うには少々面倒な部分があった。特に作成時に手間がかかるのは大量生産には向いていないからだ。今回採用した案は『紐の色を光らせる』という術式になっている。そうすることで同じ術式を大量生産しても紐の色を変えるだけで色のバリエーションが増やせるのだ。

「では早速付けてみてください。」

「どれどれ・・・おゝ、いいねゝ。思ったより綺麗だ。」

「わっ、可愛いわこれ。ヒカリちゃんにもつけてみよう。」

かなりの好評価にトルネは心の中で安堵した。実際蛍光くらいの光しかでないので地味といえは地味なのだ。派手好きには少々物足りないかなゝ？と思ったくらいなので、クヨウ達の評価は嬉しいと同時に安心したのだった。

「見て見て。」

嬉しそうにしているヒカリの首元には、首飾りのごとく光る紐がつけられていた。

「あら、可愛いわねゝ。モデルに欲しいくらいだわゝ。」

「ヒカリちゃん、ナイスよ！」

トルネとサクラがヒカリを着飾って楽しんでた、クヨウも楽しめたかったのだが、あることに悩んでいた。

「クヨウさん、どうかしたんですか？」

「ん？いや、紐の欠点をどうにかしたいなゝゝってね。」

「欠点？」

クヨウも紐の出来栄には十分満足していた。ただ一つ問題が出てきた。紐を光らせるには輪の状態にしなければならぬ。そうすることで未使用時には光らせない用にできるし、つなげる事で大きな輪にできるからだ。しかし、その繋ぎの部分が問題だった。紐なので輪を作るには結ばなければならない。一人で結ぶには少々面倒なのである。大人はまだいいのだが、子供には不便になってしまう。その上、拙い結び方だと最悪失くしたり落したりがあるのだ。

「なるほど、確かにそうですね。でも簡単に付けれるってことは簡単に取れるってことですよ？流石に無理があるんじゃないですか？」

「ん、実はそうでもないんだよね。でも金具をつけるわけにはいかないし。ってことは。。」

一人ぶつぶつと考え込むクヨウをそっとしておき、ミリアもヒカリで楽しむことにするのだった。

トルネはヒカリを飾り付けをして楽しんだ後に、クヨウと細かい内容の打ち合わせをした後帰って行った。クヨウの悩んでいた点はトルネとの話し合いの末、マジックテープもどきを作ることにより解決した。これも共同特許ということになり、帰る時のトルネはホクホク顔だった。

トルネの帰った後、ミリアは疑問に思っていた事をクヨウに聞いてみた。

「クヨウさん、どうしてカティナさんに頼まなかったの？」

カティナはリユミエールの服装デザインをしてくれた人だ。クヨウも本来ならカティナに頼もうとしていたのだが……

「実はあの人も祭りの準備でかなり忙しそうだったんだよね。流石に相談とか持ち掛けれる雰囲気じゃなかったんだよね。」

「へえ、結構人気ある人だったのね。」

「トルネさんの所は大口の依頼は受けてないから今回はなんとかなったんだよ。」

実際のところ、トルネの店の規模が小さく大口の依頼は受け付けていないのだ。しかし、今回の事でトルネの店が大成功し、カティナの店より大きくなってしまふのは誰も予想していなかった。ちなみに、その事でクヨウがカティナになじられるようになったのは言うまでもない。

.....

数日後、クヨウは商人ギルドに来ていた。というのも、場所取りのためである。場所取りは出店をする側にとっては死活問題である。大通りから外れれば外れるほど、客足が遠のいてしまう。なので、みんな大通りやその近くへ店を出したが、全ての店が大通りへ店を出せるほど大通りも広くはない。昔は自由に場所取りをしたこともあったらしいが、いざこざが絶えなく乱闘騒ぎにもなることがあったため、今は王宮から商人ギルドが仕切るように指示されている。商人ギルドである程度管理するようになってからはいざこざも減り、治安というかマナーの問題もある程度解消されている。それもあり、出店をする側は商人ギルドへ事前登録をしておき、場所取りを商人ギルドで行うのだ。

「流石に混んでるなあ〜。」

商人ギルドはかなり混んでいる。祭りの規模が大きい為、出店の数が多いのは仕方がないことなのだ。場所取りの仕方は単純である。場所にも集客率の見込める所で1等から3等まで分けてある。それぞれの等級でくじを引き、くじで引いた場所に店を出せるのだ。ちなみに、場所の数より店が多い場合ははずれもある。もしはずれを引いた場合は余った場所のくじを引きなおしその場所に従う。それでもはずれを引いた場合は、禁止エリアと既に決定済みのエリア以外で出店をするしかない。

クヨウが狙っているのは2等の場所だ。1等は流石に大人気であり、はずれを引く可能性も高い。2等なら危険性はかなり下がる。それに店の規模からしても、大通りに店を出すよりは多少外れてた方が効率がいいのだ。単純に人手と物量の問題で。

「おう！クヨウの坊主じゃないか、久々だな。『リュミエール』も出店をするのか、何処を狙ってるんだ！？」

「ガラムさんですか、お久しぶりですね。僕は2等ですよ。そのくらいが丁度いいですから。ガラムさんは？」

「1等に決まってるじゃないか！男ならドーンとぶつかるのがいいんだよ！堅実にやってもつまらんだろうに。」

「相変わらず豪快ですね〜。」

「ガハハハ、当然だろ〜。まあ、その分ライバルも多いけどな。そつちは何番だ？」

「僕は34番です。」

「お！早いな！こつちは329番だぞ！つたくどんだけライバルが多いんだか。」

1等希望は全部で500店舗ある。うち100店舗くらいしか当た

りが無い。確率は25%。かなり低い。一方2等は120店舗くらいあるうち、当たりは90くらいだ。確率は75%、余程運が悪くなければ問題ない。しかも、クヨウは密かに運氣上昇の指輪をちゃっかり装備している。これは非売品であり、一般に知られていない。何気にクヨウもやる事が黒かった。

「よし、25番か・・・場所は・・・うん、なかなかいい場所かな。」

くじで当たりを引いたらその場で登録し、細かい場所を確認するだけだ。ちなみに、ガラムも当たりを引いていた。なかなか運がいいらしい。

「準備も整ったし、あとは・・・まあアレの準備だけか、流石に緊張するね。」

商人ギルドからの帰り道、クヨウは必要な物の最終チェックをしていた。祭りの準備で若干忘れかけていたが、アゲインの依頼も期日が迫ってきている。色々とやらなければならぬ事が増えてきて忙しくなってきたクヨウはある決意を固めていた。

## 第45話「お祭りの準備」(後書き)

ちよつとキャラ紹介を細かくしてみました。いつもさらっとしか紹介してませんでしたし・・・でも効果があるのかは微妙な感じですかね？

いつも何処まで書いたらいいかとか悩みまくりで、なかなか進まないんですよね。改めて執筆の難しさを実感しております。

では、次回をお楽しみに。

## 第46話「告白」(前書き)

更新がかなり遅くなってすみませんでした。

仕事は案外速く終わったんですが・・・もう難産で難産で。

それでは本編をどうぞ。

## 第46話「告白」

### 第46話「告白」

グランパレス国、首都ラングランで開催される王国記念祭は毎年5日間行われ、かなりの賑わいを見せる。中でも大人気なのが毎年恒例の花火大会。この世界の花火大会は火薬を用いる場合もあるが、記念祭の花火大会は魔法による威力0の見た目だけ派手な攻撃魔法で競い合う、ある種のスポーツだ。

しかし、あまり戦争のないこの御時世なので各国共に力を入れており、高評価をとる事ができればそれだけの力があると宣伝することができるのだ。いわば各国の魔法軍事力を競う場になっている。だが、参加に関しては個人からグループで行う事ができるため、国とは関係ない者も当然参加できる。なので、国に自分の力を見せつけ実力を買って貰うというある種の登竜門的な場にもなっている。実際過去にここで有名になった人物が何人も各国からスカウトを受けている。

今ではどこから出てきたのか『より高く・より大きく・より華麗に』というのがスローガンになっていて、通常複数人でかなり大規模な魔法を行使するのでなかなか見ごたえがある。また、個人参加者が魔力切れにより病院送りになるのも一種の恒例になっている。

そんな祭りが開催されている中、道具屋リュミエールは順調に売り上げを伸ばしていた。新商品である『ライトストリング』（光る紐）や『ライトイヤリング』等のファッション性のあるアクセサリを売っている。ちなみに、『ライトイヤリング』はイヤリングの先が直径20mmくらいのガラス玉になっており、このガラス玉ライト



ストリング同様光るようになってる。

「いらつしゃいませ〜、新商品『ライトストリング』が発売中ですよ。」

「親しい友達や彼女へのプレゼントにどうですか〜？期間限定商品ですよ〜！」

ミリアとサクラは今回の売りでもある新商品を身に付けて宣伝用のチラシを配っている。ヒカリは店頭にて、客寄せをしていた。そこへエミリアとカティナがやってきた。

「こんばんは、クヨウさん。」

「こんばんは、エミリアさんにカティナさん。二人一緒っていうのは珍しいですね。」

「そうでもないのだが・・・クヨウちゃんには言っただけでなかったかな？私とカティナは飲み仲間だよ。」

「へ〜そうだったんですか。それは知らなかったです。」

クヨウが關心している横で、カティナがかなり熱心にライトストリングを見ていたが、突然黒い笑いを浮かべ始めた。

その様子を見てエミリアと一緒にクエスチョンマークを浮かべるクヨウだったが、カティナの近くにいたヒカリが凄い勢いでクヨウに飛びついてきた。心なしか震えている。

「ふ・・・ふふふふ・・・ふふつふふふふ・・・」

「あゝ、カティナさん？」

「どうしたカティナ？」

カティナの正体不明の笑いにエミリアとクヨウは一步後退する。ヒカリは怯えてクヨウの胸元で完全に震えている。

「クヨウくさん？これ全部クヨウさんが作ったわけじゃないですよね？」

カティナが笑顔のままゆつくりとクヨウの方へ顔を向ける。この時のカティナは「笑顔なのだが威圧感は無王並だった」と、後のクヨウは語っていた。

「え？ええ、まあカティナさんがかなり多忙みたいだったので、商人ギルドが紹介してくれた所へ頼みましたが・・・」

「どうして・・・どうして私に相談してくれなかったんですか？~~~~!!!!多忙？そんなの関係ないわ!!!!!!こんな・・・こんつつつつな面白そうな物が作れるなら1ヶ月くらい徹夜してやるわよ!!!!!!」

「いや、それじゃ死んじゃいますって！カティナさん落ち着いて！」  
「カティナ、少し落ち着け。」

うがうと言いながら詰め寄るカティナを宥めるのに苦労するクヨウとエミリアだった。

しばらくして・・・

「え、お恥ずかしい所をお見せしました・・・。」

「あははは、落ち着いて何よりです。」

「全くだな、服飾のことになると本当に落ち着かないなお前は。」

「だって、本当に凄い物よこれ。」

カティナは落ち着いてから冷静にライトストリングを評価する。服

装に術式を組み込むという事は珍しいことではあるが無い事もない。ただし、それはあくまで戦闘用であり一般人向けではなかった。極々一部のハンターや騎士等が魔法の加護を得るために作るため、どうしても高価になりがちなのである。

しかし、このライトストリングの場合は戦闘向けの装備品という意味合いではほぼ価値は無いに等しい。でもそれは戦う側の人間にとつての話だ。あくまで服飾の一部、できるだけ簡易に取り扱うことができ、尚且つ安い。一般人がちょっと派手な宝石をつけるよりは圧倒的に安く簡単に手に入る。服装に術式を組み込み、それをあくまでファッションとしてあつかうライトストリングはかなり画期的な発明だとカティナは語る。

「しかも、この接着部分。何これ？外れにくくて剥がしやすいつてどんな魔法使つてるの？つて感じね。これ特許？」

「ええ、これに関しては共同の特許になってます。今日一般公開する予定になってますから、商人ギルドに問い合わせれば教えてくれますよ。」

「本当に相談してくればよかったのになぁ……。」

「カティナ、その辺にしておけ。羨む気持ちはわからんでもないが、そろそろ見苦しいぞ？」

「わかってるわよ、もう。」

カティナも大分落ち着いたところへ、ヒカリが若干怯えながらクヨウ所へ戻ってきた。

「お姉さんコワイ……。」

「がはっ！……。」

涙目のヒカリの一言で血を吐く勢いでカティナが膝をつく。

「ヒカリ、もう大丈夫だからな。怯えなくてもいいよ。」  
「まあ、自業自得だな。クヨウちゃん、これ2つずつ貰えるかい？」  
「はい、御代はいいですよ。いつもお世話になってもらってますし、つけて街中を歩いてもらえれば宣伝にもなりますからね。」  
「そうかい？じゃあありがたく貰うとしよう。」  
「今後ともよろしくお願いしますね。」  
「またね、ヒカリちゃん。」  
「ばいばい、お姉さん。」

ヒカリの怖いという一言で撃沈していたカティナを引きずりエミリアは広場の方へ向かっていった。クヨウがその光景をみて苦笑している所へ新しい客がやってきていた。

「すみません！これください！」  
「はいはい、えくと1人2個までね。」  
「ええええ！そうですか、わかりました……。」

学生と思われる女の子は10個くらい一度に買おうとしていたが、流石にそれはクヨウが止める。あまり1人に多く買われると他の客が買えなくなるからだ。そうこうしているうちに次々と学生と思われる子たちがやってきた。

「私もこれください！」  
「私もこれを。」  
「えくと、ちょっと待って並んで並んで。流石に1度に複数の人相手には売れないよ。」

クヨウはサクラにすぐ戻るように連絡して、なんとか1人で客対応をしていた。

.....

「いやはや、大変だったよ。」

その日の夜、次の日の準備も終えてクヨウ達は軽い打ち上げをしていた。

「最初はまあ想定範囲だったんだけどね、あんなに学生が来るとは思わなかったよ。」

「そうね、あれは確かに驚いたわ。学生の情報共通のネットワークでもあるのかしら？」

「あはは、それは多分私のせいですね。」

「ミリアさんの？」

実はミリアが生徒達に祭りで『こんなのが発売される』というのを話していたのだ。当日になり宣伝しているミリアを目撃し、買った生徒から口コミであつという間に広がっていったようだった。

「なるほどね。まあ売れる分にはいいんだけど、反響が予想以上かな。念のため在庫を増やしておこうかな。あとで連絡しておかないと。」

クヨウ達が納得していたのを確認したところで、ヒカリがクヨウに飛びついた。

「お父様、ヒカリもお祭り見に行きたい。」

いくらヒカリが物分りがいいとはいえ、まだ子供である。クヨウもそれを理解してはいるが、どうしても仕事が優先的になってしまうのは大人の悲しいところか。

「そうよね、折角のお祭りなのに全部店番はヒカリちゃんにとって辛いわよね。」

「エミリアさんに言って連れて行ってもらう？僕は連れて行くとなると最終日しか連れて行けないんだけど・・・」

「お父様と一緒にいい。お母様も一緒に行きたい。」

「じゃあ、最終日まで我慢してくれる？そしたら3人で行こう。」

「うん！」

ヒカリは尻尾を激しく横に振り了解する。元々最終日は3人で祭りを見て周ろうと計画していたクヨウはほっとする。最悪エミリアや他の店の常連（ヒカリが特に懐いている人物限定）で周ってもらおうと思っていたからだ。ただ、そうすると最終日に1つ問題が起る。

「え？私はいいけど店番どうするの？ミリアちゃん1人は流石にきついと思うわよ？」

「明日からリンスちゃんにも手伝ってもらうから2人ですけど、もう1人欲しいところですね。」

最終日は花火大会の決勝があり、大抵の花火は遠距離でも十分眺める事ができるため、人がかなり多くなる。なので、花火大会まではかなり忙しくなることが予想されるのだが、花火大会が開始されると逆に来客が少なくなるため暇になる。ある意味、一番忙しくなり一番暇になる日なのだ。忙しい時に2人では少々きついものがあった。

「そこは臨時で手伝いが入るよ。最終日限定だけどね。」  
「臨時で?」「」  
「そう。」

クヨウがそういうのなら、と2人は納得する。臨時と言ってもある程度信用できる人に頼んでいるのである。とりあえず、この後の日程の在庫調整等を軽く打ち合わせてこの日は終わった。

.....

2日〜4日目は完全に販売一色だった。初日の口コミから2日目は客がかなり増大した。流石に珍しい物見たさの客もいたが、ついでに買っていかうという客が多く4日目を持たずに在庫が切れるところだった。初日にトルネの所に追加発注をしなければなかなか危なかった所だ。

クヨウが予想外だったのはハンター関連の人も多数買っていたところだ。なんでも非常用の明かりになるとかで買ったらしい。そこまで明るくはならないと説明したが、光が余計に漏れないからダンジョン等で重宝するのだという。

あとは病院関係者が魔力回復用の薬を大量に買い込みに来たの事があった。今年は魔王騒ぎもあったことからかなり広範囲魔法の重要性が高まったらしく、団体でも個人の負担がかなり多くなったらしい。倒れるまでいかなくとも、かなり疲労しているのだという。その関係上、最終日に備えて色々なところでポーションのしているらしい。

そんなこんなで4日目の販売時間が終わる。一応交代で休みを取る等していたが、流石にメンバーも疲れが目立ってきた。販売が終了後はリュミエールの店の中で休憩していた。

「流石にこんなに疲れるとは思わなかったねえ。」

「私はまだ大丈夫よ?」

「サクラさんは流石一流のハンターと言った所でしょうか?私やリンスちゃんは大分疲れてますよ。」

流石にSランクハンターは違うようだったが、他の3人には辛かったらしい。

「そついえばクヨウさん最終日の臨時の手伝いって誰が来るんですか?」

「そつね、まだ聞いてなかったわ。新しく雇ったわけじゃないわよね?」

「ん?夜には来るって連絡きてたからもうすぐ来るんじゃないかな?」

丁度その時、外からドアがノックされる。噂をすれば影というやつだ。

「はいよ、お久しぶりだな。」

「おう!久しぶりだ。皆も久しぶり!」

「レニヤ君!」

中に入ってきたのは旅に出ていたレニヤだった。もつとも昔より若干生傷が目立つものの全体的に筋肉が引き締まっており、何よりも



雰囲気は昔と大分違っていた。

「へ、あの時より格段に強くなってそうね。参ったわ、今じゃ私より強そうだもん。」

「いやいや、『白刃血桜』殿にはまだまだ勝てないって・・

レンヤの言葉が終わる前に、気絶しそうになるくらいの殺気と共にレンヤの首元にサクラの此花咲夜の刃が置かれていた。

「レンヤさん。その言葉・・・2度と言わないことをお勧めするわ。次に言ったらどうなるかわからないわよ？」

「お、おう。すまん、気をつける・・・」

「え」と、サクラ？今は・・・はい、ごめんなさい。僕は何も聞いてません。」

「よろしい。」

サクラの笑顔のまま刀を下げる。一体何時の間に取り出したかもわからない面々だった。ちなみに『白刃血桜』はサクラの二つ名であり、オオヤマ国の盗賊たちの間では有名だった。名前の由来はそのまま、とある事件が起こった際に、盗賊がサクラの逆鱗に触れ30分ほどで100人を血の海に沈めたのだ。

しかも、白い刀とサクラ本人には一切血が付着しておらず、血を桜のように舞わせ血の海の上に佇む姿からその名前がついたという。簡単に言えばサクラの黒歴史だ。

結構まずい空気になったので、ミリアとレナリンスが話題を半ば強制的に変えることにした。

「そ、それにしてもレンヤさん久しぶりですね。旅で何をしてたんですか？」

「あ、おう。まあ依頼をこなしつつ修行って感じだな。あと、オオヤマ国へ行ったときに基礎修行をした。」

我流でもいけたのだろうが、レンヤ自身にその才能があるかどうかわからない。だったら基礎を徹底的にこなしたほうが近道になる。というのがレンヤの考えだった。

「レンヤさんはもう旅はしないんですか？」

「いや、しばらくしたらまた行くことと思ってる。でもまあ数日はこっちでのんびりしようと思ってるけどね。」

「あゝ、それで手伝いをするこゝろになったんですね。」

なるほど、レナリンスとミリアは納得するが、本人であるレンヤは納得していなかった。

「ん？手伝い？」

「ええ、明日一日出店の手伝いをするんですよね？」

「……………はあ？」

そこではっとクヨウを見ると、我関せずといった感じでヒカリと遊んでいた。

「おい、クヨウ。本人に了承を得ずに何を勝手に決めてるんだ？」

「ん？いいじゃないか、今まで好き勝手遊んでたんだ。たまにはうちの仕事も手伝いなさい！」

「お前は俺のお母さんか！」

クヨウとレンヤの言い合いになるが、結局レンヤが折れて店の手伝いをするこゝろになった。

.....

「じゃあ、店番よろしくね。」

「いってらっしゃい。」

次の日は朝からクヨウ、サクラ、ヒカリの3人で祭りの見学に出掛けていった。れを知ったレンヤは昨晚いじけてたらしい。

「あのリア充め。既に子連れかよ。あいつなんてハゲればいいんだ。」

「あはは、レンヤさんだつて彼女の1人くらい作れるんじゃないですか？もうSランクハンターなんですよね？」

「彼女がいるいないにハンターランクは関係ないよ。」

「レンヤさん、これちょっと手伝ってもらっていいですか？」

「はいよ、ちよつとまつてな。」

不貞腐れつつも、結局根が真面目なだけに仕事は普通にこなすレンヤだった。

その頃クヨウ達は普通にお祭りを楽しんでいた。ほとんどクヨウとサクラのデートなのだが、一応ヒカリも一緒にいる。ヒカリは流石に体格差があり逸れるとまずいので、クヨウのフードの中か、サクラが抱っこしている形だ。

「じっくり見ると祭りの大本はどこも変わらないね。」

「ああ、向こうの世界とってことね。結局人がやることだし、同じ

よようになるわよ。」

くじ引きや食べ物の屋台等々、結局大なり小なり同じような物になるのだろう。

「お父様、あれを食べてみたいです。」

ヒカリが目を輝かせて見ている先にはリークという鳥系の動物のから揚げが売られていた。幻獣とはいえ、やっぱり狐は揚げ物に目が無いようだ。

「ふふ、ヒカリちゃんもご機嫌みたいね。」

「もぐもぐ。」

「普段は仕事の合間にしか遊んで上げてないからね。近所に子供がいればもうちょっと遊ばせてあげれるんだけどね。」

「そこは仕方がないわね。」

完全に会話が夫婦化しているクヨウとサクラだった。

夕方になりかけた頃、夜の花火大会に向けて席を確保しようとする人が増えてきた。最終日の会場のチケットは祭りが始まる前に完売状態なので、いかに会場外でいい場所を確保するかがポイントになっている。そんな中、クヨウ達はちよつと早めの夕食をとっていた。

「大分慌しくなっているね。」

「クヨウさん、私達は大丈夫なの？あまり心配してないみたいだけど？」

「ヒカリも花火が見たいです。」

実際走り回って場所を確保しようとする人がいるくらいだ。ある程

度早く確保しにいかなければ場所がなくなってしまうだろう。ゆっくり出来る人は元々花火大会に興味が無いが、既に席の確保が終わっている人だけだ。しかし、サクラの知っている限りでは席の確保などまったくしていなかった。

「大丈夫だよ。場所は既に確保済みだからね。」

「え！？そうなの？」

「うん、だから焦らなくても大丈夫。」

ほっとしたところで、サクラも大分お腹がすいたらしく、デザート込みでなかなかの量を食べていた。

「ヒカリちゃん寝ちゃったね。」

「結構はしゃいでいたからね、お腹が一杯になったら眠気が来たらだろうね。」

「くく……。」

3人……もとい2人と1匹はとある場所へ移動していた。ヒカリは既にクヨウのフードの中で熟睡している。そして着いた先は道具屋リュミエールの店舗だった。

「???まさか、ここの屋上？」

「そうだよ、意外とここの辺りは穴場だね。店が多いから人が少ないし、泥棒防止に屋上は立ち入り禁止になってる場所が多いんだ。でもまあ、自分の店なら別にいいでしょう?それに念のため結果も張ってあるから入ってくる人はまずいないからね。不法侵入もない。」

「そういえば、会場もそれなりに近かったわね。祭りをしている場所から遠いから気付かなかったわ。」

そのままクヨウ達は屋上へ移動。一応ヒカリも一緒に連れてきている。屋上で予め用意しておいた敷布を広げ、あとは待つのみである。

ある程度暗くなった頃、花火大会が始まった。最初は個人参加者であるろう小さな花火がいくつか上がる程度だ。流星に小さいものは見えにくいので、最初はあまり迫力はない。しかし、花火が進むにつれてどんどん派手さが増していく。個人参加者クラスは小さな円形の花火が上がる程度。細かい細工をしているものや数で勝負しているものがあつたが、やはり規模は小さい。中盤になるにつれ、団体参加者が出てくると大型の派手な円形から、はじまり色とりどりの花火や動物の形を模したものがでてきて、最後は巨大な竜を模したものの、中型だが動きをつけたものまで登場するようになっていた。中盤以降はリュミエールの店舗の屋上でお十分楽しめるくらいになり、音に驚きヒカリが飛び起きてクヨウの服の中で逃げ込もうとする場面もあつたりした。

「ん、なかなか派手だねえ。氷竜の竜巻とかすごいリアルだね」。クヨウが關心している横で、サクラは少し複雑な表情を浮かべていた。

「確かにすごいわ、でもなんだか不思議な感じね。綺麗だし、見ていたい気持ちはあるんだけど・・・やっぱりあの魔法の最終目的は敵を倒すことなのよね。そう考えると、綺麗綺麗とただ喜ぶのもどうなのかな？」

威力0の広範囲魔法。それだけならば完全な見世物なのだが、威力はあえて殺している。結局どこまでいこうと攻撃魔法は攻撃魔法なのだ。攻撃魔法は相手を倒すことが本来の目的だ。いくら取り繕う

ともそれは事実であり覆せる事柄ではない。

「ん、でもそれは何をとっても同じことなんだよ。」

「え？それはどういうこと？」

「力はただ力でしかない。それをどう使うかは使う人次第ってね。

このまま戦争がなければこの魔法はただの花火魔法だからね。戦争が起きれば攻撃魔法に変わる。それは変えようのない事実だけど、でもそれを恐れちゃ駄目なんだと思うよ。抑止力っていう意味合いでもそうだし、さっきの氷竜なんてあれを攻撃魔法として使われたらどうなるかって皆が見てるから想像がつくよね。だから、戦争を起こしちゃいけないっていう考えが出てくるんだ。勿論逆に使いたくなる人だっているだろうけどね。あ、と、話が少しずれちゃったか。ともかく、今は攻撃するためじゃなく魅せるための魔法なんだからそこは否定しなくてもいいと思うよ？」

「うん、そういうものなのかしらね……。」

サクラは何かを考えるように若干のため息をつく。

「やっぱり難しく考えすぎなのかな？前にクヨウさんに言われたけど、なかなか治らないものね。」

「考えることは悪いことじゃないけどね、考えを止めるのも大事なことだよ。『鋭さと鈍さ』ってね。切れすぎる刃は自分をも切ってしまう。刃に峰があるのもそういう理由じゃないかな？まあ、これは予想だけだね。」

あはははと笑うクヨウにサクラもやや自嘲気味に笑ってしまう。

「ほんと……そういう所には勝てないな……。まあそういうところが良いんだけどね。」

「ん？何か言った？」

「んん、なんでもない。」

サクラの小声は花火の音に紛れてクヨウには届かなかったがサクラは特に気にしてはいなかった。そこからは2人とも無言で花火に見入っていた。最後の花火が終わると会場のほうから大歓声が沸きあがっていた。目の前で見ていた分だけ、盛り上がっているのだろう。サクラも若干の余韻を味わっていたが、ふとクヨウを見ると若干クヨウが緊張しているように写った。

「クヨウさん？何かあった？」

「ああ、いや・・・ちよつと待ってね。」

クヨウは大きく深呼吸をして落ち着かせているようだ。変な緊張の仕方にサクラは？マークを浮かべていた。

「ねえ、サクラ。今アゲインさんからの依頼を受けているよね。それが無事に終わったらさ、・・・僕と結婚してくれないかな？」  
「・・・え？」

サクラは一瞬クヨウが何を言っているのか良く分からなかったが、クヨウの言葉を頭の中で何度も反芻させてようやく理解をした。

「あつと、その・・・私でいいのかな？」

「うん、サクラじゃないと僕は嫌だ。」

クヨウもこの時ばかりはしっかりとサクラの目を見つめて言った。逆にサクラはやっぱりこういう場面には弱いらしく、顔を真っ赤にして俯いた。少ししてから三指を立てて頭を下げる。

「あの、その・・・不束者ですが、よろしく願います。」



「あ……うん、こちらこそよろしくね。」

それからしばらくは、二人の影が離れることはなかった。

## 第46話「告白」(後書き)

長いです。本当に長かったです。

2話か3話にわければよかったですけど、1話でなんとか終わらせる予定だったので悪戦苦闘しているうちにこの長さになんか……

まあ……次回からは元の長さにする予定です。

では、次回をお楽しみに。

## 第47話「杖を作ろう」(前書き)

前回の総合評価が一気に増えてついに1000点超えてました。正直かなりびっくりしてます。1話だけで300点くらい増えた気がして・・・  
毎回読んでいただいてる方には本当に感謝しています。

## 第47話「杖を作ろう」

第47話「杖を作ろう」

――道具屋リユミエール（居住区）――

ラングランでのお祭りが終わり、クヨウ達が店のかたづけを終わらせたところでアレがやってきた。

「ご苦労様です〜。」

配達業者から受け取った物はクヨウがヨーゼフに頼んでいた物であった。

「クヨウさん、それは？」

「これかい？これはあの依頼を完了させるための杖だよ。」

嚴重に封をされた箱をあけると、そこにあつたのは煌びやかな装飾は施されていない、しかし無垢な純白を思わせる杖だった。素材に世界樹の枝や白蛇の皮を使っているためか、神聖な魔力を帯びているような雰囲気をもし出している。一言で言えば「浄化の杖」、まさしく名前の通りの杖だった。

「まあ、今のままだと唯の杖なだけどね。」

伝承の記載通りの素材を使い、伝承通りの外見をしてよとも、普通に通ったならば能力を持つはずもないので唯の杖なのである。

「これにクヨウさんの力で能力をつけるのね。」

「まあね。もう依頼の日数も無いに等しいし、今日中にやっちゃうけど・・・僕の準備がまだだからね。今日は店に出ないから全部任せちゃっていい?」

「ええ勿論。クヨウさんは杖のことだけ考えてなさい。」

そういええ、サクラはクヨウを店の奥に押し込んだ。そのままヒカリを連れて店番に出る。

「お母様?お父様とは遊んじゃ駄目ですか?」

「ごめんねヒカリちゃん。今日のクヨウさんは仕事に集中するから終わるまでは駄目よ。その変わりお店の手伝いをよろしくね。」

「はい、お母様。」

ヒカリが嬉しそうに返事をする。ヒカリにとっては店の手伝いはぶっちゃけると遊んでいるようなもので大した差はなかった。

一方クヨウはというと、若干緊張した面持ちで部屋に魔力漏出を防ぐための結界を張る。その後、仰向けに寝ていた。というのも心を落ち着けるためである。

「ふゝ、いざというときにはやっぱり緊張するね。」

今回は事が事だけに失敗することが許されない。告白等の件で忙しかったせいで完全に忘れていたがこれに失敗すると最悪の場合世界崩壊に繋がるからだ。それと・・・杖が壊れてしまえば財産のほとんども使っているので大損害だ。

「あゝ緊張する。小市民に勇者の真似事なんて無理だな。」

異世界に来て魔王を倒せとか言われなくて本当に良かったと思うクヨウだった。とりあえず、落ち着くためにゆっくり深呼吸をする。ゆっくりゆっくり深呼吸をして自分の心臓の音が早い事を確認する。そのまま目を閉じ、何も考えずにただ深呼吸をする。

ふと目を開けると外は夕暮れだ。想像以上にクヨウは緊張していたようで、そんな自分に苦笑するのだった。そして、作ろうとしている杖の能力を思い浮かべ再認識する。

「ふうう……さて、やってみるかな。」

クヨウは落ち着いて箱から杖を取り出す。そしてそのままゆっくりと付与する能力を思い浮かべイメージがブレないように慎重に魔力を込める。一通り込め終わると杖が大量の魔力を発散しだした。

「これは！？グツ！」

クヨウは懸命に杖を治めようとするが収まらず、余波でクヨウが傷ついてしまう。そして、しばらくしてなんとか治まったと思ったら、大きな爆音と共に杖が粉々に砕けてしまいクヨウも意識を失ってそのまま倒れてしまうのだった。

.....  
.....  
.....  
.....  
.....

——道具屋リュミエール（店区）——

クヨウが目を閉じて寝てしまった頃、店の方ではちょっとした騒ぎ

になっていた。祭りで売りにだしたライトストリングやライトイヤリングを買いたいという人が次から次へとやってきていたのである。

「嬉しい悲鳴というのはこういうことですかね？」

「うん、そうかもね。でも、もうちょつと落ち着いて欲しいわ。」

やれやれとサクラが顔を横に振りため息をつく。というのも、大量に買い込もうとする人が多いのだ。しかし、祭りの時に大量生産をして祭りが終わったら需要は減るだろうと予想してあまり生産するつもりはなく、トルネのところも今は休みになっている。予想以上の需要に対して在庫は僅かしかないのだ。従って1人に大量に売ることとはできないので、サクラは1人1個という限定で販売することにしたのだ。

普通の客ならそれで解決するのだが、行商の類の人はそうもいかない。どうにかあの手この手で売ってくれと頼んでくる。仕舞には完璧な上から目線で店長を出せ！と脅す輩もいる始末だ。ただまあ、生憎サクラにはその手の脅しはまったく効果はなく逆に殺気を当てられ腰を抜かして逃げ出す輩が大半だった。

「今日はクヨウさんから店の事を任せれちゃったからね、きっちりやらないと。」

「ははは、もうすっかり奥さんやってますね。指輪までしっかりしちゃって。ウラヤマシイナ。」

「ミリアちゃんだって良い人すぐに見つかるわよ。」

指輪はクヨウが祭りの時に告白した際にサクラにプレゼントしたものだ。半目でサクラと指輪を眺めつつミリアは「本当に誰かいないかな？」と悩み、サクラがそこを突っ込んでいた。そういった話で盛り上がるサクラとミリアだったが、生憎ヒカリにはまだまだ何のことなのか理解できていなかった。

そして夕暮れ時にそれは起こった。  
サクラとミアが店番をしているときに、店の奥から膨大な魔力が流れてきたのだ。

「え！？何この魔力！」

「すごい力ね。ある程度結界を張って防いでるみたいだけどそれで防ぎきれないわね。ん〜、騒ぎにならなければ良いけど。」

2人はクヨウが中で杖を作っていると予想できてはいたが、まさか杖の魔力が暴走しているとは思っていなかった。

「神様が作った杖の再現っていうんだから、これくらいの魔力があるんでしょね〜。」

ミアは関心したように頷いていたが、サクラは少し嫌な予感を感じていた。

（それにしても、少々乱暴な魔力じゃないかな？この膨大な魔力を杖の中に押し込むのだから少々強引になるのかもしれないけど・・・）

流石に中の状態までは予想しきれず、嫌な予感を抱えたまま見守るしかなかった。そしてそれは起こった。魔力の破裂とも言うべき爆音がしたのだ。その瞬間、結界が破壊される。幸いなことに店の壁や窓には影響がなかったが、中にいるクヨウの安否が気に掛かる。サクラは爆音の瞬間、少々驚いたが結界が破壊されたことに気がつくとそのまま店の奥へ一気に駆け込んで行った。

「クヨウさん！」



あまりの出来事にミリアは固まってしまいがヒカリが飛びついてきたので、ヒカリを抱いて店の奥に入っていく。そして、そこで見たのはうつすらとしか呼吸を行っていないクヨウと顔を青くして必死にクヨウの状態を調べているサクラだった。

――真っ白い空間――

「あれ？ここは？」

クヨウがふと目を覚ますとそこは真っ白な空間だった。

(あれ？何がどうなったっけ？)

自分がどうしてここにいるかが、全く思い出せない。それでも悩むクヨウの目の前に1人の人物が現れた。

「ほっほっほ、久しいのお。元気にしておったか？」

その人物とはクヨウとレンヤをこの世界に入れた張本人であり、この世界の管理人だった。しかし、クヨウは全く気がつかず悩んでおり、完璧無視している状態だった。

「お〜い、お話を聞いておるか？」

「え？」

そこでようやく目の前の管理人に気がついた。気がついたのだが、

誰か判別できていなかった。

「え〜と、どちら様でしょうか？あの世だと仮定すると死んだ爺さんとか？」

「わしの事を覚えておらんのか。わしじゃよ、わし！」

「新手の詐欺？ごめんね〜お爺ちゃん今僕お金ないんだよ〜、だからまた今度遊んであげるね〜。」

管理人も流石に詐欺やボケた爺さんとかと勘違いされると流石に青筋を浮かべた。

「わしをおちよくるつもりか？そろそろボケ倒すのを辞めないならそのままの世へ案内してやってもよいぞ？」

「え〜と、ごめんなさい。」

クヨウと若干遊びすぎたことを反省し謝罪する。

「それで、僕はなんでまたここにいるんですか？」

「お主覚えておらんか？ここに来る直前まで何をしておったかを。」

「それがさつきから思い出せないですよ、何してましたっけ？」

「やれやれ、まあよい。まずは思い出してもらおうとするかのう。」

そして管理人がクヨウが浄化のための杖を作っていたことを説明する。半分くらい話してからようやくクヨウも思い出してきた。

「ん〜？もしかして、僕死んだ？」

「いや、死んではおらぬよ。ただ、今のおぬしは魂だけの存在じゃがのう。」

「魂って・・・じゃあ肉体は？」

「向こうにおいてある。今回はお主の魂だけを呼び出した形じゃか

らの。ああ、安心せい。別に死んだわけじゃないから肉体も生きておるよ。」

魂が抜けておるがのうと笑う管理人に若干クヨウは呆れる。しかし、ある程度の事情を思い出し把握したクヨウは一安心する。

「理解してもらえたようで何よりじゃ。それでは本題じゃ。」

「僕を何故呼び出したか・・・ですか？それは杖の件ですか？」

「うむ、まあ原因じゃしものう。」

ここに来る直前と記憶があれば誰でも推測することはできる。そしてその理由も。しかし、クヨウの予想は良い意味で裏切られることになる。

「別に説教をするつもりはないぞい。まあやりすぎじゃがな。今回あれは失敗したのではなく失敗させたのじゃ。」

「?????どういう意味？」

「あれを成功させてしまうとお主の魂が神格化されてしまうのじゃよ。何せ神と同じ事をやり遂げたのじゃからな。無論わしが与えた反則に近い能力のおかげとはいえな。なので、人間のままでいさせるために失敗させたのじゃ。」

神格化すると輪廻の輪からはずれてしまうし、肉体からして人間を遥かに上回る存在になってしまうのだ。今までのクヨウを生き方を見て、本人がそれを望まないだろうと推測していた管理人はそれを阻止したのだ。

「なるほど、それはありがとうございます。色々厄介な状態になる寸前だったのですね。」

「何、礼には及ばんよ。わしが与えた力の監督をするくらい造作も

ないことじゃからな。」

クヨウとしてはかなり助かることだ。しかし、同時に困ることもある。依頼を解決させる方法が途端場でなくなったのだ。かといって、神格化して依頼を解決するわけにもいかない。しかし、管理人もそれは見越していた。

「ああ、心配するでない。失敗させたとはいえ偉業を達成したことには違いが無い。その杖はわしが与えようではないか。ただし、効果は1度きりじゃ。使用後は粉々になつて消滅するから気をつけるように。」

「ありがとうございます。あゝ良かった。これで何とか依頼を達成できるか。」

ホツとするクヨウだが、管理人の要件はこれだけではなかった。

「それとお主から、その能力ははずしておいた。もう2度と使うことはできないだろう。」

「え！？どうしてですか？」

「あれはのう、元々補助具のような意味合いでつけておいたのじゃよ。いきなり異世界へ送つてもなかなか生活できる物でもないからのう。しかし、お主は既にそれを克服しておる。かの地に根を張り1人の人間として生きておる。そんな者には補助具は必要なからう。既にお主とてそれがなくとも生きていける自信はあるのじゃらう？」「ええ、そりゃあまあなんとか。」

クヨウも目立つことを嫌つて極力能力を使わない事を選んだのだ。不便と言えば不便にはなるが、そこまで困ることもない。

「能力に頼りきりだつたらそのままでもよかつたんじゃが、お主は

そうでもないからのう。1人前になったという証じゃと思えばよい。」  
「ん、そういうことなら。まあいいか。」

既に決定事項っぽかったので、クヨウも反論する気はない。それに自分の力でもなんとかやっっている自信はある。

「さて、そろそろあちらへ戻そう。お主の心配をしている者もおるじゃろうしのう。」

「うん、まあ色々ありがとう。」

「うむ、もう会うことは・・・多分ないじゃろう。達者で暮らせよ。」

クヨウの意識はそのまま闇に落ちていった。

――道具屋リユミエール（居住区）・・・

「ううん・・・」

クヨウがゆっくり目を開けるとそこには泣いて心配しているサクラがいた。

「クヨウさん！？あ、よかった気がついたのね。どう？大丈夫？どこか痛かったり調子の悪いところある？」

クヨウはゆっくり起きて体の調子確かめる。体全体が少々痛む程度で特に酷いところはない。

「うん、大丈夫だよ。ごめんね、心配かけたみたいで。」  
「よかった。本当に死んだみたいで怖かったのよ。」

サクラはクヨウに抱きつく。クヨウは突然のことに驚くが、サクラの体が少し震えていたのがわかったので、何も言わずただ抱きしめた。

それから少ししてミアが医者を連れてきた。そこである程度見てもらい問題ない事がわかり、念のため細かい検査を後日行うことになった。

「本当に良かったですよ。まさかあんな失敗するとは思わなかったですからね。」

「あはは、ミアさんも心配をかけてごめんね。」

「いえいえ、無事でなによりです。それにしても依頼はどうするんですか？杖は見るからに粉々になってますからね。」

「あゝ、それに関してはこれを……。」

クヨウがポケットから取り出したのは、かなり小型になった杖だった。もつとも杖から放たれる神々しさは粉々になった杖の比ではない。しかし、同時にどこか儂さをかもし出していた。

「クヨウさん、どうしてそんなものを？」

「うん、今からそれを説明するね。」

クヨウは気を失って倒れたあとの事を全て話した。最初は驚いているサクラとミアだったが、杖があることが何よりの証明なのでもう感心するしかなかった。

「でも、1回だけじゃ試せないわね。」

「んまあ、管理人がわざわざくれたんだから使えないってことはないと思うよ。」

「そうですね。」

説明も済み一段落したところでヒカリがクヨウに飛びつき顔を舐めてきた。ヒカリもヒカリでかなり心配していたようだった。流石に今まではヒカリなりに空気を読んでいたようで、大人しくしていたがそれも既に限界だったようだ。

「お父様、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。ヒカリも心配かけてごめんね。」

「ううん、いいよ。お父様今日は一緒に寝て良い？」

「あはは、いいよ。じゃあ3人で寝ようか？」

「うん！」

大喜びのヒカリに対し、サクラは顔を真っ赤にしている。流石に同じ布団で寝るのは恥ずかしいようだった。

「サクラさん顔を真っ赤にしちゃって可愛いですね。じゃあ私はそろそろ帰りますね、お邪魔虫は早々に立ち去らないとね。サクラさん、御馳走様。」

「ちよっとミリアちゃん！？」

ミリアは後半はサクラにしか聞こえないように囁いて帰っていった。サクラは変わらず顔を真っ赤にしている。

「サクラ？どうしたの？」

「お母様？お顔が真っ赤ですよ。」

「ああううん、大丈夫、大丈夫よ。」

大分ミリアにからかわれるようになったサクラはしばらく顔を赤くしたままだった。

クヨウの杖作りは失敗したが、それでも依頼を達成させるための物がそろった。あとは期日を待つばかりである。



#### 第47話「杖を作ろう」（後書き）

これで杖を完成させたら神様もびっくりしますよね〜ってことで失敗させました。

ついでに能力もなくなりました。1人立ちって意味では丁度いいのでね。

ちなみに、レンヤの場合は既に身体能力便りではなくちゃんと技術もあるので既に1人立ちしてます。身体能力減とかにはなりません。

では、次回をお楽しみに〜。

第48話「浄化と完了」(前書き)

今回で本編終了です。

## 第48話「浄化と完了」

第48話「浄化と完了」

クヨウが受けた依頼の期日の夜、リュミエールにアゲインはやってきた。約1ヶ月ぶりにみたアゲインは以前よりも神々しいオーラのようなものを纏っている。恐らく、以前よりも遥かにブルーシードが体に馴染んでいる影響であろう。本人もその事を気にしているせいか、かなり強力な部類の封印を自身の体にかけているようだった。

「お久しぶりですね。前よりも神様っぽくなってきたようですが、ブルーシードの影響ですか？」

「うむ、だがあまりそれは言わないで欲しいな。正直これには参っているのだ。」

前と変わらない様子に見えたが、声から察するに大分疲れているようだ。

「ブルーシードと瘴気が反発でもしているんですか？アゲインさんが疲れているということは余程の影響なのでしょうけど・・・。」

「いや、そうではない。私としてはそちらのほうが幾分か楽だがな。君もわかるだろうが、ブルーシードの影響でこのオーラみたいな物が体につくようになった。そのせいだな、一部の人間達から聖人、或いは神の使い等と崇められる様になってしまったのだ。私がいくら違うといってもこのオーラがある以上否定しきれんのだ。そんな人間共の相手をしていて大分参っているのだよ。」

魔王と呼ばれ恐れられている者が聖人、或いは神の使い等とは皮肉もいいところだ。しかも、ある意味そういう存在になってしまった

以上完全に否定するのは不可能である。しかも、証拠と言わんばかりに神々しいオーラを纏っている。肯定する材料ばかり揃ってしまった。アゲインもかなり苦労しているようだった。

「いつそのこと、嫌悪してくれたほうが、気楽なのだな。」  
「あはは、まあお疲れ様です。」

流石にクヨウも引きつった笑いしかでなかった。

「ふむ、愚痴になつてしまったな。今のは忘れてくれ。さて、依頼は完遂する事ができそうかね？」

「ええ、こちら結構苦労はしましたが、なんとかできそうですよ。」

「ほう、それは頼もしい。一応他にも依頼をかけているところを周ったが、今のところ全滅だな。今出来そうか？」

「はい、これを使えば大丈夫でしょう。」

クヨウがそう言って取り出したのは管理人から貰った浄化の杖だった。こちらもちちらで神々しいオーラを放っており、アゲインも流石に驚いて声が出なかった。

「これで瘴気がなくなれば依頼完了というわけか。では、やって欲しい。」

「では、いきますよ。」

クヨウが浄化の杖をかざすと、目が眩むような光が周りを照らし始める。あまりの光の強さに目を閉じても明るさが分かるくらいだ。

「ん！？グッ、あああ……ああああ……。」

徐々にアゲインの体から煙が上がってきている。今正に瘴気を浄化しているのだろう。クヨウ自身は光が眩しくてアゲインの様子を見ることができないが、それでもアゲインからの魔王のプレッシャーの様なものが徐々になくなっていくのを感じており、浄化が進んでいることが予想できる。

そして1分ほどで光が収まり浄化が完了する。それと同時に杖が粉々に砕けた。元々1度だけということとで管理人から貰ったものなので、クヨウも特に驚きはしなかった。浄化が済んだアゲインは姿形に変化はないが、魔王としての力はなくなっていた。

「ふう、なかなか辛い体験だった。」

「大丈夫ですか？一応浄化は完了したみたいですけど、体調のほうはどうですか？」

「いや、特に問題ない。体の奥底にあった塊がとれたような感覚だ。こんなに体が軽く感じられるのは久しぶりのことだ。」

アゲインは体の各所を動かしつつ様子を見るが特に問題はないようだった。疲労はあったが、今までよりも体調がよくなっている様子だ。

「しかし、よくあのような物を用意できたな。世に出せば世界遺産級の扱いを受けてもおかしくはないものだ。既に粉々に砕けているのが残念だな。」

「まあ、色々ありまして・・・1度使えば確実に壊れることは知っていましたので、問題はないですよ。」

「そうか・・・いや、何もいうまい。依頼ご苦労だった。報酬は数日後、組織の方から送るようにする。何か問題はあるかね？」

「いえ、大丈夫ですよ。」

多少報酬の確認を済ませ、アゲインは店から出て行った。アゲイン

が外へ出て行ったのを見計らってサクラがヒカ리를抱いたまま店の置くから出てきた。

「どう？クヨウさん。無事終わった？」

「うん、終わったよ。」

サクラも結構心配していたようで、クヨウの安全を確認してほっとする。

「それにしても案外何も無く終わったのね。」

「ははは、まあ僕にかかる負担はそんなに重くはないよ。アゲインさんのほうは結構きつそうだったけどね。」

長年体に同化させてきた瘴気を浄化したというのは、体の作りをその場で強制的に変えたようなものだ。アゲインは苦しむ程度で済ませてはいたが、並みの人間だと死んでもおかしくない激痛が襲っていただろう。それを感じさせなかったアゲインは流石魔王といったところか。

「まあ、店全体に遮断用の護符を貼ってあるしね。下手に漏れると大騒ぎだ。」

「それもそうね。これでようやく落ち着いたんだもの、しばらくはゆっくりしたいわ。」

店を再開させてから、依頼があり、お祭りがあり等意外と忙しくしていた。クヨウ一人が忙しくしていそうなイメージもあるが、サクラやミリアはクヨウのフォローに周っているため、それなりに忙しくはしている。しかし、それもこの依頼達成で終わりであった。

「あとの気がかりは、式くらいだしなあ。まあ数ヶ月先になるだろ

うし、ゆっくりやっていくかな。」

「そうね、式……式か……ふふ、ふふふ。」

若干不気味な笑い声をあげサクラは何かを想像したようで、女性としてはどうなのか？というくらいニヤけた。クヨウもサクラの妄想癖は大体把握したらしく、若干あきれ気味に突っ込む。

「サクラ？妄想はほどほどにね。」

「え？！クヨウさんとの結婚生活とか、甘い夜とか全然想像してないよー！」

「……うん、わかったから落ち着いて落ち着いて。」

「お母様、お顔が真っ赤です。」

サクラは気がついていないが同棲と結婚生活は差ほど変わりは無いだろう。子供代わりにヒカリがいるから尚の事。クヨウは気がついていないが、サクラを撃沈するつもりもないので黙っている。

「ええと……そうだ！クヨウさん、魔法具関係はどうするの？能力なくなっちゃったんでしよう？」

「（結構強引に話をずらしたね、別にいいけど。）魔法具ね、まあ今までとあまり変わりはないんだよね、実のところ。」

「え？変わらないの？」

「そりゃ、術式なしで作るのは不可能だけど……なんとなくかコツがわかった、といえいいかな？作りたいと思う能力に対してどういう術式がいいかって大体分かるようになったんだよ。結構遊びも兼ねて色々作ったからその経験則だと思っただけだね。だから、多少研究する必要があるけど、他の人よりは楽に作れるよ。まあ、アイデアもあるしね。」

これは作った魔法具を見て術式に直すという作業を繰り返して

いたクヨウだからできる経験則である。他の人とは完全に考え方が違うのだ。そして、今まで電化製品と創作物関係の道具を作ってきたクヨウにとって魔法具のアイデア等腐るほどある。勿論、今まで通りあまり武器に転用できない物を作っていく予定だ。

「まあ、これからはのんびりやっっていくことにするよ。」

.....

1年後。

「お疲れ様、サクラ。案外疲れたね。」

「ほんとね、何か飲む？」

今現在クヨウとサクラがいるのはオオヤマ国である。険しい山に囲まれ、独自の文化を創った国である。山の麓から本土への移動用魔方阵が開発されたことにより交易が盛んになった。人間族と竜人族が主に暮らしており、サクラの生まれ故郷である。何故そんなところにいるのかというと、クヨウとサクラの結婚式のためである。

アゲインの依頼を終えてから、数ヶ月後、クヨウはサクラの両親へ挨拶のためにオオヤマ国へ向かったのである。そして一悶着あったものの、なんとか結婚を認めてもらえたのだが、条件として結婚式はオオヤマ国でやるということを約束させられたのである。これは唯単に親としての強い要望だったのである。クヨウも特にこだわりがあつたわけでもないし、親の気持ちというのもある程度理解していたため、これを了承。それで今回結婚式のためにオオヤマ国へ



きているのであった。ちなみにサクラの両親が一番結婚式の準備を進めていたのは余談である。

「それにしても、結婚式でそこらじゅうの人が来るとは思わなかったなあ。いつもこうなの？」

「うん、オオヤマ国はどうしても閉鎖的な部分があるじゃない？逆に言えば町1つが全部身内の様なものなのよ。昔から結婚式は町中で大騒ぎしてた覚えがあるわね。」

そしてその大騒ぎの渦中にいた主役は疲れ果てるのも無理の無いことだった。

「サクラは凄い人気だったんだね、特に女性からの歓声が凄かったけど。」

「あははは、修行中によく後輩を指導してたりもしてたからその関係だね。素直でいい子達だし、悪気はないと思うよ？」

実は式の最中等にクヨウは殺気の籠った視線（女性が多い）を大量に浴びていたのだ。全部嫉妬なのだが、7割が女性だったのはサクラの人徳の表れなのだろうか？サクラが気がつき宥めていたので時間が経つにつれ減ってはいったが、クヨウの神経をすり減らした要因の1つには違いがないだろう。

「まあ、でもおば様方のプレッシャーが一番きつかったかな。」

「あ、それはあるわね……その……いつになったら、ここ……子供ができるかとか……。」

「サクラは本当に人気だね。」

サクラの両親への挨拶が終わったと同時に近場の大人（ほぼ既婚者）の女性から「子供はいつ連れてくるのか!？」と質問攻めにされて

いた。サクラはそういった質問に弱いので全部クヨウが答えていたが、流石に具体的にいつとは決まっているわけではないので無難に「これから・・・ですかねえ。」と大分言葉を濁すに留まっていた。ある意味ヒカリが2人の子供のようなもののだが、そこはまた別なのだろう。

クヨウはサクラから貰った飲み物を飲み干し一息つく。今日は初夜である。さっきからこの状況とは関係ない話をするあたりクヨウもかなり緊張している。

「さて・・・と。ねえ、サクラ？これから頑張っていこうね。」

「え？・・・うん。改めて、不束者ですがよろしくお願いします。」

これから更に数年後、クヨウとサクラは2人の子供を授かり、順調にこの世界に根を下ろしていくのであった。

## 第48話「浄化と完了」（後書き）

一応移住完了という意味の完了です。レンヤはまだ根無し草っぽいんですけどね。

魔王との決戦！という割にはあっさり終了しました。出てきた瘴気がモンスター化とかも考えたこともありましたが、そこまでいくと道具屋のすることじゃねえなと思って却下ですね。

そしていきなり結婚式終了へ・・・まあ一種のエンディングみたいなイメージですので深く考えないでいただければ幸いです。

あとはいくつか番外編を書いたら終了予定になっています。

ここまで読んでくださいました読者の皆さんありがとうございます。た。なんとか全部書き上げられそうです。評価とかお気に入り登録数とか増えればかなりやる気ができました。それがなかったら挫折していたかもしれないですね。

一応習作ということもあり、書き方を色々変えてみた部分もありますが楽しんでいただけたり、暇つぶし程度にでもなれてたら幸いです。

ありがとうございました。

## 第49話「レンヤのその後」(前書き)

今回はタイトル通り、レンヤはどうなったのか?です。  
内容は結構軽いです。

## 第49話「レンヤのその後」

第49話「レンヤのその後」

「フン！はあ！」

「ちっ！このおおお！」

クヨウとサクラが結婚してから約1年後、オオヤマ国にある道場で2人の男が組み手をしていた。片方はSランクハンターであり、クヨウと共にこの世界へ来たレンヤ・アオイである。そしてもう片方はこの道場の主である第32代目シュウザンこと、シュウザン・ヤマザキだ。黒い胴着に身を包み、そこから見える手足は筋肉質であり、無駄な脂肪がなく洗練されていた。とても老人の体とは思えないくらいである。細目で、皺の目立つ顔であり、縦に伸びた髭と輝く後頭部が目印の男性だ。

元々レンヤがこの国へ来たときに、サクラに紹介されたのがシュウザンだった。シュウザンの流派は他に比べかなり特殊だ。というのも柔と剛の両方を扱うからだ。柔は投げ技や絞め技、内臓破壊を行う柔拳を扱う。剛は拳や蹴等の打撃を扱う。そもそもシュウザン流の教えは『全身武器化』というものだ。拳だろつが指だろつが武器にするため、基礎トレーニングがかなりの量必要になる。しかし、習熟してくると全身を満遍なく使い、しかも相手の苦手としている分野を攻めることができるため非常に強力な武術になる。

レンヤは紹介されてから徹底的に基礎を鍛え上げた。元々竜人族以上の身体能力になるようにもらっているためみるうちに強くなっている、僅か1年ほどで、免許皆伝まではいかなくとも旅に出る許可はもらえるようになったのである。そしてSランクハンターに

なり戻ってきたわけなのだが……

「このジジイ!!!!!!」

「戯け! まだまだ青いわ!」

戻ってきたレンヤを見ると、シュウザンは道場へ案内するなり襲い掛かったのだ。実践を想定しているため、ある意味日常茶飯事でレンヤも「やっぱりこうなったか。」と思っていたりする。それはともかく、レンヤ対シュウザン。シュウザンは打撃を中心に攻めてはいるが、隙を見れば投げ技へ移行してそのまま絞めに入る。レンヤもそれはわかってしているため、投げ技へ移行させないようにガードする。しかし……

「ふおっふおっふお、どうする? このままじゃ、ギリ貧じゃぞ?」

シュウザンは齡90を超える老人だが、無限とも思える体力の持ち主だ。このままギリ貧になればレンヤの負けは確定する。しかし、レンヤとてただ攻めあぐねているわけではなかった。シュウザンの正拳突きを掌底で押し返したのだ。

「おらあっ!!」

「ふお? なんと!」

流石のシュウザンも、驚きほんの少し体勢を崩す。そこに僅かな隙をみたレンヤは一気に攻める。指突、正拳、手刀……焦らず、大振りにならないように慎重にしかし激しく攻め立てる。

「ぬぬ!」

「オラア!」

耐え切れずシュウザンの体の中心が空き、そこにレンヤが渾身の一撃を加える。

「もらった!」

レンヤもかつて無いほど綺麗な一撃、まさに渾身の一撃だった。シュウザンが見せた隙を完全に突いた・・・と思っていた。その瞬間だった、レンヤは確かに聞いた、そして追い詰められ避け様のない一撃を食らうしかない老人がニヤッと笑うところ見てしまった。

「じゃから、まだまだ青いんじゃよ。」

レンヤからは当たるはずの拳が空を切り、気がつけば自身が空中におり、腹部に激しい衝撃を受けて床に叩きつけられた所でレンヤは意識を手放した。

@@@

レンヤとシュウザンが戦っている頃、近くの廊下を歩いている女の子がいた。黒い髪に黒に近い青い瞳、薄青の袴をきている。背は小さめだが体のバランスは取れている美少女であり、胸の小ささがコンプレックスになっているフミカ・ヤマザキ、シュウザン・ヤマザキの孫である。

そのフミカ本人は上機嫌だった。というのもレンヤが帰ってくるからだ。とはいっても、フミカとレンヤは別に恋人同士ではないし、今の所お互い恋愛感情はない。どちらかというと、親友、喧嘩友達

といったところだ。しかし、親友が久々に帰ってくるということだ。フミカは上機嫌だったのだが、道場の方から物音と声があることに気付き不審がる。

「今日は道場が休みのはずだけど・・・お爺ちゃんが誰かの訓練でもしてるのかしら？」

シュウザンが色々問題を起こすことはフミカも知っており、年寄りの道楽（やってることは道楽というレベルじゃない）として半ば諦めていた。しかし、そのまま放置するほどフミカも無関心ではないので、一声注意くらいはしておこうと道場へ向った。

道場へ着いたフミカが見たのは、シュウザンに投げられ空を舞っているレンヤとレンヤに背を向け、左足を天に向って垂直にあげているシュウザンの姿だった。

ドンッ！！！！

次の瞬間には凄まじい音と共にシュウザンの左足によるカカト落としが炸裂し、レンヤが床に叩きつけられていた。あまりにも突然のことにフミカは呆然とするが、それも一瞬のことで、気がつけばシュウザンの顔を蹴り飛ばしていた。

@@@

「まったく、聞いているの！？お爺ちゃん！！！！」

「いや、じゃからすまんかったと言っておるじゃらう。」



道場の外にある石畳の上でシュウザンは正座している。そして、その正面にフミカが阿修羅のオーラを背負って仁王立ちしていた。

「いつもは寸止めとかだから、ある程度見逃していたけど……今日と言う今日は許せません！」

「いや、じゃから……レンヤが強くなったから加減がのう……」

「ああん？」

「いえ、すみません。何も言っていないです。」

シュウザンも一応言い分があるといえはあるのだが、多少はやり過ぎた意識があるのか孫には逆らえなかった。その前に、孫の本気の迫りに逆らえないというのもあるのだが……

ちなみに、レンヤは既に治療済みで客室に寝かせてある。なので、フミカは何の遠慮もなくシュウザンを説教していった。

@@@

「ん、あれ？ここは……あつ痛〜。ああ、ジジイにぶっ飛ばされたんだっか。」

シュウザンにやられてから、3時間ほどでレンヤが起床する。とはいえ、腹部のダメージがまだ大きいため動けなかった。

「ジジイが手当てしてくれるとは思えねえから、やったのはフミカ辺りか？あとで礼くらい言っておくか。」

レンヤは腹部の包帯を手触りで確認しながらぼやく。そして先ほどのシユウザンとの戦闘を思い起こし一人反省する。レンヤがこの道場でトレーニングを積み、ハンターとしてかなり経験は積んだ。そうでなければSランクに上がれなかったであろう。しかし、それでもシユウザンの手の上で遊ばれてしまった。結論として、まだまだ修行が足りない。ということを変更して実感し、ため息をつく。

「まったく、まだまだだっただことか。」

やや自嘲気味に、呟く。レンヤとて自分がまだまだだと自覚はあるが、少しは進んだ気になっていた。しかし、こうして力不足を実感してしまうと、改めて道のりの長さに辟易してしまう。ただし、そのまま暗くなってしまうレンヤではない。それにこの手の悩みは既に何度も経験済みだ。何度も挫折しそうになるが、それでも少しは進んだことを自覚することができる。なので、立ち直りは速かった。

「あ、レンヤ。起きてたんだ。」

「フミカか、久しぶりだな。」

レンヤが頭の切り替えをしたところで、タイミングを計ったかのようにフミカがやってきた。実際はただの偶然である。

「手当てありがとな。」

「いいのよ、盛大にやられるところが見学できたしね。随分派手にやられてたわね。」

「げっ！見てたのかよ！くっそ、変なところ見られたな。」

「変じゃないわよ。むしろ綺麗だったわ、綺麗に空を舞って、綺麗に床に叩きつけられてたわよ。なかなかいいわね！」

「うるせい。」

レンヤは拗ねるが、元々口ではフミカには勝てないので予定調和のようなものだ。フミカも一通りレンヤをからかったところで、本題に入る。

「そういえば、忘れてたけど……夕食食べれる？お腹に綺麗に入ってたしやめておく？」

「そうだな、軽く食べれる物を少しだけもらえるか？食べれそうなら食べるんだが……」

「はいはい、じゃあ用意しておくから怪我人はゆっくり寝ておきなさい。」

「おう、さんきゅな。」

フミカは夕食準備のため、そのまま部屋を出て行った。ちなみに夕食準備中のフミカはいつもより嬉しそうだったらしい。

@@@

次の日、治療師（回復魔法の使える医者）がやってきてレンヤの怪我が全快した。

ここでようやく、シユウザンと今後について話し合う事ができた。

「改めて、久しぶりじゃのう。随分と成長したようじゃ何よりじゃ。」

「おお、そつちも相変わらず性格悪いな。絶対に試合でぶちのめしてやる。」

「ふおっふおっふお、いつそれが来るのか楽しみじゃわい。」

レンヤが若干青筋を入れつつシユウザンを睨むが、睨まれている当人は涼しい顔をしている。実際本人たちにとっては冗談……ではないのだが、じゃれあいの1つのような物で同席しているフミカは

特に何も言わなかった。

「それで、お主は今後どうするつもりじゃ？基礎トレーニングは既に完了しておる。既に竜人族の戦士並の身体能力じゃ。人間族のそれじゃないのう。あとは、旅をして経験を積んでいくしかないのじゃが？」

「ああ、それなんだが・・・まだ基礎トレーニングを続けようと思うんだ。」  
「え？」

横で聞いていたフミカが声を上げる。しかし、それも仕方のないことだ。レンヤは人間族として既にあり得ないくらいの身体能力を持っている。それは道場の門下生のほとんどが知っていることだ。なので、また基礎トレーニングをすることは思っていないかったのだ。そして、驚いたのはシュウザンも同じだった。もつとも表情にあまりだすことはなかった。多少眉を動かしたくらいだが、すぐに思案顔になる。

「むう、・・・・・・一応理由を聞いても良いかの？」

レンヤの身体能力は底を見せてはいない。それはシュウザンも良く知っている。だが、底を見せていないのは旅に出て間もない門下生ならよくあること。旅に出て経験を積む事で、身体能力も上がりそれによって完成されていくのだが・・・レンヤもそれを知らないわけではない。一応旅の許可を出した門下生にはその辺りの説明をしているからだ。だからこそ、レンヤの真意がわからなかった。

「そうだな・・・・・・最初から話そうか。」

レンヤはこちらの世界に来たときの事情をまだ話してはいない。隠

すつもりはあまりないのだが、特に表立って話すことでもないからだ。なので、この辺りで全部話そうと思った。実際話したほうがつきりするし、理由の説明にもなる。全て最初から、別の世界から来たこと、世界の管理人から能力をもらったことを2人に話した。2人はレンヤが思っていたよりは驚くことなく、自然に受け入れてしまった。レンヤが嘘をいつているとは思えなかったのもあるが理由としては十分理解できたからだ。

「なるほどのう、変わった人間じゃと思っておつたらそこまで変わっておつたか。」

「俺としては変人に変人扱いされたくはないかな。」

レンヤからしてみれば、身体能力を技術によって圧倒できるシュウザンのほうが変人に見えていた。実際高齢のシュウザンが息子に代を譲らないのは、未だに息子より圧倒的に強いからだ。息子自身Sランクハンター並の実力があるので、息子が弱いわけではない。単にシュウザンが強すぎるだけだった。

「ふ〜ん。色々隠し事があるとは思ってたけど、そういうことなのね。」

「まあ、隠してて悪かったな。」

「別にいいわよ、なんでそうしたか・・・なんて、簡単に想像できるもの。多分同じ状況なら、私も同じようなことしてるでしょうしね。」

フミカも、レンヤが隠し事をしているくらいは感づいていた。そして内容を聞いたなら理由なんて簡単に想像できてしまう。隠し事をされていたという寂しさは無くは無かったが、こうして話してもらえたということ嬉しさもある。フミカはようやくレンヤと対等になれた気がしたのだ。

「ふむふむふむ、竜人族の数倍か・・・ふっ、くくくく・・・あつはつはつはははははは。よいぞよいぞ、久々に楽しくなってきたわい。」

何か考え事をしていた、シュウザンがいきなり笑い出した。これにはレンヤとフミカは驚いた。シュウザンが口を大きく開けて大笑いすることなど滅多にないからだ。そしてレンヤを見たときの目を見てフミカはシュウザンの気持ちを感じてしまう。『新しい玩具を見つけたような目』だったからだ。

「ふおっふおっふお。よかろう、竜人族以上になるのが確定ならやるだけやってやろうじゃないか。ふふふ、久々に滾るのう。」

「お、おう。まあお手柔らかに、頼むよ。」

「無理ね。レンヤ、看病くらいならしてあげるわ。」

「おいおい、冗談になってねえよ。」

このあと1年ほど、レンヤの地獄が続いたらしい。しかし、その甲斐もあって歴代でも有数の使い手に数えられるようになった。ちなみに、フミカとの仲はこの日を境にして若干進んだようだった。

## 第49話「レンヤのその後」(後書き)

簡潔に言えば、レンヤは最強クラスのハンターになるべく修行の日々です。

ちなみにレンヤとフミカの恋愛話は今のところ書く予定はありません。ご想像にお任せします(笑)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0499o/>

---

異世界への移住

2011年10月12日08時05分発行